敦煌寫本研究年報

高田時雄 主編

第四號

2010 年 3 月

京都大學人文科學研究所
西陲發現中國中世寫本研究班

注　記

この『敦煌寫本研究年報』は京都大學人文科學研究所の共同研究班「西陲發現中國中世寫本研究」班の報告である。共同研究の報告書は慣例として一定の研究期間終了後に刊行されることになっているが、本研究班では新しい試みとして毎年度の末に「年報」の形式で研究成果の報告を行うことにした。もちろん少しでも早く成果を學界に届けようとしてのことである。大方の好意あるご支持をお願いしたい。また「敦煌寫本」を誌名に掲げたのは最も一般に受け容れやすい名辭を選擇したに過ぎず、吐魯番ほか新疆各地で發見される寫本をも視野に入れていることは當然である。

目　次

藏經音義の敦煌吐魯番本と高麗藏　高田時雄 1

《敦煌變文集》〈下女夫詞〉的整理兼論其與「咒願文壹本」、
「障車文」、「驅儺文」、「上梁文」之關涉問題　王三慶 15

敦煌吐魯番文書中三等次供食問題研究　高啓安 35

唐宋時期敦煌土貢考　余欣 81

《俄藏敦煌文獻》中的西夏科舉“論”稿考
——簡論唐宋西夏的科舉試論　金瀅坤 101

書儀と詩格——變容する詩文のマニュアルとして　永田知之 119

敦煌書儀中的“四海範文”考論　山本孝子 141

唐代西州における群牧と馬の賣買　中田裕子 163

古代チベットの長さの單位: mda’ と sor mo　岩尾一史 181

Another Hungarian looting China’s treasures? Sir Aurel Stein, Lajos Ligeti
and a case of mistaken identity　Imre GALAMBOS 195

スタイン地圖と衞星畫像を用いたタリム盆地の遺跡同定手法と
探檢隊考古調査地の解明　西村陽子・北本朝展 209

『敦煌寫本研究年報』第四號（2010.03）1-13 頁

藏經音義の敦煌吐魯番本と高麗藏*

高田時雄

序說

佛教典籍の一大集成である大藏經は南北朝の頃すでに形作られ、その書寫が行われていたことが知られている[1]。また一切藏經をすべて讀誦する篤信の在家信者も存在した[2]。僧侶においては藏經すべてを繙閲するものの數は必ずや少なくなかったであろう。事實、僧傳の類にはしばしばそういった事を傳えている。彼らが佛典を讀誦するに際し、その理解を助けるために藏經全體に對する音義の著述が要望されるのもまた當然のことであった。今日すでに亡佚してはいるが、六世紀後半、高齊の釋道慧に『一切經音』があり[3]、また六世紀末から七世紀初めにかけて智騫が『衆經音』を著したことが知られている[4]。

音義という書物の形式はもちろん佛家特有のものではない。むしろ儒家の經典讀解の傳統の中で形作られた典籍注釋の一形式であって、後漢から魏晉以來口傳によって保持されてきた經師の讀音が基礎となっている。藏經所收の各經論に對して音義を作ろうという發想は、したがって中國固有の學術の傳統から生まれたも

---

*小文の初稿は 2009 年 3 月 20 日、韓國ソウル大學において開催された「高麗大藏經と敦煌文獻」國際會議に於ける報告であるが、今回本『年報』に掲載するに當たって、會議に於ける討論及び會議で得られた新知見に基づき若干の補訂を加えた。小文はまた文部科學省科學研究費補助金「ロシアに所藏される敦煌吐魯番等發見漢文文獻の研究」（基盤研究 B、研究代表者：高田時雄）による研究成果の一部である。

[1]『法苑珠林』卷第一百「興福部第五」、『大正藏』第 53 册第 1025 頁以下に、南北朝各皇帝による崇佛興福の事蹟を擧げる中に、しばしば一切經の書寫に言及する。

[2]『陳書』卷二十七姚察傳「初察願讀一藏經、竝已究竟、將終、曾無痛惱、但西向坐、正念云、一切空寂。」『南史』卷六十九姚察傳もほぼ同文。

[3]『開元釋教録』卷八「一切經音義」條下。

[4]『續高僧傳』卷三十。神田喜一郎「緇流の二大小學家」『支那學』第 7 卷 1 號、25-48 頁、のち『東洋學說林』（1948 年、東京：弘文堂；1974 年、京都：思文閣復刻）、『神田喜一郎全集』第一卷（1986 年、京都：同朋舍）に收録、また拙文「可洪隨函録と行瑫隨函音疏」『中國語史の資料と方法』（京都大學人文科學研究所研究報告、1994 年）110-111 頁を參照。

のであることは疑いを容れない。また實際に音義の著述を行うにあたっては、文字音韻の學に通じたものでなくてはならなかった。

現存最古の藏經音義である『大唐衆經音義』（一名『一切經音義』）を著した玄應は、貞觀十九年（645）春、玄奘三藏の譯場が弘福寺に開かれたとき、唯一の字學大德としてこれに參加した。新譯經典の文字の正誤を判定するのがその主たる仕事であり、今日に殘る譯場列位にも「大總持寺沙門玄應正字」とか「大慈恩寺沙門玄應正字」としてその名が見える。字學の專門家として玄奘の譯場に入った玄應こそは一切經の音義を撰述する十分な資格を備えた人物であった。しかし玄應は大業を成就することなく沒したため、その音義はすべての經論に及ばず、いわば未完成の作であった。『東域傳燈目録』等には玄應の作として別に『大般若經音義』三卷が擧げられている。『大般若』六百卷は龍朔三年（663）十月にようやく譯了を見たものだが、この音義は玄應音義に含まれていない。恐らく龍朔三年以前に玄應が示寂し、『大般若經音義』も未完成であったため、『衆經音義』中には收録されなかったものと考えられている[5]。ともあれ玄應の音義は龍朔元年頃にはほぼ現在のかたちが出來上がっていたものであろう。玄應の音義は唐代を通じてすこぶる廣く行われた。

後世大藏經編成の基礎となる智昇『開元釋教録』（開元十八年、730）には、佛典音義として玄應の音義以外に『新譯大方廣佛華嚴經音義』二卷が採られている。新譯『華嚴經』は則天武后自らが發議し、于闐から梵本を將來するとともに、實叉難陀を洛陽に招いて翻譯させたもので、その音義は慧苑の手になった[6]。このような經緯もあって特別の計らいで入藏したものと考えられる。他にも單行の經典の音義は目録類にも散見し、敦煌からは『首楞嚴經』即ち唐譯の『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』十卷に對する音義や、『大般涅槃經』の音義が發見されているが、後世に對する影響から云えば、玄應、慧苑の二音義とは比較にならない。ちなみに一切經中に玄應、慧苑の二音義を缺くものはなく、どの一切經にも必ずこれら二音義が含まれる。

玄應の音義が藏經全體をカヴァーするものではなかったので、慧琳は建中末年（783）にその音義の撰述を開始し、元和十五年（820）これを完成した[7]。慧琳の音義は基本的に『開元釋教録』の入藏録に據り、そのすべての經典に音義を施した[8]。

---

[5]この項、上掲神田論文に負うところ大きい。また拙文「玄應音義について」『玄應撰一切經音義二十五卷』（日本古寫經善本叢刊第一輯）解説册、國際佛教學大學院大學學術フロンティア實行委員會刊（2006 年 3 月）、1-8 頁を參照されたい。

[6]成立は恐らく七世紀末から八世紀初。

[7]『宋高僧傳』卷第五「唐京師西明寺慧琳傳」。

[8]しかし慧琳の音義は、特に「此方撰集」典籍について、『開元録』との出入りが大きく、順序にも前後がある。特に慧琳音の最終卷は『開元録』に採らない典籍を數多く收録しているが、これ

玄應音義の用いることが出來るものはこれを採用し、すべて一百卷という浩瀚なものになっている。ついで後唐の長興二年（931）、可洪は河中府方山延祚寺藏經を底本とし、廣く諸寺の藏經を參考して『新集藏經音義隨函録』三十册を作った。その完成には十年の歲月を要し、後晉の天福五年（940）成書、上書して入藏を請うた。本書もやはり基本的には『開元録』により函を逐って音義を附したものである[9]。これらの二音義はともに高麗藏に收められて今日に傳わったことは周知の所である。

また契丹の統和五年（987）、燕京崇仁寺の沙門希麟は慧琳の續編として『續一切經音義』十卷を作った。慧琳音義が『大乘理趣六波羅蜜多經』など『開元録』以後に譯出された經論に及んでいないので、それらの音義を補ったのである。この書もまた高麗藏に收録されている。

その他には江南地域に行われた行瑫の『大藏經音疏』（また『内典隨函音疏』とも云う）五百許卷が存在する。この書はもと日本や朝鮮には傳わっていたらしいが、今日ではわずかに一部が殘されているに過ぎない[10]。江南では福州版を初めと

は慧琳の住した西明寺の藏經に據った結果と思われる。

[9]慧琳の場合と同樣、可洪の音義も「此方撰集」において『開元録』とは異同があるが、慧琳ほどではない。

[10]拙文「可洪隨函録と行瑫隨函音疏」『中國語史の資料と方法』（京都大學人文科學研究所研究報告）、1994 年、109-156 頁、を參照。『隨函音疏』については最近相次いで新發見があったので、それを含めてここに現況を補記しておきたい。まずこれまでよく知られたものとして、現在京都國立博物館に所藏される金粟寺藏經本の卷三百七摩訶僧祇律音義（守屋孝藏舊藏）がある。同じく金粟寺藏經本にはまた東京大學東洋文化研究所に所藏される瑠璃王經一卷と五苦章句經一卷に對する音義斷簡（南海伍元蕙舊藏）があるが、これは天地を裁斷して四行を一面として帖仕立てにしたもので、殘念ながらすでに原姿を失っている。しかし『隨函音疏』の數少ない材料の一つであることには變わりはない。ところが昨年（2009）秋に中國のオークションに新たな一卷が出現した。これはヨーロッパから里歸りしたものと云われ、東晉三藏僧伽提婆譯『中阿含經』第四帙（卷第三十一至卷第四十）に對する音義で、『内典隨函音疏』としては卷第二六四（小乘經之六）に當たる。卷尾に「過雲樓收藏金石圖書」と「元和顧子山祕笈」の印記があり、元和（蘇州）の藏書家顧文彬（字子山、1811-1889）の舊藏であったことがわかる。このオークションの目録である『佛教文獻』（北京德寶二〇〇九年秋期拍賣會目録）には、寫卷のカラー圖版のほかに、趙前氏の「說說顧氏過雲樓舊藏的一件《金粟山大藏經》」及び翁連溪氏の「吉光片羽――宋人寫金粟山大藏經零卷」という文章が附されているが、その性格上ごく簡單な解說に止まっているのはやむを得ない。ちなみにこの寫本、目録に據れば、起拍價は 50 萬、參考價は 60 萬～80 萬人民元となっているが、當該オークション會社のサイトに據れば、實際の落札價格は 207 萬人民元であったという。價格はともかく、新たな一卷が出現したことの意義は大きい。然るべき公的機關に歸したことを祈るばかりである。なおこの拍賣目録に『内典隨函音疏』が掲載されていることを筆者に通報されたのは、當時在外研究でハーバード大學に滯在中の關西大學玄幸子教授である。ここに誌して感謝したい。さて上掲拙文 124 頁以下に、高麗版大藏經再雕本のうち比較的初期に刷印され日本に齎されたもの（例えば大谷大學、增上寺、建仁寺所藏本）には、『隨函音疏』の卷第四百八十一と卷第四百九十が混入していることに言及しておいたが、驚くべき事に最近になってその版木二枚（うち一枚は片面）三張分が韓國で發見された。南權熙「敦煌地域關聯刊本 과 高麗大藏經」『奎章閣國際學術會議發表論文

して大藏經の刊刻がしばしば行われ、それらには函毎に字音帖が用意されたり、各帖末に音義の附されてたりする。その來歴と傳承關係については不明なことが多いが、帖末（卷末）音義の形式は明清時期の刻本大藏經にも蹈襲された。

要するに、藏經の音義で今日まで傳わるものは、慧苑が華嚴一經の音義であるのを除外すれば、玄應、慧琳、可洪、希麟、行瑫の五家に過ぎない。それらはどのように傳承、受容されてきたであろうか。小文では敦煌吐魯番發見の斷片などを材料とし、些かその周邊を探るとともに、高麗藏の果たした役割を考えてみたい。

敦煌、吐魯番の佛經音義

敦煌、吐魯番からはともに可成りな數に上る各種の佛經音義が發見されているが、藏經音義としてもっとも多數を占めるものは玄應音義である。敦煌本ついてはこれまでも既に詳しい研究があり[11]、校録はすでに『敦煌音義匯考』[12]で試みられ、近刊の『敦煌經部文獻合集』[13]では餘程網羅的に集められている。吐魯番本についても近年ドイツ隊所獲品や大谷隊所獲品中に含まれる玄應音義の斷片に關する同定作業が進み、その成果が相次いで公刊されている[14]。トルファンのものは小斷片が多く、まず綴合可能なものを集めて分類する作業が缺かせないが、それらが着實に進みつつあるのは喜ばしい。

集』2009 年 3 月、高麗大藏經研究所、49-54 頁。この二枚の版木は卷四百九十のもので、日本に傳わる『隨函音疏』の印刷に用いられた版木そのものであることはおそらく間違いない。南氏によれば第一、第二張の版木のサイズは 25.1x77.3cm、版面の匡郭内寸法は 21.8x48.4cm、第三張はそれぞれ 34.3x77.5cm、21.4x42.2cm だという。殘念ながら卷四百八十一の版木はまだ發見されていない。さらに日本の奈良西大寺に藏される磧砂版『大般若經』の卷第一から卷第四、卷第八から卷第十一までの卷末音義は『隨函音疏』とは題されていないが、實際には『隨函音疏』のテキストを利用したものであることが分かっている（上掲の拙文 128 頁）。磧砂版の『大般若』附載の音義は大部分が福州東禪寺版のものを援用するが、最初の部分のみに『隨函音疏』が用いられているのである。したがって要約すると、行瑫の『内典隨函音疏』は現在、金粟寺寫本藏經本、高麗版大藏經再雕本に混入した刊本、磧砂版『大般若經』の卷末音義に利用されたもの、という三つの形態で殘存しているということになる。もちろん一部が他書に引用されたものはここに含めない。

[11]石塚晴通「玄應《一切經音義》的西域寫本」『敦煌研究』1992 年第 2 期、54-61 頁；石塚晴通・池田證壽「レニングラード本一切經音義——Φ 二三〇を中心として」『訓點語と訓點資料』第 86 輯、1991 年、1-44 頁；石塚晴通「ペテルブルグ本一切經音義——Φ 二三〇以外の諸本」；徐時儀『玄應《衆經音義》研究』北京：中華書局、2005 年 3 月。

[12]張金泉・許建平著『敦煌音義匯考』、杭州大學出版社、1996 年 12 月。

[13]張湧泉主編・審訂『敦煌經部文獻合集』（北京：中華書局、2008 年 8 月）第十册。

[14]西脇常紀『ベルリン・トルファン・コレクション漢語文書研究』、京都大學総合人間學部西脇研究室、1997 年 5 月刊、83-96 頁；同『ドイツ將來のトルファン漢語文書』、京都大學學術出版會、2002 年 7 月刊、47-66 頁；張娜麗『西域出土文書の基礎的研究——中國古代における小學書・童蒙書の諸相』、東京：汲古書院、2006 年 2 月刊、359-367 頁。

ロシアの玄應音義の場合も小斷片が多く、研究を妨げる要因となっている。上掲の『敦煌經部文獻合集』ではこれら小斷片を丹念に綴合しているのは敬服に價するが、ロシアの玄應音義小斷片の多くは實は敦煌藏經洞から出たものではなく、吐魯番所獲と思われる。いま一例を擧げると、『經部合集』が「一切經音義（九）」として收録する斷片群がそうである。これらは 11 種からなるが、すべて玄應音義卷六の「法華經音義」の部分であり、掲出字をやや大きく出し、注文はそれよりやや小さく書くものの雙行にはしないという形式が一致するほか、かなり稚拙な書體もすべてに共通する。そして背面にはウイグル文が書寫されている點も同じである。したがってこれらが同一寫本の斷片であることは疑いを容れない。しかし實はこのような特徵をすべて備えた斷片がドイツ隊の將來品中にも存在するのである。Ch/U6782d, Ch/U6784, Ch/U6788, Ch/U7279, Ch/U7447, Ch/U7448, Ch/U7449 などがそれで、これらはすべて同一の「法華經音義」の斷片である。ドイツ隊の將來品が吐魯番所獲であることは否定できないので[15]、ロシアの斷片群もまた吐魯番所獲品であることが知られる。一切經音義に關して言えば、Дx256+Дx583, Дx965V, Φ230 など、まず間違いなく敦煌文獻であると考えられる寫本はともかく、その他の『俄藏敦煌文獻』所收小斷片は敦煌ではなく吐魯番出土であるものがかなり多いと思われる。今後、一層の注意を必要とする。

さて敦煌の寺院で玄應音義が確かに利用に供されていたことは、經藏の點檢記録が殘っていることから分かる。例えば S.5895 には「一切經音義卷弟一、弟三、弟九、弟拾貳、弟廿叁、弟廿四、已上陸卷現在、餘欠」とあり、P.4788 には「一切論音義第十七、第十八、第十九、第二十、第□□、第二、已上陸卷今藏見在、餘者竝欠。題雖稱經音、竝是論音義」、また北臨 631 に「一切經音義卷第一、第十七、第……、已上肆卷、竝依次剩、重出」とある。また玄應音義全二十五卷の闕本を補い補寫するに際してその割當てを記録した文書も存在する（S.3538V）。これらは九、十世紀の歸義軍期のものと思われ、當時でもなお一切經音義の點檢補寫が行われていたことは注目に値する。

敦煌にせよ吐魯番にせよ、唐代、中央の諸制度が各地に等しく行われていた時代には、寺院における經典の管理、佛典の書寫讀誦などあらゆる制度は、長安で作られた規範に則って一律に行われていたと思われる。そのような時代には玄應音義の權威は極めて高いものがあったはずで、佛典の讀解の基準として一般にこれが用いられたことは不思議ではない。玄應音義の音韻體系は切韻の體系に非常

[15] これらの斷片には “T II Y” で始まる整理番號が附されていて、ドイツの第二回探險隊がヤールホト（交河故城）で獲得したものであることが分かる。これらの斷片については西脇上掲『ドイツ將來のトルファン漢語文書』58-66 頁を見よ。

に近く、唐代の讀書音を忠實に傳承するものである。この音が佛典讀誦の規範として大きな拘束力を持ったのである。ところが八世紀の末から中央の政治的霸權がこれらの地域に及ばなくなると、しだいに言語的規範も著しく動搖するに至る。敦煌では60年以上に及ぶ吐蕃支配期のあと、848年に張議潮が擧兵し權力を漢人の手に奪回すると、張氏、曹氏による歸義軍政權の時代となる。特に十世紀の曹氏歸義軍時期は宛然一箇の獨立した小國家であり、自然と言語も本來の方言が表舞臺に登場し、規範的な地位を獲得するようになる。この時代には佛典の讀誦もまた土着の河西方言によって行われたのである。このことは十世紀のチベット文字やコータン文字によって轉寫された佛典などから明確に論證することが出來る[16]。

一方、吐魯番盆地では長安の勢力がここから手を引いた後、ウイグル人の支配下に入り、やがて漠北のウイグル可汗國が瓦解すると、西遷してきた彼らの一派がここにウイグル國を樹立することとなる。そのウイグル國では高昌國及び唐の直轄支配時期の長きにわたる漢文明の影響を受けて、中國佛教が盛んに行われた。しかしその中でやがて土着の漢語方言音に基づくウイグル獨自の漢字音が形成され、佛典の讀誦などもこの字音を用いることになった[17]。吐魯番の土着方言は敦煌と同じく廣い意味での西北方言に屬し、若干の個別的相異點はあるもののよく似た音系を持っていた。

宋の太平興國六年（981）に高昌ウイグル國に出使し、雍熙二年（985）に歸國した王延德はその旅行記のなかで「佛寺五十餘區、皆唐朝所賜額、寺中有大藏經、唐韻、玉篇、經音等」と報告している。高昌ウイグル國において、寺院では漢文佛典が行われ、『切韻』や『玉篇』などの辭書とともに『經音』も存在したのである[18]。ウイグル國における強固な漢文化の傳統を想見できる。いずれにせよこの『經音』が玄應音義であることはまず間違いのないところである。上に觸れたロシアとドイツに分散所藏される玄應音義は、ウイグル國時代のものであったことも思い合わされる。

敦煌や吐魯番では、唐の中央から政治的に引き離された後も、玄應音義はなお用いられ續けた。それはもちろん保守的な傳統による部分も大きいと思われるが、唐代讀書音を體現する玄應音義は、時代の推移と共に變化して出來上がった方言における音韻の區別を十分に包攝することができたので、利用の面で特に矛盾が生じなかったであろう。とはいえより簡便な直音音注を用いた經典の難字音注の

[16]拙著『敦煌資料による中國語史の研究——九・十世紀の河西方言』、1988年、東京：創文社刊、特にその186-188頁を參照。

[17]拙文「ウイグル字音考」『東方學』第70輯（1985年7月）134-150頁；同「ウイグル字音史大概」『東方學報・京都』第62册（1990年3月）329-343頁。

[18]王明清『揮麈録・前録』卷四。また『宋史』卷四百九十、外國六、高昌國條。

類は敦煌でも吐魯番でも盛んに作られ、個人的な使用に供された。それらの音注は敦煌では河西方言を反映しており、吐魯番ではウイグル字音を反映していることは言うまでもない。ここでは唐の盛時におけるのとその性格はやや異なるにせよ、敦煌でも吐魯番でも玄應音義が引き續き影響力を保持し續けた點を指摘しておけばそれで足りる。

ただ敦煌、吐魯番の玄應音義は、形式、内容において必ずしも一様ではなく、幾つかの類型に分かれる。また實際の使用に應じて簡略化された寫本も報告されている。内容の點では高麗藏をはじめとする刊本大藏經のテキストとの間にしばしば異同が見られるが、これらはむしろ日本に傳わる古寫本に近い場合が多い。玄應音義の日本古寫本についても近年調査が一段と進んでいるので[19]、これらのテキストを網羅的に校合することにより、近い將來、玄應音義の本來のテキストを復元できる日が來ることが期待される。

姜亮夫『敦煌――偉大的文化寶藏』に「在巴黎藏中，連玄應的『一切經音義』（三〇九五），與慧琳的『一切經音義』（三四二八）都有了」というが[20]、實際には敦煌からは慧琳音は發見されていない。思うに姜亮夫のいう P.3428 というのは P.3429 の誤りで、これは『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』に對する音義である。慧琳の音義は大中五年（851）に入藏を奏請したと傳えるが[21]、唐末亂世の影響もあり、廣く流通するには及ばなかった。まして刊刻されることはなかった。五代後周の顯德年間に、高麗國の使者が浙中に赴いて慧琳の經音義を求めたが、得ることが出來なかった[22]ことも、その流布が限られた範圍に止まったことを物語っている。したがって敦煌、吐魯番にも傳わらなかったのである。

玄應以外の音義で敦煌から發見されたものとしては可洪の『新集藏經音義隨函録』があり、その寫本斷片が數點存在する。上に觸れたように『隨函録』は後晉の天福五年（940）に完成した。十世紀、敦煌の歸義軍政權は五代の中原王朝と往來があり、その結果としてこの音義も敦煌に齎されたものとも考えられるが、實際には宋代になってから傳わったのである。敦煌本『隨函録』の一斷片（P.2948）には版心の文字を正文中に混入して寫していて、それを高麗藏の『隨函録』と比較すると版心の位置までぴったり符合する。ただし高麗版が敦煌に傳わったと考えるこ

[19]日本古寫本の影印には『一切經音義』（上）（中）（下）（「古辭書音義集成」第 7 巻～第 9 巻、東京：汲古書院、1980 年）があり、下巻に收録諸本の詳しい解題（小林芳規執筆）がある；また『玄應撰一切經音義二十五巻』（「日本古寫經善本叢刊」第一輯、國際佛教學大學院大學學術フロンティア實行委員會、2006 年）は、これまで紹介されていない日本古寫本數種を影印刊行したもので、近年の新しい成果の一である。

[20]上海古典文學出版社、1956 年刊、125 頁。

[21]『宋高僧傳』卷第五「唐京師西明寺慧琳傳」、『大正藏』第 50 册第 738 頁。

[22]『宋高僧傳』卷第五「唐京師西明寺慧琳傳」、同上。

とは時代の前後關係から不可能である。したがって敦煌寫本と高麗藏の兩者はともに同一刊本に由來すると考えねばならない。また高麗版の闕筆の狀況を見ると、宋初の避諱を確認でき、したがってこの本が宋版であったことを知り得る。宋版の『隨函録』が一方では敦煌に傳わり、一方では高麗に傳わったのである[23]。慧琳が傳わらず、より成立の晩い可洪が敦煌に傳わったということは多少意外の感があるが、歴史的背景の然らしめるところで、慧琳にとっては不幸なことであった。

ドイツ隊所獲の吐魯番寫本斷片中に希麟の『續音義』が見られるという報告がある[24]。高昌ウイグル國は契丹（遼）と相當密接な交渉があったので、希麟の音義が吐魯番に來ていた可能性は十分にあるが、實見したわけではないので、ここには簡單に觸れておくに止めたい[25]。

寫經から刊經への變遷と藏經音義

上に見たとおり、敦煌、吐魯番から發見された藏經音義は主に玄應の音義と可洪の『隨函録』とであった。希麟の『續音義』は吐魯番に來ていた可能性があるが、しかし肝心の正編である慧琳音は傳わっていない。新譯經典の參考のために、『續音義』だけが將來されたのかも知れないが、詳しい事情は不明である。

さてこのような敦煌、吐魯番文獻における藏經音義の殘存狀態は、音義史の中でどのような意味をもつであろうか。小文の初めに述べたように、音義というジャンルは中國の傳統的注釋の一形態であった。唐初に撰述された玄應の音義は、多數の經籍や小學書を引いて典據としており、博引旁證、非常に學術的香氣の高い著作となっている。小學書としては『爾雅』『廣雅』『釋名』『說文』『字林』『蒼頡篇』『三蒼』『方言』『通俗文』『字書』『埤蒼』『聲類』『韻集』などが引かれているが、これらは後世失われたものも多く、清朝學者が輯佚を行うに際して大いに利用されることとなった。さらに玄應音義が反映する音系は『切韻』に近く、隋唐期の非常に規範性の高い讀書音であるという意味でも、その高蹈的な性格を窺うことが出來る。端的に言えば貴族的色彩が濃厚だと言えよう。

慧琳は玄應に比べ巻帙がより浩瀚なため、輯佚の材料としては玄應より更に高い價値を有するが、如何せんその存在が中國に知られるのはずっと後、光緒年間の

[23]拙稿「可洪『隨函録』と行瑫『隨函音疏』」『中國語史の資料と方法』（京都大學人文科學研究所、1994 年 3 月刊）、118-124 頁。

[24]上掲の西脇『ドイツ將來のトルファン漢語文書』40-41 頁。八〇年代初めに舊ソ連から東ドイツに返還された文書中に含まれる未整理の斷片中から見いだされたという。

[25]またカラホトの遺跡からも希麟の續音義が出たという報告がある。聶鴻音「黑城所出《續一切經音義》殘片考」『北方文物』2001 年第 1 期、95-96 頁。

ことである。ところで慧琳音義の反切は秦音を反映すると言われ、そこに安史の亂を隔てた中國社會の變化に伴う言語規範の弛緩が觀察される。佛典の讀音の規範もまた各地方毎それぞれに多様化していく兆しが見られる。上に十世紀敦煌における河西音採用につき言及しておいたが、地方化の傾向は多かれ少なかれ中原においても同様だったのである。唐代も後半以降になると、識字層の擴大によって、讀書の形態そのものが餘程自由になってくる。讀音や訓詁が限られた範圍においてのみ傳受されるという風なことではなく、必ずしも師承を經ずに行われるようになってきた。慧琳は玄應の補完を目指して著されたものだが、二書のあいだに介在する時間の推移はやはり相當に大きいと言わねばならない。

さて五代後晉の世に出現した可洪『隨函録』に至っては、もはや音義の性格が大きく變化していることに氣付く。この書物の主眼は佛典讀誦の音的規範を提供するというよりは寧ろ、藏經中に見られる俗字を糾正することにあった。可洪は方山延祚山の藏經と上方栢梯山の兩藏を底本としながら、多數の藏經を用いて字句の異同を具さに指摘する。見つかるままに引用される藏經の名を擧げれば、長水藏、麻谷藏、千佛藏、渾家藏、廣濟藏、開元樓藏（また樓藏とも）などがある。この時代はまさに木版印刷が出現し始めた頃で、寫本時代の末期に屬するが、各地の寺院に置かれた藏經には相互にかなり大きな文字の異同が存在したのである。可洪が直面したのはこうした一種の混亂狀態であり、その狀況に對して正しい規範を提示することこそが急務と感じられた。隨函音義の形式を採ってはいないが、可洪の後約五十年、契丹の僧行均が『龍龕手鏡』を著したのもまた同じ問題意識に出るものである。ちなみに『龍龕手鏡』の斷片は吐魯番から見つかっている（Ch1874）。

可洪の書物が成ってのち三十年餘、最初の刊本大藏經たる開寶藏の刊刻が開始される。これ以降次第に寫經から刊經の時代に移り變わっていくわけであるが、しかし兩者が竝存する時代もまたかなり長い間繼續する。行瑫の『内典隨函音疏』は殘念ながら今日完帙を傳えていないが、零卷が若干殘っているのでその内容が分かる。『宋高僧傳』の「行瑫傳」[26]によれば、行瑫は湖州長城の人で、後唐の天成年間（926-929）に會稽の大善寺に至り、藏經の批閲を事としたが、郭迻の音義が疏略で、慧琳の音義が傳わらないことを慨き、『大藏經音疏』五百許卷を述べたという。彼は後周の顯德三年（956）に示寂したから、可洪とはほぼ同時代人と見ることが出來る。その音義の特徴は可洪と同じく藏經間の誤字乃至異體字を列擧し、最後に正體字を掲げるというスタイルである。南北でほぼ同様な書物が作られたということに、強い時代の要請を感得し得る。ともに寫本時代の掉尾を飾る音義と稱してよい。

[26]『宋高僧傳』卷二十五、『大正藏』第 50 册 871 頁上欄。

刊本時代の音義について詳述することは小文の目的を逸脱するが、この場を借りて簡單に筆者なりの見通しを述べておきたい。刊本の大藏經は大きく三類に分けられる[27]。開寶藏が出現した後、高麗では早くも顯宗の時代（1010-1031）に大藏經の刊刻を行っている。開寶藏を底本とした復刻であったといわれる。その經板が蒙古の入寇によって兵火に罹ると、高宗の時代に再び藏經彫印の大業を發願し、その三十八年（1251）に功を畢えた。これが今日まで傳存する高麗大藏經である。開寶藏の復刻と目されるものにはまた金藏がある。これは 1933 年に山西省の趙城縣廣勝寺から發見されたため、趙城藏とも呼ばれている。これらが第一類。第二類は契丹の大藏經で、これは唐代の長安における正しい寫本大藏經を受け繼ぐものとされていて、敦煌本や日本の奈良平安朝の古寫經の多くもこの系統に屬する。また房山石經の遼代に彫られた部分は底本に契丹藏を用いているので、傳存すること極めて稀な契丹藏の面目を窺うに足る。第三類は中國南方地域に行われた大藏經で、福州版（東禪寺版及び開元寺版）、思溪版（前後二版）、磧砂版、普寧寺版など宋元時期に刊刻された諸藏から、明清時期に至るまで非常に多數の藏經が作られ今日まで傳わっている。第三類の藏經では、はじめ東禪寺版には字函ごとに一帖の字音帖が附けられていた。同じ福州で開板され形式をほぼ同じくする開元寺版ではこの字音帖を缺くとされる[28]。さらに思溪版になると獨立した字音帖は無くなり、各帖末に音釋を附ける樣式に變化した。その後の磧砂版や普寧藏、明代の各版藏經（洪武南藏、永樂南藏、永樂北藏、嘉興藏）などはすべてこの形式を蹈襲することになった。音釋の内容は福州藏の東禪寺版のやや詳しい、といっても玄應や慧琳には遠く及ばないが、それを引き繼いでいる場合もあり、また新たにより簡略化された音釋に取り替えている場合もある。これら各藏經における卷末音釋の實態についてはほとんど手が付けられておらず、詳しい調査は今後の課題である。しかし極めて大雜把な概括をすれば、これらの音釋からは玄應や慧琳の音義に見られるような學術の香氣は微塵も感じられず、單に轉讀の際に字音を確認するための方便を提供するだけのものになっているように思われる。

[27] この分類法は竺沙雅章氏の說に據る。同氏の「漢譯大藏經の歷史——寫經から刊經へ」（大谷大學、1993 年刊）を參照。

[28] 小川貫弌『大藏經——成立と變遷』（京都：百華苑、1964 年刊）49 頁。但し最近の調査では開元寺版にもかなり字音帖が附されているという。山田健三「漢譯版經附載音釋に關する基礎的研究」（平成 15・16 年度科學研究費研究報告）、2005 年、16 頁。同「福州版一切經附載音釋の形成過程」『人文科學論集 文化コミュニケーション學科編』43（2009 年）、1-12 頁

高麗藏の貢獻

現在、高麗藏には以下の音義が含まれている。

玄應一切經音義二十五卷（K.1063）
慧苑新譯大方廣佛華嚴經音義（K.1064）
新集藏經音義隨函録三十卷（K.1257）
希麟續一切經音義十卷（K.1497）
慧琳一切經音義一百卷（K.1498）

音義について高麗藏は極めて豐富であるといえよう。これらのうち前二者は開元録所收で、どの藏經にも必ず含まれるものであるから、とくに問題とするには當たらないが、後の三つについてはここに些か辯じておく必要がある。音義の保存に關する高麗藏の貢獻はまさにここに盡きると思われるからである。これらの音義は高麗藏がなければ今日に傳わらなかった。慧琳『一切經音義』一百卷は、忍澂上人（1645-1711）の努力により京都建仁寺所藏の高麗藏本に據って翻刻が始められ、江戸時代の元文三年（1738）に京都鹿ヶ谷の白蓮社から刊行され[29]、希麟『續音義』も延享三年（1746）に同じく白蓮社から印行された[30]。忍澂上人は建仁寺所藏の高麗蔵を用いて黄檗版大藏經を校訂し『大藏對校録』を作ったことで有名だが、その過程で高麗藏に含まれる慧琳音義を發見し、その重要性に氣付いた。彼はその刊刻を志したが、正德元年（1711）、十餘卷を終えたところで示寂した。弟子たちは師の始めた事業を繼續し、長年月をかけて元文三年ようやく全一百卷の刊行に漕ぎ着けたのである。珂然『獅谷白蓮社忍澂和尚行業記』[31]卷下には、忍澂が慧琳音義翻刻を發念した經緯を以下のように記している。「又唐京師西明寺慧琳師所撰一切經音義一百卷，支那南北二藏竝闕漏不收，唯有建仁藏室朝鮮經本收在之。師乃覽之，猶痿人之得起，盲者之得視，亢陽降甘雨，災癘逢良醫，飢而食，渴而飲者，不能自已，懽抃無量。即使眾繕書，欲刊版傳之未聞，乃校閲之（師囑校閲於洛西五智山如幻大德[32]），已刻梓十餘卷。師疾病，終不起，無成全刻，杳從冥往。」忍

[29]忍澂上人による慧琳音義の再發見及びその弟子たちによる刊刻事業については、神田喜一郎「忍澂上人と慧琳音義」に詳しい。『神田喜一郎全集』第二巻（京都：同朋舍、1983 年）289-297 頁。なお昭和六年（1931）當時の京城帝國大學法文學部から海印寺の經板を用いた再刷本が出版されている。

[30]校訂に當たったのは内州（河内）交野郡山田郷の万法藏院の比丘行願顯明であったと卷末に記されている。また封面ウラには「燕京崇仁續一切經音義十卷、高麗國大藏都監奉敕雕造。其本傳在本山、今新上木播之海内、印板置當院矣。　大日本延享二年乙丑冬十一月、高野山北室院沙門堯昌謹誌」とあり、希麟『續音義』の翻刻には高野山所藏の高麗藏が使用されたことが分かる。

[31]享保十二年（1727）刊行。また『淨土宗全書』卷十八（大正二年刊）所收。

[32]五智山如幻は眞言宗の僧で、字は道空。智積院第七世化主運敞の弟子で、寶暦元年（1751）に沒した。悉曇や小學に詳しい人物だったようで、音義の校勘には適任者であったと想像される。『高

澂が慧琳音義を見つけたときの感激が如何に大きなものであったかが分かる。

慧琳の日本における翻刻は中國では乾隆三年に當たるが、この本はすぐには中國に傳わらず、清末に日中間の往來が頻繁になった頃、ようやくこの本が中國に齎され大きな衝撃を與えることになる。楊守敬はその『日本訪書志』に、白蓮社翻刻本によって慧琳音義を著録し[33]、最初島田蕃根から本書を贈られたとき、それが玄應の音義でないことを知って驚喜したと書いている。その後楊守敬は書肆に存する白蓮社版をすべて買い占めると共に、京都になお版木が保存されていることを知るや、數十部を印刷させて上海に送った[34]。慧琳音義はかくして中國の學界に廣く知られるようになる。その第一の功勞者は楊守敬であった。

また同じく可洪の『隨函録』は 1934 年、日本の希覯典籍蒐集會によって増上寺所藏の高麗版が影印され、一般の眼に觸れるようになった。近年『隨函録』に對する關心が高まりつつあるが、慧琳には遠く及ばない。いずれにせよ慧琳、希麟、可洪の音義が傳承されるについては、すべて高麗版が根源となっていることは紛れもない事實である[35]。

では高麗藏はどこからこれらの音義を得たのであろうか。上で見たとおり、『宋高僧傳』の「慧琳傳」によれば、高麗では周の顯德年間（954-959）に使者を浙中に派遣し『慧琳音義』を求めさせたが、得ることが出來なかったと傳えている。これは同時期に湖州に居た行瑫が慧琳の音義が傳わらないことに發奮してその『隨函音疏』を著したという事實ともよく符合する。高麗では宣宗の三年（1086）、大覺國師義天が自ら渡海入宋し、また遼や日本に書を發して佛典章疏の博捜に勉め、續藏の編纂を試みた。その成果は『新編諸宗教藏總録』三卷（1090）に見えている。音義について云えば、そこに『一切經音義』一百卷（惠琳述）、『續一切經音義』十卷（希麟述）が載せられているので、これら二音義は義天の時に高麗に將來されたものであることがわかる[36]。しかし高麗藏初彫本は續藏も含めて蒙古の厄に

楠順次郎遺稿「日本梵語學史」集成』（1984 年、名著普及會）202-203 頁。

[33]『日本訪書志』卷第四、第二十葉以下。楊守敬は題目下に注して「日本藏高麗藏本」とするが、解題中に「此本從高麗藏本翻出」と言っているので、實は白蓮社本であると知られる。

[34]『日本訪書志』卷第四「余既見此本，凡書肆中所有皆購之，以餉中土學者。厥後又知其板尚存西京，又屬書估印數十部，故上海亦有此書出售，皆自余披剔而出也。」

[35]慧琳の『一切經音義』、希麟の『續一切經音義』さらに可洪の『隨函録』は、ともに明治 13 年（1880）から 18 年（1885）にかけて東京の弘教書院から刊行された『大日本校訂大藏經』（いわゆる『縮刷藏經』）に、高麗藏に據ったテキストが收録された。次いで中國では上海の頻伽精舍が宣統元年（1909）から民國二年（1913）にかけこれを『頻伽藏』として復刻したので、一般にも廣く入手し得るようになった。ただこれらの藏經は鉛活字で印刷され、そのテキストは極めて劣惡であるため、近年ではほとんど用いられない。

[36]徐時儀「慧琳《一切經音義》版本流傳考」『古籍整理研究學刊』（1989 年第 6 期）は『遼史』卷二十三（道宗本紀三）の記事「（咸雍八年（1072）十二月）庚寅，賜高麗佛經一藏」に據って、この時に慧琳音義も傳わったとする。その可能性は否定し得ないが、ここで言われる「佛經一藏」に

罹ったとすれば、一旦傳わったこれらの音義もまた滅びた可能性がある。これらは高麗藏再彫の際に補刻したと考えるべきかも知れない。いずれにせよその底本は契丹藏であったと思われる[37]。

では『隨函録』の來源はどうであろうか。如何なる藏經が『隨函録』を收めていたかは不明で、「敕を以て大藏に編入した」とする說もあるが[38]、極めて疑わしい。恐らく長く藏外の著作として扱われていたものであろう。しかし『崇文總目』、『宋史藝文志』『通志藝文略』などにこの書を著録しており、宋代に刊本が存在したことは間違いない。高麗藏本はこの宋版を復刻したのである。しかし高麗義天の將來目録に本書が見えないことからすれば、その傳來はやや後のことと考えるべきであろう。

いずれにせよ高麗藏がこれらの音義を收録して呉れていたことは幸いであった。とりわけ慧琳の音義は敦煌、吐魯番はおろか日本にもその影を見いだすことが出來ず、唯一高麗藏に據ってのみ今日に傳えられたのである。敦煌、吐魯番は現存する材料から見る限り、主として玄應音義の世界である。しかし十世紀になると敦煌には『隨函録』も傳わり、吐魯番には恐らく契丹から希麟も傳わっていたらしい。もちろんこれらは玄應が盛んに利用された頃とは異なる時代相を背景にしている。一方、高麗藏には玄應、慧苑、慧琳、可洪、希麟の音義がすべて收められていることは偉觀というほかない。音義史の立場から云えば、寫本時代の音義がほぼここに網羅されているということになる。

（作者は京都大學人文科學研究所教授）

藏外典籍である慧琳音義が含まれていたかどうかは必ずしも確實ではない。ただこの時點でなかったにせよ、慧琳音義が高麗に傳わったのが契丹からであったことは恐らく間違いない。次の注 37 を參照。

[37]李富華・何梅『漢文佛教大藏經研究』（北京：宗教文化出版社、2003 年）151 頁に、契丹藏の内容を復元し、最後の「晉」帙に希麟を、「楚」帙から「滅」帙を慧琳に配當している。徐時儀『玄應《衆經音義》研究』はこの順序に疑義を呈しているが（80 頁注 5）、高麗藏が正にこの順序を採用していて、それが契丹藏に據ったものだとすれば、本來このような順序であったと考えざるを得ない。ところが元の弘法藏の順序は慧琳→希麟となっていたらしい。弘法藏を基礎とした勘同目録『至元法寶勘同總録』卷十「東土聖賢集傳」に掲げる順序はそうなっている。とすれば希麟→慧琳の順序は非常に特徴的で、高麗藏が契丹藏の順序を承けたものと考える根據ともなる。

[38]『佛祖統記』卷四十二、晉高祖天福四年（939）條。

『敦煌寫本研究年報』第四號（2010.03）15-33 頁

《敦煌變文集》〈下女夫詞〉的整理
兼論其與「咒願文壹本」、「障車文」、「驅儺文」、「上梁文」之關涉問題

王三慶

【提要】本論文乃針對王重民等整理《敦煌變文集》〈下女夫詞〉一篇之檢討，認為當時已知七個寫卷，而用了六號，的確具有首創之功，可惜卻也造成諸多文字的錯誤和內容上的涵蓋面不夠周全。如今，由於敦煌文獻的大量刊行，除了可以看到未盡利用的北大本外，更可補充如下十四個卷號：P.3266V、S.3277-1、Дx3860、Дx3885A、Дx11049、Дx2654、S.9502V+S.9501+S.11419+S.13002RV、Дx3135+Дx3138、Дx12833RV 等未曾利用過的寫本，不但可以校補該文的不少錯誤外，更將〈下女夫詞〉的內容分成「下女婿」主要部分，以及路經「大門、中門、堆、堂基、逢璅、至堂門」和「論開撒帳合詩、去童男童女、去行座障詩、去扇詩、詠同牢盤、去帽惑、去花、脫衣、合髮、梳頭、繫指頭、繫去離心人去情詩、下簾」等三個階段組合的婚禮節目。這些都是婚禮中帶有戲樂取笑的成份，因與古禮不合，以致於才有建中元年（780）唐紹的上表和顏真卿的奏議，主張請停「障車」、「下壻」、「却扇」等儀式及禁斷聲樂。

再者，如果檢討這些寫卷，凡有近半數以上在〈下女夫詞〉的前後，還抄錄了「障車文」和「咒願新郎、新婦」文字，而「障車文」都以韻文歌唱的〈兒郎偉〉作為題名，卻沒被收錄在〈下女夫詞〉一篇裡頭，恐非合宜。如果根據 S.6207 號寫卷《今時禮書本》的抄寫內容及十四個小篇題，以及「張敖《新集吉凶書儀・吉儀卷上》」一書所錄的婚禮節目及篇章，〈下女夫詞〉的原始名義應該僅限於「下婿」兒女對答的部分，縱使一些抄本以〈下女夫詞〉一名作為冠首篇題的總稱，也應該含括於後面抄寫的「咒願新人」，甚至也可以收入前面的「障車文」部分，畢竟這些都是婚禮中最具趣味性的戲舞節目。

最後，透過「障車文」中的「兒郎偉」，追索其原始意義實來自於先秦兩漢以迄唐代的「驅儺」年俗，除了對於侲子驅逐厲鬼行為的讚頌歌唱外，亦帶有和聲壯膽的作用。其後的「上梁文」之援用「兒郎偉」，並非如吳曾及樓大防的說法把它看成勞動歌曲，象徵著協力舉梁的工作唱和樂聲；主要還是和驅儺的性質類似，期望將土地龍神以及邪祟等趕走，使居住者的身心平安康健。這點也和「障車文」之使用「兒郎偉」具有異曲同工之妙，期望將攔街求索財物的群眾驅離，有如兒郎侲子驅逐厲鬼般的意義延伸。

一、《敦煌變文集》〈下女夫詞〉的整理和探源

《敦煌變文集》收錄了〈下女夫詞〉一篇[1]，如果嚴格檢視，其與「變文」[2]名義已經相懸甚遠，最多只能與「講唱文學」的表演形式扯上一點關係，或者只比講唱的「變文」還稍富變化，並朝向民間小戲的發展邁進。因此，這篇被收錄於「敦煌變文集」中，原本不甚合理。至於其在整理過程，也有值得商榷之處，根據《敦煌變文集》整理成書時，王重民等已知本篇共有 P.3350（原卷）、S.3877V（甲卷）、S.5949（乙卷）、S.5515（丙卷）、P.3893（丁卷）、P.3909（戊卷）、P.2976（己卷）、北大 D246RV 七種寫卷，除北大本未據以入校外，可說已經悉數彙集，而其整理成果自是大家共同依循的善本。然而是否無可批評之處，却也未必，因為潘師石禪後來走訪英法，又在《敦煌變文集》的原來基礎上，重新加以勘校與增補，使用的文獻資料縱使沒有增加，卻已補充校正了二十二條校記，恰好說明了草創者的不凡功業，同時也看到了校書的困難如掃落葉一般，隨掃隨生。

如今我們的視野和角度都已較之前輩自由寬廣，可以利用的條件也比前輩學者更為優越，除了一小部分是私人收藏的敦煌文獻外，大部份寫卷的影本已刊印成書，坐在自己的書房或研究室中，就可重新再予檢視一遍，不必費時費力的遠訪英法及世界各地的圖書館進行檢閱，那麼所得的成果應該更為豐碩才對。若以〈下女夫詞〉一篇而言，當年學者知而未用的北大 D246RV 寫卷，我們已經可以看到外，又有他們所未知的 P.3266V、S.3277-1[3]、Дx3860、Дx3885A、Дx11049、Дx2654、S.9502V+S.9501+S.11419+S.13002 RV、Дx3135+Дx 3138、Дx12833RV 等十三個〈下女夫詞〉的卷號可以利用，所以掌握的資料更為全面了，縱使有些只是一些小殘片，但是能夠改正補充過去學者錯誤的機會不少。

如果充分利用這些卷號進行研究，除了可以改正或補充學者錯誤的若干地方外，重新檢討過去學者整理文獻的業績，也有值得商榷之處。因為以〈下女夫詞〉整篇

[1]〈下女夫詞〉收錄於王重民等編輯之《敦煌變文集》（人民文學出版社，1984 年 8 月第二版）卷三，第 273～284 頁。潘師石禪《敦煌變文集新書》（文津出版社，1994 年 12 月出版）則收入卷七，第 1179～1192 頁。

[2]目前對於「敦煌變文集」所收錄的篇章，一種說法乃持續舊說的發展，即是從原來佛教的齋會唱導，講解佛經，演化為不完全根據佛經經文，或只選取其中有趣味、又具有意義的片段經文及佛經或佛教的人物事蹟進一步的解說，藉以吸引大批的庶民大眾，由信而入。其後，更脫離了教義，或者因民間藝人的仿效，而以歷史事件及人物或者當代人物事件及市井間的雜碎細項作為講述敷衍的底本內容，成為宋元說話及民間講唱技藝的源頭。因此，這種技藝是中印文學及文化混血的結晶，既非完全襲自印度，也非無端產生於中國，孫楷第、鄭振鐸、王重民、潘石禪師即主此說。另外一種看法則是從向達、程毅中到張錫厚及多數晚近的大陸學者，都以為說唱技藝是中國原來早已具體存在的事實，不必外來文化或宗教的介入，因此把非佛經與非佛教所關涉的說唱篇章，依文體分成講史、民間故事、故事賦、話本、詞文等等，並且認為它們全是源自中國傳統的民間文化或文學，也與宋元以後的民間百藝接軌。

[3]此卷四川人民文學出版社新著目為「下女夫詞」，非是。

的內容結構而言，它是採用男女之間相互問答的方式而開展，從男方自報客來，女方即問來此何為？ 於是開始了一段對話，含括了原因、目的、質疑與不滿。而女方的說明及追問後，男方才誇大的表明自己是長安君子，進士出身，選得刺史，才至高門。接下來又是因何所求、籍貫、平安等一連串的問答。此後敘述一轉，成為男方發問姑嫂及家長的身體狀況，女方也問來客的平安。在這樣的問訊和對答中，男方始終進不了女家門因而顯得有些不耐；女方則解勸男方離開，速奔前程，使男方只好以種種理由推說走不動了，希望行個方便。女方也在不好絕情推拒之下，轉問伴者身分？ 籍貫、鄉里、川望？ 在一一回答後，才說明不得不詳審釋疑的原因，實非借故拖延，男方也認同這個說法。女方既然難以發遣這位登門的貴客，只好展褥舖床，請對方下了馬來，牽繩入房；至於來客也帶著綾羅千萬的禮物進門。等入房後，又是上酒、請下馬、鋪帳[4]、請下床的動作。對話到成大禮止，即告一段落。接下來則凡經過的每個地方，從論女家大門起，到中門、堆、堂基、逢鏁、堂門等，完全用五言詩詠的形式表現。最後則有論開撒帳合詩、去童男童女、去行座幛、去扇、詠同牢盤、去帽惑、去花、脫衣、合髮、梳頭、繫指頭及詠繫去離心人去情詩及下簾詩等，也是用五言或七言的韻文形式來加以表現。

以上〈下女夫詞〉的這套對話和詩詠看來是連續性的進行，毫無中斷，然而根據顏真卿等對於唐代公侯大夫士之婚禮節目進行討論後，卻有幾個步驟頗具爭議性，故杜佑《通典》曾載：

> 建中元年（780）十一月，禮儀使顏真卿等奏：「郡縣主見舅姑，請於禮會院過事。明日早，舅姑坐堂，行執笄之禮。其觀華燭，伏以婚禮主敬，非宜。並請停障車、下壻、却扇等，行禮之夕，可以感思，至於聲樂，竊恐非禮，並請禁斷。相見儀制，近代設以氈帳，擇地而置，此乃虜禮穹廬之制。合於堂室中置帳，請准禮施行。俗忌今時以子卯午酉年，為之當梁年，其年娶婦，舅姑不相見，蓋禮無所據，亦請禁斷。」並從之[5]。

可見當時盛行的「觀華燭」不合於禮，並且也將「障車」、「下壻」、「却扇」等節目一併禁斷。所謂「觀華燭」即指洞房花燭夜，聚眾取鬧，調笑新人，大家爭相觀看為樂；而「障車」即是娶親婚嫁之時，在半途上「攔街」阻車，索取財物或酒錢，後來發展為調笑戲樂；「下婿」則是女婿迎娶至女方家門時，即將「下馬」時的刁難取笑；「却扇」為男女雙方圓房前，將遮面的扇子移開，讓大家共睹新娘的面貌，也讓整個熱鬧的婚禮沸沸揚揚，達到一個高潮頂點。在這之後大家才取散告別，並共同咒願新郎新婦。以上這些項目除了「障車」一類在目前整理的〈下女夫詞〉中未見

[4]這裡「下馬」與「鋪帳」的動作應與上文有所複重。

[5]唐・杜佑撰，王文錦等典校，《通典》卷五十八〈禮十八・沿革十八・嘉禮三公侯大夫士婚禮〉（中華書局，1988 年 12 月出版），第 1654 頁。

外，「下壻」、「却扇」可說全然俱在。如果再尋求唐代的相關文獻，還有「催妝」、「撒帳」、「約花釵」、「咒願新人」等節目[6]，這些儀節除了「咒願新人」的部分在整理的〈下女夫詞〉一文找不到對應文字外，每一項目都還以詩詠的形式保留著。

既然如此，這一篇章的描寫必然與當時流行的婚姻習俗相關聯，此在下列參考文章中已多論述。可是整理這些寫卷的前輩似乎看到〈下女夫詞〉這一題名後，就不辨前後的相關文字，而獨立整理成篇，在考慮上似乎稍欠周詳。因為他們只提出一些現象後，卻沒有再加細究，如王重民校錄時，在文本最後一句話下附錄了校記，並作如此的說明：

> 原卷、丁卷、戊卷，從此以後有「咒願補（新）郎文」。但咒願文各自不同，則因咒願文必須隨著新郎新婦的家庭具體環境而措詞故也。此類咒願文敦煌所出極多，故刪去不載[7]。

顯然他在整理本篇時，所用的六號〈下女夫詞〉寫本，有半數以上是在抄寫至此之後又續接「咒願新郎文」，如果加上他沒有提到的己卷 P.2976，則接抄「咒願新郎文」的卷號更高達三分之二，而這麼高比例卻未引起學界更進一步探討兩者的關聯性，未免令人不解。其實，這些卷號在抄寫〈下女夫詞〉之後不只錄寫「咒願新郎文」而已，如原卷 P.3350 還有「咒願新婦文」一篇，顯然兩篇同是針對新人咒願所設立的文字。丁卷 P.3893 作「咒願女婿文」「咒願女婦文」，名稱上雖然稍有不同，意義還是一樣。因此，「咒願新人」還是涵括在〈下女夫詞〉之中，將它割離並非合理。至於〈下女夫詞〉即是原來「下婿」的部分，如今有些寫卷以此為題，只是作為整組對話詩詠部份前題混稱的一個總代表，王重民等整理時取作篇題，並不完全概括內容，最多只是反應抄寫者的認知而已。對於這點敦煌寫卷倒有個明確的證據，即 P.3909 戊卷在第一行的下端曾經載錄了如下的說明：「都十四篇為記，具說之。」第二行「論通婚書法第一」下與第一行平行處又有：「《今時禮書本》」五個字，顯然這兩處文字都是這本小冊子的內容註解和篇題，而「論通婚書法第一」則是《今時禮書本》的第一篇題及內容，以下另有「別紙」；「論女家答婚書第二」及「別紙」；然後提行說明：「右前件是公侯卿大夫已上男女共用之」，其下又有一小段空白，並續抄：「令長以下及庶人同用」，顯然原書作者以此區別為界，分為前後兩個段落，前段指出第一和第二篇都是公侯卿大夫以上共用的男方通婚書和女方答書，兩書都附有別紙。此後所錄則是「男家通婚書本」、「別紙」以及「女家通婚答書一本 前紙予不□」。從現存文字來看，似乎有省略節抄的情況，不過從內容而言，這些沒有篇次的書函應該是「令長以下及庶人同用」的通婚書及答書，原則上屬於第一和第二的別式書函。

[6]參見黃亮文撰，《敦煌寫本張敖書儀研究》（成功大學中國文學研究所碩士論文，1997 年 6 月），〈第三章張敖書儀婚禮研究〉第 69～128 頁。

[7]王重民等合編，《敦煌變文集》（北京：人民文學出版社，1984 年），第 284 頁。

可是接下來我們看不到第三到第七篇的題目和內容，現存原本似乎脫去數葉，直接與「論障車詞法第八 辟辭詞〈凡兒家時燭，對女家門，燭出兒家式〉」相接續。「障車詞法」上文已經解釋過了，這裡不如直錄原文，大家一看便能明白：

障車之法：吾是三台之位，卿相子孫。太元（原）王郭，鄭州崔陳。河東裴柳，隴西牛羊。南陽張李，積世中（忠）臣。陳君車馬，豈是凡人。

女答：今之聖化，養育蒼生。何處年小（少），漫事蹤（縱）橫。急手避（擗）路， 廢（發）我車行。

障車之法：小年三五，中（忠）赤（亦）榮華。聞君成禮，故來障車。

兒郎偉：梭梭南山，迢迢北斗。夜時更蘭（闌），從君統首。徒勞抵方，定知無酒。

障車之法：吾是九州豪族，百郡名家。今之成禮，故來障車。不是要君羊酒，徒（徙）君且作榮華。

兒郎偉：向來所說，將君作劇。恰恰相要，欲何所索。

障車之法：先自有方，須德（得）麒麟一角，三足鳳凰。聊（遼）東九味，西國胡羊。擬成桂昔，秦地生薑。小（少）一不足，實未形相。

兒郎偉：有酒如江，有肉如山。百味飲食，羅列斑斑。自餘雜物，並有君前。

障車之法：今故（古）流傳。蘭（攔）街興酒，枕巷開延（筵）。多招徒儻（黨），廣集諸賢。盃觴落解，絲竹暫烟。故來遮障，覓君財錢。君須化道，能罷萬端。劍南驄馬，雲走飛先。金錢萬貫，綾羅數千。

兒郎偉：百僚陽（揚）州，美味歌延（筵）。如其少一，定畢留樂酒[8]【錢】。

這段障車文的內容顯然是古代搶婚風俗在文明化後，變相的攔街，強要酒錢；也是女子出嫁途中，要脅有樂同享的一種風俗，然後逐漸成為一種戲樂風俗。抄本在障車之後，似乎又有脫葉的現象，因為另葉起再無篇第名稱，其標題和文字則屬〈下女夫詞〉的「請下馬」、「鋪帳」、「請下床」及「論女婿下至大門詠詞」、「至中門詠」、「逢鏁詩詠」、「至堆」、「至堂基」、「至堂戶」等詩詠，可說與其他寫卷大同小異，但是缺少「撒帳」到「下簾詩」等數段文字，並且直接續抄「論咒願新郎文」一篇，即以餘紙空白結束，沒有續抄他卷應有的「咒願新婦文」，因此這冊《今時禮書本》也是一份不完整的節抄本，雖然說明了「都十四篇為記，具說之。」但是實際上只錄了第一

[8]本卷冊頁本，黃本所錄至此，然續頁猶有「樂酒」二字，下接「請下馬詩」，乃標題，故「樂酒」二字當上屬為是。

到第十二篇的篇目和文字，中間脫去數葉或節略部分文字，後面也未曾抄完。因為S.6207一卷中，「長興三年（932）壬辰歲三月二十六日畫寶員記」的抄本中也有「障車詞法」，文字雖然不同，形式和意義則與此段類似，也有幾首「兒郎偉」的韻文，其後更有「咒願新郎文第十二」的標題。可見「障車詞法第八」之〈下女夫詞〉應被編列為第九，然後才接「論女婿至大門詠詞」到「至堂戶」等諸詩詠為第十，「撒帳」到「下簾詩」則屬催粧詩第十一，最後應為「咒願新郎文第十二」、「咒願新婦文第十三」以及「賀男女家第十四」，這應該是《今時禮書本》後半部。至於中間脫去的一部分應該存在俄羅斯藏本中，如Дx01055今題「書儀」，雖不中亦不遠，然而究其中題：「婚書儀第三」恰可補此半葉，內容書跡並同，知現存原本猶有數葉脫去，與「論障車詞法第八 辟辭詞〈凡兒家時燭，對女家門，燭出兒家式〉」相接續。如今〈下女夫詞〉只是請婿下馬、經過門戶及催粧三部分的組合，為不完整敘述的三個散段，因此整理者將屬於戲舞的部分獨立出來，至於「障車文」及「咒願新人」仍然具有戲謔的成分，卻被排除在外，實非合理。

所以如此斷定，又有一證，在「天復八年（908）歲次戊辰二月廿日學郎趙懷通寫記」的「張敖《新集吉凶書儀・吉儀卷上》」[9]中也有一組〈通婚書、別紙〉、〈答婚書、別紙〉的內容，以及婚書用紙、書法、函木大小、品式裝束和封題函樣等的說明，甚至還包括了送去押函的充使及副使，以及送去女家的步驟、方法及各種伴禮物品式樣。接下即是〈女家受函儀〉、〈成禮夜兒家祭先靈文〉（包含男女雙方），並且附有如此的文字說明：

> 三獻訖，再拜，辭先靈了，即於堂前北面辭父母。如偏露，微哭三五聲，即侍從儐相引出，向女家戲舞，如夜深即作催粧詩。

可見「戲舞」和「催粧」是婚禮進行中最具戲樂的趣味性節目，因此往往被獨立摘出，而題作「下女夫詞一本」，成為現存幾卷的抄寫式樣。其後又題〈女家鋪設帳儀〉一目，其內文也包括了「撒帳」、「咒願」、「女婿儐相行禮」、「昇堂奠鴈」、「同牢盤」、「合巹盃」及「脫禮衣冠」、「請劍履」、「儐相帳前詠除花去扇詩」等部分，並且以「去燭」結束，婚禮才終告完成，這些內容不少是「下女夫詞」中的一部份。此後，另有「賀慰兒家父母語」和「賀慰女家父母語」應是婚禮告一段落，客人即將散去前的賀詞。

張敖《新集吉凶書儀・吉儀卷上》婚禮的這段記錄不但反映了晚唐婚禮的步驟，也和《今時禮書本》一書的篇次內容兩相呼應，同時更證明了學者整理〈下女夫詞〉的不合理性。因為從嚴而論，「下女夫詞」名義原只限於請婿下馬的戲舞部份，但是

[9]參見黃亮文撰，《敦煌寫本張敖書儀研究》（成功大學中國文學研究所碩士論文，1997年6月），〈第三章張敖書儀婚禮研究〉第319～324頁。

敦煌文獻中的諸多抄者往往還加錄了經過門戶及催粧等詩文，並以「下女夫詞」作為冠首總稱，縱使大家勉強接受，但是排除較具趣味性的戲舞的「障車文」及「咒願新人」，則期期以為不可，否則應當重新整理，一併收入，改題：「《今時禮書本》」，並認定其非屬變文內容，需從《敦煌變文集》中移出。

二、〈咒願文〉是婚禮不可分割的吉祥祝願

其實張敖《新集吉凶書儀・吉儀卷上》之有「咒願文」並不意外，因為「下女夫詞」所用的寫卷中，如原卷 P.3350、丁卷 P.3893 及戊卷 P.3909 都具有「咒願新郎文」、「咒願新婦文」，王重民已經加註說明；而 S.6207 之題「咒願新郎文第十二」則已如上個段落論述。在此之外，還有己卷 P.2976 作「咒願新女婿」，S.0329V 則作「咒願新郎」，S.2049V 又作「咒願文」、「咒願新□」，S.5546 直接題作「咒願壹本」，含括「咒願新郎」、「咒願新婦」，Дx1455 題目雖同，但是僅存「咒願新郎」部份，S.8336 雖無「咒願壹本」及「咒願新郎」的題稱，從殘留的部分文字應屬同一內容，而且有「又云庶咒願新婦文」這一標題。因此在十二個「下女夫詞」的卷號中，除了甲、乙、丙和北大本四種因未抄完，或因殘片而未錄製「咒願文」外，其他八種都與「咒願新郎文」等共同出現，證明兩者之間的依存度十分緊密。此從題作戊卷的 P.3909《今時禮書本》一書來看，兩者都是婚禮儀式中的部分篇次。比較特殊的是 S.5546 題作「咒願壹本」，S.8336 則作「庶咒願」，似乎說明了咒願也有單行抄本，更有階級使用的身份區別，如同張敖《新集吉凶書儀・吉儀卷上》或《今時禮書本》中的加註說明。

三、〈兒郎偉〉與〈障車文〉的習俗

上述談到 P.3909《今時禮書本》中曾有〈論障車詞法第八〉，是在女家出嫁之時，半途障車攔街的對答韻文。這種「障車文」也出現在 S.6207 一卷，並且都以「兒郎偉」三字作為冠首題名。有關「障車文」的這種形式不只出現於敦煌文獻，唐人司空圖即有「障車文」一篇，除了第一段的說明外，全以「兒郎偉」題署的四首四六韻文呈現，這些韻文當日應該是配合音樂，可以吟唱[10]。根據《新唐書》唐紹對於婚禮風俗的建議：

> 昏家盛設障車，擁道為戲樂，邀貨捐貲動萬計，甚傷化紊禮，不可示天

[10]司空圖著，《司空表聖文集》卷十，又見《全唐文》第 4 冊第 3811 頁。

下。事雖不從，議者美歎[11]。

也因戲樂節目與禮不合，顏真卿等才主張禁斷[12]，可是此風並未就此衰歇，以至於晚唐五代西北一地的文獻依然保留這類風俗，而東南一帶及台灣民俗的婚禮，在新人迎娶之時，也每以嫁妝多少遊街抬行炫耀，蓋亦攔街之遺風。然而所談最稱詳細者莫過於《封氏聞見記》卷五「花燭」條，其文云：

> 近代婚嫁有障車、下壻、卻扇及觀花燭之事，及有卜地安帳，并拜堂之禮。上自皇室，下至士庶，莫不皆然。今上詔有司約古禮今儀，使太子少師顏真卿、中書舍人于邵等奏：障車、下壻、觀花燭及卻扇詩，並請依古禮；見舅姑於堂上，薦棗栗脯一本作脯脩，無拜堂之儀。又氊帳起自北朝穹廬之制，請皆不設，惟于堂室中置帳，以紫綾幔為之。又除俗禁子、午、卯、酉年，謂之當梁，嫁娶者云：婦姑不相見。按起居郎呂才奉太宗詔，定官陰陽書五十卷，並無此事，今亦除之[13]。

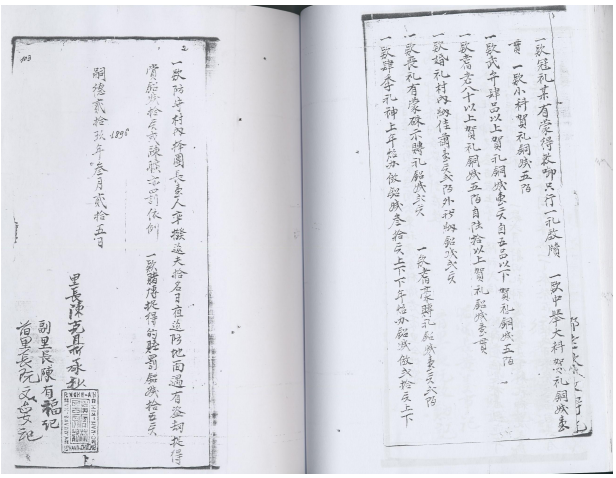


圖 1: VHV1192 北寧省僊遊縣受福總永富社鄉約（1896）

[11]宋・宋祁撰，《唐書》（臺北鼎文書局影中華書局點校本，1979 年 11 月初版），卷一百十三〈唐張徐列傳第三十八〉，第 4185 頁。

[12]唐・杜佑撰，王文錦等典校，《通典》卷五十八〈禮十八・沿革十八・嘉禮三公侯大夫士婚禮〉（中華書局，1988 年 12 月出版），第 1653 頁。云：「太極元年十一月，左司郎中唐紹上表曰：『士庶親迎之禮，備諸六禮，所以承宗廟，事舅姑，當須昏以為期，詰朝謁見。往者下俚庸鄙，時有障車，邀其酒食，以為戲樂。近日此風轉盛，上及王公，乃廣奏音樂，多集徒侶，遮擁道路，留滯淹時，邀致財物，動踰萬計。遂使障車禮貺，過於聘財，歌舞喧譁，殊非助感，既虧名教，又蠹風猷，諸請一切禁斷。』從之。」又《舊唐書》卷四十五「禁斷」下有「其有犯者有蔭家，請準犯名教例附簿，無蔭人決杖六十，仍各科本罪。制從之。」又參見上註 6。

[13]唐・封演撰，《封氏聞見記》（臺北、新文豐出版公司，1984 年 6 月出版）卷五，第 59-60 頁。

由此可見 P.3909《今時禮書本》一書還是忠實反映了唐代庶民社會的婚姻風俗。至於越南河內漢喃院所藏北寧省各社「俗例」、「券例」或鄉約中也多有「攔街」風俗的條文紀錄，如〈北寧省慈山府僊遊縣芝泥總芝內社券例〉第九到十一條，列舉民家有孝事及民社有生死嫁娶簿。後者規定社總內凡有婚喪，參日內需就里長家詳開列報，否則察得，詳呈民社耆役擬罰。其中更規定：一般女子出嫁內鄉，應納本社斯文會錢和芙蓉；外鄉則壹倍貳，而錢留斯文會公支。出具攔街錢則有內外之分：凡社內者陸陌，社外者壹倍貳。（又參見圖 1～圖 3）

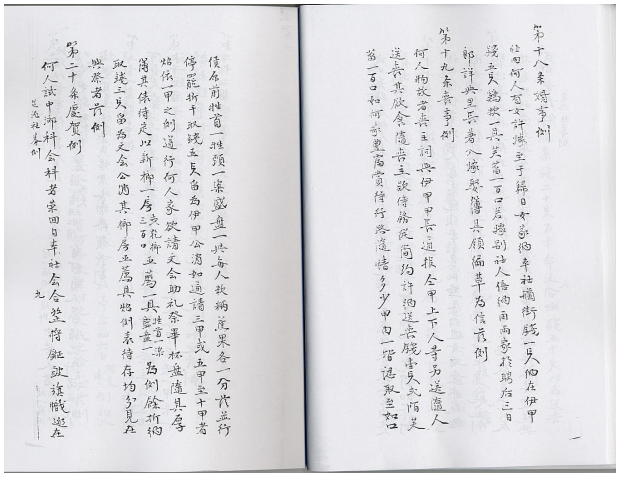


圖 2: AF-a08-1-22 北寧省僊遊縣芝泥總芝泥社

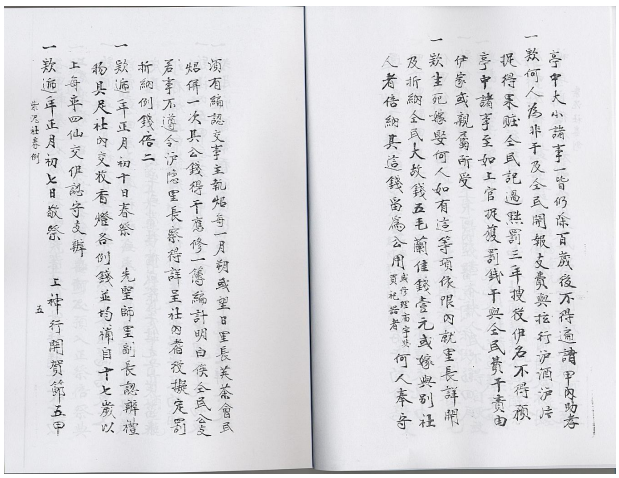


圖 3: AF-a08-1-1 北寧省僊遊縣芝泥總紫泥社券例

只是障車時何以要吟唱「兒郎偉」這類的歌謠呢？ 這不得不在下節中加以分析探究。

四、〈兒郎偉〉與〈驅儺文〉

「兒郎偉」與古代之大儺信仰息息相關,《後漢書・禮樂志》曾經談到大儺儀式云：

> 先臘一日，大儺，謂之逐疫。其儀：選中黃門子弟年十歲以上，十二以下，百二十人為侲子。皆赤幘皂製，執大鼗。方相氏黃金四目，蒙熊皮，玄衣朱裳，執戈揚盾。十二獸有衣毛角，中黃門行之，冗從僕射将之，以逐惡鬼于禁中。夜漏上水，朝臣會，侍中、尚書、御史、謁者、虎賁、羽林郎將執事，皆赤幘陛衛。乘輿御前殿。黃門令奏曰：「侲子備，請逐疫。」於是中黃門倡，侲子和，曰：「甲作食$\boxed{\text{歹凶}}$，胇胃食虎，雄伯食魅，騰簡食不祥，攬諸食咎，伯奇食夢，強梁、祖明共食磔死寄生，委隨食觀，錯斷食巨，窮奇、騰根共食蠱。凡使十二神追惡凶，赫女軀，拉女幹，節解女肉，抽女肺腸，女不急去，後者為糧！」因作方相與十二獸儛，嚾呼，周徧前後省三過，持炬火，送疫出端門；門外騶騎傳炬出宮，司馬闕門門外五營騎士傳火棄雒水中。百官官府各以木面獸能為儺人師訖，設桃梗、鬱儡、葦茭畢，執事陛者罷。葦戟、桃杖以賜公、卿、將軍、特侯、諸侯云[14]。

這裡所載述的宮庭儀式內容與 P.3552 情節類似，而且其源起甚早，孔子以來即有鄉儺的紀錄，考之《周禮・春官宗伯第三》設有「占夢」一職，「掌其歲時，觀天地之會，辨陰陽之氣，以日月星辰占六夢之吉凶。……季冬聘王夢，獻吉夢于王，王拜而受之。乃舍萌于四方，以贈惡夢，遂令始難毆疫。」〈夏官司馬第四〉也設有「方相氏狂夫四人」，其專職是：「掌蒙熊皮，黃金四目，玄衣朱裳，執戈揚盾，帥百隸而時難，以索室毆疫。大喪先匶。及墓入壙，以戈擊四隅，毆方良」[15]鄭玄注云：「令，令方相氏也。難，謂執兵以有難卻也。……故書難，或為儺。杜子春難讀為難問之難，其字當作儺。月令：季春之月，命國難九門磔禳，以畢春氣；仲秋之月，天子乃難，以達秋氣；季冬之月，命有司大難旁磔，出土牛以送寒氣。」這幾個「難」字是由人經過特殊的裝扮，用於毆疫逐鬼的方相狂夫，蒙著熊皮，裝扮如魌頭一班，然後依春秋冬三季之時令，向四方九門磔禳，故又云：「蒙、冒也。冒熊皮者，以驚毆疫癘之鬼，如今魌頭也。四時作方相氏，以難卻凶惡也。月令：季冬，命國難索廋也。」[16]所謂命國難九門磔禳，或命有司大難旁磔，都是如王昭禹所謂的：「方相氏者，以其相視而攻疫者非一方也。」鄭鍔也說：「蓋方相氏以狂夫為之，康成謂方相猶放想，

[14]《後漢書・禮儀中・大儺》（臺北鼎文書局影中華書局點校本，1979 年 11 月初版），第 3127-3128 頁。

[15]以上數段引文參見《周禮》卷二十五，《十三經注疏本》（藝文印書館）第 381-382、432、475 頁。

[16]《周禮》卷二十五，《十三經注疏本》（藝文印書館）第 382 頁。

可畏怖之貌，義無所攷，殆猖狂之意也。因四方而驅疫，必狂夫為之，蓋陽勝則為狂，陰慝則為疫。狂夫陽之太過者也，夏則陽盛而火王，陽盛而太過，則為狂矣。使之索陰慝之鬼，亦厭勝之術。」[17]可見這種從宮廷到鄉里社區之間驅厲逐鬼的厭勝之術，逐漸形成祈求庶民百姓平安的風俗活動，並且以不同的面貌傳衍到今天。因此，兩漢宮廷也不能夠免俗，唐代亦有大儺及諸州縣儺儀式，不過主持的位階一在中央，一屬州縣的層級，其分別在於規模的大小及參與人數的多寡而已[18]。所以陳暘在《樂書》中即云：

> 三代而上有公厲、族厲、泰厲之祭，至周始用方相氏……齊因之以戲射，魏帝因之以閱武，至唐季冬大儺及郡邑儺，開元禮制之詳矣。蓋以晦日於紫宸殿前設宮架之樂，前期先閱儺并樂。是日，大宴三府，朝臣家皆上棚觀之，百姓亦預焉，頗謂壯觀也。惟歲除前一日，於金吾仗龍尾道下重閱，即不用樂矣。觀孔子有鄉人儺之說，未嘗用樂也。然則驅儺用宮架之樂，其後世之制歟！[19]

歷來驅儺隊伍都著假面，衣赤布袴褶之侲子和執事、執鞭宮人、方相氏、唱師鼓吹令、太卜令等陣仗組成。當鼓吹聲作，唱師導唱，眾子相和，此即《後漢書・禮樂志》所談的「中黃門倡，侲子和。」其和聲乃唱作兒郎偉，帶有相互自我勉勵壯膽的意味。甚至到了齊魏之際，還有戲射閱武等節目，已經演化成近乎戲射的一種活動，也為後代戲劇起源的先導。可惜文獻上並沒有具體談到唱和的內容，但是從敦煌文獻中的驅儺寫卷，每在「兒郎偉」之前說明驅儺活動是古來遺傳，然後即有「兒郎偉」的唱和，唱完之後，又加註了「音聲」二字。凡此，足以說明這些驅儺活動的隊仗排場，在音樂歌唱的相互附和之下，從宮廷或鄉里房宅之內遶行到四境城門，象徵驅除社區之疫鬼凶邪，祈求國泰民安的大致情況。至於現今敦煌所存在的二十八號文獻，共十七種不同文字的「驅儺」文本[20]，除了帶有說明性質的第一段偶為四字句外，幾乎以純粹的六字句為主，而未有「音聲」加註的「兒郎偉」也可准此推定，絕非徒誦的方式。

那麼，上節談到「障車文」之用「兒郎偉」當然是受此一活動之「驅儺文」影響下的產物，絕對不可能無緣無故自然生發的相同文體，並且是以戲樂的方式驅除凶神惡煞般的障車者。尤其越南不但上一世紀中還保留了攔街的習俗，追溯文獻紀錄更可與敦煌文獻接軌，如《朝野僉載》卷三「崔鉉信」條曾云：

---

[17]宋・王與之撰，《周禮訂義》（四庫全書本）卷五十一。

[18]參見《大唐開元禮》卷九十「大儺」、「諸州縣儺」條。

[19]宋・陳暘撰，《樂書》（四庫全書本）卷一百九十九。

[20]參見周紹良著，《敦煌文學芻議及其它》載錄了十種寫本，黃徵、吳偉著，《敦煌願文集》又增加了六種。

安南都護崔鉉信命女壻裴惟岳攝愛州刺史，貪暴，取金銀財物向萬貫。有首領取婦，裴郎要障車綾，索一千疋，得八百疋，仍不肯放。捉新婦歸，戲之，三日乃放還。首領更不復納，裴即領物至揚州。安南及問至，擒之，物並納官，裴亦鎖項至安南，以謝百姓。及海口，會赦而免[21]。

再者，五代王定保撰述的《唐摭言》卷十也說：

湯篔，潤州丹陽人也。工為應用，數舉，敗於垂成。……晚佐江西鍾傅，書檄闐委，未嘗有倦色。傅女適江夏杜洪之子，時及昏暝，有人走乞障車文。篔命小吏四人，各執紙筆，倚馬待製，既而四本俱成[22]。

似此情形，說明了障車習俗絕對不是西北一地個別存在的現象，證之上述唐紹的上表和顏真卿的奏議，實非事出無因。

五、〈兒郎偉〉與〈上梁文〉

有關使用〈兒郎偉〉作為歌唱的形式，不只用於〈驅儺文〉和〈障車文〉這兩種文體而已，敦煌文獻中 P.3302V〈維大唐長興元年癸巳歲（西元 930 年）貳月廿四日丙寅河西都僧統和尚依宕泉靈跡之地建龕一所上梁文〉、S.3905RV〈〔大〕唐天復元年辛酉歲（901 年）十二月十八日金光明寺造□〔佛〕窟上梁文 和□□自述〉等二號寫本都有建龕窟上梁的說明，隨即出現「兒郎偉」的韻文。P.4995「社邑功德記」雖無「兒郎偉」這一題目，也無〈上梁文〉的題稱，但是從內容來看，既是六字句的押韻形式，並且與營建落成典禮相關，還是可以列入〈上梁文〉的範疇。

在敦煌文獻之前，〈上梁文〉的最早出現當屬北魏溫子昇的〈閶闔門上梁祝文〉[23]，以驅儺文、障車文、上梁文三者出現的時間而論，上梁文恰是前兩者的中介。然而該文僅是四字句、十四句的簡短祝語韻文。根據劉勰對於祝文的看法，認為它起源於伊耆始蠟，以祭八神之辭[24]。這點的確與〈驅儺文〉的性質近似，如果驅儺是在驅逐邪神厲鬼，遠離社區民宅；而蠟祭八神是在要求「土反其宅，水歸其壑，昆虫毋作，草木歸其澤。」至於〈上梁文〉的祈求目的則是祭祀土神，讓邪神惡鬼遠離新建房舍，使入居者能夠身體平安康健。因此，兩者主要目的都是在祈求國泰民安和社稷的祥和，庶民百姓的安居樂業，遠離災殃，意義上可說無所區別，所以上梁才援用了驅儺的兒郎偉。只是初盛唐文獻未見〈上梁文〉一類的續作，直到晚唐，才有河

[21]唐・張鷟撰，趙守儼點校，《朝野僉載》（中華書局，1979 年 10 月版）卷三，第 77 頁。

[22]五代・王定保撰，《唐摭言》（四庫全書本）卷十。

[23]明、張溥編，《漢魏六朝百三名家集》（文津出版社，1979 年 8 月出版）第六冊，第 4637 頁。

[24]劉勰著、范文瀾註，《文心雕龍、祝盟第十》云：「昔伊耆始蜡，以祭八神。其辭云:『土反其宅，水歸其壑，昆虫毋作，草木歸其澤。』」參見臺灣開明書店，1969 年排印七版，第 74 頁。

西敦煌人李琪（873～933？）撰寫之〈長蘆崇福禪寺僧堂上梁文〉[25]。該篇是用「六詠」的韻文形式，助舉雙梁，即以東、南、西、北、上、下六合之次，用七言三句形式及方向字為韻，並以簡短之祝願文字作結。凡此，不但說明了〈上梁文〉源於祝文這類的文體，到了宋人著作更出現不少這類的文章，於是蔚為大國，成為獨立的一種文類[26]。

唯一不同的是「六詠」並無〈兒郎偉〉的名目，直到敦煌文獻及宋人的諸多文集才被大量的使用，因此它受到〈驅儺文〉形式的影響應該足以確認。至於其意義，《愛日齋叢鈔》卷五曾經引用吳氏《漫錄》及樓大防之說如下：

> 上梁文吳氏《漫錄》考其所始，云：後魏溫子昇有〈閶闔門上梁祝文〉……乃知上梁有祝文矣，不若今時有詩語也。樓大防參政又考「兒郎偉」始於方言，其說云：「上梁文必言兒郎偉，或以為唯諾之唯，或以為奇偉之偉，皆未安。在敕局時，見元豐中獲盜，推賞行部例，皆即元案，不改俗語。有陳棘云：『我部領你懣廝遂去深州邊。』吉云：『我隨你懣去。』懣本音悶，俗音門，猶言輩也。獨秦州李德一案云：『自家偉不如今夜去。』余啞然笑曰：『得之矣。』所謂兒郎偉者猶言兒郎懣，蓋呼而告之，此關中方言也。上梁有文尚矣，唐都長安，循襲之。以語尤延之諸公，皆以為前未聞。或有云：『用相貌之偉』者，殆誤矣。」樓公考證如此，予記《呂氏春秋、月令》，舉大木者前呼與謣，後亦應之。高誘註：『為舉重勸力之歌聲也。』『與謣』注或作『邪謣』，《淮南子》曰『邪許』，豈偉亦古者舉木隱和之音[27]。

這段論證把「兒郎偉」看成如勞動歌曲，象徵著大家協力舉梁時的唱和樂聲，乍看之下似乎言之成理，但是從敦煌本的〈驅儺文〉來看，吳曾及樓大防的說法不過想當然耳；何況從驅儺儀式所唱的「兒郎偉」，則是針對侲子驅儺行動給予的讚頌歌唱，兼帶壯膽激勵的作用已如上述。然其影之深遠，從宋、元以迄於今日的著作或民俗中，常有紀錄，甚至東亞各國，如越南諒山省之關帝廟尚可見到上梁實物的遺跡。（參見圖4）

至於韓國之文人作品，也存極多實例，如《秋浦先生集》卷二則有一篇、《睡隱

[25]清、董誥編，《全唐文》（大化書局，1987年3月出版）卷八四七，第3995～3996頁。

[26]魏齊賢、葉棻同輯錄，《五百家播芳大全文粹、序》（以下凡不著名書局及出版年月日者，蓋用四庫全書本）。

[27]《愛日齋叢鈔》，卷五《讀書劄記叢刊》（世界書局，民國五十二年四月板）第二集，第八冊第206～207頁。按本則不見於今本《能改齋漫錄》，蓋為明抄本《說郛》卷三十五引述，北京中華書局本則輯入逸文卷一第531頁，木鐸出版社乃據此本出版翻印。文字與叢抄所引略有不同。又宋、王應麟《困學紀聞》卷十九亦主：「溫子昇〈閶闔門上梁祝文〉為上梁文之始也。兒郎偉猶言兒郎懣，攻媿嘗辯之。」

圖 4: 越南諒山省關帝廟上梁題字

集》卷二有三篇、《鳳巖集》十四卷共七篇、《魯西遺稿》卷十六共六篇、《鼓山集》卷十有二篇、《澤堂集》別十二有六篇、《白軒先生集》卷十五更多達十三篇、《耳溪集》卷十九有六篇作品，凡此，都與宋人寫作之上梁文體有近似的形式，並有「兒郎偉」詞。再如以漢文書寫的文言小說，金時習模仿瞿佑《剪燈新話》之《金鰲新話》，亦有〈龍宮赴宴錄〉一篇，也有「兒郎偉」。

跨海到了日本以後，在《本朝文粹》正、續編的確未見有兒郎偉的遺跡，可是根據王小平最近的努力[28]，卻找到了不少相關的資料，如鎌倉室町時代中岩圓月 (1299-1375)，俗姓土屋，號中岩，別號中正子、海漚子、東海一漚等，其文集為《東海一漚集》，其中載有元文宗即位時，因建百丈山法堂及其上層的天下師表閣，而令中岩作的「上梁文」；此外，另有一篇題作《吉祥寺新建方丈上梁文》，兩者皆受宋人體式影響，非直接仿自唐人作品。又「奈良縣宇陀市榛原區的禦井神社，何時初建，已不可考，但《大和志》所載上梁文說其『建長八年重修，天正二年再修，高井自明共予祭祀。又村西有神殿，稱曰十二社，勒文中四年營造』。」更可貴的是在《平泉志》也找到了一篇《義經廟上梁文》，其文云：

> 陸奧州高館者，源氏義經故城也。義經薨後，遂作墟荒。天和年中，當州太守、仙台羽林綱村公家臣、河東田兵衛定恒來，治郡之次，登此山，

[28]王曉平，〈日本上梁文小考〉，《尋根》（2009 年）第 01 期。

訪遺塵，寒煙蔓草，四顧荒涼。故老相傳云：「五十年前，此地有靈祠。」定恒慨然而歎曰：「義經者，大將軍賴朝公令弟，其軍功威名，市豎街童，無不知焉。豈有不封尺寸地，剪一莖草，而安厥神靈乎？」即平泉眾徒共儀（議），而白公太守命之，草創一宇，以鐵瓦葺之，人咸號之曰「義經堂」。其功其德，雖專歸太守，原濫觴實出自郡吏定恒之善心。善心豈可不獲善報乎？ 可嘉可尚，仍賦一偈，充上梁文。偈曰：以平等心為墓趾（址），旻廣新成輪奐美。俎豆來藻川漣漪，□□高館城蒼翠。□蒿愴愴如見之，勿疑台靈垂光賁。蓋代功名昨夢回，從前汗馬總兒戲。假令四海鬥英雄，爭似早出離生死。血流漂鹵（櫓）古戰場，純白蓮華棒（捧）雙址（趾）。我有一卷了義經，天龍八部常側耳。

這篇文章的確可以補充有關日本上梁的諸多資料，彌足珍貴。可見「上梁文」或「兒郎偉」等，還待繼續追索，而東亞各國諸多文化或文學之間的交涉，更值得深入探討，畢竟這是一個比較文學和比較文化學上有趣的問題，也是東亞各國文化及漢字文化圈內所要共同關心的課題。尤其在敦煌文獻已經公布殆盡之際，學者更應朝向一個更宏觀且更為深化的延伸研究。

附錄一：諸家使用敦煌文獻下女夫詞、驅儺文、上梁文、障車文、咒願文卷號表

P.3350 原卷[1]	王重民	潘師	周紹良	黃征		下女夫	驅儺	上梁	障車	咒願
S.3877V 甲卷[2]	王重民	潘師				下女夫				
S.5949 乙卷[3]	王重民	潘師				下女夫				
S.5515 丙卷[4]	王重民	潘師				下女夫				
P.3893 丁卷[5]	王重民	潘師	周紹良	黃征		下女夫	驅儺			咒願
P.3909 戊卷[6]+Дx01055	王重民	潘師		黃征	伊藤	下女夫			障車	
P.2976 己卷[7]	王重民	潘師	周紹良	黃征		下女夫	驅儺			咒願
北大 D246RV[8]	知而未用		周紹良			下女夫	驅儺			
S.5546[9]			周紹良	黃征			驅儺			咒願
S.2049V[10]			周紹良				驅儺			咒願
S.6207[11]			周紹良	黃征	伊藤				障車	咒願
S.0329V[12]			周紹良	黃征					障車	咒願
P.3270+P.3270V+P.4976+Дx1049			周紹良	黃征 黃征	伊藤 伊藤		驅儺 驅儺			
P.3468[13]			周紹良	黃征			驅儺			
P.3856			周紹良	黃征	伊藤		驅儺			
P.4011			周紹良	黃征	伊藤		驅儺			
P.4055			周紹良	黃征	伊藤		驅儺			
S.6181			周紹良	黃征	伊藤		驅儺			
P.3702			周紹良	黃征			驅儺			
P.3552			周紹良	黃征	伊藤		驅儺			

P.2569V				黃征	伊藤		驅儺			
P.3555V				黃征	伊藤		驅儺			
S.2055V				黃征			驅儺			
P.2612V				黃征	伊藤		驅儺			
P.2058V				黃征			驅儺			
S.8210V				黃征			驅儺			
P.3302V			周紹良	黃征	伊藤			上梁		
S.3905RV				黃征				上梁		
P.4995V				黃征				上梁		
P.3266V[14]						下女夫				
S.3277-1						下女夫				
S.8336[15]										咒願
Дx2654[16]						下女夫				
Дx3860RV[17]						下女夫				
Дx3885A[18]						下女夫				
Дx11049RV[19]+（Дx2654）						下女夫				
S.9502V+ S.9501 +S.11419 +S.13002RV[20]						下女夫				
Дx1049（校）							驅儺			
Дx2235V							驅儺			
Дx3135+Дx3138[21]						下女夫				
Дx12833RV						下女夫				
Дx1455										咒願
Дx05877										咒願

1 首行原題「下女詞一本」，第四行後斷裂，今已綴合為一，所錄至「暫請旁人與下簾」一句止，然後跳行接抄「咒願新郎文」、「咒願新婦文」、「咒願主人」。

2 本卷正面為葬經及社司轉帖、背面則錄各種文契，其第五部份始抄「下女詞一本」，題目原有，又另題「下女詞一首」，尾殘，未錄完。

3 本卷首題「下女夫詞一本」，尾殘未抄完，卷背亦有「下女夫詞一卷」之題名紙條。

4 本卷無題，首尾俱殘，卷背有雜抄。

5 本卷首殘，無題目，抄：「下女夫詞」，然後續抄咒願女婿文、咒願新婦文。文字據 P.3893 迻錄。

6 P.3909 冊葉本，正面首為「今時禮書本」，「都十四篇為記，具說之。」次行「論通婚書第一」當為書名」而其上「論通婚書第一」則上為篇目標題，下為書名，其後各頁間插「論女家答婚書第二」、、「別紙」、「令長已下及庶人男家通婚書本」、「別紙」、「女家通婚答書一本」、「論障車詞法第八」，各詞繫以「兒郎偉」名。然後接抄「下女夫詞」之「請下馬」、「鋪帳」、「請下床」、「論女婿下至大門詠」、「至中門詠」、「逢鎖詩」、「至摧粧詩」、「至堂基詩」、「至堂戶詩」等內容，然後續抄「論咒願女郎文」。

7 本卷首殘，無題目，抄：「下女夫詞」內容，然僅止於鋪帳入門，然後續抄「咒願新女婿」、「咒願新婦文」，今據迻錄。

8 本卷首題「下女夫詞一本」，未抄完即接抄社司轉帖，蓋為學郎習書錄本。

9 本卷據 S.5546 迻錄，題目「咒願壹本」原有。

10 S.2049 正面為毛詩鄭箋豳風至小雅，卷背首為敦煌諸賦，然後有錦衣篇、漢家篇等詩……老人相問嗟嘆詩等至北邙篇後始錄本文，今據 S.2049V 迻錄。

11 S.6207 僅為殘紙，自「作極兒郎偉」到「故來障車須得牛羊」蓋屬下女夫詞障車文字，其下有「長興四年壬辰歲三月廿六日寶員記」，其後接抄「咒願新郎文第十二」，至「此無為。新」止。似乎其前尚有不同類別之文字，或當從「下女夫詞」中分出。又卷背雜寫。P.3909 為《今時禮書本》，中題〈論障車法第八〉，卷末為「論咒願新郎文」，故知此類文字皆屬《今時禮書本》之部分，可單獨據以整理，合成一書。此段據 P.3909、S.6207 整理迻錄。

12 本書正面為杜友晉之書儀境，卷背雜抄，不成體類，有曲子、兒郎偉及咒願新郎等殘文。另有一行「寫信式樣，大順年間事」，似乎其時曾有檢點，待考。

13 周誤作 P.3486。

14 本卷正面為王梵志詩，背面殘存題目及一行內文，題作：「下女夫詞一首」，蓋為習寫。其後留空數行，然後錄寫「投社人董延進狀」。

15 S.8336 為一殘紙，自「三品」二字起，無標題，中間多殘缺，迄於「緯緯行行」止。

16 本卷無題目，首尾俱殘，僅存兩片殘紙。

17 本卷僅一殘紙，正背面並抄「下女夫詞」，無題目。

18 本卷僅殘存題目：「下女夫詞一本」，烏絲欄。

19 本卷僅是殘片，無題目。

20 本卷共四號，今已綴合，正面為「孔子馬頭卜法」，卷背錄「下女夫詞」，首殘缺題。起自「今宵至」三字，然後接「第二去行座障詩」（撒帳）、「去扇詩」、「去花詩」、「尾須詩」（即繫指頭詩）、「詠同牢盤詩」、「開撒帳合詩」、「脫衣詩」等，不但與原次第不同，文字接合亦有問題，似乎此四號可以綴合了無疑意，其順序或缺文部份猶待改正。

21 題作「變文」實為「下女夫詞」。

附錄二：參考書目及提要：

程毅中，〈關於變文的幾點探索〉，《文學遺產增刊》，1962 年。案本篇蓋亦論述變文名義體制等問題，提及《下女夫詞》也只介紹背景是姑嫂二人在家接待一為遠方來客，相互酬謝。

趙守儼，〈唐代婚姻禮俗考略〉，《文史》3，1963 年。案本篇考述唐代婚姻禮俗，其中涉及障車文之問題。

張錫厚，《敦煌文學》，上海古籍出版社，1980 年，第 105 頁。其所持看法與王重民不異。

王重民，〈敦煌變文研究〉，《中華文史論叢》，1981 年 5 月第二期。本篇又曾收錄於《敦煌遺書論文集》、《敦煌變文論文錄》，文字略有不同，蓋論述變文名義體制儀式等為主，談到《下女夫詞》也只提及七個寫卷以及由二人至三人講述，如古代的所謂「合生」。

張鴻勛，〈游仙窟與敦煌民間文學〉，《敦煌學輯刊》第二期，蘭州大學敦煌學研究小組編，1981 年。此篇並非專論，其中僅部分文字涉及，並其主張《下女夫詞》是雙方所唱的喜歌，且女婿到女家，每見一物，都要歌詠，由雙方歌唱。至於女家唱者是女方的親友。

張鴻勛，〈敦煌寫本《下女夫詞》新探〉，《1983 年國際敦煌學術討論會文集、文史遺書編》（下），第 162-180 頁， 1987 年。本篇雖增 S.5643、P.2350 二卷，皆非《下女夫詞》。唯認為此乃搶親風俗所蛻變的婚禮儀式，並隨婚禮進行即興

編唱的民間歌謠的婚禮儀式歌本，上半是戲弄女婿，下半是戲弄新娘，從論開撒帳合詩起至結束。

李正宇，〈《下女夫詞》研究〉，《敦煌研究》2 第 40-詹 50 頁，1987 年。認為是歸義軍某一位沙州刺使迎親時禮賓人員編輯的親迎禮辭手冊，供給伴郎伴娘以及儐相人員熟讀背誦，以便林長時應酬得體，對答自如，始迎親儀式按步就班，有條不紊，從而保證迎親儀式的質量和水平而製作的。因此亦涉及年代的考證。

楊寶玉，〈《敦煌變文集》未入校兩個《下女夫詞》卷校錄，解放以來全國敦煌語言文學研究述評〉，周紹良 張錫厚，《敦煌語言文學研究》，1988 年。本篇以《敦煌變文集》未曾入校的北大本及 P.2976 寫本的討論與補校，並認為《下女夫詞》事一首婚禮儀式歌，非一般的說唱文學作品。

黃征，〈敦煌文學《兒郎傳》輯錄校注〉，《杭州大學學報》，1988 年。本篇以輯錄校註為主，其使用卷號已如圖表。

高國藩，《敦煌民俗學》（上海文藝出版社，1989 年 11 月），第十二章（第 194～215 頁）「民間婚禮程序」蓋據 P.3350 及 P.3284 二卷號加以鋪敘成章。第二十七章（第 483～505）「驅儺風俗與兒郎偉」則專門探討驅儺風俗與兒郎偉間的關係，所利用之卷號有 P.3270、P.4011、S.2055、P.3552、P.4055，並探討其思想內容與宗教本質。

高國藩，《敦煌古俗與民俗流變—中國民俗探微》（河海大學出版社，1989 年 12 月），第 346～359 頁，乃據 P.3468 號文字探討夜進胡風俗及驅儺問題。

黃征，〈敦煌歌謠「兒郎偉」的價值〉，《文史知識》（1990 年）第七期，第 104-105 頁。

黃征，〈敦煌願文「兒郎偉」考論〉，《文學論叢》（1992 年 5 月），。

周紹良，〈敦煌文學「兒郎偉」并跋〉，《敦煌文學芻議》（臺北：新文豐出版社，1992 年），第 165-182 頁。

黃征，〈敦煌願文「兒郎偉」輯考〉，《九州學刊》（1993 年）。

譚蟬雪，《敦煌婚姻文化》（甘肅人民出版社，1993 年 8 月）。本書對 P.3909《今時禮書本》（P.3909）及「婚嫁詩詞」（P.3350、P.2976、P.3909）、「障車詞」（P.3909、S.6207）、「咒願文」（P.3608、S.5546、P.2976、P.3893、P.3252、P.3350、P.3909、S.6207、P.4638）等卷號，分類輯錄其本文，並從婚姻文化觀點切入，探討婚姻儀式問題。

王三慶，〈敦煌寫卷記載的婚禮節目與程序〉，《潘石禪先生九秩華誕敦煌學特刊》（1996.09），第 533～564 頁。

王三慶，〈敦煌寫卷中的營建民俗研究〉，《民俗與文學學術研討會論文集》，（1998.11，國立中山大學主辦之民俗與文學學術研討會），第 141～180 頁。

黃笑山,〈「兒郎偉」和「悉曇頌」的和聲〉,《河南廣播電視大學學報》2001：3，頁3～5，2001。本篇旨在說明「兒郎偉」三字是沒有意義的襯詞，跟〈悉曇頌〉中「現練現」等一樣的和聲，然而他主張兩者的和聲在語音結構及用法上完全不同，並做出了語音分析。

弗子,〈敦煌儺歌《還京樂》與《兒郎偉》〉，中國網，2003 年 10 月。此篇僅是介紹性的泛論。

楊挺,〈不存在兒郎偉文體和兒郎偉曲調〉,《敦煌研究》2003：1，頁 45～48 頁。本篇作者否定兒郎偉文體和兒郎偉曲調根本不存在，而是上梁文、障車文、驅儺文等實用文體中所呼的「兒郎輩」或「小伙子們」。

趙睿才,〈敦煌寫本《下女夫詞》的民俗解讀〉,《名作欣賞》2005：22，頁 14～16，2005。本篇乃據文本解讀婚俗的相關問題。

王三慶,〈有關周先生『敦煌文學「兒郎偉」并跋』一文的貢獻及補實〉,《周紹良先生紀念論文集》（北京圖書館出版社，2006.08），第 383～385 頁。

王三慶,〈上梁文體之流變研究〉,《宋代文學之會通與流變—-「近世文學國際學術研討會論文集」之一》（張高評主編，新文豐出版社，2007.03），第 337～366 頁。

伊藤美重子,〈敦煌資料に見える「兒郎偉」をめぐって——驅儺文、障車詞、上梁文〉,《お茶の水女子大學中國文學會報》第七號，第 85-104 頁。案本篇蓋據金剛照光之《敦煌出土文學文獻分類目錄附解說》（東洋文庫敦煌研究委員會，1971 年）與《敦煌遺書總目索引》（中華書局，1983 年）二書所錄相關寫卷共十號寫卷，並說明驅儺文、障車詞、上梁文之內容，以及兒郎偉之民間性質。

蔡艷,〈兒郎偉若干問題考辨〉，南京師大碩士論文，第一指導教授黃征，2008 年 4 月 28 日。本篇在黃征的觀點上，檢討兒郎偉諸爭論問題，以「兒郎偉」作品文本入手，對「兒郎偉」的涵義、文學性質、文化意義及在敦煌文學中的地位等問題，進行細緻的探討和考辯。第一章主要綜述國內外研究情況以及「兒郎偉」研究所遇到的問題；第二章解讀「兒郎偉」的涵義；第三章是對「兒郎偉」文學性質的考辯；第四章論述了「兒郎偉」與敦煌歷史文化的淵源；最後一章，則總結論述。

王曉平,〈日本上梁文小考〉,《尋根》（2009 年）第 01 期。本篇乃對日本上梁文的鉤輯研究，有不少發現。

（作者為臺灣國立成功大學中國文學系教授）

『敦煌寫本研究年報』第四號（2010.03）35-79 頁

敦煌吐魯番文書中三等次供食問題研究

高啓安

一　緣起
二　敦煌官文書中三等供食內容
三　上中下次料的數量及其供應
四　吐魯番文書中的上人、中人、下人供食
五　歷代客館和宴賞供食制度概述
六　題外的話
七　結語

一　緣起

筆者在研究敦煌飲食文化時，注意到敦煌文書 S.1366《年代不明歸義軍衙內麵油破用曆》等官文書支出曆中，將給來客支用的供食標準分爲三個等次，即上次料、中次料、下次料，這和高昌政權將來訪客使分作“上人”、“中人”、“下人”，並依此供食的方式如出一轍。想來這可能是西域及敦煌等地一條成文或約定俗成的規矩，即按照客使團隊中個人地位和使命大小、與政權關係重要與否，將他們分作上、中、下三等，以便在飲食和賞賜時加以區別，久之，相沿成習，並被西域一些地方政權繼承了下來。

由於此問題涉及到一系列制度，如驛傳客館制度、官員品階制度等，當時簡單地作了一些分析[1]，沒有作更深入的研究。但此問題一直縈繞在心。

及至閱讀出土秦簡、漢簡，才覺得問題不是那樣簡單。該現象的本質、源頭和流變狀況如何？ 如何操作？ 食料等級差怎樣？ 需要進一步研究。

關於交通、驛傳歷史的研究，一直是學界關注的重點，從其設置、功能、發展變化乃至管理方式的研究方面，都取得了顯著的成就。學界對敦煌寺院、歸義軍衙內的宴設司、酒司，迎送招待以及吐魯番客館文書中有關住宿、驛馬等驛傳制度內容

[1]高啟安《唐五代敦煌飲食文化研究》第 180 頁。北京：民族出版社，2004。

等都有不同側面的探討，但對於客館供食制度之具體操作，卻著墨不多[2]，也爲此問題的進一步研究留下了空間。

敦煌、吐魯番出土的這些文書，爲供食制度提供了具體的操作範例，不斷出土的相關資料，也爲該問題的進一步探索提供了可能。現將對此問題的思考供述如下，幸望大方之家教之。

二　敦煌官文書中三等供食內容

出現爲客使等供食記錄的文獻主要爲歸義軍衙內設司文書，S.2474《庚辰～壬午年間（公元 980～982）歸義軍衙內麵油破曆》、S.1366《年代不明歸義軍衙內麵油破用曆》、S.6577Va《歸義軍時期宴設司麵破曆狀稿》、P.2641《丁未年（公元 947 年）六月都頭知宴設使宋國清等諸色破用曆狀並判憑》等件。時代爲張氏歸義軍和曹氏歸義軍時期。因過於冗長，在此不一一錄出，只將相關部分摘錄如下，在論述時再相應引入。

1. S.2474《庚辰～壬午年間（公元 980～982）歸義軍衙內麵油破曆》[3]：

   （前缺）

   38　（前略）准舊，都頭張清

   39　子垒舍頓細供三十分，中次料二十分，胡併一百枚，用麵（後缺）[4]

2. S.1366《年代不明（公元 980～982 年）歸義軍衙內麵油破用曆》：

---

[2]大庭修《吐魯番出土北館文書-中國駅伝制度史上の一資料》,《西域文化研究》2〔敦煌、吐魯番社會経済資料 (上)〕，法蔵館,1959，第 369～380 頁；小田義久《吐魯番出土唐代官庁文書の一考察：物価文書と北館文書をめぐって》,《龍谷大學論集》427，第 108～129 頁，1985；石見清裕《唐の鴻臚寺と鴻臚客館》,《古代文化》42 卷（8），第 48～56 頁,1990；吳玉貴《試論兩件高昌供食文書》,《中國史研究》，1990 年 1 期；吳玉貴《高昌供食中的突厥》,《西北民族研究》，1991 年 1 期；大津透《唐日律令地方財政管見——館駅・駅伝制を手がかりに》,《日本律令制論集》上卷，第 387～440 頁，吉川弘文館，1993；劉俊文、牛來穎《敦煌吐魯番文書所見宴設司》，礪波護編《中国中世の文物》，日本京都大學人文科學研究所，1993；石曉軍《隋唐時代の四方館について》,《東方學》第百三輯，第 65～79 頁，2002 年 1 月；錢伯泉《從傳供狀和客館文書看高昌王國與突厥的關係》,《西域研究》，1995 年 1 期，第 87～96 頁；盛朝暉《“細供”考》,《敦煌學輯刊》，1996 年 2 期，第 101～104 頁；羅彤華《歸義軍期敦煌寺院的迎送支出》,《漢學研究》第 21 卷第 1 期，第 193～224 頁，2003；馮培紅《唐五代敦煌地區的酒行、酒戶和酒司》，鄭炳林主編《敦煌歸義軍史專題研究續編》，蘭州大學出版社，2003；馮培紅《唐五代敦煌官府宴設機構考略》，敦煌研究院編, 梁尉英主編《2000 年敦煌國際學術討論會文集：紀念藏經洞發現暨敦煌學百年：1900～2000（歷史文化卷）》甘肅民族出版社, 2003。等等。

[3]本文所引敦煌供食文獻，除注明者外，均錄自全國圖書館文獻縮微複製中心 1986～1990 年出版之唐耕耦、陸宏基《敦煌社會經濟文獻真跡釋錄》（簡稱《釋錄》），只注冊及頁碼，個別字依自己辨識，作了改動，不一一注出。

[4]《釋錄》，第 3-280 頁。

（前缺）

23　（前略）西州使

24　及伊州使上窟迎頓細供二十五分，中次料十五分，用麵六斗

25　五升五合，油二升六合。（中略）

62　（前略）償散酒戶胡并一百

63　四十枚，細供一分，償設司女人漢七人各中次一分，十鄉老麵二斗，

64　油一升。（中略）

68　（前略）迎甘州使頓

69　細供二十分，中次料十分，下次料十分，迎頓細供十分，中

70　次料十分，下次料五分。又下檐甘州使細供三分，中次料十

71　分，下次料十七分，早夜麵四斗五升，用麵一石七斗五升七合，

72　油三升八合四勺。張彥容細供一分，麵一升半，肅州使細供

73　一分，中次料一分，下次料一分，早夜共五升，用麵一斗二升五合、

74　油兩合。（後略）[5]

3．S.6577Va《歸義軍時期宴設司麵破曆狀稿》：

（一）

1　宴設司

2　伏以今月二日，公主下陳缽倉月麵玖㪷，忙藥麵玖㪷，李悉□

3　張悉不麵玖㪷，羅闍梨麵玖㪷，妻麵捌㪷，變諾麵玖□

4　麵柒㪷，男麵三㪷，堛子麵伍㪷，蓮花麵柒㪷，永興麵□

5　叁㪷[6]

需要指出的是，這種月供食形式與一日、一餐供食形式稍異。我們將在後面論述。

4．P.2641《丁未年（公元 947 年）六月都頭知宴設使宋國清等諸色破用曆狀並判憑》四件

（二）

1　宴設司

2　伏以今月十日償設牧子胡并柒拾枚。十一日大廳設

3　修內間城都衙并修堡都頭鄉官等細供伍分，壹胡

4　并，中次料拾壹分。木匠、泥匠中次料貳拾貳分。同日，

5　夜間看納馬來龍家細供拾貳分，貳胡并。十二日設

6　瓜州來龍家并雍歸家，中次料叁拾分，下次料拾壹分。

7　付皺文匠喚酥油壹升。窟上堆沙人油半升。鐵匠史奴々

[5]《釋錄》，第 3-281～286 頁。

[6]《釋錄》，第 3-609 頁。

8　等貳拾人，早上餺飥，午時各胡并三枚，供壹日，食斷。金
9　銀匠捌人，早上餺飥，午時各胡并兩枚，供兩日，食斷。煤油壹合。
10　十三日設，東河修堡人，細供壹分，壹胡并。又胡并貳伯枚，餜
11　餘拾枚，付胡祿匠陰應子等麵壹碩。北宅龍家女人男
12　身故，胡并叁拾枚。大廳設，畫匠并塑匠用細供肆拾
13　三分，壹胡并，上次伍分。造鼓木匠捌人，早上餺飥，午時各
14　胡并兩枚，供叁日，食斷，又鐵匠拾人，早上餺飥，午時各胡
15　并兩枚，供壹日，食斷。鞍匠張兒々等拾壹人，早上餺飥，午（時）
16　各胡并兩枚，供兩日，食斷。付胡兒龍家身故，胡并叁拾
17　枚，餜餘拾枚。南宅女夫郎君屈客油貳升。瓜州來龍家
18　壹人，逐日午時下次料，早夜麵壹升半，供拾壹日，食斷。
19　楊醜漢男身故，麵柒斗，油壹升。支走來肅州家麵叁斗，
20　又麵壹斗。玉匠麵叁斗伍升。駞沙人胡并陸枚。伏請 處分。
21　　丁未年六月日都頭知宴設使宋國忠
22　　爲憑 十八日（簽字）

（17、18 行瓜州來龍家 1 人，每日早晚供應麵 1.5 升，而午食則供應下次料一份。可見，供食規則是每人一餐次料一分。）

（三）

14　（前略）于闐使迎于闐
15　使，細供拾分，壹胡并，中次料拾分。（後略）

（四）

1　宴設司
2　伏以今月去伍月貳拾捌日，供瓜州來龍家貳人，逐日
3　午時中次料，又貳人下次料，早夜陸升，至陸月貳拾貳日
4　午時喫了斷。拾叁日，又供後納馬來龍家肆人，逐日午時各
5　下次料，早夜麵陸升，至貳拾貳日午時喫了斷。又龍家
6　壹人，逐日午時下次料，早夜麵壹升半，供拾陸日，食斷。（中略）
10　（前略）音聲
11　作語，上次料兩分，又胡并貳拾捌枚（下略）[7]

爲完整理解文書內容，上述文書中出現的一些與飲食活動有關的詞語需要解釋一下。

[7]《釋錄》，第 3-610～614 頁。

早夜麵（早夜料）、料：

料。敦煌供食文書中帶有“料”的名詞有“料麵”、“料油”、“佛料”、“僧料”、“吃料”、“次料”等。其實都是“食料”，文書中有時稱作“料麵”、“料油”（S.2474 卷 1～3 行）、“僧料麵”等。通俗講，就是食物原料。只不過用於不同場合，給佛、神供養的稱之爲“神佛料”或“佛料”；供養僧人的稱之爲“僧料”。“料”在大多時候爲定語。

料，《說文解字》不列入“米部”而列於“斗”部。解爲“量也。從米，在斗中。”段玉裁注爲“量者，稱輕重也。稱其輕重曰量，稱其多少曰料。其義一也。”[8]《廣韻》：“度也”；《玉篇》：“數也，理也”。

由是觀之，“料”之本義爲量度，包含了一定規格的意思在內。從敦煌文書中可以看出，其義雖有轉移，但仍有“量度”的意思存在。因此，凡帶“料”者，其飲食數量有一定之規。

“食料”一詞，很早就出現於史籍。如：

“張儀去楚，因遂之韓。說韓王曰：韓地險惡山居，五穀所生，非菽而麥，民之食大抵飯菽藿羹，一歲不收，民不饜糟糠；地不過九百里，無二歲之食料。大王之卒，悉之不過三十萬，而廝徒負養在其中矣。”[9]

《北史》：“銅價至賤，五十有餘，其中人功、食料、錫炭、鉛砂，縱複私營，不能自潤。”[10]

唐代以後，“食料”已經是一個很流行的詞。

“勅尚食使：自今每一日禦食料分爲十日，停內修造。”[11]

“郎中、員外郎之職，掌邦之祭器、牲豆、酒膳，辨其品數及藏氷食料之事。”[12]等。正是所供食物之意。

由此引申出的“料麵”、“料油”、“佛料”、“僧料”、“吃料”以及其他文獻中的“節料”，就是按規定分配的食物原料之意。拙作《唐五代敦煌飲食文化研究》中對佛事活動中的“僧料”等詞曾作解釋[13]。

“料”在敦煌文獻中一般情況下屬于原糧加工品，如麵粉、米、油等。但有時也可能直接分配已加工的成品食物。如以上所錄和“細供”一起分配的“次料”，應該屬於成品食物。

月麵：即以某種標準按月所分配的麵粉食料。

---

[8]《段注說文解字》，第 725 頁。藝文印書館印行本，1964。
[9]《史記》卷七十，中華書局 1960 年，第 7-2293 頁。
[10]《北史》卷五十，第 1827 頁，中華書局點校本。
[11]《舊唐書》卷十七下，第 568 頁，中華書局點校本。
[12]《舊唐書》卷四十三，第 1832～1833 頁。
[13]《唐五代敦煌飲食文化研究》第 356 頁。

早夜麵：晚唐五代時期的敦煌，已經是每日三餐制。“早夜麵”分別是製作早餐和晚餐所分配的麵粉。

神食：是祭祀各種神祇時供奉的食物稱謂[14]。

細供：這是一個關係到供食標準的問題，雖以前已有論述，但因與三等供食關係密切，容多費筆墨再加以敍說。

細供乃一組較精美的食物稱謂，有一定數量規定，用在招待重要客人和供奉神靈的儀式上[15]。

“細供”一詞，早在謝諷的《食經》中就已出現：“北齊武成王生羊膾、細供、歿忽羊羹”[16]，學者也有專門研究，大抵認爲是精細食物[17]。其數量用“分”而非“枚”。筆者認爲是一組食物的總稱，從煎炸和烘烤的餜食與之並列、且用油較少分析，或爲加少量植物油的蒸食[18]。其用麵、油量有固定的標準，以 S.1366 卷爲例，每份用麵 1.9 升，用油 8 勺（一合等於 10 勺）。

表一：

行數	份數（括弧内爲其他食物）	麵/合	油/勺
15～16	25	475	200
18～19	2（麵 50 合）	88	16
19～20	4	76	32
21～23	5（胡餅 50 枚）	345（其中胡餅用 250）	40
23～25	25（中次料 15 分）	655 合	260
27～29	7（胡餅 20 枚）	333（其中胡餅用 100 合）	56
29～30	7（胡餅 60 枚）	433	56
30～31	10（胡餅 60 枚）	490（其中胡餅用 300 合）	80
37～38	10（胡餅 50 枚）	440（其中胡餅用 250 合）	80
43	3	57	24
59～65*	1509（胡餅 2914 枚，餑餉886 枚，饖餅 250 枚，小食子 7）	53397	17344
68～72**	33（中次料 29 分，下次料 32 分，早夜麵 450 合）	1750	384
72***	2（中次料 1 分，下次料 1，早夜麵 50 合）	125	20

* 此次支破品種較多，除細供用油外，小食子、饖餅均使用油，故難以計算各項油的分配。

** 此筆支破除了細供用油外，早夜麵需要調油。

[14]《唐五代敦煌飲食文化研究》第 296 頁。

[15]《唐五代敦煌飲食文化研究》第 297 頁。

[16]［宋］陶谷《清異錄》卷下，第 103 頁，大象出版社，2003。此“細供”與“歿忽羊羹”斷句不同，則理解有異，或誇飾其羊羹品質，或爲羊羹配食之主食。

[17]盛朝暉《“細供”考》。

[18]《唐五代敦煌飲食文化研究》第 297 頁。

*** 此筆支破除細供外，早夜麵需要調油。

由上表可知，每分細供用麵和用油有固定數量，由歸義軍宴設司的供食標準所決定。由於每分用麵量達到了 1.9 升，因此，細供的分配方式是“共食”或可稱之爲“合食”，從細供大部分出現在迎頓、看、設等宴飲場合，需要主人或知客相陪同，因此，不需要將食物分配到人頭。但除了這樣的招待宴會外，則按照一定等次數量爲他們供應食物。

P.2744《食物賬》也可證以上原則不誤：

1　八合，支鄧福朵麵三斗。十九日供衙內造作
2　皮條匠令狐丑子等五人，逐日早上各麵一升，午時
3　各胡併兩枚，供兩日，食斷，用麵二斗。廿日，支慶
4　富磨身故助葬胡併三十枚，支紫亭遮羊
5　人胡併五枚，用麵一斗七升五合。廿二日，准舊十二
6　行拜至，饊胡食三十分，用麵五斗四升。廿三日，支四道使客節
7　節料殘：于闐使二人，共麵二斗；漢大師等麵五斗、油
8　三升；石大師、孫大師二人，共麵三斗、油一升；達干宰
9　相及公主交關人麵三斗。准舊大廳明堂油半
10　升，庫子麵一斗。支常樂弓匠氾順清麵五斗，祭節
11　細供兩分，有饙併，用麵四升六合、油二合四勺。
12　准舊笆籬匠麵二斗。廿四日，衙內看漢僧及于
13　闐僧細供六分，有饙併，小食子兩枚、餤頭子兩枚，用
14　麵一斗五升、油九合二勺。西衙看四道使客用細供
15　五十八分，饙併四枚，灌腸麵六升，用麵一石一斗七升
16　八合、油四升八合。看十二行胡併五十枚、餜餉二十枚、
17　餲併十枚、饊併十枚，用麵四斗一升、油一升兩合。廿
18　五日，夫人支□□麵三斗、油一升。准舊□□麵□斗□升、油（後缺）[19]

表二：

行	細供		饙餅		小食子		餤頭子		灌腸麵		合計/升
	分	升	枚	升	枚	升	枚	升	付	升	
10-11	2	3.8	2	0.8							4.6
12-13	6	11.4	7	2.8	2	0.4	2	0.4			15
14-15	58	110.2	4	1.6					2	6	117.8

[19]《法國國家圖書館藏敦煌西域文書》，第 18-53 頁，上海:上海古籍出版社, 1994～2005。

已知每分細供用麵 1.9 升，每枚饑餅用麵 0.4 升，每枚小食子用麵 0.2 升，每枚餤頭子用麵 0.2 升[20]，經計算，完全符合每項開支的用麵數量。

關於細供和上中下次料的關係，盛朝暉《“細供”考》一文認爲“按細供，是與上次料、中次料、下次料相對而言，蓋言其所供食物精美細緻之故。歸義軍衙內每次款待吃用，有細供、上次料、中次料、下次料四種，細供與其餘三種經常並列出現，而細供位居最前，是招待吃用檔次最高、待遇最爲隆重的一種。”“招待規格一般分爲四等，即細供、上次料、中次料、下次料，以細供最爲精美，檔次最高”[21]。細供確屬最精美之食物，所用場合一般亦較重要和隆重，在招待客使的場合出現細供，往往是供食三等原則下的額外增加，類似唐政府規定的“會食”或“設食”時“常食料”以外所加部份，如《唐六典》規定：“凡諸王已下皆有小食料、午時粥料各有差，複有設食料、設會料，每事皆加常食料。”[22]如上引“于闐使迎于闐使”的飲食活動中，是細供拾分，中次料拾分，非是制度規定的一個等次。

偏次、偏麵。“偏”即“徧”，“徧次”即“依次”、“輪流”之意。唐賈公彥疏《儀禮》曰“長者尊先而卑後者，君酬賓，賓酬旅三卿，三卿徧，次第至五大夫，大夫徧，不及士。”[23]正是“依次”之意。由此看，“徧麵”和“徧次”，即依等級次序所供應的麵粉。S.2472V/1 卷有“客料麵兩石，油壹斗，都頭偏次麵……”[24]，S.1366 卷亦有“支于闐使偏麵一石，油三升”的記載。

頓：是一種飲食活動。敦煌文獻中有“迎頓”、“頓遞”、“頓定”等詞。均是飲食活動，本即一餐。後演變爲某種專門的飲食活動。關於這個詞，學者已多有研究[25]。

迎頓：指迎接使節和完工後迎接工匠的飲食活動，P.3234Vi《癸卯年（943）正月一日後淨土寺直歲沙彌廣進麵破》：“麵□斗，造小胡併子西窟上水迴來時迎頓用”（36～37 行）[26]；P.2032V：“麵三斗，西窟上水來迎頓造小胡併用”（713 行）[27]可證。

唐五代時期的敦煌，歸義軍政權迎接中央政權和于闐的使節，往往要前往若干路程，在這些地方舉辦宴飲活動，也稱爲“迎頓”。“迎頓”舉辦的地點有“壽昌”（P.2641）、“馬圈口”（P.2641）、“窟上”等。使節出行時，也分不同方向設“頓”相送，設“頓”的地點分別爲“南園”、“東園”、“東窟”等地（S.2474）。

其他有關“知客”、“神食”、“設”、“油胡餅子”等，學者已有解釋[28]。

---

[20]《唐五代敦煌飲食文化研究》，第 172～173 頁。

[21]盛朝暉《“細供”考》。該文所引 P.2937P1《光啟三年酒司判憑四件》之一，謂最早記載細供之文獻，細審該詞，非“細供”，而是“例供”。按，如爲“細供”，應出於宴設司，而非酒司。

[22]［唐］李林甫等撰、陳仲夫點校《唐六典・尚書禮部》卷第四，第 129 頁，中華書局，1992。

[23]《儀禮注疏》卷十四<燕禮>第六，《十三經注疏》第 1018 頁，大化書局，1982。

[24]《俄藏敦煌文獻》第 4-83～84 頁。

[25]馮培紅《唐五代敦煌官府宴設機構考略》；高啟安《唐五代敦煌飲食文化研究》，第 192 頁。

[26]《釋錄》，第 3-447 頁。

[27]《釋錄》，第 3-499 頁。

[28]劉俊文、牛來穎《敦煌吐魯番文書所見宴設司》；高啟安《唐五代敦煌飲食文化研究》第 113 頁、

需要說明的是，歸義軍的供食方式顯然在某種程度上繼承了唐政府的驛館供食制度。

據《沙州都督府圖經》（P.2005）記載：“新井驛、廣顯驛、烏山驛，已上驛瓜州捉。右在州東北二百廿七里二百步，瓜州常樂縣界。同前奉敕移置，遣沙州百姓越界供奉，如意元［年］（692 年）四月三日敕，移就稍竿道行；至證聖元年（695 年）正月十四日敕，爲沙州遭賊，少草，運轉極難，稍竿道停，改於第五道來往。又奉今年二月廿七日敕，第五道中總置十驛，擬供客使等食，付王孝傑並瓜州、沙州審更檢問，令瓜州捉三驛，沙州捉四驛。”[29]明確設立十驛，兼爲往來客使供食。

三　上中下次料的數量及其供應

次料的解釋

次料有上次料、中次料和下次料之別。其中上中下比較好理解，等次也。

關於“次料”，已經有學者作過探討。

劉俊文、牛來穎《敦煌吐魯番文書所見宴設司》一文對上中下三種次料的解釋是“次，猶等。上次料謂上等料。中次料謂中等料，下次料謂下等料。”[30]如是之說，則上中下次料至少有主食結構上的區別。

吐魯番文書中出現的“次”，廖明春在《吐魯番出土文書新興量詞考》中有考證。但作者只考證了該詞作爲“動量詞”的性質，即與今之漢語相同的作爲補語成分的用法：“‘次’作爲狀語成分用於謂語‘下’前，而不是作補語置於謂後，這是一種相當成熟的用法，與現代漢語相比，已無大的區別。由此可推知，動量詞‘次’作補語成分，這時肯定早已慣用。”[31]並認爲“次”已具備現代漢語的兩種用法，即“數次+次+動詞”、“動詞+數次+次”。但“次傳”之“次”，與作補語成分的“次”不惟用法不同，且含義也不相同。

從吐魯番文書中看，“次傳”之“次”，其含義與“又”相同，如果將這些“次”以“又”替代，則意思不變。而“又”，《說文解字》謂“手也。象形三指者，手之列多不過三也。”反觀“次”，正是列舉所傳的每筆賬目。因此，吐魯番文書中，“次傳”之“次”是“次第”之意。如：

《高昌大胡等粗細糧用帳》69TAM33：1/5（b），1/1（b）

1　□十三日，大胡粗十二□

第 191 頁、第 296 頁。馮培紅《唐五代敦煌官府宴設機構考略》。

[29]《釋錄》，第 1-2 頁。

[30]劉俊文、牛來穎《敦煌吐魯番文書所見宴設司》。

[31]《敦煌研究》1990 年 2 期，第 83 頁。

2 ［　　］斛四斗，次永保細六斛三［　　］
3 ［　　］大胡細六斛。次十四，慶細五斛，次［　　］
4 ［　　］永保細五斛九斗半。次十五日大胡細［　　］
5 ［　　］五斛三斗。次十六日，青兒米［　　］
6 ［　　］胡粗十五斛［　　］
7 ［　　］九斛九斗，次［　　］
8 ［　　］斛一斗。次十七日，［　　］
9 ［　　］斛一斗半，次永［　　］
10 ［　　］斗半，次酉兒米［　　］
11 ［　　］斛四斗，次［　　］
12 ［　　］永保粗五斛［　　］半。次廿五日，永［　　］
13 ［　　］粗□斛六斗，［　　］粗七斛八斗半，［　　］
14 ［　　］次大胡粗十二斛［　　］粗十三斛五升，次［　　］
15 ［　　］酉兒米三斛九斗［　　］次大胡米三斛［　　］
16 ［　　］斗半，次大胡粗七斛［　　］斛九斗，次酉兒［　　］
17 ［　　］粗二斛九斗，次弘慶［　　］兒粗十二斛七斗［　　］
18 ［　　］兒米三斛八斗，次細五斛一斗。次廿七日，青兒粗八斛［　　］
19 ［　　］慶粗五斛一斗，次永保細五斛八斗。次廿八日，大胡［　　］
20 ［　　］兒細三斛六斗半，次酉兒細十二斛六斗，次弘［　　］
21 ［　　］次酉兒粗九斛八斗，次永保粗八［　　］
22 ［　　］七斛二斗半，次大胡粗六斛九［　　］
23 ［　　］粗四斛一斗，次［　　］[32]

其他一些吐魯番文書中，也有不少。在這些文書中，“次”不僅出現在人名前，而且出現在時間之前。如上舉之第3、4、5、8、12、18、19行，應該爲“次第”之意。這樣，在同一件文書中，出現在人名前的“次”也應當是“次第”列舉之意才對。

可見，“次”之出現在不同的語境中，意思有一定區別。

而從敦煌文書行文看，“次料”之“次”當爲“等次”講。《說文解字》“次，不前、不精也。從欠二聲，七四切。”

從上中下次料的構成中可以看到，各次料的構成確實有高下之分[33]。

[32]中國文物研究所、新疆維吾爾自治區博物館、武漢大學歷史系編，唐長孺主編《吐魯番出土文書》圖版本第壹冊，第245～246頁。文物出版社，1992～1996。本文所引吐魯番文獻，均錄自該書，個別字依自己辨識作了改動，只注冊及頁，不一一注出。

[33]《唐五代敦煌飲食文化研究》第178～179頁。

上中下次料之數量區別

次料之分上中下，究竟是數量上的多少之分，還是品質上的高下之別？ 下引原文以說明。

S.1366 卷第 23 至 25 行的一筆食料開支：

“（前略）西州使及伊州使上窟迎頓細供二十五分，中次料十五分，用麵六斗五升五合，油二升六合。（下略）”

細供 25 分用麵 47.5 升（每分 1.9 升，前揭），餘 18 升爲 15 分中次料的開支，可知每分中次料用麵 1.2 升。

S.1366 卷第 68 行到 72 行是某年某月迎接甘州和肅州使節活動中的飲食支出：

68　（前略）迎甘州使頓

69　細供二十分，中次料十分，下次料十分，近頓細供十分，中

70　次料十分，下次料五分。又下簷甘州使細供三分，中次料十

71　分，下次料十七分，早夜麵四斗五升，用麵一石七斗五升七合[34]

72　油三升八合四勺。（下略）

此次迎接活動是將三次飲食活動中的食料支出匯總到了一起。全部用麵 175.7 升，其中細供 33 分、62.7 升，早夜麵 45 升，中次料共 30 分，下次料爲 32 分。已知每分下次料用麵 1 升，中次料爲 1.2 升，各項支出與總數合。

“張彥容細供一分，麵一升半，肅州使細供一分，中次料一分，下次料一分，早夜共五升，用麵一斗二升五合、油兩合。”

筆者在《唐五代敦煌飲食文化研究》一書中對“張彥容細供一分。麵一升半”句理解和斷句有誤，當時認爲張彥容的這一分細供是個例外，用了一升半麵粉[35]。其實這一升半麵粉並非細供用麵，應該是張彥容的“早夜麵”。P.2641 有龍家一人，早夜麵一升半的記錄可證。此筆賬主要是肅州使節支用記錄，共用麵 12.5 升，其中細供 2 分，用麵 3.8 升，早夜麵 5 升，張彥容“早夜麵”1.5 升，餘 2.2 升爲一分中次料和一分下次料的開支。已知一分中次料用麵 1.2 升，一分下次料爲 1 升，一分細供用麵 1.9 升，和該卷 15 行、18 行、19 行計算出的結果完全一致。

可見，歸義軍宴設司所供的“次料”是一種“定食”。而且可以肯定，就數量而

[34]此處唐、陸二先生補爲“用”字（《敦煌社會經濟文獻釋錄》，第 3-286 頁）。筆者以前照錄，因此得出第 69 行末尾字爲“九”的結論（《唐五代敦煌飲食文化研究》第 179 頁）。觀此卷斷裂空處，應該有二字，而該卷在製作食物用油的支出上，都沒有“用油”的寫法，而直接寫“油”，如第 1、3、13、16、18、19、20、22、25、26、29、30、31、37、38、42、43、45、55、56、57、58、61、62、64、68、74、75、76、78、81、82 行共 32 筆等。所以，此處應該爲“七合”。70 行缺損的字應該爲“十”。這樣才符合麵粉開支的總數（《釋錄》，第 3-286 頁。）

[35]“這確實是個例外。如果不是記錯，也可能是給一個不重要的個人的細供，因此減少了用面量。”（《唐五代敦煌飲食文化研究》，第 179 頁。）

言，每分次料爲一人一餐的食量（敦煌當時普通人每餐的供應數量往往爲二胡餅，即一升麵），其中中次料略多於平素給雜役等人員供應量，而下次料數量與平時一餐數量相等。

“上次料”只出現在 P.2641《丁未年（公元 947 年）六月都頭知宴設使宋國清等諸色破用曆狀並判憑》四件文書的第二件和第四件當中。

第二件：

12　（前略）大廳設畫匠並塑匠用細供肆拾

13　三分，壹胡并，上次伍分。（後略）

第四件：

9　（前略）廿三日

10　大廳設于闐使用細供貳拾捌分，內三分，貳胡并。音聲

11　作語，上次料兩分，又胡并貳拾捌枚。親從都頭等細供三分。

12　貳胡并。當值都頭並知客細供兩分，貳胡并。灌腸麵三

13　升。速丁公主賽神細供伍分，壹胡併。（後略）

由於該卷不計麵粉支出數量，無法計算出一分上次料的用麵數量。

上述文獻共有 20 筆分配“次料”，如**表三：**

卷號	事由和分配對象	分配食物											麵粉	油
		細供		上次		中次		下次		胡餅		早夜麵		
		分	升	分	升	分	升	分	升	枚	升	升	升	升
S.2474	都頭張清子疊舍頓	30	57			20	24			100			131	
S.1366	西州使上窟迎頓	25	47.5			15	18						65.5.	2.6
S.1366	迎甘州使	20	38			10	12	10	10				175.7	3.84
S.1366	迎頓	10	19			10	12	5	5					
S.1366	下簷甘州使	3	5.7			10	12	17	17			45		
S.1366	張彥容	1	1.9									1.5	12.5	0.2
S.1366	肅州使	1	1.9			1	1.2	1	1			5		
P.2641(一)	大廳設都衙、都頭、鄉官	5	9.5			11	13.2			1	0.5			
P.2641(一)	大廳設木匠、泥匠					22	41.8							
P.2641(一)	夜間看龍家	12	22.8							2	1			
P.2641(一)	爲龍家、雍歸設					30	36	11	11					
P.2641(一)	大廳設畫匠、塑匠	43	81.7	5						1	0.5			
P.2641(一)	瓜州來龍家 1 人							1	1			1.5		
P.2641(三)	于闐使迎于闐使	10	19			10	12			1	0.5			

P.2641(四)	供瓜州來龍家 2 人					2	2.4					6		
P.2641(四)	瓜州來龍家 2 人							2	2					
P.2641(四)	納馬龍家 4 人							4	4			6		
P.2641(四)	龍家 1 人							1	1			1.5		

上次料不常支用。由於 P.2641 卷文獻沒有支出匯總，無法判斷每分上次料用麵數量。但應和中下次料一樣，是按一人一餐的原則供應，數量上應該多於中次料。P.2641 卷第四件 24 行的兩分上次料，正是供應音聲和作語兩位藝人的一餐食物。

由此看，次料的供應是以每人每餐的供食標準作爲參考來分配數量的。從敦煌文獻記載分析，至少有量的區別。

由於文書沒有透露這些“次料”的食物構成，所以無法判斷其品質上的區別。但既然有上中下之別，其食物構成應該有明顯的區別才是。而且在上述文書中，“上次料”只出現過兩次，沒有用麵量的記載，其他“細供”往往和中次料、下次料一起分配，（如 S.1366），這讓人懷疑“上次料”和細供之間有某種關係。但 P.2641 卷第 12～13 行在列有細供的情況下，又列“上次伍分”，則表明二者有區別。

“次料”供食與“月麵”的對比

歸義軍衙內對外來僧人、僑居敦煌者提供口糧和食用油。他們的供食數量也爲“次料”的供食數量提供了參考。

爲清楚起見，我們將上引 S.6577Va《歸義軍時期宴設司麵破曆狀稿》供應的月麵和工匠每日的供應標準列表如下（**表四**）：

文書號	供應對象	月麵數（斗）	月油數（升）
S.6577	公主*	9	
S.6577	李悉□	缺	
S.6577	張悉不	9	
S.6577	羅闍梨	9	
S.6577	羅闍梨妻	7	
S.6577	變諾	9	
S.6577	某人	7	
S.6577	男	3	
S.6577	堛子	5	
S.6577	蓮花	7	
S.6577	某人	缺損	

S.6577	某人	3	
S.2474	太子		5
S.2474	僧	9	2
S.2474	于闐僧	7	2
S.2474	僧執缽悉歹	9	2
S.2474	董俄都督	7	
S.2474	甘州僧（4 人）	人均 7	人均 2
S.2474	肅州僧（3 人）	人均 7	人均 2
S.2474	瓜州僧瓜朱	5	1
S.2474	胡麥錫隨拙	5	
S.2474	大師	5	1
S.2474	肅州使*	2	
S.2474	于闐使**	1	
S.2474	太子宅于闐使	7	
S.1366	狄寅及使	4.75	2
S.1366	祭雨師	2.84	1 升 4 合 6 勺
S.1366	胡骨子兒及妻	14	
S.1366	納藥波斯僧	10	3
	胡牒密骨示	7	

* 瓜州僧“瓜朱”、胡麥錫隨拙以及大師尚不能確定是否爲“月麵”；肅州使、于闐使所供當非“月麵”。

** 爲一些使節支出的食料雖標明爲“月麵”，但由於供食時間不足一月，所以在數量上達不到月麵的規定。

根據以上文獻，可知歸義軍對衙前弟子、牽攏官、工匠等的供食標準是早夜各麵 1 升，午餐是每人 2 個胡餅。而張彥容和龍家人來客，則是早夜麵一升半，表示了對客人的優渥。我們知道，當時敦煌標準胡餅用麵量是半升，每日按照三升的標準供食。

知道了這樣一個標準，回頭來看歸義軍宴設司對使節等人的月麵供應。根據上表，重要使節、地位較高或特殊身份僧人的月麵是按照每日三升的標準供應，而女性、地位較低或來敦煌的一般僧人則大多按照每日 2 升多的原則供應。孩童供應的標準更低。而三等次供食方法每餐“下次料”與月麵最高標準相等，中次料每餐要多於“月麵”平均一餐的供應數量，上次料當然更多。次料供應數量多於月麵平均每餐供應數量，應該和次料的供食性質有一定關係。

“次料”供食對象和供食場合

從上述記載看，三等次方式供食，大多出現在有客使的場合，但也不限於客使，有時還包括了參與管理的官員、勞作的工匠以及爲客使服務的藝術家“音聲”、“作語”。

“次料”的供應和“月麵”的供應性質有所不同，食物製作應該由歸義軍宴設廚負責。而其他長期居住在敦煌的僧人、于闐太子、某公主等人，其食物製作或者不在歸義軍宴設廚內進行。因爲在支出月麵的同時，要支出一定的食用油。

其次，“次料”是成品食物，而月麵則是尚未加工成食物的麵、油等。

另外，在有“次料”供應的情況下，其“設”均在“大廳”。該“大廳”當是歸義軍衙內機關的會客廳兼宴會廳，稱爲“衙廳”，或者是館驛的宴會廳。

關於歸義軍宴設廚，P.3644 卷《類書習字》可證。

此卷爲一習字紙本，但其中多有歸義軍衙內機構設置及飲食的信息，如“三腳鐺鍋子鏵子鏊子釜灶杏菓梨李蒲桃菻芩（高按：當爲“林檎”俗寫）乾棗”“匙筯鏁鑰椀疊醬醋薺韮蔓菁蘿蔔蔥蒜茴香萵苣”、“達担回鶻使漢使入城般次天使館驛供備食料肥羊甚好看待使命繁稠大将排班”、“廚舍廡舍”、“沙州東水池神廟西水池神廟北水池神廟孔子文宣王廟堂衙內甲丈庫軍資庫宴設庫煙火倉司軍糧大倉九眼倉衙廳中館橫園”、“勾當驛官阿磨遮”、“飲酒讌會設樂”、“氍毹氈毯倚子交床獨坐子”等字樣。可證歸義軍有館舍、宴設庫，有招待客使的“衙廳”、“中館”、“橫園”等，作者甚至抱怨各種使節“繁稠”，所供的食物有食料肥羊等[36]。

其中的“宴設庫”應即宴設司下設的庫管機構。宴設司是歸義軍衙內專設的飲食管理機構，負責使節、衙內做工工匠以及周邊友好政權流寓敦煌人員乃至外地來敦煌僧人、流落人員、提供情報的少數民族人員的飲食供給機構。對此，學者已有研究[37]。從 P.3644 卷提供的信息看，當時敦煌還設有“驛館”來安置“天使”，爲回鶻、漢使等供應“食料肥羊”。而我們知道，“天使”指中原王朝派來敦煌的使臣。該卷還透露，驛館設有“廚舍廡舍”，爲來訪使節等製作食物，提供住宿，“飲酒讌會設樂”的地方有“衙廳、中館、橫園”等；其設備有“氍毹、氈毯、倚子、交床、獨坐子”，炊具有鐺子、鏊子、釜等，餐具有匙、筯、椀、疊等；還有用於管理的“鏁鑰”。這些正是宴設庫宴飲時所不可或缺的設施。從宴設司負責爲使節提供飲食看，驛館應該隸屬于宴設司管轄。因此，客使或其他外來需要招待的客人的上中下身份的認定、食料的製作和供應，應由宴設廚負責執行。

由 P.3644 卷可知，“肥羊”也是歸義軍廚舍日常用語之一，但在歸義軍衙內招待使節的“設”等飲食活動中，幾乎不出現肉食和蔬菜的記載，這當然不是在招待使節這樣高規格的宴飲活動中只有一些麵食和酒，應該也有肉類。

[36]《法國國家図書館蔵敦煌西域文獻》第 26-200～202 頁。

[37]馮培紅《唐五代敦煌官府宴設機構考略》；高啟安《唐五代敦煌飲食文化研究》第 192 頁。

仔細分析歸義軍衙內破曆文書，個別出現宰羊等字樣的文書，還是因爲與糧食發生交換和替代時才出現（如 P.3272《丙寅年（公元 966）牧羊人兀寧狀並判憑》中，有祭祀時用羊的記錄："伏以今月一日，歲祭拜白羊羯壹口，節料用白羊羯壹口，定興郎君踏舞來白羊羯壹口"，"伏以今月十六日李家立柱用白羊羯壹口"[38]。在 S.3728《乙卯年（公元 955）二、三月押衙知柴場司安佑成狀並判憑》中也有祭拜時煮肉的記載[39]，說明有關的祭祀中，都要殺羊作犧牲）。歸義軍飼養了許多牛羊，牛羊肉是敦煌人主要的肉食來源。之所以沒有出現供肉記載，可能和歸義軍衙內的記賬方式有關，這就是麵油、酒和肉食分別記載，羊肉應由羊司來提供並記帳，但這些記載肉食的記錄可能沒有留下來。

次料的供應方式

從文獻記載看，次料供應往往是在比較重要的專門飲食場合，爲一餐食量的分配形式。這種按等次分配的形式與當時實行的分餐形式相適應。從表四所列即可看出，同樣是"瓜州龍家"的使節，但前 2 人和後 2 人的身份不同，雖一同進食，但食料供應有明顯差別，因此，他們的食物應該分別供應才能體現身份、地位之高下有別。莫高窟壁畫的飲食圖像也印證了這種供食形式[40]的存在。我們理解當時宴飲會食應該是相同等次的客人坐在一張食床旁，按等次供食。細供、中次料即能說明，而不像"月麵"是以一個月爲限來供應。因此，雖然文獻沒有透露"次料"究竟製作成何種食物，但應當是由宴設司出面製作成成品食物供應客人。

歸義軍衙內三等次的宴飲供食方式，不僅是一種傳統，而且影響到了其他社會階層的飲食方式。在寺院文書中，我們也發現了個別類似於三等次的飲食分配方式。

P.3745《三月廿八日榮小食納付油麵柴食飯等數》

（前略）

39　點心細供九分，佛聖三分，東寺僧統及僧録

40　二分，細料玖十六，次二伯六十分，通計三伯伍拾

41　六分，張都頭女師？ 次一分，氾都頭細一分，氾家阿師子三分，

42　街二一分，索押衙一分。[41]

這是一次名之爲"榮小食"的飲食活動，規模相當大。食物的分配也作了等級的區分。雖然沒有以三等次方式區分，但有"細料"和"次"的區別。顯然，在製作食物時考慮到了等級的區別。

---

[38]《釋錄》，第 3-599 頁。

[39]《釋錄》，第 3-618 頁。

[40]《唐五代敦煌飲食文化研究》267 頁, 圖 55、莫高窟 61 窟宴飲圖。

[41]《釋錄》，第 4-19 頁。

酒的供應也分等次

除食料的供應有區別外，使客酒的供應也有一定的區別。

爲清楚起見，我們將幾件歸義軍衙內爲客使供酒的資料列表如下。其中“看”、“設”、“迎”等臨時性的支出不列入內。

表五

卷號	供酒對象	人數	日供酒（升）	供酒天數	供酒數量（升）	人均日供酒（升）
敦研 001 (1)	兩頭祗門人		10	27	270	
敦研 001	甘州使			1	60	
敦研 001	甘州使			1	60	
敦研 001	納呵梨勒胡*			1	60	
敦研 001	西州使		10	88	880	
敦研 001	南山別力		10	7	70	
敦研 001	南山		20	7	140	
敦研 001	南山		20	4	80	
敦研 001	土門樓勾當人			6	30	
敦研 001	孔目官修西州文字				20	
敦研 001	南山		20	5	100	
敦研 001	于闐、葛祿		20	129	258	
敦研 001	于闐羅尚書		5	75	365	
敦研 001	修于闐文字孔目官		10	7	70	
敦研 001	畫匠及勾當人		10	7	70	
敦研 001	南山		15	3	45	
敦研 001	造花樹僧		10	5	50	
敦研 001	甘州走來胡		2.5	203	507.5	
敦研 001	報消息回鶻		2.5	150	375	
敦研 001	甘州使		30	137.5	4125	
敦研 001	修甘州文字孔目官			6	40	6.66
敦研 001	石匠		5	4	20	
敦研 001	木匠		10	6	60	
敦研 001	兩頭祗門人		10	3	30	
P.3569V (2)	西州回鶻使	上下 35 人	86	32	2752	2.4678
P.3569V	璨微使	上下 6 人	16	32	512	2.667
P.3569V	涼州使	3	9	32	288	3
P.3569V	涼州嗢末及肅州使	11	24	14	336	2.18

(1)《釋錄》，第 3-271 頁。

(2)《釋錄》，第 3-622～624 頁。

*“支納呵梨勒胡酒壹甕”，斷讀不同，理解有異。筆者理解應爲“支繳納呵梨勒的胡人酒一甕。”

由於大多酒破曆不載人數，爲正確判斷客使的等次及供酒量增添了難度。但通過 P.3569V 卷可以看出，各路使節人數不同，則一人日均供應量也不相同，顯然，這正是每路使節人員組合等次不同的緣故。P.3569V 卷將使節記錄爲“上下”，亦可證明。但不知其“上下”是“上中下”的省稱呢？還是在供酒時將他們只區分爲兩個等次。

以上列表中，“甘州走來胡”和“報消息回鶻”應該各只有一人，其供應標準爲 2.5 升/日；另一條資料是“于闐羅尚書”的供酒狀況：5 升/日，這應是供酒的第一等次。涼州使節每人日供酒平均爲 3 升，而南山、甘州使節日供酒分別爲 10 升和 20 升。雖然依據現有材料無法得出使節供酒等次的具體狀況，但使節劃分等次且依等次供酒應無疑問。

使節的食料供應由宴設司（宴設庫或宴設廚）負責，使節食物的製作也由宴設司負責。S.1366 卷有賞設司女人漢 7 人中次各一分的記載。這是寒食大規模飲食製作後的賞賜行爲。可以想見由於使節頻繁，經常有宴飲活動，宴飲的地點又比較分散，歸義軍衙內宴設司應該有常年服役的專職廚師。但像上述多至 7 人，應是臨時增加，平時宴設司可能不會有如此多的廚師。

我們注意到在歸義軍衙內供食文書中，屢次出現“大廳設”、“東園”、“南園”等字樣。這些地名，不僅是使節出行時舉辦送行宴會和居住的場所，也是平時舉辦宴會的場所。由於使節出行前要餞行，所以在東園或南園（可能因出行方向不同而舉辦地點不同）舉辦宴會，出行人員需要在此居住一宿。是否爲歸義軍衙內的驛館？由於沒有直接材料證實，一時難於下判斷。

S.5713《惠廣雜謝狀抄》是一件充當使節的僧人離開時的答謝狀：

1 ［　　］［　　］
2 謝外客到軍州供給 惠廣等膚賤
3 奉 本使駈馳幸過貴土夫蒙沿路管
4 界州鎮特賜供給倍常惠廣等下情
5 無任感恩惶懼 謝下擔［擔下，有倒鉤］惠廣等微
6 賤奉本使駈馳幸達 貴土未蒙
7 拜伏特賜重擔 惠廣等無任感恩
8 戰懼 謝迴賜物 惠廣膚淺難使
9 拜奉□□□□特賜憂□給□□[42]

“供給倍常”雖屬客氣話，但也說明沿路飲食供給有一定標準。

[42]中國社會科學院歷史研究所等合編《英藏敦煌文獻》第 9-94 頁，四川人民出版社，1990。

四　吐魯番文書中的上人、中人、下人供食

無獨有偶，我們在吐魯番文獻的客館傳食文書當中也發現了這種區分等次的食物分配方式，且等次的劃分也是上中下。

這些文書是麴氏高昌國時期客館的供食記載。不僅供食品種有粗細之分，且將供食對象分成上中下三等，與敦煌文獻的上中下等次異曲同工。

（一）供食文書

吐魯番阿斯塔納 307 號墓文書中有供食內容，該墓爲麴氏高昌晚期。

高昌竺佛圖等傳供食帳

（一）60TAM307：5/3（a）

1　□□□

8 ［　　］傳，粟米一斗，麨一斗，供棧頭□□大官上十八人，盡十四日，［　　］

9 ［　　］粟米一斛四斗半，麨一斛四斗半。次傳麵一斛五斗二升。床［　　］

10 ［　　］上四人，中十人，盡十四日半，合用麵廿二斛四升，床米四［　　］

11 ［　　］斗九升，供棧頭案豆遮摩訶先，上二人，［　　］

12 ［　　］斛八斗半。次傳麵一斛一斗，床米三斗，供［　　］

13 ［　　］四斛五斗，床米四斛三［　　］

14 ［　　］人盡［　　］[44]

（三）60TAM307：5/4

1 先，上三人，中三人，盡卅日，合用三百一十五斤。次傳九斤，供貪淂提懃便［　　］

2 廿二日半，合用六十七斤半。次傳十四斤，供棧頭大官使炎畔陁，中七人，盡盡（衍一“盡”字）十七日，合用廿八斤□

3 傳八斤，供棧頭大官使脾娑，中四人，盡廿二日，合用五十六斤。次傳七斤，供阿珂寒使□

4 振珂離振，上一人，中一人，盡[45]

高昌虎牙都子等傳供食帳60TAM307：4/2（a）

1 ［　　］食［　　］

2 □□二斤，供現珂支（虔）一人，子弟（弟）廿二人。

3 □虎牙都子傳，十五斤，供南葙（廂）珂寒使咖

4 舉貪淂，上一人，豆，上二人，盡□半。次曺子○（塗去字爲“弟”字）嶽賞食十三人

5 □斤，供阿都紇希瑾使畔陁子弟，中三人，

6 ［　　］賞食［　　］[46]

高昌□善等傳供食帳

（一）60TAM307：5/1（a）

1 ［　　］陁（陀），中十人，下十人，盡卅日，［　　］浮利，中四人，下四人，盡

2 ［　　］斗，供外生兒提懃珂都支卌五人［　　］

3 ［　　］善傳，麵五斗，供阿摶（博）珂寒鐵師居［　　］

4 ［　　］七斛五斗。次畦少何傳，麵五斗，供棧頭大官［　　］

[44]《吐魯番出土文書》，第1-413頁。
[45]《吐魯番出土文書》，第1-414頁。
[46]《吐魯番出土文書》，第1-414頁。

5 ［　　］下三人，盡卅日，合用麵□斛五斗。次康師得

6 ［　　］珂寒使阤缽大官□□上六人，中四人，盡卅

7 ［　　］次虎牙都子傳，麵［　　］粟米二斗，供南□珂

8 ［　　］子弟，上六人，盡卅［　　］粟米三斛。次十七日［　　］

［　　］四人

9 ［　　］斗，供袗桑拙使浮［　　］盡卅日，合用麵［　　］

10 ［　　］師得傳，麵三斗，供［　　］寒使呼典枯合振［　　］

11 ［　　］麵［　　］次傳［　　］[47]

（二）60TAM307：4/4（a）

1 ［　　］麵一斗供［　　］

2 ［　　］麵一斛四斗，次十八［　　］

3 ［　　］使咖舉貪涅，上二人，盡［　　］

4 ［　　］斗供南相□寒使咖舉貪浮上［　　］

5 ［　　］傳，麵二斗，供棧頭折無艮，中一人，下一［　　］

6 ［　　］日鄭伽子傳，［　　］斗，供雞弊零出軍［　　］

7 ［　　］斗。次年一日竺仏啚傳，［　　］斗，供渾零居之弊［　　］

……

8 ［　　］屈，上二人，盡卅日，合用［　　］斛，粟米三斛。次明威［　　］

9 ［　　］六斗，供外生兒［　　］支（虔），卌五人，盡卅日，合［　　］

10 ［　　］田阿善傳，麵［　　］珂寒鐵師居織［　　］

11 ［　　］麵七斛［　　］麵五斗，供棧頭大［　　］

12 ［　　］人，中二人［　　］麵七斛五斗。次康師[48]

（三）60TAM307：4/3（a）

1 ［　　］摩珂［　　］中十［　　］

2 ［　　］米六升，供烏莫胡［　　］至中［　　］

3 ［　　］米一斗，供貪浮珂寒［　　］人，盡［　　］

4 ［　　］麵三斗三升，床米六升，□貪浮提懃［　　］

5 ［　　］虎牙都子傳，［　　］三升，南葙珂寒［　　］

6 ［　　］子弟，上一人，下二人，盡［　　］威仏奴傳，麵［　　］

其二人廿二日

7 ［　　］烏羅烺五十三人，盡［　　］僧忠傳，麵一［　　］

廿一日［　　］

[47]《吐魯番出土文書》，第 1-415 頁。

[48]《吐魯番出土文書》，第 1-416 頁。

8 ［　　］九升，供棧頭摩［珂］［　　］人，中十三人，［盡］［　　］

9 ［　　］［升］，床米六升，供棧頭［　　］盡廿一［日］，［　　］

10 ［　　］米一斗二升，供棧頭浮［　　］盡［　　］[49]

高昌令狐等傳供食帳

（一）60TAM307：5/2（b）

1 ［　　］斗一升，床米二斗四［升］［　　］

2 ［　　］倫大官，上七人，中八人，下十四［人］，［　　］

3 ［　　］麵一斛六斗八升，床米一斗半。次粟［　　］

4 ［　　］羅烺，上六人，中五人，下四人，盡。次令狐［　　］

5 ［　　］［床］米三斗，供亡來人［阿］□，七人，盡。次嚴僧［　　］

6 ［　　］床米三升，供貪［涅］□寒金師莫畔阤，上一［　　］

7 ［　　］張容真傳，麵□□□升，米一斗二升，供［　　］

8 ［　　］上一人，中四人，盡。［　　］提伽傳，麵一斛八［斗］［　　］

9 ［　　］三升，供希慬摩［　　］，上六人，中十一人，盡。［　　］

……

10 ［　　］眾僧傳，麵一斛［　　］［米］二斗七升，供堊[50]［　　］

（二）60TAM307：5/3（b）

1 ［　　］十二月十六日，孝琛傳，麵四斗，床米一斗供侍禦

2 仕達，四人，盡。　　次校郎麵瓊傳，三斗，供石隆愛

3 ［　　］嶽，三人，盡。　　次康苟掃傳麵一斗，供員浮达[51]

阿斯塔那三二九號墓文書

本墓無隨葬衣物疏，據墓葬形制和同出文物推知爲麴氏高昌時期。

（一）60TAM329：23/1，23/2

1 ［　　］珂寒使［　　］

2 ［　　］次虎牙［參］［　　］

3 ［　　］人。　次虎［　　］

4 ［　　］傳，一斗半，供［　　］虔大官［　　］，上一人［　　］

5 ［　　］次顏［　　］斗半，供吐屯拙［　　］

6 ［　　］［大］官，上四人，中一人，盡。　次虎牙元治［傳］，［　　］

7 ［　　］婆演大官別回。　　次［　　］

8 ［　　］供恕羅珂寒烏都倫大［官］［　　］

[49]《吐魯番出土文書》，第 1-417 頁。
[50]《吐魯番出土文書》，第 1-418 頁。
[51]《吐魯番出土文書》，第 1-419 頁。

9 ［　　］次虎牙元治傳，［　　］

10 ［　　］盡。　　次［　　］

……

11 ［　　］不六多取婊（妻）　次康元相

12 ［　　］供北相（廂）珂寒使吐別貪旱，上一人，盡。

13 ［　　］傳二斗，供卑失移浮孤使烏庾延伊利

14 ［　　］次上一人，中二人，盡。［　　］五斗，供射尼

15 ［　　］珂寒使吐屯［　　］四人，盡。

16 ［　　］吐屯大官別

17 ［　　］九升供貪

18 ［　　］人，盡。

19 ［　　］阿賴□[52]

（二）60TAM329：23/3

1 ［　　］盡。［　　］四酐（斛），供屬貪旱［　　］

2 次康趙苟傳，［　　］卑麵二人眼藥。

3 ［　　］那［　　］縫作胡阿賴姿兒，下

4 ［　　］次虎［　　］供吐別貪旱［　　］[53]

（三）60TAM329：23/4

1 ［　　］傳一斛［　　］尼［　　］

2 次牙仲達傳，一斛供［　　］

3 次虎牙參悅傳，四斛供［　　］見出桓

4 ［　　］公主。常侍伯悅［　　］德□[54]

上述文書中，在爲客使供食時，均出現“傳”的字樣。有必要對此加以解釋。

“傳”很早就出現在中國史籍中。顏師古注《漢書・高帝紀》中的“傳”謂：“傳者，若今之驛。古者以車，謂之傳車，其後又單置馬，謂之驛騎。”[55]

是則“傳”指在交通驛站爲特殊使命者準備的交通設施。

而“傳食”的概念應爲“客使在驛時的食料供應”。

河西漢簡中亦見到“傳食”一詞：

⧄□東部五威率言：廚傳食者眾，費用多，諸以法食者，皆自斎費，不可許。E.P.F22:304[56]；

[52]《吐魯番出土文書》，第 1-461 頁。

[53]《吐魯番出土文書》，第 1-461 頁。

[54]《吐魯番出土文書》，第 1-461 頁。

[55]《前漢書》第 57 頁，中華書局點校本。

[56]甘肅省文物考古研究所編《居延新簡：甲渠候官与第四燧》，第 496 頁，文物出版社，1990。

□尉須省卒，亭一人，會月十五日，毋失會日。

⧄毋得使吏卒責署，相從飲食，命從傳食。 D797A[57]

由上知，傳食者，驛傳按律供應來往公幹者的飲食之意。應爲名詞。

關於“傳”，冨谷至先生專論之甚詳[58]。但我們從上述吐魯番文書中看到，這個詞的性質已經發生了某種變化，由名詞轉化爲動詞。在每筆傳食中，往往由一人傳，供應食客。文句成“XX 傳，供 XXX 等”樣式。從行文分析，似由某人負責領取食料，供應前來的使節或相關人員。“傳”者，似爲領取食料者，用途爲“供”前來的使客和其他相關人員。從傳食者姓名不同看，似爲接待支應人員。由於各人所司使節對象不同，故每項傳食，出現的人員殊不相同。

現將上述記載“傳食”者與供食場合內容列**表六**：

卷號	傳食者	供食對象
60TAM307：5/3（a）	竺仏（佛）啚（圖）	婆瓠吐屯牛兒浬
	呂僧忠	雞弊零蘇利結個婦
	令狐□僧	烏渾摩河先使河干
60TAM307：5/2（a）	虎 □	□寒使咖舉貪浬
	*	南相（廂）珂寒
	**	供 □浬弟子
	明威仏（佛）奴	懃烏羅渾
	虎牙 □	棧頭□□大官
		棧頭案豆遮摩訶先
60TAM307：5/4		貪浬提懃使
		棧頭大官使炎畔阤
		供棧頭大官使脾娑
60TAM307：4/2（a）		供現珂攴（虔）
	虎牙都子	南葙（廂）珂寒使咖舉貪浬
	曺子○（一）嶽	阿都紇希瑾使畔阤子茀
60TAM307：5/1（a）	□善	阿摶（博）珂寒鐵師居□
	畦少何	棧頭大官□
	康師得	珂寒使阤缽大官
	虎牙都子	南□珂□
	□師得	□寒使呼典枯合振

[57]呉礽驤, 李永良、馬建華釋校，甘肅省文物考古研究所編《敦煌漢簡釋文》第 100 頁。甘肅人民出版社，1991。

[58]冨谷至《漢代の「傳」について》,《古シルクロードの軍事行政システム——河西回廊を中心にして》(《シルクロード學研究》Vo1.22)，第 63～82 頁，2005。

60TAM307：4/4（a）	鄭伽子	雞弊零
	竺仏（佛）啚（圖）	渾零居之弊（弊）
	明威	外生兒
	田阿善	珂寒鐵師居織
	康師□	
60TAM307：4/3（a）	虎牙都子	南葙（廂）珂寒
	威仏奴	烏羅烺
	僧忠	棧頭摩珂
60TAM307：5/2（b）	□羅烺	
	令狐□	
	嚴僧□	貪浮□寒金師莫畔阤
	張容真	（缺）
	□提伽	希慬摩□
	眾僧	堊□
60TAM307：5/3（b）	孝琛	侍禦仕達
	校郎麴瓊	石隆愛□嶽
	康苟掃	員浮达
60TAM329：23/1，23/2	虎牙參□	
	虎□	□虔大官
	顏□	吐屯拙□
	虎牙元治	□婆演大官別回
	虎牙元治	
	康元相	北相（廂）珂寒使吐別貪旱
	康趙苟	□卑麵
	虎□	吐別貪旱
60TAM329：23/4	虎牙仲達	
	虎牙參悅	

由上表可知，傳的對象均爲使客，似乎“虎牙都子”專負責南廂來的使節，這可能跟各人與前來使節關係較熟或沒有語言障礙有關。因此，高昌時期的傳仍然繼承了中原政權的傳食制度。

（二）賞食及供食量

“賞食”一詞，字面上較容易理解。但反映在文書中，卻與“傳食”性質截然不同。上舉敦煌文書中也有“賞食”，由文書可知，傳食是按照驛傳規定的常設供食，“賞食”則是規定以外的飲食料或飲食活動。類似于《唐六典》規定的“設食料”和“設會料”。雷紹鋒認爲敦煌宴設司對牧子的賞設是一種臨時性的款待，是在領取口

糧之外的額外賞賜，的是[59]。

關於這些供食文書，吳玉貴等先生從供食情況詳細研究了麴氏政權和突厥等政權的關係[60]，認爲上中下人正是對使客的區別，“高昌客館對外國客使的食物供應，一般根據客使身份高下，分爲上、中、下三級，個別不分等次的客使，疑爲非官方使團。”[61]的是，但最後一點，還需要進一步研究。

吳玉貴先生的研究及論斷，爲我們理解客使供食文書的記載方法指明了正確的方向。我們的問題是，使團的三等次供食之區別究竟如何？既然分了等次，就應該在食物的質或量上有一定區別？或者質和量均有區別。

在這些供食文書當中，我們也發現了一些和敦煌歸義軍衙內宴設司相同性質的內容。

由於文書殘破嚴重，完整的支破記載較少，爲分析客使供食的質量增添了難度。爲了然起見，現將客使等次、每日供食品種和數量列表如下：

表七

卷　號	行	等次及人數				原糧（升）				日人均
		上人	中人	下人	不明確	麵	糜米	粟米	麨	升
60TAM307 5/3	2-3	2	3			56	9			13
60TAM307 5/3	3-4		4	2		60	12			12
60TAM307 5/3	5	2	1			36	3			13
60TAM307 5/2b	8-9	8						10	10	
60TAM307 4/4a	5		1	1		20				10
60TAM307 5/3b	1-2				4	40	10			12.5
60TAM307 5/3b	2-3			3		30				10
60TAM307 5/3b	3				1	10				10
60TAM329 23/1、23/2	4	1				15				15

上表中，一、二、三筆雖同屬一檔，但據此難以計算出上中下人統一的供食標準。根據第一筆和第三筆，可知上人一日供食中，麵粉爲 13.5 升，中人爲 9 升；而

[59]雷紹鋒《論曹氏歸義軍時期官府之“牧子”》，《敦煌學輯刊》1996 年第 1 期。

[60]“據本類帳目計帳格式，第 3 行‘十三日’上，或第 2 行‘中三人’下，應脫‘盡’字。由於文書殘損過甚，無法直接瞭解帳目的內容。如果仔細觀察，就會發現本件文書中存在兩個日期系統，即‘盡’字以上部分的日期和‘盡’字以下部分的日期。‘盡’字以上日期，僅在第 4 行末可見‘次六日’。‘盡’字以下日期存四項，順序排列爲：十五日、十三日、十五日、十日。顯然四項日期排列雜亂，無章可循。‘盡’字以上部分的日期及糧食數目與‘盡’字以下部分的日期及糧食數目之間，究竟存在什麼對應關係呢？我們假定‘盡’字以上糧食數爲某天一批客使的日供食數，‘盡’字以下部分的糧食數爲截止某一批客使供糧食的總數，……本項使團六人，某日食面六斗，至十五日，共用面七斛二斗，總計十二天；日用糜米一斗二升，至十五日，共用一斛四斗四升，總計也是十二天，以此推之，就食日也是某月四日，與 2-3 行所推結果相同。通過對記載完整的九項進行推算，各項數字完全相合。”（吳玉貴《試論兩件高昌供食文書》，《中國史研究》1990 年第 1 期，第 70～80 頁。）

[61]同上，第 76 頁。

根據這個標準計算，第二筆下人的麵粉數量達到了 12 升。顯然不是這樣。其供食原則與麵粉以外的糜米有關係。從一、三筆看，上人似乎沒有供應糜米，而每個中人則在 9 升麵粉外，再供應三升糜米，總數達到 12 升。也說明當時的高昌，麵粉已躋身于精糧之列，糜、粟地位下降。

60TAM307：5/4 卷只有總數 315 斤，上人 3 人、中人 3 人，食用 15 天，則每日 21 斤，人均 3.5 斤。上人 5 斤、中人 2 斤或上人 4 斤、中人 3 斤均符合 21 斤的日食總量。關於此筆供食內容，筆者認爲是肉食[62]。

高昌時期實行的是小斗制，每 3 斗合大斗 1 斗。即 1 斗合大斗制 3.3 升。這樣，高昌上中下客使供食量大體維持在和敦煌相同的水準。試將二者列表如下：

表八

	敦煌*（升）	吐魯番 (升)
上人	不詳	13
中人	3.6	12
下人	3	10

*敦煌客使日供應數由上中下次料計算得出。

我們發現在供應食物質量上也有顯著區別。

由以上供食文書中看出，在麴氏高昌時期，小麥已經在人們的主食中佔有主要地位，成爲一種“細料”，而粟和糜（床）則處於次要地位，這可從每次的供食數量上看出。從表六中可以看出，在供應使客時，麵、米（粟米、糜米）的比列爲 5：1、6：1 左右，甚至是 12：1，大多時候，只供應麵粉。只有 [9] 行是個特例，雖然是“上人”，但供應的食物是粟米和麩。這是否與該使節執著於草原遊牧飲食習慣有關，或者是爲使節準備的路途食物也未可知。

由此，分析上表前三行，我們發現第一行和第三行均只供應上人和中人，麵米比列分別爲 6：1 和 12：1；而第二行由於供應對像是中人和下人，麵米比例爲 5：1。除此外，第十二行在上人數量相同的情況下，第一行中人 3 人，日供糜米 9 升，第三行中人 1 人，日供糜米 3 升，使人懷疑糜米就是給中人供應的，上人所供可能全部是麵粉，以示區別。

（三）高昌時期客使供肉情況

《高昌重光三年（公元六二二年）條列虎牙氾某等傳供食帳一》66TAM50：9（a）：

1　細麵壹酐（斛），床細米貳兜，□

[62]見拙作《吐魯番高昌供食文書中的肉食量詞——以“節”爲中心，兼說《唐六典》中的肉量詞“分”》，待刊出。

2　十人前十五日用。次虎牙氾　傳，細麵三酬，床米陸兜，粟米壹兜半，供襄邑夫人前尼道師

3　貳人十五日食。次傳細麵貳酬（斛）伍兜，床米伍兜，粟米壹兜貳昇半，供閻典禄下右禪師

肉六節

4　肆人五日食。次傳細麵五斗，市肉一節，供各兒阿婆三日食。次傳細麵壹酬，床細米壹兜，供參軍

5　義宣張善海二人五日食。次虎牙氾　傳，市肉拾柒節，細麵壹百酬，床細米壹兜半，供

6　襄邑夫人作食送與張郎中。次傳細麵伍兜，市肉陸節，供送與侍郎涉彌子。次傳蘇壹

7　兜，付明威慶懷用治赤威（韋）拾伍張。次殿中楊　傳，白羅麵貳兜，市肉三節，胡瓜子

8　三昇，作湯餅供世子夫人事。次宣威曹　傳，油壹昇，用摩鎧。次陰　傳，粟米

9　貳兜，供張夫人用作阿摩腎糜。次虎牙氾　傳，市肉貳節，白羅麵壹兜，供吳

10　尚書食。次傳細麵伍昇，作餅，市肉壹節，供襄邑夫人前白元相食。次傳細麵壹兜，供

11　襄邑夫人前索禪師食。

12　重光三年壬午歲十一月一日　　條

13　　江 將 軍 高[63]

《高昌重光三年（公元六二二年）條列虎牙氾某等傳供食帳一》66TAM50：9（b）：

1　次廿七日，氾傳，油一斗，供康禪師用。次傳，肉八節，細麵八斗，

床米壹斗，麵一斗

2　用促縫帳氈宮人食。次傳，豆一斗，供康禪師用。

3　次傳，肉二節，白羅（高：麵？）一斗，供鎮軍摩頓。次傳肉三節，用作逕。

4　楊殿中傳，肉一節，細麵一斗，供鎮軍食。此（高：次？）肉二節，細麵一斗，供史殿中、

5　麴歡岳、葛（薩）三人食。次氾傳，粟米二斗，供康禪師舍用。次傳，肉

6　三節，細麵一斗，作餅，用開帳窗食。

八

7　十月廿〇日，麴郎阿住傳，麻三束壹拔（把），供大

[63]《吐魯番出土文書》，第 1-376 頁。

8　波帳上用。次明威嚴傳，油壹昇，用摩鎧。次

9　虎牙氾傳，麻一拔（把），供畢頭帳上用。

10　十月卅日，虎牙氾傳，市肉三節，細麵三兜，供尗公主食。次殿中陽

11　傳，市肉捌節，供世子夫人食。康將，市肉三節，自死肉十二節，

12　麵一斛五斗，供客胡十五人賞。次虎牙氾傳，蘇一斗，供

13　供（此處衍一“供”字）世子送與吳尚書。次傳，市肉陸節，細麵三斛，供康禪

14　師舍用。次殿中陽傳，繡革靴貳兩，並帝（羣）。次傳，細麵一斗

15　二昇，粟米二昇，供明威慶善小兒二人。

□

16　侍郎辛傳，棗三斗，供□帳中□[64]

《高昌重光三年（公元六二二年）條列康鴉問等供食及作坊用物帳》66TAM50：32（a）：

1　□次傳，肉一腳，供襄邑夫人用作糜。次傳，廿五節，麵二斛五斗，

床米一斗，麵一斗，作羹。

2　供縫作女輩食。次傳六節、麵五斗，供夫人作食，送與苟

3　侍郎。次傳肉十節，肝肺二，羊頭一，供康禪師舍用。

4　康鴉問傳，麻一紱（把），用系練。次傳，黑毫五斤，駝毛六斤，

5　付阿監；清（青）毫十斤，用作氊蕈緣，付張夫人坊中。十一月五日，

6　黑毫一斤。

7　次嚴子亮傳，麵四斛，供白客兒一人下右七人作五日食。次傳麵

8　五斗，死肉三節，供三犒一人五日食。次傳，五斗，供同作人五人

9　五日食。次傳，市三節，死肉三節，麵六斗，供唐懷憙一人

10　下五人看飲，盡卅日。曹宣威傳，油一升，用摩鎧（？）。唐懷憙

11　傳，羊皮三枚，用鋁囊。[65]

有關高昌時期的肉量詞“腳”和“節”，學者已有研究[66]，筆者也依據唐代文獻《太白陰經》，認爲一“節”爲一羊的二十分之一，大約爲二斤[67]。

《高昌重光三年（公元六二二年）條列虎牙氾某等傳供食帳一》中“康將，市肉三節，自死肉十二節，麵一斛五斗，供客胡十五人賞。”每人賞一節。《高昌重光三年（公元六二二年）條列康鴉問等供食及作坊用物帳》中“次傳麵五斗，死肉三節，供

[64]《吐魯番出土文書》，第 1-377 頁。

[65]《吐魯番出土文書》，第 1-378～379 頁。

[66]劉世儒、廖明春《吐魯番出土文書新興量詞考》，《敦煌研究》1990 年 2 期，第 85 頁；洪藝芳《敦煌吐魯番文書中的量詞研究》，臺灣文津出版社，2000 年。

[67]《吐魯番高昌供食文書中的肉食量詞——以“節”爲中心，兼說《唐六典》中的肉量詞“分”》。

三犒一人五日食”，該人五日受賞“三犒”爲三節，這透露了一個重要的信息，就是傳食與“賞食”的區別。傳食是按照規定的標準供食，“賞食”則是在傳供食標準額外的舉動，標準是每人一節（一節大約 2 斤，這和《太白陰經》中的賞食肉標準相同)。(“賞食”《唐六典》中亦有規定，可證之）但高昌文書中以節爲單位的供肉資料無法判斷等次情況。幸而上列 60TAM307：5/4《高昌竺佛圖等傳供食帳》（三）和 60TAM307：4/2（a)《高昌虎牙都子等傳供食帳》兩件文書有量詞“斤”，經研究，正是供肉文書[68]，差可判斷上中下三等客使人員的肉食供應情況。

表九：

卷　號	行	等次			供肉時間（天）	總量(斤)	日供(斤)	人/日均供（斤）
		上	中	下				
60TAM307：5/4	1	3	3		15	315	21	3.5
60TAM307：5/4	1	1	2		7.5	67.5	9	3
60TAM307：5/4	2		7		2	14	28	2
60TAM307：5/4	3		4		7	56	8	2
60TAM307：5/4		1	1		1	7	7	3.5
60TAM307：4/2（a）	2-3	3			1	15	15	5

這樣，可以計算出一名“上人”日供肉 5 斤，一名“中人”日供肉 2 斤，相當於一節。表中第二行的供食對象必定是上 1 人，中 2 人。

由此看，高昌時期的客使供肉也分等次。且上人和中人的供食待遇相差較大。由於文書缺損，無法得出“下人”的日供肉數，不能不說是個遺憾。上人和中人如此大的差距，和客使的身份等級有很大的關係。

敦煌的三等分出現在招待、宴請等會食場合，而吐魯番文書反映的情況卻有兩種：一種爲每日的供料，如麵粉、米、麩以及肉等，另一種爲“賞食”，每人 2 斤，相當於一節，似乎只反映在肉食的賞賜上，多是一日之食或一餐之食，與敦煌的三等分場合大致相同。

需要說明的是，文書對肉作了區分，其中有“死肉”和“自死肉”。因文書中的肉來源於市場，需要核實價格，“死肉”價格較低，所以被特別提出。

由此看，高昌王國在爲客使供肉時，也實行上中下三個等次。

四 歷代客館和宴賞供食制度概述

敦煌吐魯番客館供食出現三等分並非偶然，而是有悠久的傳統。作爲中國早期交通體制和外交制度的一個不可缺少部分，不時出現在史料記載當中。雖然作爲制

[68]《吐魯番高昌供食文書中的肉食量詞——以“節”爲中心，兼說《唐六典》中的肉量詞“分”》。

度的細微末節，大多史料概而不詳，難窺全豹，但秦簡、漢簡的不斷發現，使這一制度逐漸清晰起來。

那麼，作爲一種招待使節和館驛供食制度，它如何形成、變化，就不得不引起我們的思考。

飲食等次之別應起源於階級社會，是身份等次在飲食活動中的反映和體現，很早就反映在驛傳對往來官員的食物供應上。《周禮》中已經有記載：秋官“掌四方賓客之牢禮餼獻、飲食之等數與其政治。”[69]可見當時招待的客人就已經區分等次。

《史記・孟嘗君列傳》：“初，馮驩聞孟嘗君好客，躡蹻而見之。孟嘗君曰：‘先生遠辱，何以教文也?’馮驩曰：‘聞君好士，以貧身歸於君。’孟嘗君置傳舍。十日，孟嘗君問傳舍長曰：‘客何所爲?’答曰：‘馮先生甚貧，猶有一劍耳，又蒯緱。彈其劍而歌曰：‘長鋏歸來乎，食無魚。’孟嘗君遷之幸舍，食有魚矣。五日，又問傳舍長。答曰：‘客複彈劍而歌曰：‘長鋏歸來乎，出無輿。’孟嘗君遷之代舍，出入乘輿車矣。”《史記索引》也謂“傳舍、幸舍及代舍，並當上、中、下三等之客所舍之名耳。”[70]這實際上反映當時的傳舍已分爲三個等次，第一個等次，不僅食有魚肉，且出有車；第二個等次食有魚，但出無車；而第三個等次則既無魚，更無車，僅有粗食。在《戰國策・馮諼客孟嘗君》中，第三等被形容爲“食以草具”。[71]由此看，飲食等級是傳舍等級的主要區別之一。不僅如此，從“食以草具”看，甚至連飲食器具也有較大區別。

《太平御覽》引《列士傳》對這件事的判斷也是將客人分爲三等：“列士傳曰：孟嘗君食客三千人，廚有三列，上客食肉，中客食魚，下客食菜齊。市中有乞食人馮煖，經冬無袴，面有饑色，願得上廚。”[72]就飲食品質高下而言，是對身份三等分的深入理解。當時人的觀念是肉高於魚。

“食客”一詞，突出地反映了貴族養士的首要一點，就是爲他們提供食宿。

而出土之簡牘也爲今人提供了律令上的第一手明證材料。

1975 年，湖北省雲夢縣睡虎地出土了一批秦代竹簡，內容大都是秦代的法律文書。就中的《傳食律》是驛站接待過往官吏的供食標準規定。現引如下：

> 禦史卒人使者，食粺米半斗，駟（四）分升一，采（菜）羹，給之韭蔥。其有爵者，自官士大夫以上，爵食之。使者之從者，食（糲）米半斗；僕少半斗。
>
> 不更以下到謀人，粺米一斗，醬半升，采（菜）羹，芻稿各半石。宦奄

[69]《周禮注疏》卷 38《秋官・掌訝》，《十三經注疏》（上），第 902 頁。
[70]《史記》，第 7-2359 頁，中華書局點校本。
[71]［漢］劉向集録《戰國策・齊策》，第 1-395 頁，上海古書籍出版社，1985。
[72]［宋］李昉等《太平御覽》卷四百五，第 2-1875 頁，中華書局，1960 年影印。

如不更。上造以下到官佐、史毋（無）爵者，及卜、史、司禦、寺、府，（糲）米一斗，有采（菜）羹，鹽廿二分升二。[73]

可以清楚地看到，主要區分這樣幾個等級：

第一等：按爵位供食者，官士大夫以上；

第二等：不更以下到謀人，包括宦閹；

第三等：上造以下到官佐、史無爵者、卜、史、司禦、寺、府等；

第四等：卒人、從人、僕人等（品質上稍有區別）。這一個等級應該不算做正式接待者之內。後世也是這樣認爲的。他們屬於隨從。因此，只供應粗糧，連鹽、菜都不供，質言之，傳食律的標準仍然是三等分。

不僅在數量上有區別，且在品質上也有高下之分。現列表如下：

表十

客使名稱	等級	粺米	糲米	醬	菜羹	韭	鹽	芻	
禦史卒人使者	等外	半斗		1/4 升	有				
有爵者，官士大夫以上	一等								按爵位供應
（使者從人）	等外		半斗						
（使者僕人）	等外		少半斗						
不更到謀人以及宦奄	二等	1 斗		半升	有			半石	
上造到官佐、史無爵者、卜、史、司禦、寺、府	三等	1 斗			有		2/22 升		

從上表中可以看出，主食部分有四種區別：一斗粺米；半斗粺米；半斗糲米，少半斗糲米。供食者身份分爲使者、從人和僕人三種。使者本身分爲三種規格供食。其等次不僅有量的多寡之差，也有質的高下之別。律文雖然沒有確定使者團隊分三等分，但實際上卻是三種標準。這可以視作後世驛站供食三等分明確規定的濫觴。

先秦的驛館供食制度奠定了後世等分（等次）的基礎。張家山出土的漢律繼承了秦的供食制度。

發傳□□□□，度其行不能至者□□□□□長官皆不得釋新成。使非有事，及當釋駕新成也，毋得以傳食焉。229(F43A、B)

[73]睡虎地秦墓竹簡整理小組編《睡虎地秦墓竹簡》第 5-68～69 頁，文物出版社，1978。

而以平賈（價）責錢。非當發傳所也，毋敢發傳食焉。爲傳過員，及私使人而敢爲食傳者，皆坐食臧（贓）爲盜。230(F45)

□□□□□□□□及乘置、乘傳者□□，皆毋得以傳食焉。231(F41B)

丞相、禦史及諸二千石官使人，若遣吏、新爲官及屬尉、佐以上徵若遷徙者，及軍吏、縣道有尤急 232(F124)

言變事，皆得爲傳食。車大夫粺米半斗，參食，從者糲米，皆給草具。車大夫醬四分升一，鹽及從者人各廿二分升一。233(F123)

食馬如律，禾之比乘傳者馬。使者非有事，其縣道界中也，皆毋過再食。其有事焉，留過十日者，稾米令自 234(F106)

炊。以詔使及乘置傳，不用此律。縣各署食盡日，前縣以誰（推）續食。食從者，二千石毋過十人，千石到六百石毋 235(F107)

過五人，五百石以下到二百石毋過二人，二百石以下一人。使非吏，食從者，卿以上比千石，五大夫以下到官大夫比五百石，236(F104)

大夫以下比二百石；吏皆以實從者食之。諸吏乘車以上及宦皇帝者歸休若罷官而有傳者，縣舍食人、馬如令。237(F103)

傳食律 238(F102)[74]

這是對秦代《傳食律》的繼承，不過將秦代複雜的供食等次簡化爲兩個等次：使和從人。但卻詳細規定了使者隨從人員的數量，使者如果不是在籍官吏，則卿以上，同于千石官吏的供應標準，五大夫以下到官大夫，則同于五百石官吏的供應標準。區別主要在於食物的品質，即“粺米”和“糲米”的區別。其中“叁食”爲三餐。漢代量制和秦代同，半斗約爲 1000 毫升。這是一日的食量供應。其他乘車以上的官吏，則不在驛站飲食，而是到“縣舍”就食。

敦煌漢簡記載：

371:釋 MC.344：門下史馬剛， 米斗，從者一人，麥一斛。

372:釋 MC.345：從掾位田裒，米斗，私從二人，麥二斛。

373:釋 MC.346：騎吏田揚，米斗，從者一人，麥一斛。[75]

[74]張家山二四七號漢墓竹簡整理小組編著《張家山漢墓竹簡二四七號墓》，第 39～40 頁，文物出版社，2006。

[75]甘肅省文物考古研究所編吳礽驤、李永良、馬建華釋校《敦煌漢簡釋文》，第 36 頁，甘肅人民出版社，1991。

也是將使客和從者區分開來。大抵漢代使節等分爲兩個等次，主使和從者。與之相應的驛站供食制度也採取了兩等分的制度。

按上述漢簡記載，正使米四斗，而從者麥達到了一斛。似乎從者的供食數量多於正使。由於無有更多的資料，我們猜想，一是漢代由於加工和製作技術的限制，麥還作爲粗糧，所以分配從者；第二，從者所分配的麥當中，或包含了使節騎乘的飼料。無論如何，從者的食料分配不會超過正使。

三等供食制度還形成了一些特殊的稱謂，如上客、次客、下客。

檢索史籍，多有記載。

《史記》："引入，留數月，爲上客，厚送之。"[76]

《史記》："引入與坐，爲上客。"[77]

"上客"一詞，正是各國貴族置館舍分等養客風氣下形成的一個詞彙。後世史料中的"上客"，或爲一種尊崇地位的反映，但也有實指。

《魏書・房法壽傳》："以法壽爲上客，崇吉爲次客，崔劉爲下客。"[78]

《史記》："已報使，因言曰：'魏有張祿先生，天下辯士也。'曰：'秦王之國危於累卵，得臣則安。然不可以書傳也。'臣故載來。」秦王弗信，使舍食草具。待命歲餘。"唐人司馬貞《史記索隱》解"草具"謂："亦舍之，而食以下客之具。"[79]

《後漢書》："若夫齊武王之破家厚士，豈遊俠下客之爲哉。"李賢注"下客"謂："毛遂、馮煖之徒也。"[80]則亦屬於三等客之下者。

《三國志・魏書》：林曰："雖當下客，臨子字父，何拜之有？"[81]

《宋書》："長瑜教惠連讀書，亦在郡內。靈運又以爲絶倫，謂方明曰：阿連才悟如此，而尊作常兒遇之，何長瑜當今仲宣而飴以下客之食？ 尊既不能禮賢，宜以長瑜還靈運，靈運載之而去。"[82]

《魏書》："曜忿之，乃至撾撻。後還其衣，爲之設饌，遂與長史房天樂、司馬沈嵩等鎖送京師，面縛數罪，宥死，待爲下客，給以麤衣蔬食。顯祖重其節義，稍亦加禮之，拜爲外都下大夫。"[83]

可見，從先秦到南北朝，館舍養士，皆區分爲上中下三等以給食具，不特虛言也。

歷代各政權當也有類似的供食制度，可惜史料闕如，不得其詳，只能從零星的史料中推知。

---

[76]《史記》卷一百，中華書局點校本，第 2732 頁。
[77]《史記》卷一百一，第 2742 頁。
[78]《魏書》卷四三，中華書局點校本，第 970 頁。
[79]《史記》卷七九，中華書局點校本，第 2403 頁。
[80]《後漢書》卷十四，中華書局點校本，第 555 頁。
[81]《三國志・魏書》卷二三，中華書局點校本，第 658 頁。
[82]《宋書》卷六十七，中華書局點校本，第 1775 頁。
[83]《魏書》卷六十一，中華書局點校本，第 1367 頁。

產生在南北朝時期的道家著作《陸先生道門科略》規定道徒在三會（正月七日、七月七日、十月五日）和滿月、娶婦時，要設食，食分爲上廚和中廚：

“雖一年三會，大限以十月五日，齎信一到，治又若家居安全，設上廚五人。若口數減落，廚則不設，齎信如故。”

“若生男滿月，齎紙一百，筆一雙，設上廚十人。生女滿月，齎掃帚、糞箕各一枚，席一領，設中廚五人。娶婦設上廚十人，藉主皆齎宅錄詣本治，更相承錄，以注正命籍。”[84]

因儀式上的飲食規格要高於平素，所以只出現了上廚和中廚，顯然，在人們的觀念當中，飲食有三等之分。這種道教儀式上設食三等的規定，當然是受驛傳三等分設食的影響。

《唐會要》和《唐六典》均記載了親王、九品官員的常食料、設食料供應標準：

二十四年六月二十三日敕：百官料錢，宜合爲一色，都以月俸爲名，各據本官，隨月給付。其貯粟宜令入祿，數同申。應合減折。及申請時限，並依常式。

一品：三十一千，月俸八千，食料一千八百，防閤二十千，雜用一千二百文。

二品：二十四千，月俸六千，食料一千五百。防閤十五千。雜用一千文。

三品：十七千，月俸五千，食料一千一百，防閤十千，雜用九百文。

四品:一十一千八百六十七文，月俸四千五百，食料七百，防閤六千六百文，雜用六百文。

五品：九千二百，月俸三千，食料六百，防閤五千，雜用五百文。

六品：五千三百，月俸二千三百，食料四百。庶僕二千二百，雜用四百文。

七品：四千五百，月俸一千七百五十，食料三百五十。庶僕一千六百，雜用三百五十文。

八品：二千四百七十五文。月俸一千三百。食料三百。庶僕六百二十五文。雜用二百五十文。

九品：一千九百一十七文。月俸一千五十文。食料二百五十。庶僕四百一十七文。雜用二百文。

[84]《正統道藏》第 41 冊，第 33120～33121 頁，臺北：藝文印書館印行,1977。

天寶三載十三日敕：郡縣闕。職錢送納太府寺。自今已後。納當郡。充員外官料錢。不足。即取正官料錢分。若無員外官。當郡分。

五載三月二十日敕：郡縣官人及公廨白直。[85]

以上“料錢”是按照官員品級所分配。其中“食料”部分，雖然等級差從 300 到 50 錢不等，但可看出一到三等、四、五等、六等以下級差較大，與下引《唐六典》供食的規定差可相似。

《唐六典》還規定了各級官員的供食情況：

凡親王已下常食料各有差。每日細白米二升，粳米、粱米各一斗五升，粉一升，油五升，鹽一升半，醋二升，蜜三合，粟一斗，梨七顆，蘇一合，乾棗一升，木橦十根，炭十斤，蔥、韭、豉、蒜、薑、椒之類各有差。每月給羊二十口；豬肉六十斤；魚三十頭，各一尺；酒九斗。

三品已上常食料九盤，每日細米二升二合，粳米八合，麵二升四合，酒一升半，羊肉四分，醬四合，醋四合，瓜三顆，鹽、豉、蔥、薑、葵、韭之類各有差；木橦，春二分，冬三分五釐；炭，春三斤，冬五斤。

四品、五品常食料七盤，每日細米二升，麵二升三合，酒一升半，羊肉三分，瓜兩顆，餘並同三品。若斷屠及決囚日，停肉，給油一合、小豆三合。三品已上亦同此。

六品已下、九品已上常食料五盤。每日白米二升，麵一升一合，油三勺，小豆一合，醬三合，醋三合，豉、鹽、葵、韭之類各有差；木橦，春二分，冬三分。

凡諸王已下皆有小食料、午時粥料各有差。複有設食料、設會料，每事皆加常食料。又有節日食料。謂寒食麥粥，正月七日、三月三日煎餅，正月十五日、晦日膏糜，五月五日粽，七月七日斫餅，九月九日麻葛糕，十月一日黍臛，皆有等差，各有配食料。

蕃客在館設食料五等。蕃客設食料，蕃客設會料，各有等差焉。[86]

甚至葬儀都規定了等級：

若身亡，使主、副及第三等已上官奏聞，其喪事所須，所司量給；欲還蕃者，則給轝遞至境。首領第四等已下，不奏聞，但差車、牛送至墓所。諸蕃使主、副五品已上給帳、氈、席，六品已下給幕及食料；丞一人判廚事。季終則會之。若還蕃，其賜各有差，給於朝堂。典客佐其受領，教其拜謝之節焉。[87]

[85]《唐會要》卷九十一，第 1963 頁，上海古籍出版社，1991。
[86]《唐六典》卷四，第 128～129 頁。
[87]《唐六典》卷十八，第 506～507 頁。

爲方便觀覽，將上引《唐會要》、《唐六典》供食情況列表如下：

表十一

官員品階	月食料（文）	常食料 (升)							備註
			白 米	粳米	麵	粱米	粉	粟	
親王			2（細）	15		15	5	1.5	
一品	1800	9 盤	2.2（細）	0.8	2.4				
二品	1500	同上	2（細）						
三品	1100	同上	同上						
四品	700	7 盤	2		2.3				
五品	600	同上	同上		同上				
六品	400	5 盤	2		1.1				
七品	350	同上	同上						
八品	300	同上	同上						
九品	250	同上	同上						
蕃客									分五等

除親王以外，三品以上官員每日所供食料（主食）5.4 升，九盤；四品、五品爲 4.3 升，七盤；六品到九品爲 3.1 升，五盤。分爲三等。

酒肉蔬菜調味料等：

表十二

官員品階	小豆/合	油	醬	鹽	醋	蜜	梨	蘇	乾棗	調味料	月供肉			酒/升
											羊/口	豬肉/斤	魚/頭	
親王		5		1.5	2	0.3	7 顆	0.1	1 升	各有差	20	60	20	90
三品以上			0.4		0.4					各有差	日 4 分			日 1.5
四、五品	3		0.4		0.4						日 3 分			1.5
六～九品	1	3 勺	3 合		3 合					各有差				
蕃客														

除親王外，九品官員分爲三等，五品以上每日酒 1.5 升，六品以下不供酒。

有了這些做參考，我們來看客使供食狀況。

蕃客供食也分爲幾種情況，一是蕃客常食料，按客使地位，分爲五等；二是蕃客設食料、設會料各有等差。“各有等差”，當是參考唐朝官員等級，也分爲三等。

“凡四夷君長，以蕃望高下，爲簿朝見，辨其等位，第三等居武官三品之下，第四等居五品之下，第五等居六品之下，有官者居本班禦史，察食料。”[88]

蕃州都督刺史朝集，日視品給以衣冠袴褶，乘傳者日四驛，乘驛者

[88]《新唐書》卷四十八，第 4-1257 頁。

六驛，供客食料，以四時輸鴻臚，季終句會之。客初至及辭設會，第一等視三品，第二等視四品，第三等視五品，蕃望非高者視散官而減半。參日設食，路由大海者給祈羊豕皆一；西南蕃使還者給入海程糧；西北諸蕃則給度磧程糧。[89]

這雖然是設會時的待遇，但可作爲在館供食的參考標準：將蕃客區分爲五等，第一等相當於唐朝官員的三品，就是日供食料主食爲 5.4 升，羊肉 4 分，酒 1.5 升。除以上三等外，第四等與散官相同，最後一等爲隨從。

而設食標準，雖然《唐六典》只說“複有設食料、設會料，每事皆加常食料。又有節日食料”，是在“常食料”基礎上，再加一些其他的食物和酒，所加部分沒有具體規定。按照百官常食料的標準，則在迎送宴會上，蕃客分三等，一等常食料九盤，二等常食料七盤，三等的情況《新唐書》記載和《唐六典》稍有不協之處，《唐六典》說百官常食料四品、五品均爲七盤，而《新唐書》則曰設會時，蕃客的第三等同於五品，以情理推之，或者蕃客的第三等同於六品以下到九品，這樣就有了區別。果真如此，則第三等設會料爲五盤，外加其他食物。

這樣，不僅可看到當時設會的供食情況，也可推之宴會的設座情況：相同標準的官員和蕃客應該坐在同一張食床上，不僅區別了身份高下，而且方便尚食局供食。

這種供食方式也見之於客館：

太后自徐敬業之反，疑天下人多圖已，又自以久專國事，且內行不正，知宗室大臣怨望，心不服，欲大誅殺以威之。乃盛開告密之門，有告密者，臣下不得問，皆給驛馬，供五品食，使詣行在。雖農夫樵人，皆得召見，廩於客館，所言或稱旨，則不次除官，無實者不問。於是四方告密者峰起，人皆重足屏息。[90]

由上可知，“五品食”正是第三等供食標準。可證不僅設會時的設食料分爲三等，驛館供食也維持著三等食的制度。

張鷟《朝野僉載》記載：

納言婁師德，鄭州人，爲兵部尚書，使並州，接境諸縣令隨之。日高至驛，恐人煩擾驛家，令就廳同食。尚書飯白而細，諸人飯黑而粗。呼驛長責之曰：“汝何爲兩種待客？”驛將恐，對曰：“邂逅浙米不得，死罪。”尚書曰：“卒客無卒主人，亦複何損。”遂換取粗飯食之。[91]

[89]《新唐書》卷四十六，第 4-1196 頁。

[90]《資治通鑒》卷 203《唐紀十九》；第 11-380～381 頁，臺灣《資治通鑒今注》臺灣商務印書館，1966。

[91]［唐］張鷟《朝野僉載》卷五，王雲五主編“叢書集成初編”《朝野僉載及其他二種》第 61 頁，商務印書館，1936。

驛站將宰相與隨行各縣令的主食作了明顯區別，婁師德發了火。驛長是按照等分規定供食，按理說婁師德不該發火。其實，當時驛站供應的主食米應該沒有大的區別（如上舉《唐六典》，除親王外，主食均爲細米和白米）因此，婁師德才有理由發火。

《舊唐書》在談到郎中員外郎的職司時，也提到俸料“外官以州縣府之上中下爲差”：

> 比部……郎中、員外郎之職，掌勾諸司百寮俸料、公廨、贓贖、調斂、徒役、課程、逋懸數物，周知内外之經費，而總勾之。凡内外官料俸，以品第高下爲差。外官以州縣府之上中下爲差。凡税天下戸錢，以充州縣官月料，皆分公廨本錢之利。羈縻州所補漢官，給以當土之物。關監之官，以品第爲差，其給以年支輕貨，鎮軍司馬、判官俸禄，同京官。鎮戍之官，以鎮戍上中下爲差。凡京師有別借食本，每季一申省，諸州歲終而申省，比部總勾覆之。凡倉庫、出内、營造、傭市、丁匠、功程、贓贖、賦斂、勲賞、賜與、軍資、器仗、和糴、屯牧，亦勾覆之。[92]

顯然，官員的俸料等級與供食等級間存在一定的一致性。

宋代客館供食情況大致也如唐代，這反映在契丹的供食方式和標準上：

> 金國待宋使也，使、副日給酒二十量罐，羊肉八觔，果子錢五百，雜使錢五百，白麪三觔，油半觔，醋二升，鹽半觔，粉一觔，細白米三升，[麵] 醬半觔，大柴三束。
>
> 上節：細酒六量罐，羊肉五觔，麪三觔，雜使錢二百，白米二升。
>
> 中節：常供酒五量罐，羊肉三觔，麪二觔，雜使錢一百，白米一升半。
>
> 下節與中節同。[93]

宋人著作《松漠紀聞》中有更詳細的記載：

> 虜之待中朝使者、使副，日給細酒二十量罐，羊肉八斤，果子錢五百，雜使錢五百，白麵三斤，油半斤，醋二斤，鹽半斤，粉一斤，細白米三升，麵醬半斤，大柴三束。上節：細酒六量罐，羊肉五斤，麵三斤，雜使錢二百，白米二升，中節常供酒五量罐，羊肉三斤，麵二斤，雜使錢一百，白米一升半。下節常供酒三量罐，羊肉二斤，麵一斤，雜使錢一百，白米一升半。[94]

---

[92]《舊唐書》卷四十三，第 6-1839 頁。

[93]《大金國志》, 卷十六。《二十五別史》，第 17-128 頁，齊魯書社，2000。

[94]［宋］洪皓撰《松漠紀聞》卷二，國學文庫第四編，第 36～37 頁，1933 年重印本。

下節所供數量與《大金國志》所記不協。以情理推之，《松漠紀聞》更可信。

表十三：

	細　酒（罐）	羊肉（斤）	果子錢	雜使錢	白麵/斤	油/斤	醋/斤	鹽/斤	粉/斤	白米/升	麵醬/斤
中朝使節、副使	20	8	500	500	3	0.5	2	0.5	1	3	0.5
上節	6	5		200	3					2	
中節	5	3		100	2					1.5	
下節	3	2		100	1					1.5	

也將使節分爲三個等次，不僅主食部分質和量以及雜使錢有別，而且酒的供應也有別。

降至元代，由於驛站的發達，有關驛站的供食規定出現在律令當中：

“正官宿頓分例：米一升，麪一斤，羊肉一斤，酒一升。柴一束，油鹽雜支鈔三分；從人每米一升。經過皆減半。”[95]

“太宗元年十一月，敕諸牛鋪馬站，每一百戶，置漢車十一具，各站俱置設米倉，站戶每年一牌內納米一石。令百戶一人掌之。北使臣每日支肉一斤，麪一斤，米一升，酒一瓶。”[96]

> 世祖中統四年三月，中書省定議，乘坐驛馬、長行馬，使臣、從人及下文字曳剌、解子人等，分例乘驛，使臣換馬處，正使臣支粥食、解渴酒，從人支粥。宿頓處，正使臣白米一升，麪一斤，酒一升。油鹽雜支鈔一十文。冬月一行日支碳五斤，十月一日爲始，正月三十日終住，支從人白米一升，麪一斤。……其一二居長人員，支頓宿分例：次人與粥飯，仍支給馬一匹，草一十二斤，料五升，十月爲始，至三月三十日終止，白米一升，麪一斤，油鹽雜用鈔一十文。[97]

> 宿頓處：正使臣白米一升，麵一斤，酒一升。肉一斤，油鹽雜支鈔：碳五斤，自十一月初一日爲始。至正月三十日住支。闊端赤不支酒肉，雜支鈔，白米一升，麵一斤。至元十五年，兵部呈准：除朝廷大官人並正蒙古使臣，及不食死肉官員，依例應付羊肉雞兒，其餘使臣，止應付豬肉。[98]

[95]《站赤》，國學文庫第二十八編，據東洋文庫影印永樂大典本重印，北平隆福寺街文殿園書莊印行，第 1 頁。

[96]《站赤》，第 2 頁。

[97]《站赤》，第 2～3 頁。

[98]《站赤・驛站》卷一，下冊第 124 頁。

只是元代使臣分爲兩等：正使和從人，因此，驛傳供食也隨之分爲兩個等次。有關元代制定驛館供食標準的情況，在《中書令耶律公神道碑》中得到了證實：

始諸王貴戚皆得自起驛馬，而使臣猥多，馬悉倒乏，則豪奪民馬以乘之，城郭道路，所至騷動。及其到館，則索要百端，供饋稍緩，輒被捶撻，館人不能堪。公奏給牌劄，仍定飲食分例，其弊始革。[99]

實際上，各使節沿途在驛館不按規定而過分索要飲食、馬匹的情況在《站赤》一書中還有記載：

一奏江南做官去來的一個漢兒人，說有江南行底使臣每，與豬肉魚兒鵝鴨吃不肯，只要羊肉吃。有那田地裏每一口羊用七八十兩買，有這般呵。教站赤生受的一般奏呵。若有豬肉呵與者，無豬肉呵，教與飯吃者。魚兒教廣也者，與魚吃者，無呵，休與者。羊肉雞鵝鴨等飛禽休與吃者。這一件事，並行省行台、宣慰司、各總管府按察司，諸衙門不得出馬劄子，差鋪馬行的兩件公事，一處疾忙行文字省諭將去，截日罷了者。聖旨了也。[100]

至元十九年六月，中書省奏：江南行的使臣每，與豬肉、魚兒、雞鵝鴨吃不肯，只要羊肉吃，有奉聖旨節該，若有豬肉呵，與者；無豬肉呵，交與飯吃者，魚兒敢廣也者，與魚吃者，無呵，休與者。羊肉鵝鴨雞等飛禽休與吃者。疾忙行文字省會將去。欽此。至元二十一年，通政院奏：打捕鷹的的忽都魯見在肉不肯，要吃活羊吃了。奉聖旨，節該，如今見在肉有呵與見在肉者，若見在肉與呵不吃的人每根底，水也休與者。欽此。[101]

照得至元二十五年十月二十三日，准中書省咨，奏准任回官員飲食馬匹草料……據在任已歿官員妻子，亦合依驗已死官員品級，依例應付飲食馬匹草料。[102]

且頻頻發生出使官員索要無度而拷打站赤人員的事：

至大元年九月十九日，有開讀聖旨使臣忽赤兀歹等，爲河東軍人勾當，將利津縣尹成克孝打傷身死，勾促忽赤兀歹等到官取問間，欽遇詔

[99] ［元］耶律楚材著、謝方點校《湛然居士文集》第 330 頁，中華書局，1986。
[100]《站赤》卷九，下冊第 88 頁。
[101]《站赤・驛站》卷一，第 125～126 頁。
[102]《站赤》卷九，下冊第 89 頁。

書釋放了當。又使臣五兒等二起到站，拷打官員，多要羊肉米麵鈔等物。[103]

延至明代，仍然維持了歷代宴請外來使節分爲三等分的傳統，但名稱發生了變化，稱爲上桌、中桌、下桌。雖然從洪武到嘉慶年間標準數次發生變化，但所謂“上桌”、“中桌”、“下桌”的稱謂沒有改變：

> 筵宴番夷土官桌面：洪武二十六年：每正一桌，果子五色，按酒五般，湯三品，小割正飯用羊。永樂元年：上桌：按酒五般，果子五般，燒煠五般，茶食湯三品，雙下大饅頭，羊肉、飯、酒七鍾；中桌：按酒、果子各四般，湯二品，雙下饅頭，牛馬羊肉，飯，酒五鍾。
>
> 天順元年：上桌：高頂茶食，雲子麻葉，大銀錠油酥八個，棒子骨二塊，鳳鶩一隻，小銀錠笑靨二楪，茶食果子按酒各五般（盤），米糕二楪，小饅頭三楪，菜四色，花頭二個，湯三品，大饅頭一分，羊背皮一個，添換小饅頭一楪，按酒一般（盤），茶食一楪，酒七鍾。中桌：寶粧茶食，雲子麻葉二楪，甘露餅四個，鮓魚二塊，大銀錠油酥八個，小銀錠笑靨二楪，果子按酒各五般（盤），菜四色，花頭二個，湯三品，馬肉飯一塊，大饅頭一分，添換小饅頭一楪，羊肉一楪，茶食一楪，酒七鍾。下桌：寶粧茶食，大銀錠油酥八個，煠魚二尾，果子按酒各四般（盤），菜四色，湯三品，馬肉飯二塊，大饅頭二分，酒七鍾。[104]

邊疆少數民族代表來京，人數較少無法按規定置辦標準宴飲時，亦根據實際情況作些變通，但上中下桌的稱謂不變。

> 弘治十年，令會同館宴待番人禮部屬官一員，光祿寺正官一員巡看，務要桌面豐腆，酒味眞正，宴畢，待宴大臣宣佈朝廷優待至意，回還之後，各守恭順，管束部落，毋得生事擾邊，自取滅亡。十七年又因貢使僅四員赴京，以人少難請。待宴官員奏准領宴，番夷人等朔望朝及見辭酒飯，上桌：按酒，用牛羊等肉共五楪，每楪生肉一觔八兩，茶食五楪，每楪一觔，果五楪，核桃、紅棗、榛子每楪一觔，膠棗、柿餅每楪一觔八兩。中桌：按酒，用牛羊肉四楪，每楪生肉一觔，茶食四楪，每楪十兩，果四楪，核桃、榛子、紅棗每楪十兩，膠棗十二兩，酒三鍾，湯飯各一椀。

[103]《站赤》卷九，下冊第 102 頁。
[104]《禮部志稿》卷三十九，景印文淵閣四庫全書，第 597-719～727 頁。

成化十一年，迤北使臣朝見，令中桌，按酒，每楪加四兩茶食，每楪加二兩果品，內核桃、榛子、紅棗各加二兩，膠棗一楪加四兩，餘同常例。

番夷人等領宴。嘉靖二十八年，番夷領宴，自各衛都指揮僉事並烏斯藏朶甘斯宣慰使司國師番僧進貢，値皇太子喪，題准領宴。隆慶元年朝鮮國差陪臣謝恩，加渴瓦寺達思蠻長官司法藏等六寺番僧各進貢到京，値世宗皇帝喪，俱免宴，禮部行文遼東都司並各該布政司，候其回還，各照宴例管待，令總兵等官待宴。[105]

其變化由早期的館舍等次，逐漸演變爲按客使的品階分等次，而吐魯番文書所反映的情況則是將客使分爲三個等次，按三等次供食，可視爲對早期兩種形式的綜合。契丹供食制度亦如之。到了明代，則以宴會的規格來體現等次，形象地稱爲上中下“桌”，以“桌”來分別高下，經歷了一個逐步完善、規整的歷程。需要說明的是，明代按照上中下桌來區分等次，這是對宴飲形式由分餐到合食的適應。既然明代已經流行合食制宴飲，客使供食形式必然要適合合食制度，因此，出現上中下桌的稱謂也就在情理之中了。

由上可知，敦煌文書中的上中下食料和吐魯番供食中的上人、中人和下人的供食制度由來已久，斷續的歷代史料說明，這不只是敦煌和高昌才有的特殊，而是中國歷代交通驛傳和宴賞制度之有機組成部分。它是中國封建社會身份等級的最基本表現。只是敦煌以食料等分來區別高下，吐魯番文書中以身份來定其供食標準。其珍貴之處，在於記錄了各等分的供應數量甚至供應方式。爲歷代驛傳供食和中央政府宴飲制度提供了最具體的史料。

五　題外的話

爲何要將使客的等級分爲三等，進而將食物乃至分配方式也分爲三等呢？ 食物等級上的區別並非食物本身所具有的屬性，而是人們在長期選擇食物過程中，根據原料、口味、數量多寡、加工的簡單或繁複等原因而形成的食物價值觀念，這種觀念在等級社會中，便被賦予了高下之別。這種高下之別又隨著身份等級的規定，被人爲地區分爲三等。

將事物的質和量區別爲三個等分，是中國古代一個古老、普遍的哲學命題。實際上是對事物程度的一種認識和把握。

縱觀中國古代史料，將事物分爲三等分出現很早，比比皆是：天地人謂之三才；“三元”爲上中下三局；策略有上中下，古代軍隊組成分爲上中下三軍（春秋時期晉

[105]同上。

國的軍隊分爲上軍、中軍、下軍），戰國時期賽馬分爲上棚、中棚、下棚；九品官人法實際是上中下品的進一步區分；唐代的考科也分爲上中下三等，皆此類也，不煩舉。因此，將食客分爲三等、進而將食物分爲三等以對等供應，也就在情理之中了。按今天之理解，食物之等次應有許多，之所以區別爲三等，應是沿襲這種將事物區分爲三等分的普遍觀念以及管理上的方便。

六　結語

由此可知，在麴氏統治時期的高昌和晚唐五代的敦煌，客館在爲客使等分配食物時，遵從著一個共同的原則：即將來客分爲三個等次，依等次供應食料。宴賞時，也按照客使以及官員品階大致區分爲三個等次，依等次供應不同的食物數量和內容。

敦煌的三等次中，主食料、酒供均有區別。高昌傳供食文書中的上人、中人、下人的供食主食料、肉食也有區別。

不僅客館、驛站的供食要區別等次供應，而且中央政府所舉辦的宴會設食料、設會料也沿襲著相同的供食原則。

這種將來客的宴飲設食規定爲三個等次的原則，來源甚早。早在先秦，就已經形成了較爲完備的供食制度，根據客使的官爵大小，按一定等次（先秦時已經有三等次）供應食物，以顯示地位尊卑大小，睡虎地秦簡的《傳食律》中就有明確反映。漢承秦制。張家山漢墓出土的漢簡也規定了按出使官員的職位之大小分等級供食。逮至唐代及以後，客館供食和宴飲仍然通行著這個等級制度。下迄元明，雖然食物的數量和品質都發生了變化，但仍然遵從著這個規定。

雖然敦煌的三等次主要反映的是食物的等次，而沒有顯示客使的等次，但我們有理由相信這種食物的等次，正來源於客使的等次。三等次原則下的食料在質和量上都有區別，是等級觀念在食物分配上的明顯反映。

食物等次分配製度也許在社會制度中屬於細微末節，但卻是分配制度的有機組成部份，它是等級觀念在飲食上的體現，又是政權與政權間、政府與來客間關係親疏的一種體現。對飲食品質和數量追求的無度和社會財富的有限，是一對永遠不可調和的矛盾。制定一定的標準來限制人們對無度的追求，就是用來調和這種矛盾、實行政府管理的有效方式，也是杜絕接待官員以此行私舞弊、謀取利益、維持政權的最基本制度之一，因此也是社會不可或缺的制度。時至今日，幾乎每個國家的各級政府，都要制定各種飲食標準，接待他們的客人。在中國，雖然已經沒有了“三等次”的說法，但各級政府仍然按照所接待官員職位的高低、權利的大小，來安排接待，也規定各級出差人員的“伙食補助”標準，有些甚至規定菜品的數量和盛食具的大小，可謂纖細入微，遠超古代，仍然延續著這個無法消除的法則。

（本文得到日本學術振興會 2007-2009 年度科學研究費特別研究員獎勵費“絲綢之路飲食文化研究”課題資助。在京都大學人文科學研究所“西陲發現中國中世寫本研究班”上發表時，高田時雄先生、王三慶先生及班員各位提出了寶貴意見，在此謹致謝意！）

（作者為蘭州商學院教授）

『敦煌寫本研究年報』第四號（2010.03）81-99 頁

唐宋時期敦煌土貢考

余　欣

一、導言

中國古代的貢獻制度起源甚早，《尚書・禹貢》云：“禹別九州，隨山浚川，任土作貢。”孔穎達正義曰：“九州之土，物産各異，任其土地所有，以定貢賦之差，既任其所有，亦因其肥瘠多少不同，制爲差品。……貢者，從下獻上之稱，謂以所出之穀，市其土地所生異物，獻其所有，謂之厥貢。”[1]關于“貢”之涵義，歷代學者多有辨析[2]。就我的理解，“貢”的意義大抵有以下二層：

其一，從實際的層面來看，“貢”雖與“賦”有別，但也是中央王朝財政收入的主要來源之一；　其二，從理念與政治效應的層面來看，“貢”具有禮儀上的功能，既是統治的合法性與有效性的體現，也是大一統的象徵。

“貢”的上述特性，在唐宋時期得到進一步強化。元和十二年（817）十二月戶部所上《請宣示申光蔡三州貢物奏》云：“淮西夷、虺蜴攸居，歷年貢賦不入，有司羞之。今則化被齊民，便為善地。”[3]黃正建引述此奏文，並發揮道：“換句話說，這些州應該或者必須貢這些物品。不貢就是夷狄就是虺蜴；貢了纔是齊民，纔表明朝廷的統治達到（或者恢復到）了這些區域。”[4]由此可見，“從下獻上”之義的土貢，雖然不是賦稅收入的大宗，但是因為其具有供帝室私用的性質，並且承載了特殊的政治意義，因而頗受中央與地方統治者的重視[5]。

---

[1]《尚書正義》，阮元校刻《十三經注疏》，北京：中華書局，影印本，1980 年，146 頁，上欄。

[2]詳參胡渭著，鄒逸麟整理《禹貢錐指》，上海：上海古籍出版社，1996 年，1-3 頁。

[3]“淮西夷虺蜴攸居”，《全唐文》卷九六五（北京：中華書局，1983 年，10022 頁）作“西”，與下連讀，則為“西夷”，《唐會要》卷五八《尚書省諸司》（上海：中華書局，1955 年，1012 頁）作“淮西”，句讀斷開，則可理解為淮西之地，夷與虺蜴攸居，雖一字之差，含義迥異。按，申、光、蔡三州均隸屬淮南西道節度使，並非西夷，憲宗元和十二年十月，李愬雪夜攻入蔡州，淮西之亂平定，三州重新納貢，故十二月戶部有此奏。因此，當作“淮西”為是。

[4]黃正建《試論唐代前期皇帝消費的某些側面——以〈通典〉卷六所記常貢為中心》，《唐研究》第六卷，北京：北京大學出版社，2000 年，174 頁。

[5]張衛東試圖從博弈論的角度進行闡釋，但分析有欠深入。參看張衛東《唐代中央與地方的博弈——以土貢為中心》，《江漢論壇》2007 年第 5 期，102-105 頁。

敦煌的土貢，藏經洞出土文獻和傳統史料中均有不少材料，然迄今為止未見有專論加以考察。敦煌，在唐前期祗是一個普通的下州，但是因為其在中西交通上的獨特地位，多有異物，從構建新博物學史的角度來看[6]，其貢獻之品目，頗有令人矚目之處，值得細緻考索，尤其是到了歸義軍時期，誠如榮新江教授所言："歸義軍在唐朝是一個邊遠的藩鎮，五代、宋初則成爲實際的外邦，這是歸義軍在中國歷史上的特性之一。"[7]與敦煌土貢有關的材料恰好集中于這一時期，因而還有可能通過土貢更為深刻地理解晚唐五代地方與中央的關係，這是別的州縣所不可能具有的珍貴價值。故筆者不揣譾陋，就部分重要資料和貢物略加考論，擬稍補其闕。

二、學術史

關于唐宋時期的土貢，較早進行較為系統的考論的是日比野丈夫。他以《新唐書・地理志》所載土貢為中心，與《六典》、《通典》、《元和郡縣志》等進行了比較研究，認為嚴格的天下府州貢獻制度，存在于開元天寶的盛世時期，《六典》所載整齊劃一的制度是否真正行用是有疑問的，所列土貢品目可能祗是理想化的標準，並未實行。實際的獻上品目著錄于《通典》。安史之亂後，原先的上計、貢獻等制度弛廢，德宗雖致力于恢復舊制，但尚不及開天之半。由于土貢是地方府州忠誠度的具體表現，故特為此後的中央所重[8]。日比野氏所論，對于分析敦煌的土貢，很有啟發。

[6]何謂新博物學史？ 詳細的闡述，非此小文所能容納。此處僅就筆者所倡導的博物學概念略加說明。依我的陋見，博物學並不等于十七世紀以後現代科學逐漸確立之後的 Natural History，也不等同于物質文化史（儘管兩者有交涉的部分）。我認爲在當下西文語境中，沒有能與傳統的博物學準確對應的概念和詞匯。簡而言之，博物學是指對于物以及物與人的關係的整體認知和體驗。作爲一門內涵豐富的認知系統、研究範式、實踐技能，在現代科學確立之前，博物學在傳統社會的知識體系和思想領域中一直占據著獨特而重要的地位。它既是古人觀察事物，瞭解世界，認識"他者與自我"，乃至貫注信仰、寄托情感的途徑，也是關于宇宙觀、自然觀與人生觀的書寫與表達的體現。博物學在傳統中國具有極爲深厚的傳統。所謂"一物不知，以爲深耻"，究天地萬象，察異域殊方，博觀省思，窮源竟委，以期明天下之道，乃中國士人千古不懈追求之境界。故博物之學，亦爲中國學術本源之一。這類文獻中蘊涵著極爲豐富的信息，非僅使人"多識于鳥獸草木之名"而已。另一方面，博物學並非祗是文人士大夫的雅趣，知識本身所具有實用性以及愉悅身心的功能，使一般的民衆同樣感到興致盎然。經由實踐、交往、繼承所獲得的博物之學的知識和技能，除了人際傳播之外，通過字書、醫方、類書、蒙書等方式擴散開來，然後這些知識和經驗逐漸沉澱爲常識。考察其在民衆中的傳播、滲透及影響，對于探索多面的古代中國的思想世界，頗具價值。換言之，博物學是構建古代中國的知識與信仰世界的基底性要素之一。對中國博物學史進行新的考索，可以增進對于傳統社會知識體系的成立史，關于自然、社會、物質的認識史，"異"（異域、異人、異物、異俗）的觀念史，思維方式發展史諸問題的理解。

[7]榮新江《歸義軍史研究——唐宋時期敦煌歷史考索》，上海：上海古籍出版社，1996 年，前言，2 頁。

[8]日比野丈夫《新唐書地理志の土貢について》，《東方學報》第 17 冊，1949 年，83-99 頁；收入氏著《中國歷史地理研究》，京都：同朋舍，1977 年，190-209 頁。

此後，曾我部靜雄也較為全面地檢討了唐代的貢獻制度，他認為唐令規定的貢獻物的價格不超過絹五十匹的制度，代宗時期崩壞，天子對積極進奉貢獻持歡迎的態度，于是地方官競為貢納，以求榮進左遷，由此給百姓帶來極大的痛苦[9]。王永興也論述了唐代土貢制的特點，並對《唐六典》卷三“戶部郎中員外郎”條、《通典》卷六《食貨典》六《賦稅》下、《元和郡縣圖志》、《貞元十道錄》、《新唐書・地理志》等五種文獻所記六次土貢資料的年代作了考定[10]。通論性的文章，還有張仁璽的《唐代土貢考略》，但發明不多[11]。

從賦役角度分析土貢與進奉的，有張澤咸的《唐代賦役史草》，資料較為翔實[12]。李錦繡的討論偏重于財政史的角度，她對唐前期的七種貢獻形式：常貢、雜貢、別索貢、訪求貢、折造貢，額外獻、絕域貢等進行了考察，並對縣在常貢中的作用，羈靡州貢和外蕃貢，納貢的官吏，貢獻的入庫狀況諸問題做了分析[13]。大津透在研究唐代的課役制與差科制的同時，在附筆中討論了貢獻問題。他指出《新唐書・地理志》列舉了各州的土貢品目，表明貢獻在理念上是作為與賦（課役）相對而存在的具有重大意義的制度。但又沿襲了日比野氏所論貢物“祇是禮儀性地陳列在式場上，不具有實用目的”[14]。

貢物方面，宮薗和禧對包括藥物在內的諸多貢品進行了較爲系統的梳理[15]。黃正建則分析了《通典》卷六所載的貢物的種類和數量及其可能的實用目的，認為《通典》的記載來源于原始的《式》，雖然具有一些象徵意義或禮儀意義，但同時也具有實用性，特別是在制定貢物的當初，這種實用性還佔有相當大的比重。在某種程度上，這些貢物如實地反映了某一時期皇帝在衣、食、住、行等方面的需求或消費傾向的一些側面，因而是十分難得的研究唐代社會消費生活的資料[16]。黃正建氏此文角度新穎，論證綿密，有方法論上的意義。

岩本篤志獨闢蹊徑，揭示了《新修本草》的編纂與唐代土貢之間的關係。他認爲唐朝的醫事（醫書的編纂、醫師的派遣）是作爲皇帝救濟萬民的恩賜，本草書中四方進奉的貢納物（包含藥物）的陳列，其實是禮儀秩序空間中皇帝的位置在典籍中體現。換言之，在唐帝國的政治論理中，“醫療之法”是“禮樂、郊廟、社稷之事”的

[9]曾我部靜雄《中國社會經濟史の研究》第七章“唐の貢獻制度》，東京：吉川弘文館，1976 年，404-435 頁。

[10]王永興《唐代土貢資料繫年——唐代土貢研究之一》，《北京大學學報》1982 年第 4 期，60-65、轉 59 頁。

[11]張仁璽《唐代土貢考略》，《山東師大學報》（社會科學版）1992 年第 4 期，40-43 頁，轉 46 頁。

[12]張澤咸《唐五代賦役史草》，北京：中華書局，1986 年，237-254 頁。

[13]李錦繡《唐代財政史稿》上卷，北京：北京大學出版社，1995 年，626-644 頁。

[14]大津透《課役制と差科制——課・不課・課戶にふれて》，池田溫編《中國禮法と日本律令制》，東京：東方書店，1992 年，269-272 頁。

[15]宮薗和禧《唐代貢獻制の研究》，福岡：九州共立大學地域經濟研究所，1988 年。

[16]黃正建《試論唐代前期皇帝消費的某些側面》，173-211 頁。

一部分，是權力的表演裝置[17]。他還通過對中國國家圖書館藏敦煌寫本《新修本草》殘片的考察，對太常寺太醫署對藥物的調集的原則與土貢之間的關係，右監門長史的職掌與土貢及《新修本草》署名之間的關係等作了分析[18]，令人耳目一新。此外，石野智大對明抄本《天聖令》所收《唐令・醫疾令》中有關藥材採取與納入令文的解說，也有參考價值[19]。

至于敦煌的土貢，如前所述，管見所及，未有專論。但姜伯勤的大著《敦煌吐魯番文書與絲綢之路》，曾簡略地提及一些作為貢品的香藥、珠寶和波斯錦[20]。鄭炳林在考述晚唐五代敦煌貿易市場的外來商品時，也涉及到部分貢物[21]。趙健雄對《天寶十道錄》中諸州土貢藥物與《新唐書・地理志》及《名醫別錄》等本草書做過對照研究，但論述甚簡[22]。

三、敦煌文獻中的土貢資料

1、敦博 076《天寶十道錄》

敦煌文獻中直接記載土貢的資料，祇有 P.2511《諸道山河地名要略》[23]、P.2522《貞元十道錄》[24]、敦博 076《天寶十道錄》三種[25]。其中，真正記錄了敦煌自身貢品的，祇有《天寶十道錄》。

敦博 076 卷子，首闕尾略殘，麻紙，共存七紙，長 301.9cm，高 31cm，每紙寬 45cm，紙墨精良，書法美觀。正面為地志文獻，背面為《紫微宮星圖》、《占雲氣書》。地志，存 160 行，內容為隴右道、關內、河東、淮南、嶺南五道的州府縣簡志。起于隴右道成州，止于嶺南道澄州，現存一百三十七州、府，六百一十四縣[26]。業師榮新江教授將其定名為《天寶十道錄》[27]，並對本件文獻的價值以及前人的研究成果作了

[17]岩本篤志《唐朝の醫事政策と『新修本草』——李盛鐸將來本序例を手がかりとして》，《史學雜誌》第 114 編第 6 號, 2005 年，1046-1070 頁。

[18]岩本篤志《唐『新修本草』編纂と「土貢」——中國國家圖書館藏斷片考》，《東洋學報》第 90 卷第 2 號，2008 年，113-143 頁。

[19]石野智大《唐令中にみえる藥材の採取・納入過程について——天聖醫疾令所收唐令の檢討》，《法史學研究會會報》第 12 號，2007 年，15-28 頁。

[20]姜伯勤《敦煌吐魯番文書與絲綢之路》，北京：文物出版社，1994 年，65-66、78 頁。

[21]鄭炳林《晚唐五代敦煌貿易市場外來商品輯考》，《中華文史論叢》第 63 輯，上海：上海古籍出版社，2000 年，1-39 頁。

[22]趙健雄《敦煌遺書地志殘卷中土貢藥物淺析》，《甘肅中醫》1990 年第 1 期，27-29 頁。

[23]錄文可參鄭炳林《敦煌地理文書匯輯校注》，蘭州：甘肅人民出版社，1989 年，178-181 頁。

[24]錄文可參鄭炳林《敦煌地理文書匯輯校注》，144 頁。

[25]圖版見甘肅藏敦煌文獻編委會、甘肅人民出版社、甘肅省文物局編《甘肅藏敦煌文獻》第六卷，蘭州：甘肅人民出版社，1999 年，224-227 頁。

[26]以上描述，據《甘肅藏敦煌文獻》解題，366 頁。

[27]《甘肅藏敦煌文獻》擬題為《地志》。

詳細的評介[28]。

關于其土貢部分，榮新江教授指出：“本文書反映了開元末年的土貢情況，內容與《六典》與《元和志》所記開元貢比較接近，但並不完全相符，其中如安息都護府所貢白練、水磑，晉州之紫參、鐵器、貲布，都為諸書所不載，其他還有不少名稱相異者，可資校勘。土貢資料不僅是唐代租稅制度中的重要一項，也是人們今天研究各地物產資源的寶貴材料。”[29]但因並非該文主旨，榮先生沒有詳加論列。

本件文獻內容較為複雜，其性質及定名，至今仍有異議，此處不遑詳考，僅錄其敦煌部分文字如下：

	燉	京二千七百六十都四		燉	十二	壽	一
下	沙	千二百九十貢碁	上			下	
	煌	本八百八十		煌	七百七十	昌	二百五十

首字“下”，朱筆大字（此用黑體標示），爲州府等地，沙州爲下州；次“燉煌”二字，墨筆橫書，為郡名；次“沙”字，墨筆大字，為州名；小字注“京二千七百六十都四千二百九十”分別指的是距離西京長安和東都洛陽的里程，“貢碁”即為當州土貢，“本八百八十”為公廨本錢數；次朱筆“上”字，為敦煌縣之等第；縣名“燉煌”二字，墨筆大字；小字注“十二”，為下轄鄉數，“七百七十”為敦煌縣公廨本錢數；次朱筆“下”字，為壽昌縣之等第；壽昌縣名亦為墨筆大字；同理，“一”為壽昌縣所轄鄉數，“二百五十”為壽昌縣公廨本錢數。

我之所以對本件文書的書寫形態及敦煌此條內容進行較為詳細的介紹，想說明三點：

一、 本件文書的編修體例謹嚴，不論是否確為十道圖錄，其著錄體例和資料來源出自官府，應該是一件官文書，想必是沒有疑義的。因此本文書所記載的內容應當具有權威性。

二、 由于編纂體例所限，每條所能著錄事項非常有限，祗有三項而已，而其中便有土貢，表明這一項是不可或缺的，並且在距離西京、東都的的里程數之後，緊接著便是土貢，然後纔是公廨本錢數，表明土貢是一個州非常重要的經濟資料類目，其地位遠勝其他。

三、 在土貢中，所列的唯一一種貢物是碁，可見這是當時敦煌最有名的物產。

[28]榮新江《敦煌本〈天寶十道錄〉及其價值》，《九州》第二輯，北京：商務印書館，1999 年，116-129 頁。

[29]榮新江《敦煌本〈天寶十道錄〉及其價值》，125 頁。

2、P.3547《沙州上都進奏院上本使狀》

1. 上都進奏院 狀上
2. 　當道賀正專使押衙陰信均等，押進奉表函一封，
3. 　玉一團，羚羊角一角，犛牛尾一角。十二月廿七日到院，
4. 　廿九日進奉訖。謹具專使上下共廿九人到院安下
5. 　及于靈州勒住人數，分析如下[30]。

（下略）

這是乾符五年（877）張淮深遣使求取旌節的重要文書[31]，因為涉及到進奏院，備受學界關注。中央政府設立進奏院，本意是從禮儀秩序出發，而藩鎮之意圖則賦予其情報仲介機能[32]。由沙州進奏院行事，可見中央與藩鎮關係之微妙。

3、P.4638《權知歸義軍節度兵馬留後守沙州長史曹仁貴狀》以及相關文書

本件同樣是歸義軍史上一件著名的文書，已經有很多學者做過考證，但多側重于政治史角度，而對于貢物本身以及朝貢使問題，留意者甚少。先校錄如下：

1. 　玉一團重壹斤壹兩　羚羊角伍對　硇砂伍斤
2. 伏 以 磧 西 遐 塞，戎 境
3. 枯 荒；地 不 產 珎，獻 無
4. 奇 玩。前 物 等 並 是 殊 方
5. 所 出，透 狼 山 遠 屆 燉 煌；
6. 異 域 通 儀，涉 翰 海 來
7. 還 沙 府。輒 將 陳
8. 獻，用 表 輕 懷。干 黷
9. 鴻 私，伏 乞
10. 檢 納，謹 狀。
11. 　　權知歸義軍節度兵馬留後守沙州長史銀青光祿大夫檢校吏部尚書兼御史大夫上柱國曹仁貴狀上

（沙州節度使印）[33]

---

[30]唐耕耦等《敦煌社會經濟文獻真跡釋錄》第 4 輯，北京：全國圖書館縮微複製中心，1990 年，367 頁。

[31]此文書之年代依張國剛之考證，參看張國剛《兩份敦煌“進奏院狀”文書的研究》，《學術月刊》1986 年第 7 期，59-61 頁。

[32]福井信昭《唐代の進奏院——唐後半期“藩鎮體制”の一側面》，《東方學》第 105 輯，2003 年，47-62 頁。

[33]唐耕耦等《敦煌社會經濟文獻真跡釋錄》第 4 輯，387 頁。

同卷另一件《某年八月十五日權知歸義軍節度兵馬留後守沙州長史曹仁貴狀》：

1. 仲 秋 漸 涼，伏 惟
2. 令 公 尊 體 起 居 萬 福。即 日 仁貴
3. 蒙 恩，未 由 拜 伏，下 情 倍 增
4. 瞻 戀，伏 惟
5. 鑒 察，謹 因
6. 朝 貢 使 往 奉 狀 不 宣 謹 狀
7. 八月十五日權知歸義軍節度兵馬留後守沙州長史銀青光祿大夫檢校吏部尚書兼御史大夫上柱國曹仁貴狀上

（沙州節度使印）[34]

與此相關的另一件文書為 P.2945《權知歸義軍節度兵馬留后使狀稿》中的《涼州書》，節引如下：

> 今者使臣回轍，當軍兼差使人，路次經過大蕃，豈敢輒無狀達。前載得可汗旨教，始差朝貢專人。不蒙僕射恩澤，中路被嗢末剽劫。今乃共使臣同往，望僕射以作周旋，得達前程，往迴平善，此之恩德，何敢忘焉[35]。

P.2945《權知歸義軍節度兵馬留後使狀稿》收錄書狀九件，已由李正宇考證爲曹議金于後梁貞明四年 (918) 所寫書信抄本[36]。《涼州書》所云“前載”，應即貞明二年（916）年。又，《八月十五日曹仁貴狀》中之“令公”，當爲朔方軍節度使韓洙。《通鑑》卷二六九乾化四年（914）條：“五月，朔方軍節度使兼中書令潁川王韓遜卒，軍中推其子洙爲留後。癸丑，詔以洙爲節度使。”韓洙卒于後唐天成三年（928），在任十餘年，沙州、靈州關係始終頗爲緊密。在前人基礎上，通盤考察諸件文書，相關史事已可基本辨清。簡言之，議金以孤軍絕漠，磧西四寇，思交結強藩，貢使中朝，徐圖保境安民之良策。貞明二年秋八月十五日，議金因與甘州結爲姻親，故得可汗旨教，備玉團、羚羊角、硇沙等方物，首次遣使入貢中原朝廷，且修書致靈州朔方軍節度使韓洙，以期引薦入朝。未料使者進至涼州，爲嗢末剽劫，不達而還。入貢之事未果，乃復致書靈州節帥韓洙，專使送達，請求周旋，護祐使者入京朝貢，往來平善，以得天朝指撝[37]。文書中鈐有官印，表明為上書朝廷之正本。蓋因為嗢末所劫，未能送達，乃由專使殘部攜迴沙州。

[34]唐耕耦等《敦煌社會經濟文獻真跡釋錄》第 4 輯，388 頁。

[35]唐耕耦等《敦煌社會經濟文獻真跡釋錄》第 5 輯，北京：全國圖書館縮微複製中心，1990 年，329 頁。

[36]李正宇《曹仁貴歸奉後樑的一組新資料》，《魏晉南北朝隋唐史資料》第 11 期《唐長孺教授八十大壽紀念專輯》，武漢大學出版社，1991 年，274-281 頁。

[37]筆者與榮新江教授合著《沙州歸義軍朝野系年錄》稿，饒宗頤主編“補資治通鑑史料長編稿系列”之一，臺北新文豐出版公司即刊。

其中值得注意的是關于朝貢使問題。文書中“朝貢使”、“朝貢專人”屢見，一方面說明歸義軍對朝貢之事極為重視，專設“朝貢使”一職以重其事，另一方面恐怕也是朝集制崩壞，朝集使爲朝貢使取代所導致的。唐代前期，各州府每年向朝廷進獻的土貢由朝集使押領至京，並由使團中的白直承擔運送之職。安史之亂後，朝集制逐漸弛廢，諸州貢物一度由考典押領入京[38]。朝貢使應該是歸義軍專門應對這種形勢而設，這是沒有疑點的。問題在于，是否有朝貢使之印。前件後款銜名及後件後款時間上所鈐之官印，印文相同，《沙州文錄》著為“沙州節度使印”，李正宇云“余據縮微膠卷審視，字雖難識，但亦為九字，三字一行，式同 P.3239 所鈐印，揆之印文亦同為‘沙州觀察處置使之印’。”[39]唐耕耦注稱“此件鈐有沙州朝貢使印”。若果為“沙州朝貢使印”，則表明沙州為此次朝貢，不僅設立朝貢專使，並且特為之鑄印。無疑為歸義軍與中原政治關係史和職官研究的驚人發現。然據 IDP 彩色圖版，雖不甚清晰，細辨印文，並非如李正宇所云九字，而是六字，故絕非“沙州觀察處置使之印”。至于所謂“朝貢使印”，乍看似乎有點象，但度之以理，曹仁貴的押署之上不應是此印。尋檢森安孝夫大作，此印早已辨明，乃“沙州節度使印”[40]。蓋“節度”與“朝貢”二字篆書有些近似，故唐耕耦望文生義，識作“朝貢使印”。

4、S.4398《天福十四年（949）五月新授歸義軍節度觀察留後曹元忠獻慱砂牒》

1. 新授歸義軍節度觀察留後光祿大夫檢校司空兼御史大夫譙郡開國男食邑三百戶曹元忠
2. 硇砂壹拾斤。
3. 右件砂，誠非異玩，實愧珍纖。冒瀆
4. 台嚴，無任戰懼之至。謹差步軍
5. 教練使兼御史中丞梁再通等，謹
6. 隨狀
7. 獻，到望俯賜
8. 容納。謹錄狀上。
9. 牒件狀如前，謹牒。
10. 天福十四年五月 日新授歸義軍節度觀察留後光祿大夫檢校司空兼御史大夫譙郡開國男食邑三百戶曹元忠牒。

---

[38]雷聞《隋唐朝集制度研究——兼論其與漢上計制之異同》，《唐研究》第七卷，北京：北京大學出版社，2001 年，289-310 頁。

[39]李正宇《曹仁貴名實論——曹氏歸義軍創始及附梁史探》，《第二屆敦煌學國際研討會論文集》，臺北：漢學研究中心，1991 年，552 頁。

[40]森安孝夫《河西歸義軍節度使の朱印とその編年》，《内陸アジア言語の研究》XV，中央ユーラシア學研究會，2000 年，17-18 頁。

（歸義軍節度使之印）[41]

本件為曹元忠遣步軍教練使梁再通入貢于後漢的牒文。開運四年七月以前，曹元忠在沙州已從僕射、司徒、太保，自稱到太傅一級，但這些稱號並未得到中原王朝承認，本件文書中，元忠稱號又降至司空，當事出有因。文書鈐“歸義軍節度使之印”，乃曹元忠進貢時所寫正式公文，元忠自稱爲歸義軍節度留後、司空、開國男，結銜較同年同月之 P.4515 等《金剛般若波羅蜜經》刻本題記及稍晚 S.518《建窟檐記》節度使、太傅、開國侯要低得多[42]，據“新授”二字，新結銜是中原王朝剛剛頒賜。按歸義軍以往之慣例，元忠已稱太傅，自然不會接受低數級之司空銜。因此，牒文中元忠之具銜，不過是上書朝廷時一種策略，並不代表沙州實情。此次曹元忠進貢的物品祗有一種硇砂，但數量已從 P.4638 的五斤增加為十斤。

四、貢物雜考

弄清楚上述文書的內容和背景之後，再來看其中的貢物。

1、碁子

先對敦煌貢碁的相關資料及其文化內涵略加考證。《唐六典》卷三“戶部郎中員外郎”中關于隴右道的記載，是下文經常要引述的，為行文方便，先具引如下：

> 六曰隴右道，古雍、梁二州之境，今秦、渭、成、武、洮、岷、疊、宕、河、蘭、鄯、廓、已上隴右。凉、甘、肅、瓜、沙、伊、西、北庭、安西，已上河西。凡二十有一州焉。其秦、凉、鄯、洮、北庭、安西、甘、岷又管羈縻州。東接秦州，西逾流沙，南連蜀及吐蕃，北界朔漠。流沙在沙州已北，連延數千里。其名山有秦嶺、隴坻、西傾，朱圉、積石、合黎、崆峒、三危、鳥鼠同穴。秦嶺在秦州上邦縣，隴坻在清水縣，西傾在洮州之西南，朱圉在秦州伏羌縣，積石在河州枹罕縣，合黎在甘州張掖縣，崆峒在肅州福祿縣，三危在沙州燉煌縣，鳥鼠同穴在渭州渭源縣。其大川則有洮水、弱水、羌水，洮水出西羌中，歷岷、蘭二州界入河；弱水在甘州删丹縣；羌水歷宕、武、文三州之界。河瀆及休屠之澤在焉。河水歷廓、河、鄯、蘭等州界，休屠澤在凉州界。厥賦布、麻。厥貢麩金、礪石、碁石、蜜蠟、蠟燭、毛氎、麝香、白氎及鳥獸之角、羽毛、皮革。廓、宕二州貢麩金，宕州散金、麝香，沙州碁子，肅州礪石，成州、武州蠟燭，洮州毛氎，凉州氎布，甘、肅、瓜、凉等州野馬皮，西州白氎，瓜州吉莫皮，伊州陰牙角、胡桐律，

[41]唐耕耦等《敦煌社會經濟文獻真跡釋錄》第 4 輯，398 頁。

[42]《金剛經》刻本題記“弟子歸義軍節度使特進檢校太傅兼御史大夫譙郡開國侯曹元忠普施受持，天福十五年己酉歲五月十五日記。”

鄯州牸羊角、野馬皮，岷、秦二州龍鬚席、犛牛尾、雕翎，秦州芎藭，蕭州肉蓯蓉、栢脉根，瓜州草豉子，北庭州速霍角、陰牙角、阿魏截根，安西緋氎、硇砂、陰牙角、氍毹，甘、沙、渭、河、蘭、疊等州麝香。遠夷則控西域胡、戎之貢獻焉[43]。

此處表述不是很明確，正文作“碁石”，似乎所貢之物與肅州的礪石一樣，祗是質地特殊的石料。但注中作“碁子”，又似乎是已經制作完成的成品。而《天寶十道錄》所載，祗說“貢碁”，亦未明言是碁石還是碁子。如王永興所考，《唐六典》所載的開元貢乃開元二十五年貢[44]，敦煌所出《天寶十道錄》的編成時間，則如榮新江所考，應在天寶元年，兩者的年代非常接近，可以互相印證。由此可見，《六典》所載，未必盡為虛文。

《通典》卷六《食貨典》六《賦稅》下記：

敦煌郡貢碁子二十具、石膏。今沙州[45]。

此條雖年代較晚，但有明確的數量，因而更有價值。據此我們可以知道所謂“貢碁”應是全副的碁子，數量為二十具。

碁子乃是唐代敦煌的名物，有出土文物為證。1980 年，敦煌市博物館在壽昌古城址北門處，發掘出土了一批碁子，並有大量的半成品和毛坯。共 66 枚，其中黑色 41 枚，白色 25 枚，多為花崗石磨制，少數為玉石質地，磨制精良，外形美觀。碁子呈圓餅形，中間兩面突出，中圓直徑 1.2cm，中厚 0.75cm，重 12 克，可知作為常貢的碁子的主要產地即壽昌縣，出土地有可能是當時專門制造碁子的作坊[46]。

此外，漢懸泉置正北九公里處，發現一處古城，因位于古泉水出露帶上，昔日積水成泊，當地稱為甜澇壩，故此遺址被命名為甜澇壩古城。在城中采集到灰陶罐、鐵箭頭、銅飾件、石紡輪、陶紡輪、開元天寶、石磨、碁子等，均為唐代遺物，證明該城為唐代城址，今陳列于敦煌市博物館。李并成推測該城即唐懸泉驛址[47]。若此論不誤，則出土的碁子，有可能是當時驛站官兵平日休閑消遣之物。

在南湖破城（即古壽昌縣城）與山水溝之間的古綠洲，散佈著大量城垣和遺物，多為漢唐時期的遺存，李并成稱之為“東古董灘”。其間散落著大小不等的卵石，直徑多為 10-30 厘米，表面較光滑，當為山洪暴發時攜來。李并成認為，壽昌縣所出碁子，即唐代沙州土貢碁子，即應取料于此種卵石[48]。

---

[43]李林甫等撰《唐六典》，陳仲夫點校，北京：中華書局，1992 年，68-69 頁。

[44]前揭王永興《唐代土貢資料繫年》，62 頁。

[45]杜祐《通典》，王文楚等點校，北京：中華書局，1988 年，119 頁。

[46]譚蟬雪撰“壽昌圍棋子”辭條，季羨林主編《敦煌學大辭典》，上海：上海辭書出版社，1998 年，598-599 頁；李重申《敦煌古代體育文化》，蘭州：甘肅人民出版社，2000 年，102 頁。

[47]李并成《瓜沙二州間一塊消失了的綠洲》，《敦煌研究》1994 年第 3 期，75 頁。

[48]李并成《古陽關下的又一處“古董灘”》，《敦煌研究》1999 年第 4 期，92-93 頁。

敦煌碁子之所以享有盛名，成為常貢貢品，除了石料質佳，制作精良外。恐怕還有文化心理上的因素。魏晉以來，因中原多亂，敦煌成為文化薈萃之地，許多著名文士出自敦煌或移居敦煌。作為文人雅文化一部分的棋藝，必然隨之繁榮起來[49]。藏經洞所出《碁經》為中國最早圍棋理論著作[50]，絕非偶然，而是敦煌棋道盛行的表徵。此外，壁畫中也保留了一些珍貴的弈棋場景。莫高窟第 61 窟（五代）西壁“佛傳故事”中繪有太子弈棋圖。榆林窟第 32 窟（五代）北壁和莫高窟第 454 窟（宋代）《維摩經變》，均繪有二人對弈圖，棋盤和棋子都清晰可見，情景生動[51]。

2、玉

玉團、羚羊角、硇沙等物，均不見于《唐六典》、《通典》等所列瓜、沙二州的厥貢之列，表明非常貢之物，而當時的時勢，亦是歸義軍試圖打通與中原多年的隔絕，顯示忠誠，以圖自固，性質有類外蕃入朝，而非州縣常貢，若以朝貢的種類區分，可劃入絕域貢。故所貢之物，亦如曹議金狀中所言“並是殊方所出，透狼山遠屆燉煌；異域通儀，涉翰海來還沙府”，而非“當土所出”。

此次進貢，與乾符四年張淮深所遣賀正專使所進貢之物，大同小異。玉一團完全相同，羚羊角則由一角加至五對，犛牛尾一角則由硇砂伍斤代替。

由此可見，曹議金向朝廷所進奉的玉團等物，與前任節度使類似，主要還是象徵意義，單論物品價值，似乎不是很高。原因有可能是以下幾種：

一、蕭規曹隨。曹議金初掌歸義軍，制度上恐怕承襲的成分較多，對于向朝廷進貢的品目和規格並沒有作太大的變革；

二、投石問路 。作為曹議金掌權後的第一次進貢，帶有試探的意思，能否安全送達存有疑慮，再者沙州從自身利益考慮，或許還有所保留，所以選的物品不是最上等的；

三、財政拮據。在曹氏歸義軍初期，因為轄地、戶口有限，可能賦稅收入上還不是很寬裕，財力上難以承擔奇珍異寶的進奉。

玉一團，注明重量為壹斤壹兩。敦煌不產玉，一般來說，學者認為敦煌的玉及玉器多半出自于闐。敦煌與于闐之間的玉石貿易由來已久，既是于闐、歸義軍、甘州迴鶻等周邊政權通使互贈的常見信物，也是向朝廷進貢的主要珍獻之一。這一點

[49]此點承高啟安教授惠示，謹致謝忱！

[50]相關研究論著甚多，全文錄文並作了較爲系統的研究的專著，參看成恩元《敦煌棋經箋證》，成都：蜀蓉棋藝出版社，1990 年。

[51]譚蟬雪撰“圍棋”辭條，季羨林主編《敦煌學大辭典》，598 頁；李重申《敦煌古代體育文化》，89 頁。

鄭炳林已有詳考，毋庸贅述[52]。在其基礎上，我再作一些補充。

首先是此玉之價值。P.2826《于闐王賜張淮深札》云：“白玉一團。賜沙州節度使男令公，汝宜收領，勿怪輕尠，候大般次，別有信物，汝知。”[53]從此札語氣來看，並非自謙之辭，這表明，禮物僅僅是一團玉，對普通人而言，或許價值不菲，但若從兩地官方關係考量，並不算很高，所以于闐王要反複解釋。在 P.2992《長興二年歸義軍節度使曹議金致甘州順化可汗書》中，曹議金贈送給順化可汗的禮品有：“上好燕脂表玉境一團，重捌斤，白繡綾伍疋，安西緤兩疋，立機細緤拾捌疋，官布六十疋”[54]。文中“境”當校作“鏡”，次團玉鏡不僅寫明質地為上好燕脂玉，即于闐羊脂玉，還寫明重量達八斤，等級和重量似乎都比前次貢物要高得多。因此，即便這塊重壹斤壹兩的玉團質地如何上乘，恐怕也談不上稀世奇珍。

為免行文冗長，謹將史志及敦煌文獻中貢玉的記錄列表如下：

品名及數量	進貢時間	遣使者	出處	備注
玉一團	乾符四年（877）十二月	張淮深	P.3547《乾符五年沙州進奏院上本使狀》	遣賀正專使進奉
玉一團	貞明二年（916）八月	曹議金	P.4638《權知歸義軍節度兵馬留後守沙州長史曹仁貴獻物狀》	重壹斤壹兩，遣朝貢使進奉，未達
玉三團	同光二年（924）四月	曹議金	《舊五代史》卷一三八《吐蕃傳》；《册府元龜》卷九七二《外臣部・朝貢五》；《新五代史》卷七四《四夷附錄》	
玉鞍馬二、玉團、散玉、鞍轡、鉸具、白玉符、白玉獅子指環	同光四年（926）正月	曹議金	《新五代史》卷五《唐莊宗紀》；《册府元龜》卷一六九《帝王部・納貢獻》	白玉符、白玉獅子指環係進奉皇后
玉一團	長興元年（930）十二月	曹議金	《册府元龜》卷九七二《外臣部・朝貢五》；《舊五代史》卷一三八《迴鶻傳》；《新五代史》卷六《唐明宗紀》	
玉三十六團	長興三年（932）	曹議金	《册府元龜》卷九七二《外臣部・朝貢五》	
玉盆	太平興國三年（978）	曹延祿	《宋會要・蕃夷七》引《玉海》	
玉器	太平興國五年（980）閏三月	曹延祿	《宋會要・蕃夷五》；《宋會要・蕃夷七》；《續資治通鑑長編》卷二一	
美玉	咸平二年（999）二月	曹延祿	《宋會要・蕃夷五》	

[52]鄭炳林《晚唐五代敦煌貿易市場外來商品輯考》，406-408 頁。
[53]唐耕耦等《敦煌社會經濟文獻真跡釋錄》第 4 輯，365 頁。
[54]唐耕耦等《敦煌社會經濟文獻真跡釋錄》第 4 輯，395-396 頁。

良玉	景　元年(1004)四月	曹宗壽	《宋會要・蕃夷五》;《續資治通鑑長編》卷五六	
美玉	統和二十四年(1006)八月	曹宗壽	《遼史》卷一四《聖宗紀五》;《遼史》卷七十《屬國表》	首次入遼進貢
玉團	景　四年(1007)四月	曹宗壽	《宋會要・蕃夷五》;《續資治通鑑長編》卷六五	
玉團	天聖元年(1023)閏九月二十三日	曹賢順	《宋會要・蕃夷五》;《皇朝事實類苑》卷七五引《東齋記事》;《宋史》卷四九〇《外國六・沙州》	
玉、玉板、玉、玉鞦轡	天聖八年(1030)十一月十五日	不明	《宋會要・蕃夷七》	
珠玉	天聖九年(1031)年正月十八日	不明	《宋會要・蕃夷七》	

對上表略作分析，不難得出以下結論：

一、 自歸義軍興起直至覆亡，玉一直是進貢的主要物品。

二、 除了玉團以外，還有大量精美的玉等制飾品、馬具、禮儀與生活器具，如玉鞍馬、散玉鞍轡　具、白玉符、白玉獅子指環、玉盆、玉板等，表明進貢的物品雖然不一定真的為帝室所服用，但如黃正建所言，至少在進貢的初衷上，帶有為帝室生活的實際消費服務而獻納的傾向。

三、 進貢的數量，在曹議金執政晚期有不斷增加的趨勢，到了長興三年（932）進貢後唐的玉達到創紀錄玉三十六團，還有馬七十五疋，遠遠超過一般土貢的常規，恐怕除了政治上的需要之外，還有經濟上的因素，也就是說，已發展為朝貢貿易。

3、羚羊角

再來看羚羊角。據《通典》的記載，以羚羊角作為土貢的著名產地是武都郡和江油郡[55]，本與敦煌無涉，但敦煌卻數度納貢此物。除了 P.4838 所記錄的這次外，史志中還有如下記載：

> 同光二年四月，曹議金遣使後唐，進玉三團、砂、羚羊角、波斯錦、茸褐、白氎、生黃、金星礬等[56]。

按，西行求法僧智嚴于本年三月初來沙州，準備西行。歸義軍四月便遣使臣入貢。可以想見，沙州使人之進發是智嚴西來所致。

又，同光四年正月，曹議金復遣使入唐，謝賜旌節官誥，進玉鞍馬二、玉團、硇砂、散玉、鞍轡鉸具、安西白氎、胡錦、雄黃、波斯國紅地松樹毦褐、胡桐淚、金星

[55]杜祐《通典》，王文楚等點校本，119、127 頁。

[56]《册府元龜》卷九七二《外臣部・朝貢五》，據明崇禎初印本等影印本，北京：中華書局，1960 年，11420 頁。

礬、大鵬砂。二月，又進和市馬百匹、羚羊角、硇砂、牦牛尾。又進皇后白玉符、金青符、白玉獅子指環、金剛杵。瓜州刺史慕容歸盈貢馬[57]。

按，此番携有大批珍寶、商貨之沙州使團，甘州迴鶻並未留難，亦可見歸義軍大勝甘州迴鶻非虛。議金征服甘州後即刻遣兩般携有大量奇珍異材使團前往中原，表明位于絲路要衝之沙州歸義軍政權，亟望與中原王朝貿易，其出兵甘州，尚具爭奪絲路中轉商貿權之意圖。又，郭鋒云，將瓜沙區別對待，無非是中原王朝欲增統州數目以示人，不能視爲瓜州慕容歸盈已成獨立政權[58]。可參。

此外，羚羊角也是迴鶻可汗經常進貢的物品。例如，長興五年（934）正月，迴鶻可汗仁美遣使献故可汗仁裕遺留貢物、鞍馬器械；仁美献馬、玉團、玉秋轡、硇砂、羚羊角、波斯宝緤、玉帶[59]。

乾祐元年五月迴鶻可汗入貢，《冊府元龜》明確記為“羚羊角、硇砂諸藥”[60]。羚羊角的用途，是作為藥品，應無疑義。據現代動物分類學和生藥學，羚羊角為牛科動物賽加羚羊（拉丁名 Saiga tatarica Linnaeus）的角，曬干制得。羚羊在中國主要分佈于新疆北部，敦煌不產羚羊。進貢的羚羊角，應當是通過與西域的貿易獲得，其原產地可能為新疆或南西伯利亞草原。關于羚羊角的來源，針對陶弘景的說法，《新修本草》曾為之辯證，但亦無定論。《新修本草》引陶隱居云：

> 今出建平宜都諸蠻中及西域，多兩角者，一角者爲勝。角甚多節，蹙蹙圓繞。別有山羊角極長，惟一邊有節，節亦疏大，不入方用。而《爾雅》云名羱羊，而羌夷云祗此即名零羊，甚能陟峻坂；短角者，乃是山羊耳，亦未詳其正。蘇敬注云：
>
> 〔謹案〕《爾雅》云：羚，大羊，羊如牛大，其角堪爲鞍橋，一名羱羊，俗名山羊，或名野羊，善鬥至死。又有山驢，大如鹿，皮堪靴用，有兩角，角大小如山羊角，前言其一邊有蹙文，又疏慢者是此也，陶不識謂之山羊誤矣。二種並不入藥，而俗人亦用山驢角者，今用細如人指，長四、五寸，蹙文細者，南山商浙間大有，梁州、龍州、直州、洋州亦貢之，古來相承用此，不用羚羊角，未知孰是也[61]。

可見六朝隋唐時期已不甚明瞭，但陶弘景說西域為主要產地，應該無誤。前揭鄭炳林《晚唐五代敦煌貿易市場外來商品輯考》，認為有可能出自吐蕃，但並未論證。可能以為沙州曾為吐蕃統治，而西藏出產藏羚羊，而生此猜測。但青藏高原所產藏

[57]《新五代史》卷五《唐莊宗紀》；《冊府元龜》卷一六九《帝王部・納貢獻》，2036 頁。

[58]郭鋒《慕容歸盈與瓜沙曹氏》，《敦煌學輯刊》1989 年第 1 期，95 頁。

[59]《冊府元龜》卷九七二《外臣部・朝貢五》，11423 頁。

[60]《冊府元龜》卷九七二《外臣部・朝貢五》，11424 頁。

[61]蘇敬等撰，尚志鈞輯校《唐新修本草》（輯復本），合肥：安徽科學技術出版社，1981 年，374-375 頁。

羚羊與賽加羚羊並非同一品種，是否亦作為羚羊角的原動物，不明。從陶弘景引述“羌夷”云云，似乎亦不無可能。

羚羊角載入本草書年代較早，《神農本草經》即已收，歷代本草均有著錄，臨床應用廣泛。根據本草著作的資料，推測所進貢的羚羊角，可能會用于以下幾種場合：

一、 治療風疾。從太宗開始，唐代歷代皇帝多患有風疾，即所謂“風頭眩”或“頭風旋”。按照現代醫學史研究者的解釋，是屬于遺傳性的心腦血管疾病，一般認為類似于今天的“中風”[62]。余雲岫認爲其原因甚多，不過多種疾病中之一個證候而已，非一種獨立疾病之名[63]。在治療風疾的醫方中，羚羊角是必不可少的一位藥材。《食療本草》云：“(羚羊）角，主中風痙攣，附骨疼痛，生摩和水塗腫上及惡瘡，良。”[64]具體醫方，如《外臺秘要》卷一五“頭風旋方”七首中，就有二首用到羚羊角屑[65]。

二、 用作壯陽藥物。《神農本草經》云其有“益氣、起陰”、“久服強筋骨，輕身”之藥效[66]，《名醫別錄》更明確地補充說“利丈夫”[67]。表明羚羊角被認為有強健壯陽和輕身延年的功效。這自然迎合了帝王們的喜好。

三、 用作辟邪物。《神農本草經》云其可“辟蠱毒、惡鬼、不汜，安心氣，常不魘寐”[68]。《資治通鑑》卷一九五記載了一則關于傅奕的故事：“又有婆羅門僧言得佛齒，所擊前無堅物。長安士女輻湊如市。奕時臥疾，謂其子曰：‘吾聞有金剛石，性至堅，物莫能傷，唯羚羊角能破之，汝往試焉。’其子往見佛齒，出角叩之，應手而碎，觀者乃止。”[69]《資治通鑑》此段文字實採自唐人筆記小說，未必為史實，但足見羚羊角可辟邪的功能已被神化。羚羊角被神化，也與民間傳說和本草書的渲染有關。《本草拾遺》中記載了羚羊角的真偽鑒定方法：“且羚羊角有神，夜宿以角掛樹不著地，但取角彎中深銳緊小，猶有掛痕者，即是真；慢無痕者非。作此分別，餘無他異。真角耳邊聽之，集集鳴者良。陶云一角者謬也。”[70] “且羚羊角有神，夜宿以角掛樹不著地”，顯然是傳聞而已。從人類學的觀點分析，世界上很多民族都相信某些動物的甲骨、牙、爪、尾、羽毛和角或某些植物具有神奇的魔力[71]。此即人類學所謂

[62]景蜀慧《“風痹”與“風疾”：漢晋時期醫家對“諸風”的認識及相關的自然氣候因素探析》，《中山大學學報（社會科學版)）》第 45 卷第 4 期，2005 年，37-44 頁。

[63]余雲岫《古代疾病名候疏義》，北京：人民衛生出版社，1953 年，200 頁。

[64]孟詵撰、張鼎增補《食療本草》，謝海洲等輯校本，北京：人民衛生出版社，1984 年，70 頁。

[65]王燾《外臺秘要》，經余居刊本版影印本，北京：人民衛生出版社，1981 年，419-420 頁。

[66]馬繼興主編《神農本草經輯注》，北京：人民衛生出版社，1995 年，315 頁。

[67]陶弘景集，尚志鈞輯校《名醫別錄》，北京：人民衛生出版社，1986 年，171 頁。

[68]馬繼興主編《神農本草經輯注》，315 頁。

[69]《資治通鑑》，標點本，北京：中華書局，1956 年，6150-6151 頁。

[70]陳藏器撰，尚志鈞輯釋《本草拾遺》，合肥：安徽科學技術出版社，2002 年，400 頁。

[71]施密特《原始宗教與神話》，蕭師毅、陳汜春譯，輔仁書局，1948 年，此據上海文藝出版社 1987 年影印本，72-79 頁。

Fetichism，林惠汜先生翻譯爲“瑣物崇拜”之遺風[72]。

敦煌醫方中也有不少方劑組成中用到這一味藥材的。例如 P.3201 卷子中有一方“麻黃湯”：“主氣腫已消，猶半身頑痺，毒氣上沖，心塞悶，嘔逆吐水沫，不下食，或腫未消，仍有此侯者，服此湯”，其中有“羚羊角二兩”，與“犀角二兩”併用[73]；同卷“療皮膚不仁方”中有“羚羊角一兩”[74]。P.3930《雜療病方要抄一本》中有一首“治女人產後得熱疾方”：“羚羊角煎汁，服之即差”[75]；“治胎衣不出方”：“ 羚羊角末之，水煎服之”[76]；又有“治產後血不止方”：“羚羊角燒作灰，雞子三枚燒作灰，蒲黃二兩，並各和作酒，服之即差。”[77]

4、硇砂

硇砂，《新修本草》列爲“玉石等部下品”，並注明“新附”，表明是本草書中首次著錄。其文曰：

> 硇砂，味鹹，苦、辛溫，有毒，不宜久服。主積聚，破結血，爛胎，止痛，下氣，療咳嗽宿冷，去惡肉，生好肌，柔金銀，可爲焊藥。出西戎。形如樸消，光淨者良。驢馬藥亦用之[78]。

唐以後，醫書中硇砂較為常見，敦煌醫方也有它的身影。P.3930 為一册子本，據筆者考察，從寫本書法、行款、墨色、紙張、裝幀等物質形態綜合分析，當屬歸義軍時期[79]。《敦煌古醫籍考釋》校注者據文中避“世”字諱，便認爲仍是唐抄本[80]，證據單薄，不可從[81]。又，校注者將本件文書定名爲《不知名藥方第十種》，這種命名方式，雖然是比較謹慎的做法，但實際上等于沒有定名。今據本件裝幀形式及收錄的藥方內容及性質，我認爲則應該是一件民間輯錄的用于常見疾病及緊急救治的效驗方手

[72]林惠汜《天風海濤室遺稿》，厦門：鷺江出版社，2001 年，99 頁。
[73]馬繼興主編《敦煌古醫籍考釋》，第 240 頁。
[74]馬繼興主編《敦煌古醫籍考釋》，第 244 頁。
[75]馬繼興主編《敦煌古醫籍考釋》，第 289 頁。
[76]馬繼興主編《敦煌古醫籍考釋》，第 290 頁。
[77]馬繼興主編《敦煌古醫籍考釋》，第 291 頁。
[78]蘇敬等撰，尚志鈞輯校《唐新修本草》（輯復本），142 頁。
[79]羅福頤據其書體及裝潢，認爲本件似出五代或宋初，這一看法值得重視。羅福頤《西陲古方伎書殘卷彙編》，1952 年；法藏目錄編目者推定本件爲 10 世紀寫本，也印證了這一判斷。Michel Soymié ed., *Catalogue des manuscrits chinois de Touen-houang. Fonds Pelliot chinois de la Bibliotheque Nationale*, vol.IV, Paris: École Française d’Extrême-Orient, 1991, p.420.
[80]馬繼興主編《敦煌古醫籍考釋》，279 頁。
[81]筆者認爲，在寫本斷代上，僅憑避諱或武周新字等作爲依據，是有很大風險的。參看拙文《寫本時代知識社會史研究——以出土文獻所見〈漢書〉的傳播與影響爲例》，榮新江主編《唐研究》第 13 卷，北京：北京大學出版社，2007 年，471-472 頁。

册，參照敦煌同類性質的文書題名，重新擬題爲《雜療病方要抄一本》[82]。其中有另一首“治胎衣不出方”：“硇砂二分，末，和酒服之，立出。”[83]此方所用的正是硇砂“破結血，爛胎”的藥性。

至若其產地，《新修本草》祗是籠統地說“出西戎”。硇砂在《隋書・西域傳》中稱為“鐃沙”，云康國、龜茲所出[84]。羅佛曾對鐃沙做過考證，關于其名稱，認為鐃沙應來自康國語，可構擬為 navša 或 nafša，與波斯語 neft（石油精）有關，可能源于祆教經典 *Avesta* 的 napta（潮濕的）[85]。薛愛華對硇砂也有論列，但基本不出羅佛所考[86]。在《通典》中，硇砂是安息都護府的貢品，數量為五十斤，應出自安西四鎮之一的龜茲[87]。此外，硇砂又名北庭砂、狄鹽[88]。種種線索，似乎都暗示硇砂可能由粟特商胡販運至新疆，然後輸入內地。

我在吐魯番出土文書中有新的發現，大谷文書《唐天寶二年（743）交河郡市估案》記錄了許多藥材的價格，幸運的是，其中恰好有硇砂：

匈[89]沙壹兩　上直錢玖文　次捌文　□（下）〔柒文〕[90]

池田温對本件文書作了細緻的研究，他指出，這件文書的性質，是由交河郡市司的市令製成並呈報交河郡都督府倉曹參軍的關于市估的官文書。所謂市估，即市司的官吏每隔十日把市場上物品的物價各定爲三等或九等記錄下來，報送並保存于官府。經過詳細的分析，他認爲，除去由于受規定形式制約而產生的若干偏差和官文書難免的搪飾之外，市估案是忠實地依據客觀存在的時價而制定的，是反映了當時物價的真實情況的可以信賴的資料[91]。雖然後晉時期的物價情況，我們不是很清楚。

---

[82]雜取群書，摘錄要點，重新彙編，爲中古撰述的主要形式之一，也是實用型知識在民間傳播的重要途徑。簡易醫方萃編和日常實用小類書編撰的興盛，是非常值得深入探究的現象，對于研究中古中國的知識社會史，是一個很好的觀照基點。相關觀點的表述，參看拙文《新刊俄藏敦煌文獻研讀札記》，《敦煌學輯刊》2004 年第 1 期，13 頁；《吐魯番洋海出土高昌早期寫本〈易雜占〉研究》，《敦煌吐魯番研究》第 10 卷，上海：上海古籍出版社，2007 年，74 頁。

[83]馬繼興主編《敦煌古醫籍考釋》，南昌：江西科學技術出版社，1988 年，290 頁。

[84]《隋書》，標點本，北京：中華書局，1973 年，1849、1852 頁。

[85]Berthold Laufer, *Sino-Iranica: Chinese contributions to the history of civilization in ancient Iran, with special reference to the history of cultivated plants and products*, Chicago: Field Museum of Natural History, 1919, pp.505-506.

[86]E. H. Schafer, *The Golden Peaches of Samarkand, A Study in T'ang Exotics*, Berkeley: University of California Press, 1963, p.218.

[87]杜祐《通典》，王文楚等點校，118 頁。

[88]日華子集，尚志鈞輯釋《日華子本草》，合肥：安徽科學技術出版社，2005 年，26 頁。

[89]“硇”，大谷文書中寫作“匈”，字形與前引敦煌醫方書 P.3930 相同，係形近假借。

[90]小田義久《大谷文書集成》貳，京都：龍谷大學，1990 年，19 頁，圖版 13；池田溫《中國古代籍帳研究》，東京：東京大學東洋文化研究所，1979 年，449-465 頁。“下”後“柒文”是筆者推補。

[91]池田温《中國古代物価の一考察——天寶元年交河郡市估案斷片を中心として》，《史學雜誌》第 77 卷第 2 號，1968 年，45-64 頁；同作者《盛唐物価資料をめぐって——天寶 2 年交河郡市估案の斷簡追加を中心に》，《シルクロ-ド研究》第 1 號，1998 年，69-90 頁；韓昇中譯文《中國古代物價初探

但根據天寶年間的《交河郡市估案》的相對指數，五斤或十斤硇砂確實不算是很珍貴的東西。那么，歸義軍不遠萬里，把這種本草書中列為下品，並且有一定毒性的礦物，作為主要甚至唯一的貢品進奉朝廷，又是為何呢？

《本草拾遺》云：

> 硇砂，主婦人、丈夫羸瘦，積病，血氣不調，腸鳴，食欲不消，腰脚疼冷，痃癖痰飲，喉中結氣，反胃吐水，令人能食，肥健。一飛爲酸沙，二飛爲伏翼，三飛爲定精，色如鵝兒黃，和諸補藥爲丸。服之有暴熱損髮。飛煉有法，亦能變鐵[92]。

又，《證類本草》注引《藥性論》云：

> 硇砂，有大毒。畏漿水，忌羊血。味酸、鹹。能消五金八石，腐壞人腸胃。生食之，化人心為血。中者，研生綠豆汁，飲一、二升解之。道門中有伏煉法，能除冷病，大益陽事[93]。

從以上關于硇砂藥性的描述，我們可以知道兩點：其一，硇砂雖然辛溫有毒，但也有強身健體等功效；其二，硇砂是道家外丹黃白法中飛煉法中常用的一種石藥，煉後服用，被認為可大益陽事[94]。恐怕正是因為唐朝皇帝多好丹藥，歸義軍纔投其所好，把硇砂作為貢品。

5、犛牛尾

P.3547《沙州上都進奏院上本使狀》中有“犛牛尾一角”。同光四年正月，曹議金遣使入唐謝賜旌節官誥，貢物名目中亦有犛牛尾[95]。此外，亦見于清泰二年（935）七月迴鶻可汗仁美遣都督陳福海入貢後唐獻物單[96]。敦煌的犛牛尾可能來自吐蕃或吐谷渾。

據薛愛華所考，犛牛尾很早就已作為貢品，被制作成旌、旄、纓帽、拂塵以及貴族車輦的裝飾物，是權力和榮譽的象徵。在唐代，貢獻上來的犛牛尾是由宮中的司輦執掌，而司輦的職司為掌管妃嬪的輿輦、器杖以及駕輿輦的牲畜，其中就有旄[97]。

——關于天寶二年交河郡市估案斷片》，池田温著、孫曉林等譯《唐研究論文選集》，1999 年，122-189 頁。

[92]陳藏器撰，尚志鈞輯釋《本草拾遺》，329 頁。

[93]尚志鈞、鄭金生、尚元藕、劉大培校點《證類本草》，北京：華夏出版社，1993 年，124 頁。

[94]參看陳國符《中國外丹黃白法考》，上海：上海古籍出版社，1997 年，86、356 頁。

[95]《册府元龜》卷一六九《帝王部・納貢獻》，2036 頁。

[96]《舊五代史》卷一三八《迴鶻傳》；《册府元龜》卷九七二《外臣部・朝貢五》，11423 頁。

[97]E. H. Schafer, *The Golden Peaches of Samarkand, A Study in T'ang Exotics*, pp.74-75, 109-110.

在《唐六典》中，犛牛尾是岷、秦二州的貢品[98]。而在《通典》中，臨翼郡、歸誠郡、靜川郡、維川郡 均貢牦牛尾五斤，雲山郡貢黑牦牛尾二斤[99]。黃正建疑此處“尾”或為“蘇”之誤，理由是，按《通典》貢物體例，凡貢獸尾者如豹尾、野狐尾等，其數量均以“枚”記，此處卻用“斤”。而且，歸誠郡和靜川郡貢者，《元和志》中均作“犛牛蘇”。此外，本草中也祗有“犛牛蘇”而無“犛牛尾”[100]。黃正建的分析不無道理，但 P.3547《沙州上都進奏院上本使狀》明確寫“犛牛尾一角”，不可能是“犛牛蘇”。歸誠郡和靜川郡所貢，可能因時期不同，或貢“犛牛尾”，或貢“犛牛蘇”，“尾”並非“蘇”之誤。至于為何用“斤”而不用“枚”，有可能是作為食品。犛牛尾（非犛牛尾毛）因富含膠原蛋白，被認為有延年美容之效，至今在一些地區，仍被制作成藥膳，並視為美食。在敦煌文獻中用“角”計量，也有可能仍是用作裝飾品。

有意思的是，犛牛尾本是舶來品，非中原所產，但在《關市令》中，卻作為一種禁止向西邊和北邊出口的禁物，列在絲織品之後，真珠、金銀之前，顯得頗為突兀。《唐律疏議》卷八《衛禁律》疏議曰：

> 依關市令：“錦、綾、羅、縠、紬、綿、絹、絲、布、犛牛尾、真珠、金、銀、鐵，並不得度西邊、北邊諸關及至緣邊諸州興易。”從錦、綾以下，並是私家應有。若將度西邊、北邊諸關，計贓減坐贓罪三等。其私家不應有，雖未度關，亦沒官。私家應有之物，禁約不合度關，已下過所，關司捉獲者，其物沒官；若已度關及越度被人糾獲，三分其物，二分賞捉人，一分入官[101]。

《關市令》此條所禁止出境之物，顯然出于國家戰略與經濟安全上的考慮。犛牛尾得以廁身其間，或許因其對于邊境諸族而言，可能與絹帛、金銀鐵器一樣，已具有某種等價物的功能，因此纔會加以嚴格管制。

（作者為復旦大學歷史學系副教授）

[98]李林甫等撰《唐六典》，69 頁。
[99]杜祐《通典》，王文楚等點校，127 頁。
[100]黃正建《試論唐代前期皇帝消費的某些側面》，180 頁。
[101]長孫無忌等撰 《唐律疏議》，劉俊文點校，北京：中華書局，1983 年，176-177 頁。

『敦煌寫本研究年報』第四號（2010.03）101-117 頁

《俄藏敦煌文獻》中的西夏科舉“論”稿考
——兼論唐宋西夏的科舉試論

金瀅坤

俄藏 Дx3895 號+Дx3901 號文書[1]，《俄藏敦煌文獻》定作“讀孝經一卷足以立身治國論”，以往學者將其視作敦煌文書，高啟安、買小英《上海古籍出版社<俄藏敦煌文獻>第 11 冊非佛經文獻輯錄》（簡稱《高錄》）疑作“學郎策論草稿”，並做釋文[2]。原件用硬筆書寫，草擬成文後，又反復塗抹修改，還在諸行右側進行了墨筆句讀，因此文章非常淩亂，很難識別。本件文書包括兩件《讀孝經一卷足以立身治國論》和一件《立心以忠信不欺爲主本論》，內容有明顯的科舉考試中經論的特點，從其內容、紙質、書法等角度發現，本件文書應該是黑水城西夏文書，是西夏準備應舉的挙子練習試論的草稿。下文從分録文和考訂年代兩個部份對底卷進行録文整理和研究。

一、文書的整理與校錄

（一）讀孝經一卷足以立身治國論稿二件

《讀孝經一卷足以立身治國論》底卷中有兩件，分別依前後順序稱為甲件（共八行）、乙件（共七行），兩者內容基本相同，但字句略有差別，先後針對《孝經一卷》之《紀孝行章第十》、《廣揚名章第十四》、《天子之章第二》、《開宗明義章第一》的相關內容進行發論。敦煌文獻中有關《孝經一卷》的文書有《鄭玄孝經注》[3]、《唐玄宗孝經注》[4]、《佚名孝經注》[5]、《佚名孝經鄭注義書》[6]、《佚名孝經書》[7]、《白文孝經》

[1]孟列夫、錢伯城主編《俄藏敦煌文獻》第 11 冊，上海古籍出版社等，1999 年，彩圖五。
[2]《敦煌學輯刊》2003 年第 2 期，第 9-47 頁。
[3]P.3428+2674、Дx.2784、Дx.2979、Дx.3867、S.3993+9213、P.25569、S.3824v/1，見許建平《敦煌經籍敘錄》，中華書局，2006 年，第 410-418 頁。
[4]S.6019，見許建平《敦煌經籍敘錄》，第 419 頁。
[5]S.6177+P.3378、P.3382，見許建平《敦煌經籍敘錄》，第 420-424 頁。
[6]P.3274，見許建平《敦煌經籍敘錄》，第 425-427 頁。
[7]P.2757V，見許建平《敦煌經籍敘錄》，第 428-429 頁。

[8]等，共計三十三件。茲在《高錄》的釋文基礎上，以《孝經注疏》及敦煌文獻中的相關《孝經》文書進行參校[9]，對底卷重新錄文如下。

1. 甲件

讀孝經一卷足以立身治國論

昔者[一]明王之以孝[二]治天下也[三]，孝者乃□教盛者[四]。孝子之事親也[五]，居則致其敬，養則致其樂，病則致其憂，喪則致其哀，祭則致其嚴。五者備〔矣〕[六]，然後能事親[七]。能事親[八]，然後能揚名于天下[九]。重名于天下[一〇]，然後能立身[一一]。行孝道者也[一二]，然後可以治國□(者)[一三]。□□□□□□[一四]。□(是)故自天子以孝可成[一五]，人皆不[一六]□□也。苟不能盡其立身之□(道)[一七]，□[一八]危亡禍患有不及者，□然也。《書》[一九]："立愛惟親，立敬惟長，始于□（家）拜[二〇]，終于四海。[二一]□

昔者明王之以孝治[二二]□（天）下[二三]。

【校記】

［一］者，甲件原旁註於"昔明"二字的右側之間，茲據文義補入正文。

［二］"昔者明王之以孝"七字已經塗抹，"孝"字右側旁注"△"，疑為恢復原句符號。

［三］唐玄宗皇帝御制《孝經一卷・序》有："昔者明王之以孝理天下也，不敢遺小國之臣。"等語。(建德周氏藏宋刊本影印本，第 1 頁，收入《四部叢刊・經部》)

［四］甲件原作"夫孝乃德之本也"七字，塗抹後在其右側先旁注"皆招為出乃□也□"等八字，再塗改為"孝者乃□教盛者"七字。此句以上部份，因有粗筆塗抹劃綫，結合文義，疑此句應當刪除。

［五］甲件"孝子"前有"是故"二字，已塗抹。"孝子之事親也"至"然後能事親"，見《孝經一卷・經孝行章第十》(第 11 頁)。《孝經注疏》卷六《紀孝行章第十疏》云："子曰：'子之事親也，居則致其敬，養則致其樂，病則致其憂，喪則致其哀，祭則致其嚴。五者備矣。然後能事親。"（第 95 頁）〔唐〕玄宗皇帝注，〔宋〕司馬光指解、范祖禹說《孝經指解》云："子曰：'孝子之事親，居則致其敬，養則致其樂，病則致其憂，喪則致其哀，祭則致其嚴。五者備矣，然後能事親。事親者居上不驕，為下不亂。'"（收入《文淵閣<四庫全書・經部>》第 182 冊，第 96 頁，台湾商務印書館，1986 年版）孝子，S.728 號作"君子"。

［六］甲件"則致其哀，祭則致其嚴，五者備"等字右側旁注"以書其□□□之事少也，以書破□□也"等字，已塗抹。矣，乙件亦脱，據《孝經注疏》、《孝經指解》、S.728 號及文義補。

［七］能，乙件作"可以"。

［八］能，據乙件和《孝經註疏》及文義補。"後能事親"至"然後可以治國者"，是針對"開宗明義章第一"相關內容發論。《孝經一卷・開宗明義章第一》云："子曰：'……身體髮膚，受之父母，不敢毀傷，孝之始也；立身行道，揚名於後世，以顯父母，孝之終也。夫孝始於事親，中於事君，終於立身。"（第 3 頁）《孝經註疏》卷一《開宗明義章第一》云："子曰：'……身體髮膚，受之父母，不敢

[8]P.3416、P.3698、P.2545、P.4897、P.4628 + Дx.2962、P.3372、S.1386、P.3369+4775、S.728、S.10056A + 10060B、P.3830、S.5545、S.9956+5821、Дx.1318、P.2715、P.3643PL、Дx.4646、S.707+12911、P.2746、Дx.838、S.6165，見許建平《敦煌經籍敘錄》，第 389-409 頁。

[9]〔唐〕明皇御注、陸德明音義，〔宋〕邢昺疏《孝經注疏》，收入國立編譯館主編《中華叢書・十三經注疏》，新文豐出版公司，2001 年。

毀傷，孝之始也；立身行道，揚名於後世，以顯父母，孝之終也。【注】：言能立身行此孝道，自然名揚後世，光顯其親。故行孝以不毀爲先，揚名爲後。夫孝始於事親，中於事君，終於立身。言行孝以事親為始，事君為中。忠孝道著，乃能揚名榮親，故曰終於立身也。【疏】：夫孝至立身。○正義曰：夫為人子者，先能全身而後能行其道也。夫行道者，謂先能事親而後能立其身。前言立身，末示其跡。其跡，始者在於內事其親也；中者在於出事其主；忠孝皆備，揚名榮親，是終於立身也。○注言行至身也。○正義曰：云‘言行孝以事親為始，事君為中’者，此釋始於事親，中於事君也。云‘忠孝道著，乃能揚名榮親，故曰終於立身也’者，此釋終於立身也。然能事親事君，理兼士庶，則終於立身，此通貴賤焉。鄭玄以為‘父母生之，是事親為始。四十強而仕，是事君為中。七十致仕，是立身為終也’者，劉炫駁云：‘若以始為在家，終為致仕，則兆庶皆能有始，人君所以無終。若以年七十者始為孝終，不致仕者皆為不立，則中壽之輩盡曰不終，顏子之流亦無所立矣。’”（第 37-38 頁）

［九］揚，甲件先寫作“顯”，後從“顯”的右側塗改。

［一〇］“重名于天下”五字，甲件從“下，然”二字的右側補入，而且“重名”二字前有“□□備”三字，已塗抹。

［一一］甲件“然後”二字下有“可以立身”四字，已塗抹。

［一二］行孝道者也，甲件旁注於“然後能立身然後可以治國”的右側，茲據文義補入。甲件“行孝”與“道者也”中間還有五字，已經被塗改成兩行小字，右側第一行為“則□者作□□□□□□□□□□”，第二行為“□□□□□ 自一用□□”。

［一三］者，甲件“日”部略殘，據文義補。疑此行止“者”字。

［一四］底卷卷首有“是故讀孝經一卷所以能令人”一句，已經被劃綫刪除。此處殘缺約六字，僅存殘筆痕跡。

［一五］是，甲件“日”殘，據字形文義補。天子以孝可成，《高録》作“王可以□可人”，似誤。

［一六］此句，甲件原作“昔高明王以孝治□（國）”，塗抹之後，旁注其右側，茲徑作正文。

［一七］“也。苟不能盡其立身”八字，甲件原旁注於“未有不賴乎孝以成也”等字的右側，“未有不賴乎孝以成也”已被塗抹，茲徑録作正文。盡，《高録》作“書”。道，甲件僅存“首”字上部，下部殘，據字形文義補。

［一八］底卷此處約缺六字。

［一九］《書》，即《商書》。〔宋〕真德秀撰《大學衍義》卷一《帝王為治之序》云：“《伊尹作伊訓》商書篇名，伊尹湯之聖相湯，孫太甲立，又相之。曰：“今王嗣厥德，罔不在初，立愛惟親，立敬惟長，始于家邦，終于四海。”（同治十三年冬金陵書局印行，第 3 頁）

［二〇］“立愛惟親，立敬惟長，始于”，據乙件、《尚書正義》及文義補。立，甲件僅存上部殘劃，據字形及乙件、《尚書正義》補。家，甲件僅存下部殘劃，據字形及乙件、《正義》補。《尚書正義》卷八《伊訓》云：“今王嗣厥德，罔不在初，立愛惟親，立敬惟長，始于家邦，終于四海。【傳】：言立愛敬之道，始於親長，則家國竝化，終洽四海。”【疏】：《正義》曰：“王者之馭天下，撫兆人，惟愛敬二事而已。《孝經・天子之章》，盛論愛敬之事，言天子當用愛敬以接物也。行之所立，自近為始，立愛惟親，先愛其親，推之以及踈，立敬惟長，先敬其長，推之以及幼，即《孝經》所云：愛親者不敢惡於人，敬親者不敢慢於人。是推親以及物，始則行於家國，終乃治於四海，即《孝經》所云：德教加於百姓，刑于四海是也。所異者，《孝經》論愛敬，竝始於親，令緣親以及疎，此分敬屬長，言從長以及幼耳。”（〔漢〕孔氏傳，〔唐〕陸德明音義、孔穎達疏，收入國立編譯館主編《中華叢書・十三經注疏》，新文豐出版公司，2001 年，第 305-307 頁）

［二一］四，甲件僅存下部殘劃，據字形及乙件、《尚書正義》補。海，據乙件、《尚書正義》及文義補。乙件“海”字下有“竝始之謂歟”一句，《尚書正義》無，甲件有無不確，故不補。

［二二］之以孝治，據前後文義及甲、乙件開頭一句補。

［二三］天，乙件上部略殘，據字形文義補。乙件“天”字下有一“者”字已經塗抹。下，乙件僅書“丁”形，未寫完。

2. 乙件

讀孝經一卷足以立身治國論[一]

□[二]

昔□(者)明王之以孝治天下[三], 何也？蓋□□□□□也[四]。在下之人亦□□□[五]。是故孝子之事親也。居則致其敬[六]，養則致其樂，病則致其憂，喪則致其哀[七]，祭則致其嚴。五者備，然後可以事親[八]。能事親，然後能立身揚名于天下[九]，然後可以治國。是知《孝經》所係乎人之事者大矣！《書》:“立愛惟親[一〇]，立敬惟長，始于家邦，終于四海。”竝始之謂歟[一一]？

【校記】

［一］國，乙件下部略殘，據字形文義補。論，底卷僅存右側殘筆，茲據字形及甲件補。

［二］底卷此行原為“□□□□皇帝堯舜禹湯文武周□□□□□

立心以忠信不欺爲主本論

心信乃一身之主[一]，忠信乃一身之要也[二]。夫不欺者，与人交結，誠寔之謂也。忠信者，行事不忘之謂也[三]。苟人之心[四]，能存忠信，以肅其內[五]，世人以□[六]。□（古）之人出一言[七]，而千里應者[八]，非与人交結誠寔，行事不忘。何也[九]？ 今之人出一言[一〇]，而千里違者，則必与人交結詭詐[一一]，行事不以忠信[一二]。習之可本[一三]，況其邇者乎[一四]？ 誠能以忠信不欺，則与古之人何以異乎？……也……
……也……[一五]

【校記】

［一］信，底卷旁注於“一”的右側，茲據文義補入此處，《高録》作“偵”，不確。

［二］乃，底卷旁注於“信一”二字的右側，茲據文義補入此處。

［三］“不欺者与人交結，誠寔之謂也。忠信者，行事不忘之謂也”一句，底卷原在此行的左側，有劃綫圈起，補入“也苟”二字之間，茲據文義補入此處。

［四］心，底卷先誤書“不”，後從右側注改。

［五］底卷“內”字下有“則□必以”等字，已塗抹。

［六］此行卷首有“□□言立本也”等語。底卷“以”下字疑為“信”字，已被塗抹，但右側有“△”形符號，表示重收。此句，似乎釋文有不妥，文義不通。

［七］古，底卷僅存左側略有殘泐，據字形及文義補。言，《高録》作“百”，不確。

［八］〔晉〕韓伯注，〔唐〕陸德明音義、孔穎達疏《周易注疏》卷七《繫辭上》云：“子曰：‘君子居其室，出其言善，則千里之外應之，況其邇者乎？ 居其室，出其言不善，則千里之外違之，況其邇者乎？ 言出乎身，加乎民；行發乎邇，見乎遠。言行，君子之樞機，樞機之發，榮辱之主也。”（國立編譯館主編《中華叢書・十三經注疏》，新文豐出版公司，2001 年，第 566-567 頁） 千，《高録》作“十”，不確。

［九］底卷“何”字下有“況其邇”三字，已塗抹，並在其右側旁注“□□□”三字，亦已塗抹。

［一〇］底卷行首有兩字，已塗抹，疑為“者乎”，並在右側旁注“△△△”形符號，其中一個“△”符號，已塗抹，似表示重收，但讀此句文義，無此三字亦通。

［一一］交結，底卷從“人詭”二字右側中間補入。

［一二］以、信，底卷分別旁注於“忠”右側的上下脚，茲據文義補入。

［一三］君之有本，《高録》作“為之可甫”。

［一四］況，《高録》作“就”，不確。

［一五］底卷文章末尾的這些墨點，應該表示論文省略的意思。

二、《孝經》與科舉的關係

要判定本件文書的寫作時間，就離不開對文書內容的考察。顯然本件“讀孝經一卷足以立身治國論”，很明顯這是科舉考試中試論的文體，而且是針對《孝經》的經論。因此，要判定本件文書時間與用途，研究《孝經》與考試的關係就尤為重要。唐代明經科考試主修經書限定在“九經”之內，《孝經》不屬於“九經”的範疇，而是兼習與《論語》一起，同屬兼習經書。據《唐六典》卷二《尚書吏部》云：科舉考

試，“其明經各試所習業，文、注精熟，辨明義理，然後為通。正經有九：《禮記》、《左傳》為大經，《毛詩》、《周禮》，《儀禮》為中經，《周易》、《尚書》、《公羊》、《谷梁》為小經。通二經者，一大一小，若兩中經；通三經者，大、小、中各一；通五經者，大經並通。其《孝經》、《論語》並須兼習。(諸明經試兩經，進士一經，每經十帖。《孝經》二帖，《論語》八帖。每帖三言。通六已上，然後試策。)”[11]明經考試開始兼習《孝經》的時間目前還不是很確切。上元元年（674）十二月二十七日，天后上表曰：“伏以聖緒出自元元，五千之文，實惟聖教。望請王公以下，內外百官，皆習《老子道德經》。其明經咸令習讀，一準《孝經》、《論語》，所司臨時策試，請施行之。”[12]顯然，在上元元年之前，《孝經》就已經列入唐代明經科考試。儀鳳三年（678）三月敕：“自今已後，《道德經》、《孝經》並為上經，貢舉皆須兼通。”[13]似乎當時的進士和明經科都應該兼通《道德經》和《孝經》。據《通典》卷十五《選舉典三・歷代制下》云：“至調露二年（680），考功員外郎劉思立始奏（進士、明經）二科並加帖經。其後，又加《老子》、《孝經》，使兼通之……（十一載）禮部侍郎楊浚始開為三行，明經所試一大經及《孝經》、《論語》、《爾雅》，帖各有差；帖既通而口問之，一經問十義，得六者為通；問通而後試策，凡三條。”[14]宋代明經科考試在與唐代明經科所考的內容相同之外，亦須“兼以《論語》、《孝經》”[15]。也就是說與唐代在考《孝經》方面基本上是一致的。

唐代童子科考試也是以《孝經》為主要考試內容。武德七年（624）七月詔曰：“寧州羅川縣前兵曹史孝謙，守約丘園，伏膺道素，爰有二子，年並幼童。講習《孝經》，咸暢厥旨。”[16]這條史料說明唐代童子科最初只考《孝經》。童子科考試後來逐漸增加了《論語》，大曆三年（768）三月二十五日勅：“童子舉人取十歲以下者，習一經兼《論語》、《孝經》，每卷誦文十科，全通者與出身。仍每年冬，本貫申送禮部，同明經舉人例，考試訖聞奏。”[17]天成四年（929）春正月，幽州節度使趙德鈞奏：“臣孫贊，年五歲，默念《論語》、《孝經》，舉童子，于汴州取解就試。”[18]直到宋代童子科考試，仍然以《孝經》為主要考試內容。淳熙八年（1181），童子科考試始分為三等：“凡全誦《六經》、《孝經》、《語》、《孟》及能文，如《六經》義三道、《語》《孟》義各一道、或賦一道、詩一首為上等，與推恩”[19]。

---

[11]〔唐〕李林甫等撰，陳仲夫點校《唐六典》，中華書局，1992 年，第 45 頁。
[12]〔宋〕王溥撰《唐會要》卷 75《貢舉上・明經》，中華書局，1955 年，第 1373 頁。
[13]《唐會要》卷 75《貢舉上・明經》，第 1373 頁。
[14]〔唐〕杜佑撰《通典》，中華書局，1988 年，第 354、356 頁。
[15]〔元〕脫脫撰《宋史》卷 155《選舉志一・科目上》，中華書局, 1977 年，第 3615 頁。
[16]〔宋〕王欽若等撰《冊府元龜》卷 97《帝王部・獎善》，中華書局，1960 年，第 1153 頁。
[17]《唐會要》卷 76《貢舉中》，第 1399 頁。
[18]〔宋〕薛居正等撰《舊五代史》卷 40《唐書・明宗本紀》，中華書局，1976 年，第 547 頁。
[19]《宋史》卷 156《選舉志二・科目下》，第 3653 頁。

唐代館學教育，生員可以任選九經作為選修，但《孝經》和《論語》必須兼修。據《舊唐書》卷四四《職官志三》云：國子監："祭酒為初獻，司業為亞獻。凡教授之經，以《周易》、《尚書》、《周禮》、《儀禮》、《禮記》、《毛詩》、《春秋左氏傳》、《公羊傳》、《谷梁傳》各為一經，《孝經》、《論語》兼習之。每歲終，考其學官訓導功業之多少，為之殿最。"

隨着科舉考試對《孝經》的重視，唐代在對《孝經》的整理和注疏方面也有很大成就。長安三年（703）三月，四門博士王元感表上所注《孝經》，"制令宏文、崇文兩館學士及成均博士，詳其可否"，由是擢拜太子司議郎[20]。玄宗鞏固政權之後，也很重視《孝經》的注疏工作。開元七年（719）三月一日下敕云："《孝經》、《尚書》，有古文本孔、鄭注，其中旨趣，頗多踳駁。精義妙理，若無所歸，作業用心，復何所適？宜令諸儒並訪後進達解者，質定奏聞。"（P1405）其月六日，詔曰："《孝經》者，德教所先。自頃已來，獨宗鄭氏、孔氏遺旨，今則無聞……其令儒官詳定所長，令明經者習讀。"（P1406）玄宗的詔敕遭到朝臣的反對沒能實行，不過是年四月七日，左庶子劉子元上《孝經注議》，對當時通行的《孝經》鄭氏注本和無注《孝經》之文存在的問題提出了質疑，指出"其書錯謬多矣，無益後學，不可將帖正經"[21]，從而促進了《孝經》整理的步伐。開元十年（722）六月，玄宗將御"訓注《孝經》，頒於天下"[22]，緊接着在天寶二年（743）五月，又"以重注《孝經》，頒天下"[23]。天寶三載（744），頒布《親祭九宮壇大赦天下制》云："自古聖人，皆以孝理，五帝之本，百行莫先。移于國而為忠，長於長而為順，永言要道，實在人弘。自今以後，令天下家藏《孝經》一本，精勤誦習。鄉學之中，倍增教授，郡縣官吏，明申勸課。百姓間有孝行過人，鄉閭欽伏者，所由長官具以名薦。"[24]天寶五載（746），玄宗又下令集賢院，具寫御注《孝經》，"送付所司頒示中外"[25]，大力推行御注《孝經》。敦煌文書中大量《孝經》類文書的發現充分說明唐五代《孝經》在民間非常普及，其中不少《孝經》上有學郎題記，如S.707號（"同光三年乙酉歲十一月八日三界寺學士郎君曹元深寫記"）、S.728號（"庚子年二月十五日靈圖寺學士郎李再昌記"）、S.1386號（天福柒年壬寅歲永安寺學士郎高清子書寫"）等。

唐人有關《孝經》類的著述頗多，如《新唐書》卷五七《藝文志一》載《孝經》類有：《古文孝經》孔安國《傳》一卷，《孝經》王肅《注》一卷，鄭玄《注》一卷，

[20]《唐會要》卷77《貢舉下》，第1405頁。
[21]《唐會要》卷77《貢舉下・論經義》，第1405-1409頁。
[22]〔後晉〕劉昫等撰《舊唐書》卷8《玄宗本紀上》，中華書局，1975年，第183頁。
[23]《冊府元龜》卷40《帝王部・文學》，第454頁。
[24]〔宋〕宋敏求編《唐大詔令集》卷74《典禮・親祭九宮壇大赦天下制》，商務印書館，1959年，第417頁。
[25]《冊府元龜》卷40《帝王部・文學》，第454頁。

韋昭《注》一卷等，共計“《孝經》類二十七家，三十六部，八十二卷”[26]。宋人在唐代的基礎上，對《孝經》又進一步做了注疏。如《宋史》卷二〇二《藝文志一》載《孝經》類：《古文孝經》一卷，鄭氏注《孝經》一卷，唐明皇注《孝經》一卷，元行沖《孝經疏》三卷，蘇彬《孝經疏》一卷，邢昺《孝經正義》三卷，司馬光《古文孝經指解》一卷、又《古文孝經指解》一卷等，共計“《孝經》類二十六部，三十五卷”（P5066-5067）

《孝經》還是唐宋時期重要的童蒙教材。如五代人袁逢吉四歲，“能誦《爾雅》、《孝經》，七歲兼通《論語》、《尚書》。周太祖召見，發篇試之，賜束帛以賞其精習”[27]。如宋人路振“幼穎悟，五歲誦《孝經》、《論語》”[28]。如宋大名人馬仁瑀，十余歲時，“于鄉校習《孝經》”[29]。就連女孩子也要讀讀《孝經》，有孝女榮氏，“自幼如成人，讀《論語》、《孝經》，能通大義，事父母孝”[30]。《孝經》甚至成為當時最普及的經書，如五代荊南節度使高從誨爲了表示自己才識淺薄，稱“但能識《孝經》耳”[31]。當然，《孝經》也是民間宣揚孝道最廣的經書，宋人穆修母死，“自負櫬以葬，日誦《孝經》、《喪記》，不飯浮屠為佛事”[32]。

綜上所述，《孝經》在唐宋科舉考試中非常普遍，本件文書出現並非偶然，恰恰體現了《孝經》在科舉中的普遍性。但要確定本件文書的具體時間，還得進一步探討科舉試“論”的情況。

三、關於科舉考試試論的問題

本件文書出現《讀孝經一卷足以立身治國論》、《立心以忠信不欺爲主本論稿》的標題，不管是“論”的題材，還是《孝經》，顯然都與科舉考試關係密切，應該就是模擬科舉考試中試論的平時習作。由於史料闕如，關於唐五代科舉考試中試“論”情況，目前學界對此瞭解甚少，相關文本也尚未發現。如果此件文書可以證明為唐末五代科舉考試的“論”，那么就有可能是傳世最早的科舉考試中的試“論”，其價值自然不低。因此，考訂唐宋時期科舉考試中試“論”的情況，對判定文書的時間有一定的幫助。

唐代科舉考試中出現試論文體的時間比較晚。建中二年（781）十月，中書舍人趙贊權知貢舉，奏云：“進士先時試詩賦各一篇，時務策五道，明經策三道。今請以

[26]〔宋〕歐陽修、宋祁撰《新唐書》卷 57，中華書局，1975 年，第 1439-1443 頁。
[27]《宋史》卷 277《袁逢吉傳》，第 9441 頁。
[28]《宋史》卷 441《文苑傳・路振傳》，第 13060 頁。
[29]《宋史》卷 273《馬仁瑀傳》，第 9344 頁。
[30]《宋史》卷 460《列女傳・榮氏傳》，第 13481 頁。
[31]《宋史》卷 431《儒林傳・田敏傳》，第 12819 頁。
[32]《宋史》卷 442《文苑傳四・穆修傳》，第 13069 頁。

箴、論、表、贊代詩賦，仍試策二道。”[33]雖然趙贊的建議得到了推行，但是建中三年（782）進士試《學官箴》、《敧器銘》[34]，並沒有發現有試“論”的情況。顯然，趙贊的建議已經不適合舉子修習舉業，世人已經習慣了進士科考試注重詩賦的舊制。至德宗貞元四年（788），進士科省試又恢復了試詩賦，是年劉太真侍郎試《曲江亭望慈恩寺杏園花發詩》[35]。後來元稹在《對才識兼茂明於體用策》中建議以“學士”和“文士”兩科取士，“其詩、賦、判、論，以文自試者，皆得謂之文士”[36]。

唐代再次出現試論是在大和七年（833）七月，宰相李德裕請依楊綰議，進士試議論，不試詩賦[37]。于是八月便有禮部奏：“進士舉人先試帖經，並略問大義，取經義精通者，次試議、論各一首，文理高者，便與及第，其所試詩賦並停者。”[38]此奏得到了實行，進士科廢詩賦，轉而帖經、問大義、試議論。但是，大和八年（834）禮部貢院在進士考試中發生了一些變化。先是大和八年（834）正月禮部侍郎李漢奏：“准太和七年八月敕，貢舉人不要試詩賦、策，且先帖大經、小經，共二十帖，次對正義十道，次試議、論各一首，訖。考覈放及第。”[39]牛党李漢的奏文居然秉承了李德裕的政治主張，並將其付諸實踐，但其在政治立場上是站在牛党領袖宰相李宗閔一邊的[40]。李漢為何要贊成李德裕的建議，主要原因恐怕是考慮到大和七年八月敕已經頒示天下，天下的進士都已經按新敕準備舉業了，到大和元年正月已經是快要舉行省試的日子，所以作為禮部侍郎的李漢從穩定科場秩序、維護考試制度的延續性角度，上奏重申大和七年（833）八月敕，以穩定人心。於是十月禮部又奏：

> 進士舉人，自國初以來，試詩賦、帖經，時務策五道。中間或暫改更，旋即仍舊。蓋以成法可守，所取得人故也。去年八月節文，先試帖經、口義、論議等。以臣商量，取其折衷。伏請先試帖經，通數依新格處分。時務策五道，其中三道問經義，兩道時務。其餘並請准太和六年以前格處分[41]。

隨後禮部敕文得到批准，取消了大和七年（833）八月敕規定的進士科考試廢詩賦，“試帖經、口義、論議”的辦法，進士科考試一切復舊，“請准太和六年以前格處分”。

---

[33]《唐會要》卷 76《貢舉中・進士》，第 1380 頁。

[34]〔清〕徐松撰，趙守儼點校《登科記考》卷 11 建中三年條，中華書局，1984 年，第 419 頁。

[35]《登科記考》卷 12 貞元四年條，第 444 頁。

[36]〔唐〕元稹撰，冀勤點校《元稹集》，中華書局，2000 年，第 330-338 頁。

[37]〔宋〕司馬光編著，〔元〕胡三省音注《資治通鑒》卷 244 太和七年七月條，中華書局，1956 年，第 7886 頁。

[38]《唐會要》卷 76《貢舉中・進士》，第 1381 頁；《冊府元龜》卷 641《貢舉部・條制第三》，誤作大和三年八月，第 7683 頁。

[39]《冊府元龜》卷 641《貢舉部・條制第三》，第 7684 頁。

[40]參考《舊唐書》卷 171《李漢傳》，第 4454 頁。

[41]《冊府元龜》卷 641《貢舉部・條制第三》，第 7684 頁。

實際上，又恢復大和六年 (832) 前進士考試以詩賦為先的三場制。這年十月，李德裕罷相，出為山南西道節度使[42]。李宗閔入相，隨後便恢復了進士試詩賦的舊制，以反對李德裕推行的進士科考試主要試帖經、議論的辦法。此事，《宋史》卷一五五《選舉志一》亦有記載："大和三年，試帖經，略問大義，取精通者，次試論、議各一篇。八年，禮部試以帖經口義，次試策五篇，問經義者三，問時務者三。厥後變易，遂以詩賦為第一場，論第二場，策第三場，帖經第四場。"（P3612）顯然，《宋史》記載多有偏頗。此後，唐代再沒有見到科舉考試中試論的記載。這樣一來，唐代科舉考試試論的時間非常短，影響很小，因此，就可以判定本件文書中的三件帶有應試特點的"論"稿應當不是唐代的東西。

五代後周顯德四年（957）八月，兵部尚書張昭遠上疏要求重設制舉，還提出了實行制舉的具體辦法，"諸州依貢舉體式，量試策論三道，共以三千字以上為准"[43]。但張昭遠所說的"策論"，應該是"策"和"論"兩種文體。五代"策"與"論"的文體差異已經已經非常明顯。如晚唐牛希濟《文章論》云："今國朝文士之作，有詩、賦、策、論、箴、判、贊、頌、碑、銘、書、序、文、檄、表、記，此十有六者，文章之區別也。制作不同，師模各異。然忘於教化之道，以妖豔為勝，夫子之文章，不可得而見矣。"[44]不過值得注意的是顯德二年（955）五月翰林學士尚書禮部侍郎知貢舉竇儀上言："其進士請今後省卷，限納五卷已上，於中須有詩、賦、論各一卷，餘外雜文歌篇，並許同納，祇不得有神道碑誌文之類。"[45]可見進士向禮部貢院交納省卷中包括了"論"，說明後周科舉考試中"論"的地位有所提高，但沒有明確是否禮部省試也要考論。結合上述考證以及唐五代科舉考試實行的情況來看，本件文書出現的"論"基本上可以推定是五代以後舉子試"論"的習作。

正真將"論"納入科舉考試的場次是在宋代。宋初統治者雖然認識到經術乃"王化之本"[46]，但是唐末五代以來形成的進士科考試內容以詩賦為主的風氣並未改變。因此，宋真宗咸平五年 (1002)，洛陽節度判官張知上疏指出："進士之學者，經、史、子、集也。有司之所取者，詩、賦、策、論也。"他要求朝廷"先策、論，後詩、賦，責治道之大體，舍聲病之小疵"[47]。張知的建議似乎對劉筠影響頗深，劉筠自景德（1004-1007）以來"居文翰之選"，"凡三入禁林，又三典貢部，以策論升降天下士，自筠始"[48]。在宋真宗的支持下，進士科考試重詩賦的風尚略有改觀。至大中祥符元年 (1008)，馮拯又上奏說："來省試，惟以詩賦進退，不考文論，江浙士人，專業詩

[42]《資治通鑒》卷 245 太和八年十月條，第 7898 頁。
[43]《宋史》卷 263《張昭傳》，張昭遠因辟後漢高祖劉智遠諱，故省作做張昭。第 9090-9091 頁。
[44]〔清〕董誥等編《全唐文》卷 845，中華書局,1983 年，第 8877 頁。
[45]《冊府元龜》卷 642《貢舉部・條制第四》，第 7703 頁。
[46]〔宋〕李燾撰《續資治通鑒長編》卷 39 太宗至道二年二月，中華書局，1979 年，第 830 頁。
[47]《續資治通鑒長編》卷 53 真宗咸平五年十一月條，第 1169 頁。
[48]《宋史》卷 305《劉筠傳》，第 10089 頁。

賦，以取科第，望令於詩賦人內，兼考策、論。”[49]宋仁宗天聖二年（1024），帝賜宋郊、葉清臣等480於人及第，並於本科策問一道，為宋代進士科試策之始。又據《宋會要輯稿》卷三《科舉條制》云：“（仁宗）天聖五年正月十六日，詔：‘貢院將來考試進士。不得只於詩賦進退等第，今後參考策論，以定優劣。’”寶元中(1038-1039)，李淑侍經筵，仁宗“訪以進士詩、賦、策、論先後”，便對曰：“願約舊制，先策，次論，次賦及詩，次帖經、墨義，而敕有司並試四場，通較工拙，毋以一場得失為去留。”仁宗頗為認可其建議[50]。仁宗慶曆三年(1043)，范仲淹參知政事進行體制改革時，上書條陳十件事，其中“精貢舉”條，便特意提出：“進士先策、論，後詩、賦，諸科取兼通經義者。”[51]在慶曆四年(1044)的新政中，范仲淹採用李淑的建議，將進士科三場考試次序定為先試策，次試論，最後才試詩賦。然而，不到一年，范仲淹便被罷去宰相之職，伴隨着新政的失敗，慶曆四年以前先詩賦後策論的舊制又得以恢復。但是，慶曆八年（1048），仁宗向近臣訪天下之務時，周詢對曰：“願陛下特詔，進士先取策論，諸科兼通經義”[52]。

到了北宋中葉，隨着經術與文學之爭達到高潮，進士科考試先試詩賦，還是策論便成為了一個焦點。英宗治平元年(1064)，司馬光上《貢院定奪科場不用詩賦狀》掀起了這場爭論的序幕，云：“以言取人，固未足以盡人之才。今之科場，格之以辭賦，又不足以觀言……今來呂公著欲乞科場更不用詩賦，委得允當。然進士只試策、論，又似太簡……乞今後省試，除論、策外，更試《周易》……《論語》大義，共十道，為一場。其策只問時務。所有進士帖經、墨義一場，從来不曾考校，顯是虛設，乞今更不試。御前除試論外，更試時務策一道。如此，則舉人皆習經術，不尚浮華。”[53]這是因為司馬光為陝州夏縣(山西夏縣)人，和許多西北人一樣，比較擅長經史而短於詩賦。面對朝野崇尚文學不利西北人仕進的情況，他主張進士在試策、論的基礎上加強經義考試，并力主按地域均衡舉額分路取人。治平三年(1066)，司馬光又上《貢院乞逐路取人狀》指出：“國家用人之法，非進士及第不得美官，非善為賦、詩、論、策者不得及第，非遊學京師者不善為賦、詩、論、策。”[54]不利於西北等文化落後府路舉人參加省試，主張分路取人。針對司馬光的議論，參政知事歐陽修提

[49]《續資治通鑒長編》卷68真宗大中祥符元年春正月條，第1522頁。《宋史》卷285《陳執中傳》云：“大中汜符初，嚴貢舉糊名法。拯與王旦論選舉帝前，拯請兼考策論，不專以詩賦為進退，帝曰：‘可以觀才識者，文論也。’拯論事多合帝意如此。封泰山，為儀仗使。禮成，進尚書左丞，以疾在告，數請罷，帝以手詔諭旨，又命宰相王旦就第勸拯起視事。”第9610頁。

[50]《宋史》卷155《選舉志一》，第3613頁。

[51]《宋史》卷314《范仲淹傳》，第10273頁。

[52]《宋史》卷302《魚周詢傳》，第10012頁。

[53]曾棗莊、劉琳主編《全宋文》卷1186《司馬光一五》，上海辭書出版社、安徽教育出版社，2006年，第345-346頁。

[54]《全宋文》卷1188《司馬光一七》，第3頁。

出正面反駁。他在《論逐路取人劄子》中指出："天下至廣，四方風俗異宜，而人性各有利鈍。東南之俗好文，故進士多而經學少。西北之人尚質，故進士少而經學多。所以科場取士，東南多取進士，西北多取經學者，各因其材性所長，而各隨其多少取之。今以進士經學合而較之，則其數均。"他認為若執意要多取西北之人，則必須減少東南之數，會造成另一種不平等，且朝廷既然以文藝取人，就應有統一衡量才藝的標準[55]。從兩人爭論的情況來看，仍是經學和文學的問題，在考試形式上，反映為策論和詩賦的爭論。神宗于是令朝廷各公卿大臣展開討論，直史館蘇軾上書云："自文章而言之，則策論為有用，詩賦為無益；自政事言之，則詩賦、論策均為無用……自唐至今，以詩賦為名臣者，不可勝數，何負於天下，而必欲廢之!"他還認為經義、策論之類無規矩準繩，"故學之易成；無聲病對偶，故考之難精。以易學之文，付難考之吏，其弊有甚於詩賦者矣"[56]。因此，蘇軾極力反對專取經義策論而罷詩賦。在這場爭論中，朝中大臣唯有趙抃贊同蘇軾的看法。針對蘇軾的說法，王安石在《乞改科條制劄子》中進一步說："宜先除去聲病偶對之文，使學者得專意經義，以俟朝廷興建學校，然後講求三代所以教育選舉之法，施於天下。"[57]于是，宋神宗採納了王安石的建議，罷去詩賦、帖經、墨義，進士科省試內容依次為經義、論、策。熙寧三年（1070），殿試也一改以前試詩、賦、論三題的辦法，而"始專以策"，"舊特奏名人試論一道"[58]。到熙寧八年 (1075)，朝廷王安石所注《詩》、《書》、《周禮》頒行於全國，稱為《三經新義》，作為科舉考試官方的標準教材。這次經術與文學之爭顯然經術派佔據了壓倒性優勢。在王安石變法期間，明經等諸科都被罷去，所有考試科目全歸併為進士一科，但此時的進士科不考詩賦而側重於經術，進士科的性質實際上却已蛻變成明經科了。一定程度上也確立了試論在經義進士中的考試地位。

王安石罷相後，宋哲宗于元祐元年 (1086) 即位，政治上出現了"元祐更化"。到元祐元年，禮部奏請立經義、詞賦兩科進士，在討論此事時，以司馬光為首的經術派力主以經術取士，無意恢復詩賦，主張："取士之道，當先德行，後文學。就文學言之，經術又當先於詞采，神宗專用經義、論策取士，此乃復先王令典，百王不易之法。"[59]而以蘇軾等為代表的文學派，則要求恢復詩賦考試。次年，立進士四場法：第一場試經義，第二場試詩賦，第三場試論，第四場試子、史、時務策，以四場通定去留高下。于是，兩科又合為一科。而在元祐三年 (1088) 則規定："將來一次科場，如有未習詩賦舉人，許依舊取。應解發合格人，不得過解額三分之一。應解二人者，

[55]《全宋文》卷 690《歐陽修二八》，第 291-292 頁。
[56]《全宋文》1867《蘇軾一九・議學校貢舉狀》，第 210-212 頁。
[57]《全宋文》卷 1383《王安石二一》，第 20 頁。
[58]《宋史》卷 155《選舉志一・科目上》，第 3616 頁。
[59]《宋史》卷 155《選舉志一・科目上》，第 3620 頁。

均取。即有零分及解額一人者，並通取文理優長之人。”[60]這是經術與文學之爭論妥協折中的結果。到了元祐四年，就正式從法令上分立經義進士與詩賦進士兩科。按《宋史・選舉志》所述，省試“詩賦進士”，習五經中的任意一經，考試分經義、詩賦、論、子史、時務策四場。“專經進士”，須習兩經，考試分經義兩場、論策兩場（P3620-3621）。兩科進士解送名額各占一半，“專經者用經義定取舍，兼詩賦者以詩賦為去留，其名次高下，則於策論參之”[61]。但是，自從詩賦進士設立後，士多鄉習，而專經者不到十分之二三，“諸路奏以分額各取非均，其後遂通定去留，經義毋過通額三分之一”[62]。于是，元祐四年 (1089) 因權知貢舉出官、知任杭州的蘇軾，極力要求改變以經義、詩賦兩科進士平分名額的狀態，主張兩科進士應該按照報考經義、詩賦生員的比例，來分配錄取名額，通定去留[63]。

不久，文學派又奏請恢復在殿試中熙寧以前試詩、賦、論三題的舊法：“伏緣朝廷既降朝命，科舉兼用辭律，使天下學者習之矣，辭律之學，用志最勤，惟殿試之日……若復試策，則積日所勤，反為無用……又人主臨軒，其所詢訪，必當時大務也……故宿造預作者可以應對而無疑，考校之官，憑此以辨優劣，以第高下，安得實也。惟三題散出諸書，不可前料，詩賦以見其才，論以知其識，且無以伸佞時之說焉。蓋對策之流，本緣進取而來，利害交其前，得失攖其心，于是佞辭以取說，妄意以希合者，比比皆是。”[64]儘管受到吏部侍郎和禮部侍郎等 13 人的聯名上疏反對，但在比較了試詩、賦、論與僅試策的優劣之後，元祐八年 (1093) 三月，中書省奏請在殿試中恢復熙寧以前試詩賦的成法，而且說“士子多已改習詩賦，太學生員二千一百餘人，而不兼習詩賦者才八十二人”。于是下詔，令次年殿試“習詩賦人”，恢復試詩、賦、論三題，“專經人”則令試策，從此後殿試一概試詩、賦、論三題[65]。不過，蔡京執政期間，恢復了王安石變法的許多措施。到紹聖元年 (1094)，朝中關於“以經造士”，“專用經術之義”的議論日益增多，于是又下詔進士罷詩賦，專習經義，殿試仍舊只策試。經術派再度取得了成功。從北宋進士科考試，分立詩賦進士和經義進士的過程中，可以看出北宋經義進士主要考策、論，“論”重在考經義，與本件文書內容頗為相符。南宋孝宗淳熙十一年（1184），進士科考試稍稍改變了重詩賦的風氣，諭春官：“凡課試命題，雜出諸史，無所拘忌。考核之際，稍以論策為重，毋止以初場定去留。”[66]但也僅僅是個案，對整個社會崇重詩賦進士的環境沒有大的改變。

此外，宋代制舉考試中也增加了試論內容。《宋史》卷一五六《選舉志二・科目

[60]《續資治通鑒長編》卷 412 哲宗元祐三年六月條，第 10018 頁。
[61]《宋史》卷 155《選舉志一・科目上》，第 3620 頁。
[62]《宋史》卷 155《選舉志一・科目上》，第 3620 頁。
[63]〔元〕馬端臨撰《文獻通考》卷 31《選舉考四》，中華書局，1986 年，第 295 頁。
[64]《續資治通鑒長編》卷 415 哲宗元祐三年十月條，第 10101 頁。
[65]《宋史》卷 155《選舉志一・科目上》，第 3621 頁。
[66]《宋史》卷 156《選舉志二・科目下》，第 3649 頁。

下》云："元祐二年，復制科。凡廷試前一年，舉奏官具所舉者策、論五十首奏上，而次年試論六首，御試策一道，召試、除官、推恩略如舊制。"（P3648）其實，制舉試策、論，可能是受後周制舉試策、論的影響。又據《宋史》卷一五六《選舉志二・科目下》云："（紹興）二年，詔舉賢良方正能直言極諫科，一遵舊制，自尚書兩省諫議大夫以上、御史中丞、學士、待制各舉一人。凡應詔者，先具所著策、論五十篇繳進，兩省侍從參考之，分為三等。"（P3649）

宋代國子監考試中出現了論策。宋代國子監所屬的國子生、太學生入學後要進行一些考試"凡公試，初場經義，次場論策。試上舍，如省試法"，並且按照生員的成績等第，選送參加貢院省試和殿試[67]。顯然，這裡的論策考試實際上成了舉子取解考試的一部份。

宋代吏部銓選也可以用試論來選拔。《宋史》卷一五八《選舉志四・銓法上》云："凡選人年二十五以上，遇郊，限半年赴銓試，命兩制三員鎖試于尚書省，糊名謄錄。習辭業者試論、試詩賦，詞理可采、不違程式為中格，習經業者人專一經，兼試律，十而通五為中格，聽預選。"（P3704）又如范仲淹非常器重王益柔，便"荐試館職，以其不善詞賦，乞試以策論，特听之"[68]。

宋代諸州解試也要試論。《宋史》卷二六三《竇儀傳》云："儀上言：'請依晉天福五年制，廢明經、童子科……諸科舉人，第一場十否，殿五舉。第二、第三場十否，殿三舉。三場內有九否，殿一舉。解試之官坐其罪。進士請解，加試論一首，以五百言以上為准。'"（P9093）

隨着宋代各類科舉考試中試論的普及和地位的增加，便出現了試論的文集和範文。《宋史》卷二〇八《藝文志七》中就有不少宋代士大夫論的文集篇目。載：錢彥遠《諫垣集》三十卷，又《諫垣遺藁》五卷，《齊唐集》三十卷，又《策論》十卷，李淑《書殿集》二十卷，《田況策論》十卷，蘇轍《欒城集》八十四卷，《應詔集》十卷，《策論》十卷，馮京《潛山文集》一卷，《陳舜俞集》三十卷，又《治說》十卷，《應制策論》一卷，王發《元祐進本制舉策論》十卷，《盛策論》一卷 (P5364)。值得慶幸的是宋魏天應編選、林子長註《論學繩尺》完整的保留下來了，為我們研究宋代試論具體範文。該書"是編輯當時場屋應試之論，冠以論訣一卷，所録之文，分為十卷，凡甲集十二首，乙集至癸集，俱十六首，每兩首立為一格，共七十八格，每題先標出處，次舉立說大意，而綴以評語，又略以典故，分註本文之下"[69]。近年來隨着科舉學研究的興盛，該書引起了學界的關注[70]。張海鷗、孫耀斌《<論學繩尺>與南宋論

[67]《宋史》卷 157《選舉志三・學校試》，第 3657 頁。

[68]《宋史》卷 286《王曙傳附子益柔傳》，第 9635 頁。

[69]《文淵閣<四庫全書>》，第 1358 冊，第 71 頁。

[70]黃振萍《文起源與<論學繩尺>》,《中國典籍與文化》1998 年，第 43～46 頁；陳林《<論學繩尺>研究》，揚州大學碩士論文，2006 年；卞東波《關于<論學繩尺>的箋注者林子長》,《文學遺產》

體文及南宋論學》考訂林子長、魏天應編註的《論學繩尺》成書必在宋末，因為元初無科考，後雖恢復科舉，但以賦易論，“論學”遂寢，魏天應和書肆都不可能在入元之後還編刻《繩尺》；該書中最晚的作品是鹹淳十年 (1274，宋代最後一次科舉考試) 甲戌榜進士黃龍友的科場論文 (卷十)，可證此書最後一卷的編成時間當在鹹淳十年之後的一一年間[71]。不管怎麼講，《論學繩尺》的出現說明宋代科舉考試中試論已經非常普遍，因此才出現了論學類書，以供舉子參考。也可以幫助我們判定本文件文書的年代大致在元代以前。

四、文書的來源與年代問題

以上對唐五代和宋代科舉考試情況的考察，結合藏經洞封閉的時間[72]，如果認定本件文書為藏經洞文書，則其成文時間，應該在五代宋初。但是，根據現有資料和研究成果，敦煌陷蕃以後，以及歸義軍政權都未曾實行科舉考試，這一時期中原政權的科舉考試尚未見有確鑿試論的記載。因此，本件文書不排除就是黑水城文書的可能性，然而究竟是西夏或元代科舉考試中的試論，還有待進一步探討。其實，黑水城文書混入俄藏敦煌文書的情況，我已經在《<俄藏敦煌文獻>中的黑城文書考證及相關問題的討論》一文中，考訂了 17 件[73]。因此，本件文書為黑水城文書的可能性也非常大。

筆者在研讀文書的過程中，發現以下幾點可以幫助我們判定文書的來源和時代。首先，要解決本件文書來自黑水城文書，就得瞭解一下西夏和元朝的科舉制度實行的基本情況。根據白濱《西夏的學校與科舉制度》的研究，西夏實行科舉共八十年，從 1147 年到 1227 年[74]，但由於史料闕如，有關西夏科舉考試的具體情況，學界知之甚少，考慮到西夏科舉主要受宋朝科舉的影響，也就無法排除試論的可能性。關於元代科舉制度實行的相關情況，據《元史》卷八一《選舉志一》云：元代科舉會試的考試程式：

> 蒙古、色目人，第一場經問五條，《大學》、《論語》、《孟子》、《中庸》內設問，用朱氏章句集註。其義理精明，文辭典雅者為中選。第二場策一

2006 年第 4 期，第 156 頁；吳建輝《从<論學繩尺>看南宋文論范疇一“老”》，《湖南科技大學學報 (社會科學版)》2007 第 3 期。

[71] 見《文學遺產》2006 年第 1 期，第 91-101 頁。

[72] 斯坦因認為是十一世紀初葉，伯希和認為是 1035 年西夏人入侵敦煌前。藤枝晃認為是 1002 年後不久。方廣昌認為是在曹氏歸義軍時期。參考榮新江著《敦煌學十八講》，北京大學出版社，2001 年，第 75-76 頁。

[73] 《敦煌學》第 24 輯，2003 年，第 61-82 頁。

[74] 收入寧夏文物管理委員會辦公室編《西夏文史論叢（一)》，寧夏人民出版社，1992 年，第 17-31 頁。

道，以時務出題，限五百字以上。漢人、南人，第一場明經經疑二問，《大學》、《論語》、《孟子》、《中庸》內出題，並用朱氏章句集註，復以己意結之，限三百字以上……第二場古賦詔誥章表內科一道，古賦詔誥用古體，章表四六，參用古體。第三場策一道，經史時務內出題，不矜浮藻，惟務直述，限一千字以上成[75]。

顯然，元代科舉考試中沒有試論。據明代何喬新為游明重輯刊行的《論學繩尺》作序云:

《論學繩尺》凡十卷，宋鄉貢進士魏天應編選南渡以降場屋得雋之文，而筆峰林子長為之箋釋，以遺後學者也。元取士以賦易論，於是士大夫家藏此書者蓋少。至國朝始復宋制，以論試士，而此書散逸多矣[76]。

從元代科舉考試不興“以論試士”情況的角度考慮，此件文書定為西夏文書更為妥當而應該不是元代遺物。

其次，從文書內容來看，也比較符合西夏科舉考試的內容。文書中的“讀孝經一卷足以立身治國論”，是以《孝經一卷》相關內容發論，而《孝經》正是西夏“蕃學”、“國學”的重要內容。西夏景宗元昊自製蕃書，“教國人紀事用蕃書，而譯《孝經》、《爾雅》、《四言雜字》為蕃語”[77]。黑水城文書中就保存了不少西夏文的《孝經》譯注，如俄藏黑水城文書 ИHB.2627 號《譯寫本朱筆校點呂惠卿孝經傳序》[78]。聶鴻音先生《呂注<孝經>考》一文對其進行了研究，並對部分章節進行了翻譯。聶鴻音先生認為西夏文獻徵引到《孝經》的只有一處，見番大學院教授曹道樂奉夏桓宗之命編寫的《德行集》，其中用西夏文翻譯了《紀孝行章》的“居則致其敬，養則致其樂，病則致其尤，喪則致其哀，祭則致其嚴”[79]。但是兩個譯文的西夏對應文字存在明顯差異，聶鴻音先生認為這是因為西夏政府從來也沒有以《孝經》為代表的中原典籍譯本作為正式頒佈的科舉教材的緣故。顯然，《孝經》在西夏科舉考試中非常重要，並且很常見。也就不難理解本件文書《讀孝經一卷足以立身治國論》以“居則致其敬，養則致其樂，病則致其憂，喪則致其哀，祭則致其嚴”為立論的原因，正好可以說明本件文書為西夏科舉試論的遺物。相反，元代科舉考試以《大學》、《論語》、

[75]〔明〕宋澎等撰，中華書局，1976 年，第 2019 頁。

[76]〔明〕何喬新撰《椒邱文集》卷 9，收入《四庫全書》，上海古籍出版社，1987 年，第 1249 冊，第 141 頁；又見《文淵閣四庫全書補遺》第 8 冊，北京圖書館出版社，1997 年版，第 216 -220 頁。

[77]《宋史》卷 485《外國傳一・夏國傳上》，第 13995 頁。

[78]見史金波等主編《俄藏黑水城文獻》第 11 冊，上海古籍出版社，1999 年版，第 2-46 頁。很多學者對其進行了研究：Eric. Grinstead, *Analysis of the Tangut Script*, First Edition: Lund, Studentlitteratur, 1972; Second Edition: Curzon Press, 1975；胡若飛《俄藏西夏文草<孝經傳>序及篇目譯考》,《寧夏社會科學》2005 年第 5 期，第 97-98 頁。

[79]聶鴻音《呂注〈孝經〉考》,《中華文史論叢》2007 年第 2 期，第 285-365 頁。

《孟子》、《中庸》為主，未有考《孝經》內容的相關記載。因此，將本件文書定為西夏文書也在情理之中。

文中“立心以忠信不欺爲主本論”，以“立心以忠信不欺爲主本”發論，考其論題的出處，最早可以追溯到宋劉清之撰《戒子通録》卷六《家戒》云：“立志以明道希文自期待，立心以忠信不欺為主本，行己以端莊清慎見，操執臨事以明敏, 果斷辨是非。”考《宋史》記載，劉清之，登紹興二十七年（1157）進士第，紹熙元年（1190）光宗即位，劉清之不久病逝，所著有《曾子內外雜篇》、《訓蒙新書外書》、《戒子通錄》等[80]。這也可以佐證此論大概與其時間相當，則此件文書的年代應當為西夏更為妥當。

最後，從文書彩色圖片來看，本件文書的紙質是白麻紙，跟黑水城出土的文書所採用的紙質非常相似。儘管我沒有看到原件，但從《俄藏敦煌文獻》的彩色圖片來看，本件文書白麻紙質的特徵比較明顯，與晚唐五代敦煌白麻紙質相比[81]，紙質粗糙、松軟，比較符合黑水城文書的特點。本件文書多使用簡體漢字，以硬筆書寫，均不是中原科舉考試特點，特別是唐代“進士考試理宜必遵正體”[82]，即便是舉子私下習作，也應該用正體和毛筆，這也可以佐證本件文書為西夏黑水城文書的可能性。

綜上所述，本人傾向此件文書為西夏黑水城文書，文中有論證和資料不是非常充分的地方，希望學界同仁，給予關注，解決本文未能解決的問題。

［附記］本文為參加京都大學高田時雄教授主持的“西陲出土文獻研究班”的研究成果，也是 2008 年度教育部 985 基地項目“敦煌史部文獻匯輯集校”（08JJD740059）的前期成果之一。

（作者為首都師範大學歷史學院教授）

[80]《宋史》卷 437《儒林傳七・劉清之傳》，第 12953-12957 頁。

[81]金榮華《敦煌寫卷紙質之考察》,《世界華學季刊》1981 年卷 2 第 4 期，第 23-28 頁。

[82]參考金瀅坤《論唐五代科舉考試與文字的關係》,《首都師範大學學報 (社會科學版)》2007 年第 3 期，第 21-28 頁。

『敦煌寫本研究年報』第四號（2010.03）119-140 頁

書儀と詩格——變容する詩文のマニュアルとして

永田知之

一、はじめに

世にいう「古文復興運動」が中國文學史の一大劃期である事實は、もはや言を俟たないだろう。ただ、中唐に至ってこの運動が顯在化する以前、初唐期にも次の如き言說が存在したことを見逃してはなるまい（分段を示す圍み數字は筆者による、以下同じ）。

> 〔上略〕①孔子歿二百歲而騷人作、於是婉麗浮侈之法行焉。漢興二百年、賈誼、馬遷爲之傑、憲章禮樂、有老成人之風。長卿、子雲之儔、瑰詭萬變、亦奇特之士也。惜其王公大人之言、溺於流辭而不顧。其後班張崔蔡、曹劉潘陸隨波而作。雖大雅不足、然其遺風餘烈、尚有典刑。②宋齊已來、蓋顛頽逶迤、陵頹流靡。至於徐庾、天之將喪斯文也。後進之士、若上官儀者、繼踵而生。於是風雅之道掃地盡矣。……③**道喪五百歲而得陳君**。……崛起江漢、虎視函夏、卓立千古、橫制頽波、天下翕然、質文一變。〔以下略〕（『陳伯玉文集』卷首・唐・盧藏用「陳伯玉文集序[1]」）

八世紀初頭に著されたこの序は、後に續く唐人によって（贊否兩方を問わず）度々引用されるところとなった。その眼目は①漢～西晉＝隆盛、②宋齊～初唐＝衰退、③それ以降＝復興、と文學史を三區分し、「五百歲」に及ぶ「道」の喪失を盧藏用（中宗・睿宗兩朝の高官）の親友で陳子昂（字は伯玉、文中の「陳君」、659～700、初唐の文學者）が回復したという點に在る。

この序による絶贊が大きく作用し、陳子昂は文學における「復古」の先驅者として唐人の尊崇を受けることとなる[2]。ところが、その一方で、以下のような記述も傳わる。

---

[1]四部叢刊本を底本とした。この序の呉企明氏による注が孫望、郁賢皓（1994）に、鈴木史己、池田恭哉兩氏による譯注が京都大學中國文學研究室（2008）にそれぞれ見える。

[2]永田知之（2001）を參照されたい。

P.3849　新定書儀鏡[3]〔京兆杜友晉撰〕黃門侍郎盧藏用儀例一卷 a)

書疏之興、其來自 b) 久。上皇之世、隣
國相聞。人至老死、不相往來、則無不貴於斯矣。降及三五、迄於漢魏、憲章道廣、牋記欝興。莫不以書代詞、
因辭見意 c)。易曰、書不盡言、言不 d) 盡意、盖書之濫觴也。春秋之時、子産、叔嚮、已有往復。
爰至李斯、樂毅、少卿、子長、殆不可勝紀、並直陳其旨。至於稱謂輕重、闕而不聞。**暨齊梁通賢、頗 e) 立恐統。**
然而古今遷變、文質不同、江南 f) 士庶、風流亦異。致令晚生後學、無所取則。聊 g) 因暇日、纂述諸儀。務存簡要、以裨未悟。
士大夫之風範、盡 h) 在是矣。將以傳諸 i) 子弟、非敢出於戸庭。古今書儀、皆有單複兩體。但書疏之意、
本以代詞。苟能宣心、不 j) 在單複。既能叙致〔以下缺[4]〕

a)「黃門侍郎盧藏用儀例一卷」　P.2616V 作「刪定儀諸家略集并序例第一」。
b)「自」下、原有「來」字、據 P.2616V、P.4036 刪。
c)「意」下、原有「易曰書代詞因辭見意」、據 P.2616V、P.4036 刪。
d)「不」字　據 P.4036 補。
e)「頗」字　原作「賴」、據 P.2616V、P.4036 改。
f)「江南」　P.2616V 作「南北」。
g)「聊」字　據 P.2616V、P.4036 補。
h)「盡」字　據 P.2616V 補。
i)「諸」字　原作「語」、據 P.2616V 改。
j)「不」字　據 P.4036 補。

『儀例』と稱する文獻（書目に見えず）については、いま知るところが無い。ここに引いた文章は、あるいは盧藏用が編んだ同書に彼自身が附した序かもしれない[5]。確かなのは、それが杜友晉（開元・天寶期の人[6]）が著した書儀に見えるという事實である。更にいえば、「齊梁の通賢、頗る標統を立つ」という評價は、一見して「宋齊已來、蓋し顛頽逶迤し、陵頽流靡す」と南朝文學を一顧だにしない前掲の「陳伯玉文集序」と相容れないかに思われる。

[3]P.3849 は段組みが各部分で異なったりするので、行番號は省略に從う。
[4]この後「新定書儀鏡　吉上　凶下　京兆杜友晉撰」との一行を挾んで、更に「周備〔儀〕（P.4036 により補う）、首未（末の誤りか）合宜、何必一封之中都為數紙」とあり續いて單書・複書に關する議論が見える。『儀例』の引用は、そこまで連續しているのかもしれない。
[5]周一良、趙和平（1995）75-76 頁〔周氏執筆〕がこの立場を取る。
[6]杜友晉とその書儀については周一良、趙和平（1995）137-145 頁〔趙氏執筆〕參照。

もとより『儀例』、あるいはその序と思しき文章が盧藏用の手に成るという確證は無い。また、「陳伯玉文集序」には陳子昂を顯彰すべく、先行する六朝文學を否定し去るなど極端に走った側面がある點は考慮せねばなるまい[7]。雙方の文學觀は必ずしも矛盾するというわけではなかろう。

むしろ、注目したいのは「古今の遷變、文質同じからず」という箇所に見える時代に伴った文學の變容を認める視點だ。もちろん、この種の認識は「陳伯玉文集序」を始め歷代の「復古」的な文論にも共通する。ただ、そこではこの變容を否定的に捉える。これに對して、『儀例』の方は表面的には各時代の文章を特段の高下を以て差別していない。

注意すべきはかかる文學史觀が「書疏」（書簡）について發せられた點だ。小論では、強固な尚古主義に基づく「復古」的な文論に比べ、古典文學史全體を通して表面上は遙かに劣勢なこの議論を糸口に、書儀と唐代文學の關係についてごく粗雜な考察を試みたい。

二、「舊儀」への變革

南北朝期に始まり、唐・五代を經て、北宋に至るまで書儀及び類似の文獻は陸續と著されてきた。後に編まれたそれが先行作品を意識していたという事態は容易に想像できる。

S.6537V　大唐新定吉凶書儀一部并序
215　大唐新定吉凶書儀一部并序
216　銀青光禄大夫吏部尚書兼太常卿鄭餘慶撰
217　叙曰、人之有礼則安、無礼則危、此識材通明於儀礼。是以士
218　大夫之家、吉凶之重用。而諸礼經繁綜浩大、卒而難以檢
219　尋。乃有賢士撰集纂要吉凶書儀、以傳廿（世?）所用、寔為濟
220　要。凡有十餘家著述、唯**京兆杜氏**制撰、比諸家儀礼、則今之行
221　用**七十八**矣。然吉凶兩紙多從依之者、何也。或因死喪之初、礼
222　且貴於寧戚、非號之際、情豈假於煩文。矧乎邦家尚脩
223　單表、何哉士庶偏用**復書**。今則錯綜舊詞、較量新礼、雖
224　裁成一紙、亦畢盡哀情。又觀夫、冬至云運環周、今改云
225　晷運推移也。〔以下略〕

P.2646　〔張敖撰〕新集吉凶書儀上下兩卷

[7]盧藏用の文學觀、彼による陳子昂形象化は、永田知之（2002）で嘗て論じた。

7　〔上略〕今朝
8　庭遵行元和新定書儀、其間數卷、在於凡庶、固無所[a]施、不在於
9　此。**採其的要、編其吉凶**、録爲兩卷。使[b]童蒙易曉、一覽無遺、故曰
10　纂要書儀、叙之云耳。吉儀卷上〔以下略〕

a)「所」字　原作「使」、據 P.2556、P.3249、P.4019 改。
b)「使」字　原作「所」、據 P.2556、P.3249、P.4019 改。

鄭餘慶（746～820）『大唐新定吉凶書儀[8]』は、元和六・七年（811、812）頃の成書と思しい。ここで問題となるのは、前節で名を擧げた杜友晉（「京兆杜氏」）の書儀が行われて「七十八（年？）」だが、なお「單表」（單書）ではなく「復（複）書」（一編の書簡を二通に書き分ける様式）が一般的だと述べ、更に書簡用語の新舊にまで言及する點だ。

次に引いた『新集吉凶書儀』は大中（847～859）初年に河西で節度使の下僚（河西節度掌書記儒林郎試太常寺協律郎）の張敖によって作られたと考えられる[9]。同書は『元和新定書儀』（『大唐新定吉凶書儀』）の内容から「其の的要を採り、其の吉凶を編」んで、分かりやすい内容の二卷より成る同書を撰述したという。鄭餘慶と張敖が先行の書儀を意識していたことは明白である。これらに先立つ、次のような記述も傳わる。

P.3849　〔京兆杜友晉撰〕新定書儀鏡〔凡例廿八首〕
〔上略〕凡稱奈何者、相開解語、**舊**[a]**儀**云、不孝奈何、酷
罰奈何、酷罰奈何、斯乃
自抑之詞、非爲孝子痛結之語、可以
吊孝稱奈何、受吊者未宜自開解。今重喪告
答並刪改爲罪苦。餘凶書服輕德依**舊儀**、
随李[a]家書儀亦改此奈何。雖輕喪亦全除語、
恐時或未盡依行、故闕疑、以待後識。

a)「舊」字、據 P.3442 補。
b)「李」字、據 P.4036 補。

[8]周一良、趙和平（1995）146-190 頁〔趙氏執筆〕參照。引用した書儀とは別の部分だが「長報曹主恩」という句が見えるので S.6537V の書寫は曹氏歸義軍期まで降るかと思われる。竺沙雅章（2002）496 頁參照。
[9]『新集吉凶書儀』など晩唐の書儀については周一良、趙和平（1995）200-221 頁〔趙氏執筆〕參照。なお、P.2646 は末尾に「天復八年歳次戊辰二月廿日、學郎趙懐通寫記」という題記を有する。ただし、天復は唐末の元號だが、實際には四年までしかない（901～904）。

親を喪った者自らが「不幸（酷罰）奈何」と稱するのは、その苦しみを「いか」にして和らげるかを求める行爲であり容認できるものではない。從って、「奈何」は「罪苦」に改めるべきだ。「随李家書儀」は既にそうしているが、まだそれは全般的に行われていない[10]。

以上がこの一段の大意だと考えられる。「舊儀」とは『新定書儀鏡』に先行するいずれかの書儀（複數の可能性もある）を指していよう。ともかく、杜友晉が一方では「舊儀に依」りつつ、不適切な箇所は否定して、改變を加えるべきと考えていたことが見て取れる。

書儀がかく時代を逐って内容を變化させる理由は、その淵源[11]、殊に禮制との關わりに求められる。開皇禮、仁壽禮、江都集禮[12]、貞觀禮、永徽禮、顯慶禮、開元禮、元和新禮[13]を初め、關連する令・式、儀注など、隋唐期において禮制度にまつわる著述は乏しくない。

もとより、これら公式の禮が必ずしも社会で勵行されていたわけではなかろう。だが、その影響が民間にも及んでいたことは、疑いを容れない[14]。禮制が不變でない以上、それと關わりの深い書儀も變化せざるを得なかった[15]。本節で見た杜友晉が「舊儀」を擧げたり、あるいは鄭餘慶、張敖が先行の書儀と自らが編纂したそれとの差異に觸れたりするところは、かかる方向より解釈されるべきだろう。

それでは、「變化」したものとは何だったのか。書簡に對象を限ってみれば、まずは書式（目的に應じた複書・單書の使い分け、擡頭・空格といった平闕の手法）が考え得る。

今一つ、これら形式上の事柄とも關わるが、表現の變化も忘れてなるまい。「不孝奈何」を「不孝罪苦」に改めるべきと杜友晉がいうのは、それがそもそも禮法に適わないからだ。その一方、鄭餘慶が指摘する「運環周」（冒頭に一字を脱するか）から「晷運推移」へと冬至についての表現が改まるのは、禮法の觀點より見て

---

[10]『隋書』卷三十三「經籍志二・史・儀注」に「趙李家儀十卷（録一卷、李穆叔撰。）」を著録する。「随李家書儀」はこれを指すか。なお、『北史』卷三十三「李靈傳」に李公緒、字は穆叔、趙郡平棘の人の傳を附す。以上の指摘を含め、ここに擧げた『新定書儀鏡』の一節に關する解釋及び「舊儀」への變革については姜伯勤（1996）427-431、441 頁參照。

[11]姜伯勤（1996）426 頁は「月儀」等の文學性がある尺牘、南朝の家禮、官制の五禮及び儀注、五禮に關する令や式、南北朝以來の民間風俗の五つを書儀が含む要素と述べる。

[12]隋代の禮制やそれが何に基づくかは高明士（1993b）、史睿（1997）參照。

[13]唐禮全般の變遷は高明士（1993a）及び姜伯勤（1996）442-458 頁に詳しい。

[14]高官の鄭餘慶が編んだ官制にも近い『大唐（元和）新定吉凶書儀』をより民間の事情に適應すべく簡略化した『新定（新集）吉凶書儀』の存在が、書儀とそれを通した公式禮の廣範な普及、遅くも晩唐におけるその俗化の象徴となる。那波利貞（1974）68-71 頁參照。

[15]書儀と公式の禮書との關係は、姜伯勤（1992）1-28 頁、姜伯勤（1996）425-441 頁、周一良、趙和平（1995）285-301 頁〔周氏執筆〕、呉麗娛（2006）參照。

必須の變化というわけではない。

そこで一つの假定が可能になる。即ち、制度（禮制や儀注、令・式）のみならず、時代による流行も書儀、それも書簡の表現という方面に反映されるのではないか、がそれだ。次節では一旦、敦煌文獻より離れて、主に傳世文獻からこの假說の妥當性を考える。

三、傳世文獻に見える「書儀」

さて、前節でも擧げた鄭餘慶『大唐新定吉凶書儀』は、その序によれば韓愈（768～824）が撰述に關わったという。第一級の文學者である彼の關與が事實とすれば、書儀と後世に傳わる詩歌文章、いわゆる文學作品との關係を象徵し得るかもしれない。ただ、これは不確實な要素をも含む[16]。本節では、まず次の書簡に見える議論を題材にこの問題を考えたい。行論の都合上、四段に分けて拔粹・引用する。

> 〔上略〕①吾兄不知愚無似、猥以書見攻其非。且曰、我與子中外屬、當爲伯仲。其抵我書、執禮太卑。按**舊儀**、凡兄姊之齒有唯無伏、它以是爲衰。其於匹敵、即前云願後云白而已。大曆初、李贊皇、賈常侍猶守之無渝。二公何人也、我與子何人也。烏有從末俗以姑息爲禮、而不虞識者所窺耶。其旨云爾。……夫禮之文爲箸定、宜尊宜卑、猶四方上下左右前後。稱謂一立、古先聖賢所不敢移。（唐・劉禹錫『劉賓客文集』卷十「答道州薛郎中論書儀書」）

“「舊儀」では兄や姉への書簡で「唯」（惟に同じ、おもう）は用いても、それに「伏」（ふして）を冠しはしない。同格者宛ての手紙では、冒頭に「願」（ねがわくは）、末尾に「白」（もうす）を使う。大曆（766～779）初年の李贊皇（李栖筠〔贊皇公〕）、賈常侍（賈至〔右散騎常侍〕？）も然り、なぜ君は卑屈過ぎる言葉遣いをするのか？”。劉禹錫（772～842、文中の「愚」）は「道州薛郎中」こと薛景晦（刑部郎中・道州刺史、文中の「（吾）兄」）に批判された經驗から、筆を起こす。

> ②……兄長於大曆初、嘗接前輩游、故其風采去承平時不甚相遠。愚長於貞元中、所與游皆後來諸生、然猶於稠人廣坐時聞老成人之說、灌注耳目、斑斑然不絶如綫。其後爲御史、四方諸侯率以書來賀、校其禮皆駮不同。唯洪州牧李常侍巽、潭州牧楊中丞憑始言**執事**、其它如儀。而

[16]S.6537V の中に、鄭餘慶が書儀の編纂に際して、「司門員外郎韓愈等」と議論したという記述が存在する（序文のうち、第二節で引用した部分の後に見られる）。ただし、韓愈には職方員外郎に就いた經驗はあるが、その司門員外郎就任を述べる資料はいま傳わらない。

同在憲司者、咸以二牧爲**不遜**。愚時與其僚**柳宗元**昌言於衆曰、監察八品也、當衣碧、言執事爲宜、不當經怪。

批判の背景に存在するのは、世代の違いだ。薛景晦は大曆の初め、劉禹錫は貞元（785～805）年間に青少年期を送った。李巽や楊憑が監察御史（正八品上）となった劉禹錫に書簡で「執事」と呼び掛けた點を「不遜」と捉えた人々を、彼と柳宗元（773～819）とが本來はそれが正しいと諭したのも、時代による書簡用語への認識の差と解するべきだろう。

③……及**謫官**十年、居僻陋不聞世論、所以書相問訊、皆昵親密友、不容變更。而時態高下、無從知耳。前年祗召抵京師、偶故人**席徹**談、因及是事、乃知**與十年前大殊**。至有同姓屬尊、致書於屬卑而貴者、其紙尾言**起居新婦**、夔獨竊笑之而已、然猶不敢顯言詆之。

劉禹錫は十年に渉る地方への「謫官」を經て都へ召還された後、再び連州（現廣東省）に左遷された。この書簡は再左遷の後、元和十二年（817）頃に書かれたと推測される[17]。

「謫官十年」（806～815）の間も友人と書簡の往來は續いていた。當時は氣付かなかった「十年前と大いに殊な」る手紙の用語を劉禹錫が意識したのは、短い長安歸還時期のことだ。明確に批判こそせぬが、高位の卑屬に向けた「起居新婦」（相手の妻の安否を問う言葉）という卑下し過ぎる言葉遣いを舊友・席夔が苦々しく思っていた點は、間違いあるまい。

④……曾子有云、君子之愛人也以德、細民之愛人也以姑息。謂古人悉朴且賢、則斯言不當發於洙泗間耳。葢三代之尚、未嘗無弊。**由野以至僿**、豈**一日之爲**。漸靡使之然也。嫉其弊而救之以歸於中道、必俟乎薦紳先生德與位并者、揭然建明之、斯易也。……竊觀今之人、**於文章無不慕古**、甚者或失於野。於**書疏**獨陋古而汨於浮。二者同出於言而背馳。非不能盡如**古**也、葢爲古文者**得名聲**、爲今書者無悔吝、如水走□爲〔以下闕〕

「野由り以て僿に至る」、質樸から（長年月を經て）輕薄に陷った、今日の好ましからぬ社會は「一日」で「爲」ったのではないと劉禹錫はいう。この弊害を除去するには「中道に歸する」必要がある。以下、文章について彼はかかる持說に基づく主張を展開する。

[17]羅聯添（1986）329 頁、卞孝萱（1963）92-93 頁。

「今の人」は「文章に於いて古を慕わざる無」いのに、「書疏に於いて獨り古を陋 (いや) しみて浮に汨 (みだ)」れている。「文章」の一分野ながら、「書疏」には特異な點があるというのだ。

劉禹錫は白居易（772〜846）と共に「劉白」と併稱される中唐の代表的な詩人である。彼らが生きたのは、折しも韓愈ら古文家が本格的に活動し始めた時代でもあった。

この文章（殘存部）の末尾にいう「古文」が文學史上の概念と含意を等しくするかは、なお留保の餘地があろう。ただ、「今書」とそれを對置することは、疑いを容れない。

即ち、中唐人は「名聲を得」るためにも敢えて「古文」を作る一方、社交等の必要上、著す書簡では「古」たることを必ずしも追求しなかった。劉禹錫はこう述べている。

さて、ここで見落とせないのが、「道州の薛郎中に答えて書儀を論ずる書」という表題である。書目や敦煌文獻を除く唐人の著述に「書儀」（著作、「書簡の儀禮」いずれの意味か明確ではないが）なる言葉が使われるのは、管見の限りでこのタイトルにおいてのみだ。

表題が本來のままか疑問は殘るが[18]、「書儀」と稱し得る儀禮（の書）に基づいて、唐人が確かに書簡を著していた事實を示す點でもこの手紙はより注目されて然るべきだろう[19]。以下、劉禹錫が論じた書簡における人物の呼稱について、注脚となる資料を擧げておく。

> 身卑致書於宗屬近戚、必曰座前、降几前之一等。案座者坐於牀也、言卑末之使、不當授受、置其書於所座牀之前、俟隙而發、不敢直進之意。今或貽書中外、言座前則以重、空前則以輕、遂剏坐前、無義也。其字既不居下、是使前人坐於地、非禮之甚歟。不爾、直云座字空前可矣。
>
> 至如閤下字、案禮云、凡諸侯朝覲會遇、儐介將命、文書不相指斥。是以天子則曰陛下、太子曰殿下、公卿已下曰閤下、或云執事、足下、侍者。應劭云、此蓋進漸之辭也、今無貴賤、通書皆云閤下、其執事、足下不施用矣。侍者二字移於道者、僧徒、山人、處士之儔。噫、豈獨斯一二字乎。相借與行路之人、諂其富貴、至有下慈孝之字、斯不當謙、奈體何。（唐・李匡乂『資暇集』卷中「座前」）

> 古者三公開閤、郡守比古之侯伯、亦有閤、所以世之書題有閤下之稱。前輩呼刺史、太守、亦曰節下。與宰相大僚書、往往呼**執事**、言閤下之執事人耳。劉子玄爲史官、與監修宰相書、呼足下[20]。韓文公與使主張僕射

[18]引用の底本は南宋紹興八年廣川董氏跋刊本（民國徐森玉景印）、日本の大安も 1967 年に同版本を景印している。なお「答道州薛郎中論書儀書」の表題は、諸本共に異同は無い。

[19]山田英雄（1987）159-160 頁がこの書簡に言及する他、金文京（2009）28-29 頁及び王三慶（2009）204-205 頁に分析が見える。

[20]『舊唐書』卷一百二「劉子玄傳」に劉知幾（字は子玄）が宰相且つ監修國史を兼ねる蕭至忠に宛てた書簡を載せ、その末尾に「惟明公足下哀而許之」とある。

書、呼執事[21]、即其例也。其記室本繫王侯賓佐之稱、他人亦非所宜。執事則指斥其左右之人、尊卑皆可通稱。侍者、士庶可用之。近日官至使府御史及畿令、悉呼閣下。至于初命賓佐、猶呼記室。今則一例閣下、亦謂上下無別矣。其執事纔施於舉人侍者、止行于釋子而已。今又布衣相呼、盡曰閣下。雖出于浮薄相戲、亦是名分大壞矣。又中表疎遠卑行、多有座前之目、尤可懲怪。夫閣下去殿下一階、座前降几前一等、此之乖僭、其可行耶。宗從叔姑及姨舅之行、施之可也。近見房州刺史李使君所著資假、亦與此說相符耳。（唐・趙璘『因話録』巻五「徵部」）

「執事」の語は本來、相手への呼び掛けにおいて、身分を問わず廣く用いられていた。それらは「閣下」など地位によって限定される呼稱と併用されていた。この事實は盛唐期の杜友晉（注 6 參照）が著したとされる次の『書儀鏡』（雙行注部分）よりも明らかだ。

S.329+S.361　〔杜友晉〕書儀鏡

223　四海書題 内外文官三品云閣下、左右丞相、節度使云節下、五品云記室、已下侍者、左右唯執事之語、不論重平並通用。内外武官三品云麾下、太守管軍亦

224　云麾下節下、折衝已下無管押與文官五品已下同。〔以下略〕

先に引いた劉禹錫書簡で「執事」の語が「不遜」と非難された一節を思い起こされたい。中唐に存在したこの傾向は、晩唐[22]に至ってより顯著になっていたのである。『資暇集』の原注、『因話録』の誰彼構わず「閤（閣）下」を以て呼ぶという記述が、それを如實に示す。

興味深いのは、『因話録』が韓愈の文章を例に擧げることだ。「使主張僕射」は檢校尚書右僕射・徐泗濠節度使の張建封（736～800）を指す。韓愈は一時、その幕府に所屬した。

自らの上司でもある彼に向けて、韓愈は「執事」の呼稱を用いた。劉禹錫の記述が事實ならば、それは當時、張建封級の「大僚」に對しては輕きに失する嫌いがあっただろう。

假に時代遲れを承知で、こう呼んだのならば、あるいはこれも韓愈による「古文復興」意識の現れと捉えられるかもしれない。少なくとも、『因話録』にこれが記される背景には、古來の「禮」に則った呼稱を韓愈は用いているという撰者・趙璘の認識が存在しよう。

[21]韓愈（謚は文）『昌黎先生集』巻十七「重上張僕射」の冒頭近くに「以擊毬事諫執事者、多矣」とある。

[22]『因話録』の成書は僖宗朝（873-888）の初年か。その原注に見える以上、『資暇集』の成立もそれ以前ということになる。岑仲勉（1960）219-223 頁參照。

いずれにもせよ、公式の「禮」と異なる一種の流行が「書儀」に含まれる點は、本節で述べ來たったところより明らかだ。實は、時代の趨勢に從う意識的な文章觀は唐代、他の一分野でも顯著に見られた。次節以降で分析する「詩格」が、それである。

四、詩格の特徵

「詩格」とは唐代に盛行した詩歌批評書の總稱だ。北宋中頃に出た「詩話」が詩歌關連の隨筆だったのに對して、作詩指南の性格が色濃い。同類の著述に各々辭賦と駢文を扱う「賦格」、「四六格」がある（扱う文體は必ずしも一種に限定されるわけではない）。

後に引く『筆札華梁』など著名人に假託された可能性のある作品も多く、それだけに、俗書の性格も看取される。いま、「詩格」がもつ内容上の特徵を四つにまとめておく。

（1）對偶、聲律など作詩上の技巧・禁忌の記述に相當な力を注ぐ。

> 第一、的名對 又名正名對、又名正對、又名切對。
> 天地、日月、好惡、去來、輕重、浮沈、長短、進退、方圓、大小、明暗、老少、凶儜、俯仰、壯弱、往還、清濁、南北、東西、如此之類、名正對。詩曰、東圃青梅發、西園綠草開。砌下花徐去、階前絮緩來。又曰、送酒東南去、迎琴西北來。（空海『文鏡祕府論』〔以下、『祕府論』と略す〕東卷「二十九種對」）

『祕府論』の正對（的名對などともいう。最もオーソドックスな對句）を解說した部分から、傳・唐・上官儀（607？ ～664）『筆札華梁』の佚文と思しき一節を中心に引用した[23]。『祕府論』中の引用文によれば、同書は對句を計九種に分類していた可能性がある。また同じ項に引く初唐に編まれた別の詩格、佚名『文筆式』では、より多く一三類に細分している。更に、『文筆式』は次に掲げる「平頭」を初め聲律上の禁忌一四種類を列擧もする。

> 第一、平頭
> 平頭詩者、五言詩第一字不得與第六字同聲、第二字不得與第七字同聲。同聲者、不得同平上去入四聲。犯者名爲犯平頭。平頭詩曰、芳時淑氣

[23]唐・五代の「詩格」は次節に引く『詩式』を除けば、概ね散佚して、他文獻に引用のみが殘る。これらは多く書名を明示しておらず、佚文の歸屬を判別するのは容易ではない。小論では『祕府論』の底本とした興膳宏（1986）の他、張伯偉（2002）の說に從った。

清、提壺臺上傾。如此之類、是其病也。又詩曰、山方翻類矩、波圓更若規。樹表看猿掛、林側望熊馳。又詩曰、朝雲晦初景、丹池晩飛雪。飄枝聚還散、吹楊凝且滅。(『祕府論』南卷「文二十八種病」所引『文筆式』)

(2) 名數(數稱、數詞+名詞)によるややお題目めいた技巧の分類が多い。

八階
一詠物階。二贈物階。三述志階。四寫心階。五返酬階。六讚毀階。七援寡階。八和詩階。第一、詠物階。詩曰、雙眉學新綠、二臉例輕紅。言模出浪鳥、字寫入花蟲。又曰、灑塵成細跡、點水作圓文。白銀花裏散、明珠葉上分。(『祕府論』地卷「論體勢等・八階」所引『筆札華梁』。『文筆式』もほぼ同じ内容を含んでいたと考えられる)

他の「階」(手引きの意か)の實例は省略する。しかし、『筆札華梁』だけでも「八階」、「六志」、「属對」(本節(1)で擧げた「的名對」など九種の對句を例示)、「七種言句例」、「文病」(聲律上の禁忌八種を擧例)、「筆四病」の各項が見られる。『文筆式』等も同じ傾向を共有する。

(3) 時には隨分と卑俗にも思える作詩法上の指導が見られる。

凡詩人、夜間牀頭、明置一盞燈。若睡來任睡、睡覺即起。興發意生、精神清爽、了了明白。皆須身在意中。……凡作詩之人、皆自抄古今詩語精妙之處、名爲隨身卷子、以防苦思。作文興若不來、即須看隨身卷子以發興也。……舟行之後、即須安眠。眠足之後、固多清景、江山滿懷、合而生興。須屏絶事務、專任情興。因此、若有製作、皆奇逸。(『祕府論』南卷「論文意」所引傳・王昌齡『詩格』)

この『詩格』とはジャンル名ではなく書名であり、盛唐の著名な詩人・王昌齡が著したとされる。「燈を用意しておけ」、「メモを攜帶せよ」など極めて具體的な指示といえよう。

(4) 同時代の作品を模範的な作例として學習の對象に擧げる。

齊梁調詩
張謂:題故人別業詩曰、五言:平子歸田處、園林接汝濆。落花開戸入、啼鳥隔窗聞。池淨流春水、山明斂霽雲。晝遊仍不厭、乘月夜尋君。(『祕府論』天卷「調聲」所引『詩格』)

張謂(743進士、777生存)は王昌齡(690? ~756?)より後輩である。彼の詩が引用されることは、『詩格』に後人の手が入っている證據かもしれない。ただし

空海（804～806 在唐）の『祕府論』に見える以上、同書の成書（詩歌の補入）は八世紀末まで遡る。

「齊梁調」とは、唐人がことさら南齊・蕭梁期のスタイル（内容・聲律雙方の要素を含む）を模倣した詩風を指す。従って、唐詩が模範例とされること自體は不思議でもない。だが、それにしても全く同時代の作品を擧げるのは、前代の文學批評に類例が乏しい現象だ。次節では、この（4）と特に關連する「詩格」の基本的な立場を考察してみたい。

五、詩格における「古」の認識

> 夫文章興作、先動氣。氣生乎心、心發乎言、聞於耳、見於目、録於紙。意須出萬人之境、**望古人於格下**、攢天海於方寸。詩人用心、當於此也。（『祕府論』南卷「論文意」所引『詩格』）

「古人を格下に望」むという心構えは創作上、當然のものでしかあり得ない。しかし、「古人」の祖述を重視する中國の古典文學史上、唐以前・以後を通じて、その宣揚はそう多くあるまい。このような主張は、やや遲れる皎然の詩論において、より明確に打ち出される。

皎然（720 頃～790 以降）は唐代を代表する詩僧で、著作に『詩議』（佚文のみ傳存）と『詩式』五卷がある。とりわけ晩年に著した後者は唐代の詩格中で質量共に傑出しており[24]、後世の詩論等に與えた影響も絶大であった。いま、その兩著より各一條を引用する。

> 又云、凡詩者、**惟以敵古爲上**、不以寫古爲能。立意於衆人之先、放詞於羣才之表、獨創雖取、使耳目不接、終患倚傍之手。（『祕府論』南卷「論文意」所引『詩議』）

> 評曰、前無古人、獨生我思。**驅江鮑何柳爲後輩**、於其閒或偶然中者、豈非神會而得也。〔以下略〕（『詩式[25]』卷五「立意總評」）

「惟だ古に敵するを以て上と爲」す、あるいは「江鮑何柳（江淹、鮑照、何遜、柳惲。共に六朝の著名な詩人）を驅りて後輩と爲」すなど、本節冒頭で見た王昌齡のそれ以上に明快なスローガンといえる。前節の末尾に引く同時期の詩を手本に掲げた『詩格』の態度も背景にかかる考えが存してのものではなかったか。更に『詩式』から二條を引いてみる。

[24]『詩式』や皎然に關する筆者の基本的な立場は、永田知之（2008a）を參照されたい。
[25]底本は張伯偉（2002）を用いる。なお、小論の「詩格」理解は同書に多くを負う。

評曰、作者須知復變之道。反古曰**復**、不滯曰變。若惟復不變、則陷於相似之格、其狀如駑驥同厩、非造父不能辨。能知復變之手、亦詩人之造父也。以此相似一類、置於古集之中、能使弱手視之眩目、何異宋人以燕石爲玉璞、豈知周客噓嘲而笑哉。又**復變二門、復忌太過**。詩人呼爲膏肓之疾、安可治也。如釋氏頓教、學者有沈性之失、殊不知性起之法、萬象皆眞。夫變若造微、不忌太過。苟不失正、亦何咎哉。如**陳子昂**復多而變少、**沈宋**復少而變多。今代作者、不能盡舉。〔以下略〕（卷五「復古通變體 所謂通於變也」）

評曰、**盧黃門**序評賈誼、司馬遷：憲章禮樂、有老成之風、讓長卿、子雲：王公大人之言、溺於流辭。又云、道喪五百年而有陳君乎。予因請論之曰、司馬子長自序云、周公卒五百歲而有孔子、孔子卒五百歲而有司馬公。邇來年代既遙、作者無限。若論筆語、則東漢有班張崔蔡、若但論詩、則魏有曹劉三傅、晉有潘岳、陸機、阮籍、盧諶、宋有謝康樂、陶淵明、鮑明遠、齊有謝吏部、梁有柳文暢、呉叔庠、作者紛紜、繼在青史、如何五百之數獨歸於陳君乎。藏用欲爲子昂張一尺之羅、蓋彌天之宇、上掩曹劉、下遺康樂、安可得耶。〔以下略〕（卷三「論盧藏用陳子昂集序」）

前者では「復變の二門、復は太だ過ぐるを忌む」といって、「復」（「古に反る」）過多の弊害にのみ言及する。文學上の「變」（「滯らざる」）を重視する皎然の視座は明らかだ。引用の末尾で「陳子昂」は「復」、「沈宋」（やはり初唐の詩人で律詩の形式を完成させた沈佺期と宋之問）は「變」が多いと斷じる。彼がどちらを高く評價するかはいうまでも無い。

“六朝期五百年にも優れた詩人はおり、現に劉宋・謝靈運（封爵は康樂縣侯）らが出た。”。かく要約できる後者において、槍玉に上がるのが第一節で引用した「陳伯玉文集序」だ。南朝後期より唐初までの文學を排斥したその文學史觀を、ここでは激しく批判する。實作だけでなく、文學史に占める位置についても、皎然が陳子昂に與えた點數は辛いといえる[26]。

かかる反「陳伯玉文集序」ともいうべき文學觀は、『儀例』の序（？）、即ち第一節に引く『新定書儀鏡』中の一段に極めてよく類似する。「陳伯玉文集序」を批判する皎然の見解が同じ盧藏用の名を冠する文章のそれと相通じるのは、やや皮肉な現象だろう。

時代ごとに文學は變化し、またそれら各々に積極的な價値を認める。書簡と詩

[26]本節で論じた『詩式』等の文學史觀については、永田知之（2008b）も參照されたい。

歌、對象の文體こそ異なれ、このように「古」を絶對視しない態度は書儀と詩格雙方に散見する。こういった言説が何ゆえに存し得たか、それを探るためまず兩者の比較を試みたい。

六、敦煌文獻中の詩格

最初に、敦煌出土の詩格（現時點で唯一確認される例）と思しき斷片を引用する。

S.3011V　〔雜寫[27]〕
〔上略〕**弟一的名對**。弟二聯綿對〔中略〕
〔以下倒書〕**詩格**一部
弟一的名對。弟二隔句對。弟三雙擬對。弟四聯
綿對。弟五互成對。**弟六異類對**。弟七賦體對。
弟一的名對。**上句**〔中略〕
詩格一部、弟一的名對。
詩格一部**天青白雲外、山俊紫微中。鳥飛隨影去、花落逐搖風**。〔以下略〕

同じ寫本正面に書かれた『論語集解』卷六末尾に「金光明寺孝郎」（名を缺く）、「戊寅年十一月六日僧馬永隆手寫論語一卷之耳」、背面の終わり近くに「戊寅年十月十七日僧馬永隆撰」とある。この「戊寅」の候補には、儀鳳三年（678）、大中十二年（858）、後梁・貞明四年（918）[28]の各説が存する。「弟一的名對」以下も、同じ時期に書寫されたものか[29]。

なお、P.2250V「龍興寺、乾元寺、開元寺、永安寺、金光明寺儀狀」に「金光明寺」の僧として「法律永隆」の名が見える。S.3011V 中の「僧馬永隆」と同一人物かもしれない[30]。

さて、ここにいう「詩格一部」がいつの時代の誰による著作か、それは分かりかねる。ただ、この「的名對」（前々節（1）参照）を初めとした對句の名稱・順序は『祕府論』東卷「二十九種對」に列擧されるそれの冒頭七種と一致する。更に、次のような佚文も存在する

[27]この寫本には書簡や各種文書など無關係の文獻が散在しているので、行番號は省略する。
[28]陳鐵凡（1961）245-246 頁が 678 年説、Lionel Giles（1957）232 頁、李正宇（1987）34 頁、徐俊（2000）874-875 頁が 858 年説、池田温（1990）457 頁が 918 年説を取る。
[29]姜亮夫（2002）350 頁は張議潮以降の敦煌文獻に「倒書」は全く見えないという。ともかく、初唐の 678 年にまで S.3011 の書寫をさかのぼらせることは疑問である。次注參照。
[30]藤枝晃（1959）314-320 頁は、敦煌の僧尼籍複數を比較檢討した結果、P.2250V の書寫を 925～930 年頃かと推測する。

第一、的名對 又名正名對、又名正對、又名切對 。
的名對者、正也。凡作文章、正正相對。**上句**安天、下句安地。上句安山、下句安谷。上句安東、下句安西。上句安南、下句安北。上句安正、下句安斜。上句安遠、下句安近。上句安傾、下句安正。如此之類、名爲的名對。初學作文章、須作此對、然後學餘對也。……

第六、異類對

……詩曰、**天清白雲外、山峻紫微中。鳥飛隨去影、花落逐搖風**[31]。(『祕府論』東卷「二十九種對」)

「的名對」の解說は『文筆式』から、「異類對」(カテゴリーを異にした言葉同士を對應させる)の例句は『筆札華梁』から引用されたと考えられている。『文筆式』と『筆札華梁』については前々節(1)を參照されたい。いま、S.3011V とこれらの佚文を比較してみよう。

同一書かはともかく、兩者が同じ「詩格」類の文獻を引いたものであることは、歴然としている。形式の共通(S.3011V に「上句」とのみある箇所は、實は『祕府論』に見える「的名對」の解說「上句安天」云々の一部であろう)、「天青(清)白雲外」で始まる例句の一致がそれを證明する。敦煌文獻と「詩格」所引詩句の對應例は、この他にも存在する。

P.3353V 〔五言雜詩叢鈔[32]〕
〔上略・倒書〕天地心間淨、日月眼□
明。仁作千年貴、金銀一代榮。法榮。〔以下略〕

第五、互成對
……天地心間靜、日月眼中明。麟鳳千年貴、金銀一代榮。(『祕府論』東卷「二十九種對」)

一句の内にも對となる文字(「天」と「地」など)を含ませる對偶を「互成對」という。『祕府論』が擧げるその例句は、『文筆式』からの引用と見える。「天地心間靜(淨)」云々という詩句(撰者、詩題は未詳)は、傳世の文獻においてはここにしか登場しない。直接の引用かは措くとしても、P.3353V の書寫者は「詩格」中の詩句をここに記したと思しい。

[31] この例句のうち、後二句は南宋・陳應行輯『吟窗雜録』卷一に收める舊題・魏・文帝『詩格』にも、異類對の例として引用される。

[32] この表題は徐俊(2000)224 頁に倣った。そこには法榮を河西管内都僧統に任ぜられた僧侶と同定した上で、P.3353V の書寫を吐蕃占領期以降とする說が見える。なお、同寫本は互いに關係が無い文書等を複數内包しており、ここでは行番號を省略した。

S.3011V と P.3353V の鈔寫及び前者に見える「詩格」の撰述[33]、これらの時期が共に不明確な點は否めない。また、かくもわずかな實例より分析を試みることには困難が伴おう。

ただ、少なくとも、詩格類の敦煌における存在、これは否定できない事實だろう。周知の如く、書儀は傳世作品が少なく、敦煌寫本の發見がその研究進展の大きな契機となった。S.3011V、P.3353V は、雜然たる文書類を書き連ねた寫本だ。その中に脈絡も無く登場する點が、書儀と同樣に詩格も同じ敦煌という世界で比較的普及していたと示すのではないか。

この上は、内容面に蹈み込んで兩者を比較すべきところだが、いまその餘裕は無い。小論では以下、やや外縁部の事柄を考えてみたい。まず、見やすい表題を取り上げる。

> 唐・崔融『唐朝**新定**詩格』、徐隱秦（泰）『**開元**詩格』、王起『**大中新行**詩格』、鄭谷、黄損『**新體**詩格』[34]
>
> 劉宋・王儉『**新修**書儀』、梁・鮑泉『**新**儀』、趙燈（時代未詳）『**新修**書儀』、佚名『**新**儀』、唐・杜友晉『**新定**書儀鏡』、唐・鄭餘慶『大唐**新定**吉凶書儀』、唐・張敖『**新定**吉凶書儀』、『**新集**諸家九族尊卑書儀』、佚名『**新集**書儀』、佚名『**新集**雜別紙』、佚名『**新集**兩親家接客隨月時景儀』、佚名『**今時**禮書本』、後唐・劉岳『**新定**書儀』[35]

開元（713〜741）、大中（847〜860）はいうまでもなく共に唐代の元號だ。それらや「新（修、定、集）」、「今時」といった語彙を含む書名は何を意味するのか。

思うに、その命名には詩文の同時代性、所謂「今樣振り」を重視する考え方が働いていたのではないか（これらが原著者自身による書名かはいま問わない）。書儀、詩格の全てがそうではないにせよ、前掲の表題から時流に遅れまいとする願望は讀み取れるだろう。

書名に關していえば、そもそも「儀」、「格」は、手本の意を有する文字だ。即ち、「書儀」や「詩格」とは、それを讀めば、書簡や詩歌が著せると標榜したジャンル名であり、書名なのである。次節では、このマニュアルとしての性格から兩者の共通點を考えてみたい。

---

[33]張伯偉（2002）110 頁は對句の擧例などから、その内容は初・盛唐間の詩法と判斷する。

[34]張伯偉（2002）參照。佚文は本文に、表題のみ傳わる詩格の記事は 570-574 頁に收める。

[35]敦煌出土の書儀は張小艷（2007）30-34 頁の、書目所載・傳世のそれは王三慶（2009）192-193 頁の表に各々書名・寫本番號（出典）が圖示される。

七、書目より見たマニュアルとしての書儀と詩格

歴代の書目は、書儀、殊に吉凶書儀を、多く「儀注類」に置く[36]。書簡の範例を初め禮法全般が對象とされるのだから、それも當然だが、一方で次のような分類も存在する。

> 十八　儀注家　大唐書儀十卷　大唐書儀十五卷　宋儀注十卷　文儀注十卷　**新儀**卅卷（冷泉院）　月儀四卷（許敬宗撰）　十二月儀七卷　新修書儀五卷（趙燈撰）　九族書儀一卷（隋李德林撰）　鮑昭書儀一卷　書竿儀廿卷（謝朏撰、目録百五十四卷私略之）
> 卌卌　惣集家……文儀集一卷……大唐新集書儀一卷（藤原佐世『日本國見在書目録[37]』）

九世紀末、日本人が著したこの書目では、『大唐書儀』等を儀注家に、恐らくはそれと關わる『大唐新集書儀』を惣集家に分類する。前者は中國の書目と同じだが[38]、後者の（吉凶？）書儀を集部に置く態度は、その機能のうち書簡範例集たる側面を突出させたものといえるのではないか。實際、日本の書目において、類似の例は他にも存する。

> ……(1) 詩賦格　一卷……〔長安所求〕……
> 大唐西明寺故大德道宣律師讚　一卷　天台大師答陳宣帝書　一卷　(2) 大唐新修定[a)] 公卿士庶内族吉凶書儀　三十卷（鄭餘慶重修定）　(3) 開元詩格　一卷（徐隱泰字肅然撰[b)]）[39]　(4) 祇對儀　一卷　歎德文　一帖　道情　一帖[c)]　判一百條　一卷（駱賓王撰）　祝元膺詩集　一卷　杭越寄和詩集　一卷　詩集　五卷　法華經二十八品七言詩　一卷……〔以上、揚州所求[40]〕……
> 　　承和十四年月日入唐天台宗請益傳燈法師位圓仁上（圓仁『入唐新求聖教目録[41]』）
>
> a)「定」　青蓮院本作「宣」。
> b)「徐隱泰字肅然」　據青蓮院本補。
> c)「歎德文　一帖　道情　一帖」　據青蓮院本補。

[36]月儀は小學類、表狀箋啓書儀は文集類に多く分類される。呉麗娛（2002）79 頁參照。
[37]矢島玄亮（1984）97-98、234 頁參照。『文儀集』は純粹に作文法を説く文獻かもしれない。
[38]經史子集の部立てこそ見えないが、その下部分類や順序について『日本國見在書目録』は『隋書』「經籍志」を蹈襲する。狩野直喜（1973）89 頁など諸家、この點に異論は無い。
[39]『注進勘定前唐院見在書目録』によれば 1095 年の調査では『開元詩格』はなお比叡山に現存、1212 年書寫の『前唐院法文新目録』にその書名は見えない。兩目録は延暦寺東塔南溪所藏、小野勝年（1965）、武覺超（2008）58-99 頁參照。
[40]揚州所求書は多く『日本國承和五年入唐求法目録』、『慈覺大師在唐送進録』にも見える。
[41]前注所掲の目録と共に大正新脩大藏經第 55 册所收、ここでは、高山寺本を底本に青蓮院本で校勘した小野勝年（1969）593、605、607 頁による。

承和十四年（847)、唐土から歸國して後に、天台宗の高僧たる圓仁がまとめた請來物の目録より引用した。ここに擧がった書名のうち、詩格、書儀であることが明確なのは (1)、(2)、(3) の三種類だ。他に (4) についても「儀禮作法を說けるものか」という可能性が夙に指摘される[42]。

> ……都利聿斯經一部五卷　七曜禳災決一卷　七躍（曜?）二十八宿曆一卷　七曜曆日一卷　六王名例立成歌一部二卷　明鏡連殊一部十卷　祕録藥方一部六卷 兩策子　**削繁加要書儀一卷** 元和年中者　西川印子唐韻一部五卷　同印子玉篇一部三十卷
>
> **右雜書等雖非法門世者所要也**。大唐咸通六年從六月迄于十月、於長安城右街西明寺日本留學僧圓載法師院求寫雜法門等目録具如右也。日本貞觀七年十一月十二日却來左京東寺勘定。入唐請益僧大法師位 爲後記之（宗叡『新書寫請來法門等目録[43]』）

同じく入唐僧たる宗叡（眞言宗に屬す）が持ち歸った書籍のリストから一部を拔萃した。唐の咸通六年、日本の貞觀七年（865）の紀年をもつこの目録は『削繁加要書儀』と題した文獻を「法門に非ずと雖も世者の要する所」たる「雜書」、實用的な書籍類の中に著録する。

圓仁は書儀を讃・書簡・判・詩歌など各種の文體で著された文學書の中に交えていた。宗叡はこれほど多樣ではないが、やはりそれを歌・連殊（珠）といった文獻の中に置く。

もとより、兩目録は佛僧が撰者なだけにいわゆる内典・外典の別に從った分類を取る。具體的には、大部分を占める佛典の外に、雜然と非佛典を竝べる形式ということだ。

整然とした四部による排列ではないので、その分類意識は讀み取り難い。だが、それにしても、古來の分類法に從い、書儀を儀注類に置き續けた中國の書目とは大きく異なる。

また興味深いのは書儀を『開元詩格』や『唐韻』のような作詩關連の文獻と隣接させる配置だ。宗叡に至っては、韻書・字書以外に曆占・藥方も含む實用書の中にそれを置く。この事實は詩歌と書簡、少なくとも指南書たる詩格と書儀との近緣性を示すのではないか。

外國語の文言文を操る困難は、想像に難くない。それだけに日本人が書儀のもつ作文法としての性格を強く意識した點は、奇妙ではない。ただし、事は果たし

[42]神田喜一郎（1984）297 頁。
[43]大正藏第 55 册 1111 頁、宗叡（809〜884）は 862 年に入唐、865 年に日本へ歸國した。

てそれだけで説明し得ようか。むしろ、中國人自身にとって書儀は詩格と同じ範疇に在ったのではないか。

即ち、中國の書目が禮法という起源を引きずって儀注に分類し續けたのに對して、そこから自由な日本人は實際の用途に應じて、書儀を集部書と扱ったのかもしれない。實際は、書籍自體の傳來と同時に、中國人の認識もが日本に流入したのではないか。『日本國見在書目録』や入唐經驗があり、中國社會の實狀を知る圓仁、宗叡の請來録を見るにつけ、その可能性は考究されてよいと思われる。

八、おわりに

書儀に當たる文獻は早く南北朝に由來し、それらは禮制の影響下に在った[44]。また書簡は、第一義的には實用の文章だ。その形式・表現などが禮法の他にも、時代の流行から直接の影響を受けることに、何の不思議も無い。書簡の範例集たる書儀と盛行の時期が重なる上、敦煌文獻や日本の書目に揃って見える（前々節、前節參照）文獻、それが詩格なのである。

書儀と詩格の間に關連を見出そうとすることは、從來まず無かった。古典文學の主流である詩歌と、書簡、特に實用性が色濃いそれを同一の地平では論じられないという先入主が、そこには働いていたろう。實際には、前近代において作詩は社交の具としての性格を強くもっていた。兩者を使用する階層・目的が共通だった可能性は記憶に止められてよい。

そもそも、作詩文教則本の著述とは、一定程度の質をもつ作品がどの時代にも生産され得るという思想的基盤の上に立つ。詩格が「古」に拘らぬ文學觀をもつのは、その意味で當然だ。マニュアルとしての共通性を認めるならば、書儀についても、同じことがいえる。

この種の文章觀は、傳世の文獻中にそう多く現れない。あまりに自明だったから、「古文」の勝利が決定的で非「復古」的な文學論が淘汰されたから、など複數の要因が考えられる。

もちろん、詩格や書儀も、かかる言説を明確な形で豐富に含むわけではない。しかし、一般の詩文における寥々たる現狀を思えば、これらは極めて貴重な材料だ。所謂「文學」から排除されがちなこの種の資料を用いて唐代文學の實相へと迫る。解決すべき課題は様々にあろうが、今後もこの試みを續けたい。

[44]周一良、趙和平（1995 年）95 頁〔周氏執筆〕、史睿（2001）參照。

参考文獻一覧

（著者名等の後の括弧で括った數字はその論著の發表・出版年を意味する）

【日本語によるもの】

池田温（1990）：『中國古代寫本識語集録』（大藏出版）

王三慶（2009）：「敦煌書儀文獻と東アジア文化」（山本孝子譯）、高田時雄編『漢字文化三千年』（臨川書店）

小野勝年（1965）：「「前唐院見在書目録」とその解說」、『大和文化研究』10-4

小野勝年（1969）：『入唐求法巡禮行記の研究』4（鈴木學術財團）

狩野直喜（1973）：『支那學文藪』（みすず書房）、小論關連部分は「日本國見在書目録に就いて」として『藝文』1-1（1910 年）に初出。

神田喜一郎（1984）：『神田喜一郎全集』3（同朋舍出版）、小論關連部分は「慈覺大師將來外典攷證」として『東洋學文獻叢說』（二玄社、1969 年）に初出。

京都大學中國文學研究室（2008）：京都大學中國文學研究室編『唐代の文論』（研文出版）

金文京（2009）：「『杜家立成雜書要略』と唐代文學」、『中國文史論叢』5

興膳宏（1986）：興膳宏譯注『弘法大師空海全集』5（筑摩書房）

武覺超（2008）：『比叡山佛教の研究』（法藏館）、小論關連部分は「慈覺大師將來典籍の保存について――『前唐院見在書目録』と『前唐院法文新目録』」として『叡山學院研究紀要』17（1994 年）に初出。

竺沙雅章（2002）：『增訂版中國佛教社會史研究』（朋友書店）、小論關連部分は「敦煌出土「社」文書の研究」として『東方學報』京都 35（1964 年）に初出。

永田知之（2001）：「先達の姿――唐人の意識下に於ける陳子昂」、『中唐文學會報』8

永田知之（2002）：「詩人と傳記作者――盧藏用が抱いた文學觀と陳子昂の形象化」、『中國文學報』64

永田知之（2008a）：「摘句と品第――皎然『詩式』の構造」、『東方學報』京都 82

永田知之（2008b）：「今人も古に及ぶ――皎然の文學史觀」、『中唐文學會報』15

那波利貞（1974）：『唐代社會文化史研究』（創文社）

藤枝晃（1959）：「敦煌の僧尼籍」、『東方學報』京都 29

矢島玄亮（1984）：『日本國見在書目録――集證と研究』（汲古書院）

山田英雄（1987）：『日本古代史攷』（岩波書店）、小論關連部分は「書儀について」として森博士還暦記念會編『對外關係と社會經濟　森克己博士還暦記念論文集』（塙書房、1968 年）に初出。

【非日本語によるもの】

姜伯勤（1992）：『敦煌社會文書導論』（新文豐出版公司）

姜伯勤（1996）：『敦煌藝術宗教與禮樂文明』（中國社會科學出版社）、小論關連部分中、「唐禮與敦煌發現的書儀――《大唐開元禮》與開元時期的書儀」は 34 屆亞洲北非人文科學國際會議論文集（1993）に初出、「唐貞元、元和間禮的變遷――兼論唐禮的變遷與敦煌元和書儀文書」は 1991 年香港隋唐五代史研討會論文として初出の後、黃約瑟、劉健明共編『隋唐史論集』（香港大學亞洲研究中心、1993 年）に收録。

姜亮夫（2002）：『姜亮夫全集』12（雲南人民出版社）、小論關連部分は「導言」として陶秋英輯録、姜亮夫校訂『敦煌碎金』（浙江古籍出版社、1992 年）に初出。

呉麗娛（2002）：『唐禮摭遺――中古書儀研究』（商務印書館）、小論關連部分は「敦煌表狀箋啓書儀探源」として『文史』56（2001 年）に初出。

呉麗娛（2006）：「正禮與時俗――論民間書儀與唐朝禮制的同時互動」、『敦煌吐魯番研究』9

高明士（1993a）：「論武德至貞觀禮的成立――唐朝立國政策的研究之二」、中國唐代學會主編『第二屆國際唐代學術會議論文集』（文津出版社）

高明士（1993b）：「隋代的制禮作樂――隋代立國政策研究之二」、黃約瑟、劉健明共編『隋唐史論集』（香港大學亞洲研究中心）

史睿（1997）：「北周後期至唐初禮制的變遷與學術文化的統一」、『唐研究』3

史睿（2001）：「敦煌吉凶書儀與東晉南朝禮俗」、郝春文主編『敦煌文獻論集――紀念敦煌藏經洞發現一百周年國際學術研討會論文集』（遼寧人民出版社）

周一良、趙和平（1995）：『唐五代書儀研究』（中國社會科學出版社）、小論關連部分は周氏「敦煌寫本書儀中所見的唐代婚喪禮俗」、「敦煌寫本書儀考（之二）」、趙氏「敦煌寫本鄭餘慶《大唐新定吉凶書儀》殘卷研究」、「杜友晉《吉凶書儀》及《書儀鏡》成書年代考」、周氏「書儀源流考」、趙氏「晚唐五代時的三種吉凶書儀寫卷研究」として各々『文物』1985-7（1985 年）、北京大學中國中古史研究中心編『敦煌吐魯番文獻研究論集』4（1987 年、北京大學出版社）、同 5（1990 年、同前）、『敦煌學輯刊』1990-2（1990 年）、『歷史研究』1990-5（1990 年）、『文獻』1993-1（1993 年）に初出。

徐俊（2000）：『敦煌詩集殘卷輯考』（中華書局）

岑仲勉（1960）：『唐史餘瀋』（中華書局）

孫望、郁賢皓（1994）：孫望、郁賢皓主編『唐代文選』（江蘇古籍出版社）

張小艷（2007）：『敦煌書儀語言研究』（商務印書館）

張伯偉（2002）：『全唐五代詩格彙考』（江蘇古籍出版社）

陳鐵凡（1961）：「敦煌論語異文彙考」、『孔孟學報』1

卞孝萱（1963）：『劉禹錫年譜』（中華書局）

羅聯添（1986）：『唐代詩文六家年譜』（學海出版社）、小論關連部分は「劉夢得年譜」として『國立臺灣大學文史哲學報』8（1958 年）に初出。

李正宇（1987）：「敦煌學郎題記輯注」、『敦煌學輯刊』1987-1

Lionel Giles（1957）：*Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum*, London: The Trustees of the British Museum.

［附記］本稿は文部科學省科學研究費補助金「ロシアに所藏される敦煌吐魯番等發見漢文文獻の研究」（基盤研究 B、研究代表者：高田時雄京都大學人文科學研究所教授）による研究成果の一部である。

（作者は京都大學人文科學研究所助教）

『敦煌寫本研究年報』第四號（2010.03）141-161 頁

敦煌書儀中的“四海範文”考論*

山本孝子

敦煌寫本書儀，大約有 60 種 140 件，其內容豐富，用途廣泛，涉及到日常生活的各個方面，根據不同的對象以及不同的場合提供所需要的書札範文。此外，書儀不僅是書札範文，同時擁有典禮儀注的功能，使用的語言濃厚地反映出長幼尊卑的區別等社會觀念。敦煌寫本書儀大部分屬於唐五代時期，但每一種書儀中所體現的禮儀都具有它的特色，並隨著社會環境的變化不斷地被加以修改以適應當時人們的需求。

書儀所收錄的範文明確而詳細地標明發信人與收信人兩者間的相互關係，而且往往加註說明其應用範例或相關禮儀規定。各個範文一般都有標題，有的表示發信的時節 (如〈賀正〉(正月)、〈賀冬〉(冬至))，有的表示發信的對象 (如〈夫與妻書〉、〈與道士書〉)，有的表示發信的用途 (如〈謝～書〉(感謝信或謝罪信)、〈～相迎書〉(邀請)、〈答書〉(回信))，都很明顯地看出其特定的使用場合。但是，其中另有一類以“四海”為題的書札範文 (如〈與四海極尊狀〉、〈賀四海婚嫁書〉。以下統稱為“四海範文[1]”) 所指的範圍，與其它範文標題相比卻含糊不清，並也隨時代逐漸變化[2]。以往對四海範文的性質、格式、以及語言特色的整體考察有缺乏之處，本文將這些方面作為主要課題略述如下，試圖探索這一類範文在敦煌寫本書儀中處於哪種位置，以期有助於追溯書儀的發展演變過程。不當之處，請方家指教。

---

*本文撰寫過程中，承蒙蘭州大學敦煌學研究所伏俊璉教授以及博士生趙青山、劉全波、王使臻的協助。在此對以上老師與同學一併謹致謝忱。

[1]這裡稱之為“四海範文”而不稱之為“四海書儀”，是因為現存書儀或史志中未見以“四海書儀”為題者，“四海”之間往來的書札範文並沒有獨立性，目前只見於吉凶書儀收錄的範文中。其它特殊角色專屬的書札範文，都有單獨編纂的書儀名稱，如內外族的有謝元撰《內外書儀四卷》，婦人的有唐瑾撰《婦人書儀八卷》、僧人的有釋曇瑗撰《僧家書儀五卷》等。

[2]吳麗娛《關於 S.078 和 S.1725v 兩件敦煌書儀的一些看法》段文杰、茂木雅博主編《敦煌學與中國史研究論集——紀念孫修身逝世一周年》蘭州：甘肅人民出版社，2001，pp.168-185；吳麗娛《唐禮摭遺——中古書儀研究》〈第二章 吉凶書儀的時代特色及內容變化〉中涉及到四海範文的變遷 (北京：商務印書館，2002，pp.57-60)。詳情後述。

一　資料概觀

四海範文可見於開元、天寶到五代時期所編纂的吉凶書儀中[3]。《書儀》、《書儀鏡》、《新定書儀鏡》(以上杜友晉撰)、《新集吉凶書儀》、《吉凶書儀》、《新集諸家九族尊卑書儀》(以上張敖撰)、《書儀(擬)》、《新集書儀》(以上撰者未詳) 裡都收錄四海範文。另外，現存寫本《大唐新定吉凶書儀》(鄭餘慶撰)、《文儀集(擬)》(忻州刺史某撰) 篇前目錄中有 “四海吉書第九”與“四海吊答書第十八”，“四海吉書第四”的記載，雖然無法知道其原貌，推論應有對應的範文。可以說這一時期的吉凶書儀基本上都有關於“四海”的條目。各書儀所含有的四海範文整理歸納，詳細內容如下表。

【表 1】[4]

	書儀題目	四海範文的收錄情況						撰者	寫卷編號*0	年代
		吉					凶			
		與～書	賀～書	相迎書	囑託書	謝書	吊　書			
A	書儀	5(0)					21(21)*1	杜友晉	P.3442、Dx.1307、Dx.1441	開元末
B	書儀鏡 (安西書儀?)	2(2)*2	7(5)	4(1)	1(1)		27(20)*3	(杜 友晉?)	S.329+S.361+S.9713、S.6111+S.10595、P.3784	天寶六～十四年

[3]目前敦煌寫本書儀一般分為三大類：朋友書儀、吉凶書儀、以及表狀箋啟書儀。朋友書儀撰成於唐代初年，是按十二月順序編排的，具有早期形態的書儀，其淵源可以上溯到南北朝的“月儀”。吉凶書儀，又稱為綜合性書儀，目前所知南北朝書儀中不見，是唐代的主要形式，《隋書・經籍志》、《舊唐書・經籍志》、《新唐書・藝文志》中所見的大部分書儀應當歸入這一類。其內容也最為豐富，應有盡有，不僅是書札範文，涉及到生活各方面的禮俗 (朋友、親屬、官場、僧尼道士等等)。表狀箋啟書儀是給官僚提供的應用文，與吉凶書儀收錄的官場公私文書範文近似，而且部分書儀是匯集實寄過的書信而成的。其時代為唐五代。請參看《唐五代書儀研究》(周一良、趙和平著，北京：中國社會科學出版社，1995)、前揭《唐禮摭遺》等。敦煌出土的朋友書儀和表狀箋啟書儀、以及司馬光《書儀》等傳世文獻中，均未發現此類四海範文。敦煌寫本書儀的錄文，主要參考下列論著並依據寫本圖版作了若干修正。趙和平《敦煌寫本書儀研究》台北：新文豐出版，1993；趙和平《敦煌表狀箋啟書儀輯校》南京：江蘇古籍出版社，1997；趙和平《〈敦煌寫本書儀研究〉訂補》,《敦煌吐魯番研究》第三卷，1998，pp.229-257；趙和平《晚唐時河北地區的一種吉凶書儀的再研究》,《中華文史論叢》第 62 輯，2000，pp.192-208。

[4]製作此表時，主要參考了［趙 1993］、［趙 1998］、吳［2002］(pp.639-646，附錄)、丸山裕美子《日本古代國家・社會における書儀の受容に關する基礎的研究》(平成 15 年度～平成 17 年度科學研究費補助金（基礎研究（C））研究成果報告書，研究課題番號 15520409，pp.32-34，付表①)、《敦煌書儀語言研究》(張小豔，北京：商務印書館，2007，pp.30-34)。關於羅振玉舊藏品，通過《貞松堂藏西陲秘籍叢殘》(上虞羅氏民國影印) 與《中國歷史博物館藏法書大觀》第十二卷 (史樹青主編，上海：上海教育出版社，2001) 的對照，可以知道部分書儀寫本現藏於中國國家博物館 (原中國歷史博物館)。按《法書大觀》以及申國美編《中國散藏敦煌文獻分類目錄》(北京：國家圖書館出版社，2007)，這裡使用“歷博”之編號。

C	新定書儀鏡		8(0)*4	○*4			11(10)*5	杜友晉	P.2616v、P.2619v、P.3637、P.3688(1)、P.3849、P.4002、P.4036、P.5020、P.5035A、散0676(碎片，貞松堂本)、歷博52-2、3(貞松堂本)、上圖18	天寶時期
D	新集吉凶書儀	3(1)	2(1)	8(0)		1(0)		張敖	P.2646、P.2556、P.3246、P.3249、P.4019、P.3284、S.2200、S.4761、S.10735A、有鄰館8、北能8(未見)	大中時期
E	吉凶書儀						6(6)	(張敖)	P.2622、P.3886、P.3688(2)、S.1040、S.8699v、Dx.1256	大中時期
F	新集諸家九族尊卑書儀	3(2)*6						張敖	P.3502v(2)、Dx.1256、歷博52-1(貞松堂本)	大中時期
G	書儀 (擬)						1(1)*7	佚名	P.4050+S.5613+Dx.1458+Dx.3875+Dx.3870+Dx.1467+Dx.3902+Dx.3849+Dx.3905+Dx.3814+Dx.3917+Dx.5247	晚唐時期
H	新集書儀	5(2)						佚名	P.3691、P.3425v、P.3581、P.3716、P.4699、S.681、S.766、S.5593、S.5636、S.8516、S.8680、S.9937v、S.10010、S.10531、S.10614、Dx.1454+Dx.2418、北有76(未見)、Dx.5623+Dx.5644	五代時期
I	大唐新定吉凶書儀	◎*8					◎*8	鄭餘慶	S.6537v14	元和時期
J	文儀集 (擬)	◎*8					○*9	忻州刺史某撰	P.5550(2)+P.5547(1)	中晚唐?

［凡例］

・表中列出各書儀所收錄的四海範文。

・按標題算，附同一標題的範文看做一。如B《書儀鏡》中〈賀四海加官秩書題〉羅列兩種不同的選寫答書之方法，表中把它算一首。

・（　）內的數字為答書。

［註釋］

*0 在此列出同一種書儀的所有寫本，並不是每一件寫本都含有四海範文部分。

*1 現存標題部分所顯示的數量。

*2 《四海書題》中收錄〈重書〉、〈次重〉以及其答書。

*3 其中以〈吊伯母叔喪書〉為標題的範文，從前後收錄的範文判斷為〈吊四海遭伯母喪書〉。〈四海吊答書儀廿首〉後半部分有殘缺，現在只能看到往復 7 組 14 首範文。〈吊四海遭妻子喪書〉後似有脫文。“凶變無常，賢郎……謹此不代。謹狀。”部分不是〈吊四海遭妻子喪書〉，而應當是〈吊四海遭女婿喪書〉。於是在此另算一首。

*4 前半部分有擬為四海範文的範文。詳情後述。

*5〈內外族及四海吊答辭廿首〉中的範文，據其標題與內容，前三首（〈吊遭父母初喪辭〉、〈吊後至祥禫已來經節辭〉以及〈吊伯叔兄姊亡辭〉）判斷為關於四海之部分。

另有〈四海吊答第三〉，因寫本後闕，只能看到凡例部分而無從得睹原文。此處不計數。

*6〈未相識書〉與 D《新集吉凶書儀》收錄的同題範文文字非常近似，判定為四海範文。

*7 Dx.3814 寫本有殘缺，殘缺部分應當為〈吊四海遭父母喪服終書〉之〈答書〉。

*8 根據現存編目可以知道該書儀收錄四海範文，其範文之數量不詳。

*9 推測後半凶儀部分也有與吉儀相應內容，原來當收錄〈四海吊答書〉。《敦煌寫本書儀研究》題解推出 J《文儀集（擬）》的第八章為“四海吊答”，但不能排除該章為“內外吊答”或“僧尼書儀”的可能性。

本文的研究對象“四海範文”出現之處，各寫本所收錄的方法有兩種，這與書儀之體例有關。首先是以篇前目錄中的章節標題為四海的 (如 I《大唐新定吉凶書儀》〈四海吉書第九〉)，涵蓋社會生活方方面面使用的書札範文。吉儀之下有〈凡例〉、〈賀～書〉(某時節、某事情的祝賀之書信)、〈相迎書〉(邀請對方來用餐之書信)、〈與～書〉(對～的問候)，凶儀中收錄〈凡例〉、〈吊喪書〉(對方家屬過世，表示哀悼的書信)。另外一種是“四海”出現於各個範文附有的小標題中，從中可以知道其發信對象為四海的書札範文，如〈賀四海男女婚姻書〉、〈與四海告別書〉等。

考慮各書儀的殘存狀況，B《書儀鏡》之中保留的四海範文較多，其分量明顯地突出。除了〈四海書題〉、〈四海吊答書儀廿首〉篇目中羅列大量範文之外，還含有〈賀四海加官秩書題〉、〈賀四海婚嫁書〉、〈賀四海男女婚姻書〉、〈囑四海求事意書〉、〈賀四海正書〉、〈與四海賀冬書〉、〈吊四海遭父母喪書〉、〈吊［四海遭］伯母叔喪書〉、〈吊四海遭兄弟喪書〉、〈吊四海遭妻子喪書〉、〈吊四海傷犬馬之書〉[5]，這些都是對四海的致辭。

C《新定書儀鏡》和 A《書儀》、B《書儀鏡》之間文字有出入，且都是由同一個人編纂的，之間有密切關係[6]。文本前半部分殘缺，篇目也已丟失。現存寫本 P.3637

[5]趙和平氏指出 S.329 寫卷之內容均為四海往來書札，而四海書儀中間加上的〈奉口馬奴婢書〉、〈與稍尊問疾書〉、〈謝尊人問疾書〉、〈謝平懷問疾書〉、〈參謁法官貴求身名語〉、〈謝衣服語〉、〈謝車馬〉也認定為其一部分 (前揭［趙 1993］題解，p.296)。榮新江《敦煌本〈書儀鏡〉為安西書儀考》(《潘石禪先生九秩華誕敦煌學特刊》台北：文津出版社，1996，pp.267-273) 略同。其他四海範文中未出現〈謝～書〉、〈問疾書〉之類的範文，而近似文例又見於表狀箋啟書儀中，難以判斷是否為四海範文。暫時從本文研究對象中排除，故提出質疑，以待識者正之。

[6]趙和平《杜友晉〈吉凶書儀〉及〈書儀鏡〉成書年代考》《敦煌學輯刊》1990 年第 2 期，pp.65-69(後收錄於［周、趙 1995］pp.137-145)；［趙 1993］ pp.295-298；［榮 1996］。關於杜友晉所撰的書儀文本系統，黃亮夫《〈新定書儀鏡〉相關問題的探討——附論其他書儀寫卷的綴補》(《敦煌學》第二十七輯，2008，pp.435-458) 提出不同的看法。各寫本書儀之間的關係比較複雜，成書順序也糾纏不清，仍有待考之處，難以下結論。目前本文從多數意見，理解為 A、B、C 三個文本系統。

和 P.2619v 的開頭部分下欄抄寫〈醉不得書〉、〈問發日書〉、〈未相識〉、〈屈讌書〉、〈他鄉經節屈讌書〉、〈三月三日〉、〈五月五日〉、〈九月九日〉、〈冬至〉、〈借馬書〉、〈遺物書〉、〈求物書 (P.2619v 作“藉筆書”) 〉、〈問馬墜書〉、〈問疾書〉、〈霖雨書〉、〈雨後書〉、〈雪中書〉、〈雪後書〉、〈陰慘書〉、〈風雹書〉、〈召蹴踘書〉、〈與僧尼書〉、〈與道士書〉以及各〈答書〉，其中〈屈讌書〉、〈三月三日〉、〈五月五日〉、〈九月九日〉、〈與僧尼書〉、〈與道士書〉與 B《書儀鏡》的文字相同，並且〈屈讌書〉、〈三月三日〉、〈五月五日〉、〈九月九日〉收錄於〈四海書題〉。因此，從〈醉不得書〉到〈召蹴踘書〉所列的極有可能均為四海範文，推測應相當於 B《書儀鏡》的〈四海書題〉部分[7]。

書儀 D、E、F 的撰者張敖是“河西節度使掌書記儒林郎太常寺協律郎”，根據不少寫本上的題記看，這些書儀多由敦煌地區的“學郎”、“學士郎”抄寫[8]，從此可知，張敖新集的書儀當時廣泛流轉在敦煌地區的學校裏，自然擁有更多的地方特色。另一方面，前揭杜友晉是自開元至天寶時期在長安活動的人物，《新唐書》載有他的名字和編纂的書儀[9]，其編纂的書儀應該是流傳範圍比較廣，影響比較大的。我們需要注意編寫地方的不同和年代的先後不一，成書時代晚一點的書儀必然會或多或少受到前面的書儀之影響[10]，並且都講究其實用性而反映編寫地點和時代特色。

G《書儀 (擬)》是冊頁形式的寫本書儀。目前確認一共十二件寫本，寫本之間有掉頁，不連接，難以復原其全體結構。也可能原來含有更多的四海範文。

二　四海範文的內容

（1）與～書

〈與～書〉這類範文的用途是一般問候，收信人分為“極尊”、“稍尊”、“平懷”、“稍卑”、“卑者”等級，從此可知，如內外族有長幼之別，四海就有尊卑之別。以現存的寫本書儀為依據，下達於上的範文多，上達於下的範文只見於 A《書儀》中[11]。

除了敦煌資料之外[12]，司馬光《書儀》卷一〈上尊官時候啟狀〉註釋有如下記載：

[7]吳麗娛氏也認定這些範文為有關“四海”的內容［吳 2002］p.57。

[8]伊藤美重子《敦煌文書に見る學校教育》(東京：汲古書院，2008) 有学郎題記的一覽表 (pp.41-68)。可以參考。

[9]《新唐書・藝文志》“杜有晉書儀二卷”(中華書局標點本，p.1493)。敦煌寫本均作“杜友晉”，前人也都看做同一人物。

[10]C《新定書儀鏡》〈凡例〉中多例示與“舊儀”不同之處。I《大唐新定吉凶書儀》序文談到杜友晉編撰書儀後七十八年之間的禮儀改變而新書儀之編纂的經過。D《新集吉凶書儀》序中也有“今朝庭行《元和新定書儀》(指 I《大唐新定吉凶書儀》)，其間數卷，在於凡庶，固無使所施，不在於此。今採其的要，編其吉凶，錄為兩卷。使童蒙易曉，一覽無遺，故曰纂要書儀，敘之云爾”之語。

[11]叢書集成初編 1040，上海：商務印書館，1936，p.7。

[12]據朴鎔辰《應之の〈五杉連若新學備用〉編纂とその佛教史的意義》(載於《印度學佛教學研究》第 57 卷第 2 號，2009，pp.51-57)，駒澤大學圖書館所藏《五杉連若新學備用》卷中收錄為了佛徒編

> 裴書儀[13]，僚屬典吏起居長啟狀止如此。無如公狀之式者。裴文有四海吉書，分五等。以父之執友、疎屬尊親、受業師為極尊。年紀高於己、或職掌稍高、及姊夫妻兄之屬為稍尊。齒爵相敵者為平懷。年小於己、及妻弟妹夫為稍卑。先曾服事、及弟子之類為極卑。今以裴之啟狀為大書。四海吉書為書，小簡及平日往來手簡而微為增損。以叶時宜，以齒爵極達者為尊。官與極卑不甚相遠者為稍卑。改平懷為平交[14]。又今人與尊官書多為三幅，其辭意重複，無義理。凡與人書所以為尊敬者，在於禮數辭語。豈以多紙為恭耶。徒為煩冗而不誠。不足法也。

從此我們可以知道四海範文的演變，簡化過程[15]。裴書儀的等級分類與敦煌寫本書儀沒有多大區別，但到了宋代，有所變化。

【表 2】

		極尊	稍尊	平懷	稍卑	卑者
A	書儀	同居繼父、父之執友、疎居屬長、見藝師、姑夫、姨夫、族祖、族叔	謂己所事，或官位若高，姊夫、妻兄	———	———	———
B	書儀鏡	(重書) (相國、左右丞相、御史大夫、中丞、侍御、六尚書、三公九卿、節度使、太守同)	———	(次重)		
D	新集吉凶書儀	謂諸丈人、受業師、又妻父母等	謂前人年高於己者及姑夫、姨夫、妻叔伯等	———		

纂的書儀。〈慰師亡〉、〈慰父母亡〉等吊儀之外還見到〈謝尊人遠書〉、〈未相識尊人〉、〈平交人〉等標題，也可能是跟四海有關的書札範文。該書成書於 962 年，在於敦煌寫本吉凶書儀到司馬光《書儀》的中間，其資料價值重大。目前未得到目睹之機會，早日全面公佈為盼。

[13]根據史志記載，唐五代以迄於宋代有裴矩、虞世南《大唐書儀十卷》、裴茝撰、朱儔注《書儀三卷》、裴度《書儀二卷》，也可能還有其他沒有記載的，無法知道司馬光所說的“裴書儀”指哪一篇，但前揭三者皆為唐代書儀。

[14]“平交”之語已出現於 P.3449、P.3864《刺史書儀 (擬)》(後唐時代) 中。所收錄的〈得官後辭人書平交〉、〈辭書平交〉、〈封門狀回書平交〉均為官場範圍使用的書札範文而非四海範文。

[15]除了收信人，書儀中體現的禮儀也有變化。如 A《書儀》〈與極尊書〉“奉某月日問，伏慰下情。”下註云“不得云書絕不奉問，無慰下情；又云奉近問，伏深馳悚。”但 D《新集吉凶書儀》〈與四海極尊狀〉就有“不奉誨示，無慰下情。”之句。

F	新集諸家 九族尊卑書儀			———		
H	新集書儀	謂諸丈人、受業師父、妻父母等也	謂前人年高己及姑夫、姨夫、妻叔伯等	———		
	裴書儀	父之執友、疎屬尊親、受業師	年紀高於己、或職掌稍高、及姊夫、妻兄之屬	齒爵相敵者	年小於己、及妻弟、妹夫	先曾服事、及弟子之類
	司馬光《書儀》	（尊） 齒爵極達者		（平交）	（稍卑） 官與極卑不甚相遠者	

［註釋］

＊——— 表示該書儀收錄相應的範文，但沒有具體提示發信對象。

＊ 表示該書儀沒有收錄相應的範文。

（2）賀～書、相迎書、囑託書、謝書

〈賀～書〉、〈相迎書〉、〈囑託書〉、〈謝書〉都有特定的使用場合，各別有祝賀對方、邀請對方、囑託對方、感謝或謝罪對方之功能的書札範文。附〈答書〉的範文並不多。

〈賀～書〉，在官場用得也多，在表狀箋啟書儀中見不少範文，加官、結婚、正月、冬至等慶時寫的書札。其中B《書儀鏡》〈四海平蕃破國慶賀書〉是一個特殊的範文，事情描寫得很具體[16]，這部分跟其他範文不同，也許是據實際用過書札為藍本而成的[17]。

〈相迎書〉[18]又叫〈屈讌書〉的這一類，是應時邀請對方喝酒吃飯的書札。上表中所列之外，還有F《新集諸家九族卑書儀》、H《新集書儀》中收錄〈相迎書〉[19]，雖然沒有“四海”之識語，其文字與D《新集吉凶書儀》沒有大的區別。

〈囑託書〉只見B《書儀》的〈囑四海求事意書〉一例。〈謝書〉也只有〈醉後失禮謝書〉一首，而且收錄於D《新集吉凶書儀》的〈四海雜相迎書〉裡面，也可以看做相迎書的一部分。

[16]［趙1993］、［榮1996］據這材料考證該書儀的成書年代和地點。

[17]書儀的製作背景可以參考［吳2002］pp.140-162。筆者也對Dx.01698提出過愚見。《「侯侍郎直諫表」と書儀：Dx.01698について》《敦煌寫本研究年報》第二號，2008，pp.135-151。

[18]請參看楊莉《敦煌書儀の「相迎書」の待遇表現について》《（奈良女子大學大學院）人間文化研究科年報》23，2007，pp.117-132。

[19]［趙1993］pp.610-612；pp.653-656。F和H都附有答書，是D中未見的內容。

（3）吊書

〈吊書〉在凶儀當中占相當的分量，是凶儀的主要部分，C《新定書儀鏡》中不僅收錄書札範文，還收錄口頭吊辭。除了這些範文之外，凡例敘述得很詳細，涉及到凶儀書札中可以使用的詞彙、封題、形狀等，其中也有不少關於四海的記載，給我們提供不少信息。

三　四海範文之程式

書札範文都具有一定敘述順序。張敖在F《新集諸家九族尊卑書儀》中云“先標寒暑，次贊彼人，後自謙身，略為書況。”有時稍有變動或混雜，但吉儀、凶儀各有它的基本程式，均為單書，未見複書的形式。試看吉儀中的〈與～書〉，其程式如下。

A《書儀》〈與極尊書〉

> 名白:（i）曠覲未、稍、既、已久，馳係惟深。奉某月日問，伏慰下情不得云書絕不奉問，無慰下情，又云奉近問，伏深馳悚。（ii）孟春猶寒，（iii）不審并平闕之，繼父稱號，父友稱丈人，師稱先生，餘尊臨時所稱。尊體何如?伏願勝豫亦云動止勝常。（iv）即日蒙恩若別有事意，隨時便言，他皆放（倣）此，拜謁未期，伏增延結。願珍重。今因信往，（v）［謹］附白記不具。姓名再拜。［謹］某姓官位座前某官姓名白記

首先在起首部分表達敬慕之心（i），其次有節氣之詞如孟春猶寒（ii），再問對方的近況，平居問安（iii），報自己的近況（iv），最後是結尾的套句（v），還有一些範文後面附有封題。

下面再看凶儀，〈吊書〉的開頭部分表示聽到對方家有喪事後的哀悼之心，體諒對方心情的弔慰（i），後一半雖然用詞有所不同，但其程式與吉儀差不多，有節氣之詞（ii），掛念對方的身體（iii），說明自己的狀況和無法親自去慰唁之旨（iv），最後是結尾的套句（v）。〈答書〉先談自己的近況和心情而涉及到對方的來信，其次還是保持定形，敘述順序和內容從前所述的其他範文。

C《新定書儀鏡》

〈吊弟妹亡書〉

> （i）凶故無恒妹云厶氏妹，族云厶氏次娘夭逝，割裂拔氣，何以為懷。悲悼奈何!悲痛奈何!賢弟盛年，冀保榮祿，會此凶故，忽為今古。悲慟奈何!痛切奈何!（ii）春寒，（iii）惟　友勝。（iv）厶諸弊少理，造慰未由，但增悲仰。（v）謹遣疏，慘愴不次。姓名頓首。
>
> 月日　謹通　姓位次郎服前　位姓名慰封
>
> 〈答書〉

不意凶喪，厶弟殞逝，羽翼凋落，難以慰懷。悲痛［深悲痛深］!辱書增悲仰。秋暮甚冷，惟動靜兼祐。厶諸弊少理，未由造慰，但增悲痛。謹因還答，慘愴不次。［名］頓首。

這程式大體依照其凡例，如“凡凶書皆云不次，復無謹空字，題亦無謹封。”、“凡重喪云棄背，中云傾逝，或云喪歿、喪逝，其卑幼少年者云夭逝。”、“凡四海吊［書］皆云禍故無常，輕云一蠲有德，同宗則云不圖凶禍，輕者亦可云衰故等語。”等。

四　四海範文的常用詞彙、語言表現

這裡據各範文的格式與語詞類型，對語言表現方式進行考察。四海範文中，除了一些〈與～書〉之外，沒有具體顯示發信人和收信人的關係，但是因為一定數量的範文是往返兩件一組，通過其用詞的比較，有助於對雙方的社會關係的理解。於是以謙詞、敬詞以及見等級差別的同義詞為中心，與內外族、官場範文進行比較，展開討論。

（1）祝願對方身體安康的表現

【惟、願、想】

“祝願”、“希望”之義， A《書儀》與“極尊”、“稍尊”、“平懷”、“稍卑”的書札範文中，各別陳述“不審尊體何如?伏願勝豫 (／動止勝常)”、“ 惟勝豫”、“ 願清勝”、“ 想清宜”[20]。除了此例之外，其他範文中只見“伏惟”、“惟”之別，其使用情況與 E《吉凶書儀》〈四海吊答書儀〉最後注明“平懷已上言伏惟，平懷已下言惟。”一致。

在內外族或官場往來的書札中，上達下的情況下，還用“敬惟”、“念”等詞[21]，四海範文中均不見其用例。A《書儀》〈與表弟妹書〉“某氏表姊敬報”下註“亦云呈，然《顏氏家訓》甚非此，敬字不合卑處用，時所共行，未即可廢，今且用之。”[22]杜友晉的時候還會提到舊習慣[23]，但到了大中時期，F《新集諸家九族尊卑書儀》〈封題樣〉云“伏惟者，謂前人尊於己，並可言之。如平懷，空言惟。如前人卑小，即言敬

[20]根據 C《新定書儀鏡》〈通例第二〉，杜友晉的時候，對尊長、對平懷和小重分別使用“伏惟”、“惟”。

[21]如 C《新定書儀鏡》〈父母喪告弟妹書〉“念汝無恙。”

[22]杜友晉指的是《顏氏家訓・文章篇》“比世往往見有和人詩者，題云敬同，《孝經》云：‘資於事父以事君而敬同’不可輕言也。”(玉利器《顏氏家訓集解》北京：中華書局，1993，p.274。)

[23]唐無名氏《唐人十二月朋友相聞書》〈正月孟春答書〉中見“敬想履新”之語，是朋友之間的往返書札，沒有上達於下的語氣。

惟、敬願。”“敬”字作為敬詞的用法已經固定下來了[24]。在官場使用的表狀箋啟書儀中也習見[25]。

【尊體】

指對方的身體。A《書儀》中只見於〈與極尊書〉中，D《新集吉凶書儀》除了“極尊”還可以對“稍尊”使用，“伏惟厶位尊體動止萬福”下有註云“今多云尊體”，從此知道其使用範圍的擴大化。在內外族書儀中對長輩，不管吉儀或凶儀之場合，均用“尊體”之詞[26]，官場範圍也有其使用例[27]。

【動止/動靜/動息】

生活起居。由意義相反的動詞性語素複合而成[28]。內外族範文中對祖父母、父母使用的“起居”字，四海範文中未見其例[29]。“動止”習見為“動止萬福”之套語，“動靜”、“動息”和“兼勝”、“兼祐”結在一起，又多見於凶儀答書中。根據I《大唐新定吉凶書儀》〈公移平闕式第三〉或書儀中的使用狀況[30]，“動止”比“動靜”、“動息”更加謙卑。“動靜”、“動息”在官場未使用，隨著“尊體動止/起居萬福”的套式化和普及[31]，逐漸被淘汰[32]。

【支豫/支勝/支祐】

凶儀中見“支勝”、“支祐”、“支豫”、“支福”等以“支”為構詞語素的均是凶儀中掛念對方，望保重身體而使用的[33]。B《書儀鏡》〈凡五十條〉云“凡前人有大功已上服通吊書，極尊云支福，次尊支豫，稍尊云支勝，平云支適、支常、支祐，卑云支度、支遣。……凡子姪及外甥并孫居喪云無橫苦、無他惡；輕服云無恙，不云支立、支度之語。”[34]司馬光《書儀》卷九〈與居憂人啟狀〉“起居支福”下註云“支者，言其毀瘠僅及支梧也。稱尊云動止支勝，平交云所履，降等云支宜、支福、支和、支

[24]S.4685 “伊州弟李奴子、尊體動止康吉。”是其實例。該寫本是沙州兄李丑兒與伊州弟李奴子寫的書信，書寫年代為10世紀。

[25]P.3864《刺史書儀(擬)》(後唐時代)〈又（謝主務)〉“初熱。敬唯厶官所履康吉…(中略)…敬唯照悉云云。”

[26]如A《書儀》〈與外祖父母書 伯叔祖附之〉“不審翁婆 并平闕 尊體起居何如”、C《新定書儀鏡》〈與妻父母書〉“伏惟丈人丈母尊體動止康豫”〈姑兄姊亡吊父母伯叔書〉“伏惟次伯尊體動止萬福”、D《新集吉凶書儀》〈上兄［姊］姑夫姨夫［狀］ 內外表丈人及妻伯叔亦同〉“伏惟兄姊姑姨夫動止萬福 今［時］多云尊體動止萬福”等。

[27]如D《新集吉凶書儀》〈起居啟・寮屬起居啟狀等〉“伏惟官位尊體動止萬福”。

[28]［張2007］ p.164。

[29]限於書札起首問候之語中，起居另有結尾套句的用法。

[30]如B《書儀鏡》〈四海書題・重書／次書〉往書均用“動止萬福”，復書云“動息清宜／兼勝”。

[31]朱熹《家禮》卷四〈祖父母亡答人啟狀〉“某位尊體起居萬福”下註“平交不用起居，降等但云‘動止萬福’。”(《欽定四庫全書》第142冊，經部禮類，p.570。)

[32]“動靜”、“動息”表狀箋啟書儀中未見。

[33]前人也作過探討。請參考［吳2002］pp.248-249、［張2007］pp.377-379。

[34]同文亦見於C《新定書儀鏡》〈凡五十條〉中。

祐，小重。支宜、支適，小輕。支立、大輕。”[35]

四海範文中使用“支豫”、“支勝”、“支祐”之語，其運用看不出特別明顯的等級差別。

B《書儀鏡》〈四海吊答書儀廿首〉

① 〈吊小祥大祥及除禫〉 惟動靜支祐。 〈答書〉惟動靜兼勝。

② 〈吊起服從政〉惟位次郎動靜支豫。 〈答書〉惟動靜兼勝。

③ 〈吊兄姊亡書〉惟動靜支勝。 〈答書〉惟動靜兼勝。

④ 〈吊姑亡書〉 惟動息支祐。 〈答書〉惟動靜兼祐。

⑤ 〈吊弟妹亡書〉惟支勝。 〈答書〉惟動靜兼祐。

⑥ 〈吊妻亡書〉 惟動靜兼祐。 〈答書〉惟動靜兼勝。

上例②中往書云施於次尊的“支豫”，其答書應該是上達於下的，但還是使用平懷相互使用的“兼勝”之詞。例⑤的情況也相同，例①正相反。鑑於四海之中注重下達於上，不講究上達於下的情況[36]，可能謙虛地選用相對鄭重謹慎的詞彙。書儀中施卑的“支度”、“支遣”均不見其例，“支立”也只有內外族書儀中的兩例[37]。後來，司馬光將四海尊卑上下等級改變為三者時，不說“卑”而定稱“稍卑”的原因可能在這一點。

（2）關於發信人的表現

【吾／拙／僕】

以“吾”為自稱[38]，主要在從長往幼寫的內外族書儀中，如《高昌書儀 (擬)》[39]〈與弟妹書〉、C《新定書儀鏡》〈父母喪告弟妹書〉、D《新集吉凶書儀》〈和尚尊師與弟子書〉、G《書儀》〈與男女書〉。C《新定書儀鏡》〈通例第二〉云“凡尊長通稱吾，小重平懷皆稱名。”A《書儀》〈與卑者書〉“傾稍理耳”下註云“亦稱吾，亦稱名”是四海範文中唯一的例子並且說自稱“吾”和稱名都可以，就可以算幾乎沒有稱“吾”的。無論是尊卑長幼，一般都稱名[40]。

“拙”，一般構成“自拙將治”、“自拙將理”等套句書儀習用，四海範文也有B《書儀鏡》〈賀四海正書〉“比拙將理，尚未痊除”之說法，意思是最近自己休養治療，但還是沒有康復。

---

[35]叢書集成初編，p.107。

[36]如上所述，上達於下的範文只見於 A《書儀》中。

[37]C《新定書儀鏡》〈吊女婿遭父母喪書〉“想厶郎所履支立，男女等支致。”；〈吊女遭夫喪書〉“念汝支立，男女等支致。”

[38]《爾雅・釋詁下》“吾，我也。”(《十三經注疏：附校勘記》北京：中華書局，1980，p.2573。)

[39]72TAM169:26(b) 。

[40]範文中用“名”或“某 (/厶) 乙”標誌該寫發信人自己的名之處。

值得注目的是，B《書儀鏡》的四海〈賀～書〉中頻繁使用“僕”，這是其他範文中所不見的。《說文・業部》“僕，給事者。”[41]《廣韻・屋韻》“僕，侍從人也。”[42]本來指一種奴隸或差役，含服從對方之意，給“己所事”、“官位若高”、“受業師”等尊者送的書札中用為自謙自卑之稱比較適合。但另一方面，關於第一人稱，顏之推說，“昔者，王侯自稱孤、寡、布穀，自茲以降，雖孔子聖師，與門人言皆稱名也。後雖有臣僕之稱，行者蓋亦寡焉。江南輕重，各有謂號，具諸書儀。北人多稱名者，乃古遺風，吾善其稱名焉。”[43]從此可知，一般都稱名，很少有人用“臣”、“僕”等為自稱。因為如此，敦煌書儀中也多用名，罕見自稱“僕”。

【拙室/室人】

自己的妻子[44]。C《新定書儀鏡》〈四海吊答書廿首・答書 (吊妻亡書)〉“拙室”下註云“內外族云新婦”，從此可知，對自己家人的稱呼，四海和內外族有區別。

（3）關於收信人的表現

【尊/賢】

對對方親屬的尊稱有尊府君 (父親)、尊夫人 (母親)[45]、尊翁婆 (祖父母)、尊姑、賢閤夫人 (妻子)、賢室 (妻子)、賢侄、賢兄、賢弟妹、賢厶郎 (女婿) 等。加前綴“尊”或“賢”表示尊敬之意。關於這兩個字，《顏氏家訓・風操篇》云“凡與人言，稱彼祖父母、世父母、父母及長姑皆加尊字。自叔父母已下，皆加賢字，尊卑之差也。王羲之書，稱彼之母與自稱己母同，不云尊字，今所非也。”[46]，C《書儀鏡》〈四海吊答第三〉又云“凡吊父［云］尊府君、母［云］尊太夫人，其餘尊者及輕皆云賢，有官爵降重□。”與範文中的用法一致。

E《新集吉凶書儀》〈四海吊答書儀・吊人父母喪疏〉一個範文中前面稱“賢丈人母云太夫人”，後面又稱“尊丈人丈母”，或是錯別字，或是當時“尊”、“賢”兩者已經混亂。丈人、丈母，書儀中多用於〈與妻父母書〉中指自己妻子的父母，又廣指

[41]《說文解字注》上海：上海古籍出版社，1981，p.103。

[42]《宋本廣韻》北京：北京市中國書店，1982，p.432。

[43]《顏氏家訓集解・風操篇》p.78。

[44]《禮記・曲禮上》“三十曰，有室”“有室，有妻也。妻稱室。”(《十三經注疏》p.1234。)

[45]內外族凶儀中尊府君夫人又指女婿之父母、舅姑等。

[46]《顏氏家訓集解》p.76。王羲之尺牘中有“得示承尊夫人轉平和。”(《法書要錄》卷三所收《晉右軍王羲之書目》《欽定四庫全書》第 812 冊，子部藝術類，p.144)、“尊夫人向來復何如？”(《法書要錄》卷十所收《右軍書記》《欽定四庫全書》第 812 冊，子部藝術類，p.256) 等均為對收信人妻子的間接稱呼，未發現顏之推所說的情況。

父輩[47]，四海範文中“丈人”轉為對自己父親的朋友之尊稱[48]。丈人本來就有尊敬對方的意思[49]，用為向收信人的直接稱呼不加“尊”字，只“稱彼”家屬，專指收信人的家人使用，因此，在凶儀中多出現[50]。

C《新定書儀鏡》〈四海吊答書廿首・吊妻亡書〉“賢室”後加註云“尊云夫人”，從此可知，“夫人”施於地位較高者之妻子。

【收信人的稱呼】

四海範文中，A《書儀》〈與極尊書〉有註云“并平闕之。繼父稱號，父友稱丈人，師稱先生，餘尊臨時所稱。”對該範文的收信人“同居繼父、父之執友、疎居屬長、見藝師、姑夫姨夫、族祖族叔”各別說明書信中應該怎麼稱呼。

B《書儀鏡》〈四海書題・重書〉、〈同・次重〉各稱“官位公”、“公”，從此可知，“官位”＋“公”是更加尊重的稱呼。C《新定書儀鏡》〈四海慶賀書題・賀正冬啟〉、〈同・冬〉中又稱“大夫”、“大夫公”。“公”、“大夫”均為古代爵位名[51]，書儀中使用為對有官位之人的尊稱。D《新集吉凶書儀》〈四海雜相迎書・冬至相迎書〉中還稱“明公”，茲在《杜家立成雜書要略》〈喚知故飲書〉[52]、《唐人十二月朋友相聞書》〈正月孟春答書〉等朋友平懷之間往來的書札中見其例。

此外，張敖的各書儀範文都是“厶(／某)官(／位)”，“姓”後面加“官職”，表示敬稱[53]。官場範圍的範文中也與此相同，對收信人的稱呼一般都標誌“厶官”，如D《新集吉凶書儀》〈起居狀〉“伏惟厶官尊體動止萬福。”寫信時把收信人的姓和官位充入該處，像“張都頭、索都頭”[54]，“兄宋都頭”[55]，“鄧法律”[56]等，實用書狀中亦習見。

愈來愈重視官位的變化，不限於四海範文，內外族範文也同樣適用[57]。內外族範

---

[47]如A《書儀》〈與表丈人及表姑姨表兄姊書〉“伏願謂前人二親，隨所稱謂康和，丈人勝悆，兄姊勝常。”對表丈人，即表叔、表伯，範文中就稱為“丈人”。

[48]A《書儀》〈四海吉書儀五首・與極尊書〉云：“不審并平闕之，繼父稱號，父友稱丈人，師稱先生，餘尊臨時所稱。尊體何如?”

[49]《易經・師》“貞，丈人，吉，無咎。”疏“丈人謂嚴莊尊重之人。”(《十三經注疏》p.25。)

[50]書儀中另有在世時和沒後之稱呼的說明。C《新定書儀鏡》〈凡五十條〉“凡舅姑存日稱大君大家，歿後稱先舅先姑。”，又〈通例第二〉“凡言高祖為高問(門)，曾祖云曾門，祖為大門，父為家門，言伯極(及?)叔者云某兄弟門中，言兄弟云某姪房中，此皆是亡者之稱。”

[51]《字彙・八部》“公，爵名，五等之首曰公。”(《字彙字彙補》上海：上海辭書出版社，1991，p.47)，《漢書・百官公卿表上》“爵，一級曰公士，…，五大夫，六官大夫，七公大夫，…。”(中華書局標點本，p.739。)

[52]日中文化交流史研究會《杜家立成雜書要略　注釋と研究》東京：翰林書房，1994，p.48。

[53]牛志平、姚兆女《唐代稱謂》西安：三秦出版社，1987，p.51。

[54]S.2578〈薛九安致張都頭索都頭狀〉。

[55]S.4362〈歸義軍時期肅州都頭宋富忪起居狀〉。

[56]S.376〈歸義軍曹氏時期尚書致鄧法律書〉。

[57]比如說，各書儀所收錄的妻子給丈夫寫的書札範文中的稱呼，C《新定書儀鏡》〈與夫書〉“次郎”，E《吉凶書儀》〈妻與夫書〉“厶郎如有位呼之官官亦得”、“厶郎或呼官位”，F《新集諸家九族尊卑書儀》〈妻答書〉

文中，與“吾”相應，長輩對小輩使用的“汝”字不見於四海範文中。

（4） 結尾套句

【謹～】

書札結尾一般都有“謹～”一句。

A《書儀》〈四海吉書儀五首〉

〈與極尊書〉 ［謹］附白記不具。

〈與稍尊書〉 謹附白書不具。

〈與平懷書〉 謹白書不具。

〈與稍卑書〉 遣此不具。

〈與卑者書〉 及此不多。

其它四海範文中用例最多者為“謹奉狀不宣”，都是由表示寄送、給予之意思的動詞＋指前面自己寫好的書信之語[58]構成。凶儀中習見“謹遣書慰慘愴不次”之套語。

內外族範文中，祖父母、伯叔父母等用“言疏”，“白記”是施於妻子的父母、丈夫的兄姊的，對自己的丈夫等平輩使用“白書”，四海範文中沒有相當於祖輩的等級，詞語運用情況相對低一格等級。

“謹奉狀不宣”是在官場範文中的常用套句，另有“謹奉啟不宣”，根據其書信的格式選用“狀”或“啟”。杜友晉書儀中還可以看得出等級差別，到了張敖的時代已經幾乎都用“謹奉狀不宣”，推測其原因，可能受到官場範文的影響。

【不宣/不具/不多/不次/不代】

如杜友晉、司馬光所說[59]，在書信末句當中這些詞義沒有相違之處，但其使用對象有區別[60]。四海範文中未見“不備”(吉、凶儀中施於內外祖父母。吉儀對和尚亦同。)、“不悉”(同“不多”，施於卑下)，最多者為“不宣”(施於平懷或稍尊)，凶儀中皆用“不次”[61]。

“厶郎”，H《新集書儀》〈妻答書〉“厶郎呼官位”，有時對家人也會使用官位，表示敬意。官稱和行第，請參考［吳 2002］〈第十章 官稱與行第〉，pp.301-354。

[58] “記”原指漢代的一種公文，書儀中“白記”表示與尊者的書信。［張 2007］ pp.141-142。

[59] C《新定書儀鏡》〈黃門侍郎盧藏用儀例一卷〉“諸云不備不悉等［語］，義旨皆同。但積習為常，須重立輕 (立輕重)，不可率爾解釋，即為尺牘，今亦別立［條］例。”；司馬光《書儀》卷一〈上尊官手啟〉“不備”下註云“備、具、宣、悉，據理亦同。但世俗有此分別。今須從眾。”(叢書集成初編，p.9。)

[60] 對茲差別前人已有論述，在此省略。請參考［張 2007］pp.379-383。

[61] A《書儀》〈凡例一首〉“凡凶書吊答皆云不次，唯祖父母、外祖父母書云不備。”；C《新定書儀鏡》〈通例第二〉“凡凶書皆云不次，復無謹空字，題亦無謹封。”；〈四海吊答第三〉“凡凶書皆云不次。”

“不代”是在敦煌寫本書儀中只見於四海範文中的一個用語[62]，吉、凶均使用。《說文・人部》“代，更也。”段玉裁註“凡以此易彼謂之代。”[63]祝頌、弔喪之際，本來親自拜訪對方，表達“辭儀”中所見的相應言詞，但因為某種原因及時不能實現而以書信代替[64]，但還是不如面對敘述，正因為如此，書札結尾謂“不代”。四海範文中還有“謹奉狀以代面申，不宣。”[65]之說法，其意思應該與《杜家立成雜書要略》之答書末說的“代申何具”[66]、“且謹代申”[67]等相同[68]。

“不多”者，在四海範文中只見A《書儀》〈與卑者書〉之一例。內外族範文中施於小輩，構成“還此不多”、“遣此不多”、“及此不多”等套句。

【書末】

關於書札末句用語，C《新定書儀鏡》〈黃門侍郎盧藏用儀例一卷〉云“凡書末，尊行皆告；長皆報疏；長加敬字；舅云問疏；加丈人云敬；謂女婿云白，平懷云謹諮，小重云呈、云疏，皆為姑族已上。”四海範文中的使用情況也大概與此一致，A《書儀》〈四海吉書儀五首〉都結束於“姓名[69]”＋“再拜”(極尊)、“諮”(稍尊、平懷)、“呈/諮”(稍卑)、“報”(卑者) 之語，H《新集書儀》中再拜又施於稍尊。凶儀中皆用“頓首”或“頓首頓首”，其它範文中被省略不見。

【題書】

題書，有兩種。茲舉例說明如下：

A《書儀》〈四海吉書儀五首〉

〈與極尊書〉　［　　］某姓官位<u>座前</u>（某官姓名白記）

〈與稍尊書〉　<u>謹通</u>某姓某官位**侍者**（稍尊前人稱<u>前</u>）

〈與平懷書〉　<u>謹通</u>某姓官位**左右**（若稍尊前人稱**侍者**）

〈與稍卑書〉　<u>簡姓</u>某官（**足下或不言足下**）

---

[62]敦煌書儀之外的資料中還會出現。如《太平廣記》卷三百九十一〈鄭欽悅〉“天寶中，有商洛隱者任昇之，嘗貽右補闕鄭欽悅書：‘昇之白：傾退居商洛，……。’欽悅即復書曰：‘使至忽辱簡函，……，使還，不代。鄭欽悅白記。’”北京：中華書局，1961，pp.3127-3128。

[63]《說文解字注》上海：上海古籍出版社，1981，p.375。

[64]《禮記・檀弓上》“有殯，聞兄弟之喪，雖緦必往。非兄弟，雖鄰不往，所識，其兄弟不同居者皆吊。”(《十三經注疏》p.1293)；《顏氏家訓・風操篇》“江南遭重喪，若相知者，同在城邑，三日不吊則絕之。除喪，雖相遇則避之，怨其不已憫也。有故及道遙者，致書可也。無書亦如之。”(《顏氏家訓集解》p.96)

[65]F《新集諸家九族尊卑書儀》〈與四海告別書〉。

[66]〈賀知故得官書〉《杜家立成雜書要略　注釋と研究》p.59。

[67]〈問知故遭災書〉《杜家立成雜書要略　注釋と研究》p.95。

[68]類似表現還見於《弘明集》卷三〈何重答宗〉“重告并省大論。……。聊以代面。何承天白。”(《大正藏》52冊，p.21)；《臨川文集》〈與彭器資書〉“某啟。……。謹勒此以代面敘。”(《欽定四庫全書》第1105冊，集部別集類，pp.649-650)；S.3438〈沙州官告國信判官將仕郎試大理評事王鼎狀〉“謹修狀啓聞，代申陳謝。”等不勝枚舉。

[69]內外族範文中，只稱“名”。書儀中標誌“名”或“厶”，四海範文都是“姓名”或“厶乙”。

〈與卑者書〉　　呈某姓官亦云送某官，亦云簡某官

C《新定書儀鏡》〈通例第二〉

凡題書，父母云几前，尊長云座前，小重云前或云謹通，平懷云謹諮，小重［輕］云呈、簡，卑幼云省，子孫云發。凡刺史云**節下**，將軍云**麾下**，有爵及五品已上云**記室**，小重云**侍者**，平懷［云］**左右**、**足下**，在位云**執事**。

一種是根據尊卑長幼而定的 (於上例中畫下線者)。另一種是看收信人的身份、官位來選的 (黑體者)。A 的範文和 C 的凡例中，雖有一些文字出入，但使用情況基本上符合。前者與 D《新集吉凶書儀》〈內外［族］題［書］狀樣〉[70]相似，適用於內外族往來的書札範文中，後者近似於 F《新集諸家九族尊卑書儀》〈封題樣〉[71]，是注重在官場範圍使用的。上揭 A《書儀》中主要使用內外族之間的，但註釋說明也可以使用官場的，值得注目。

就 B《書儀鏡》〈四海書題〉情況不同，標題下的註釋云“內外文官三品云閣下，左右丞相、節度使云節下，五品云記室，已下侍者，左右唯執事之語，不論重平並通用；內外武官三品云麾下，太守管軍亦云麾下、節下，折衝以下無管押與文官五品已下同。”而在範文中只見“閤下”、“通送”、“侍者”、“謹送”等語。另一方面 H《新集書儀》〈與四海極尊重狀〉、〈與四海稍尊狀〉中只使用“座前”。D《新集吉凶書儀》〈內外［族］題［書］狀樣〉云“右件［封］題［一依書］狀內所稱，不得差失，如非內外族，即合云几前、座前等語，但看前人，高位如重即言合 (閤) 下，如是節度使亦云節下，武官即云麾下，平懷亦［云］記室，次亦侍者，執事，餘任臨時酌量輕重行用。”從此可知，對非內外族的收信人需要看輕重任意挑選恰當的題書。

總之，四海範文中的遣詞用字，更接近於內外族的相關用語。但是，像“起居”、“支福”、“不備”、“ 几前”對祖父母、父母的專用詞均不出現。就是欠缺相當於內外

---

[70]封極重狀　謹謹上　厶號几前　厶乙　狀封
封次重狀　謹謹上　厶號座前　厶乙　狀封
封以次狀　謹通上　厶號座前　厶乙　狀封
封以次狀　謹上　厶號座前　厶乙　狀封
封以次書　通送　厶號左右　厶乙　敬封
封以次書　姓名書　至厶處送達　厶乙所前　敬封
封以次書　姓名書　至厶處付　厶乙開　封

C《新集書儀鏡》〈黃門侍郎盧藏用儀例一卷〉云：“平懷已上通用謹字。”、“凡題書，父母云几前，尊長云座前，小重云前或云謹通，平懷云謹諮，小輕云呈、簡，卑幼云省，子孫云發。”有所變化。

[71]絕重云　謹謹上　厶官閤下　厶乙　狀封
次重云　謹通上　厶官閤下　厶乙　謹 (狀) 封
次云　謹上　厶官記室　厶乙　狀封
次云　通上　［厶官］執事　厶乙　狀封
次云　通送　厶官左右　厶乙　敬封

族的最高等級，這符合上揭【表 2】所列的發信對象之中，四海極尊者為同居繼父、姑父、妻父母等內外族的情況。另一方面，又不使用明顯帶有從上往下的語氣之詞，措辭比較慎重。鑑於【支豫/支勝/支祐】條等所述過的情況，四海範文的發信人與收信人的上下序列不是受到客觀條件之局限的，不是像親屬排輩等絕對的。

五 “四海範文”的使用範圍——發信人與收信人之間的關係

（1）研究概況

目前學者們對“四海”的認識還不夠清晰，趙和平先生解釋“四海”、“平懷”均為朋友之意[72]，伊藤美重子氏認為是內外族之外的，沒有親緣關係的人[73]，丸山裕美子氏提出是僧尼道士書儀等特殊書儀之外的一般書儀[74]。

Ebrey 氏對唐代書儀進行考察，其中以杜友晉的書儀爲主，對四海平懷書之運用有詳細的分析，還涉及到書信或書儀的分類法，指出分類法根據親屬與四海 (“general public”) 之間在那裏劃界定會變動。姻緣關係的人（如“姊夫”、“妻兄”）有時歸入內外族，又有時歸類於四海的情況，推論是因爲有些撰者以爲是親屬，有些以爲不是，或是因爲書儀所反映的地方和社會階層不同[75]。姜伯勤氏也以杜友晉的幾種書儀為材料，提出“‘四海’指非血緣關係的疏屬與同事、朋友關係。”的意見[76]。

吳麗娛氏指出 A《書儀》的“主要對象是內外族親屬”，在〈與極尊書〉和〈與稍尊書〉中所見的發信對象“無長官及親友尊長的特殊區別”而“‘四海’者並不非注重官場內容。”接著提到 C《新定書儀鏡》〈四海慶賀書題〉，“明顯已以官場往來為主”。又說 B《書儀鏡》是“變化最大”者，“此件書儀中稱謂‘四海’者最多”，“‘四海’的表面含義雖然包括朋友親屬”但是其中一些範文“已是完全的官場迎賀問慰。”於是得出“‘四海’的真正含義已從主要是朋友 (包括各地親屬長輩) 向著官場的範圍過度。它所體現的已經是官本位之下，具有一定政治利益的社會關係”之結論[77]。最後還談到鄭餘慶、張敖編的各書儀，“這類啟狀 (指〈起居啟/狀〉、〈賀正冬啟〉、〈賀改官啟〉、各〈獻物狀〉等) 對象由於是從‘上司’、‘長官’、到‘四海朝

[72]［趙 1998］p.237。

[73]伊藤美重子《敦煌書儀の中の凶書》佐藤保、宮尾正樹編《ああ　哀しいかな：死と向き合う中國文學》東京：汲古書院，2002，pp.124。

[74]丸山裕美子《書儀の受容について：正倉院文書にみる「書儀の世界」》《正倉院文書研究》4，1996，p.152 註 (4) 。

[75]Patricia Ebrey, T’ang Guides to Verbal Etiquette, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 45:2, 1985, pp.581-613.

[76]姜伯勤《唐禮與敦煌發現的書儀——〈大唐開元禮〉與開元時期的書儀》《敦煌藝術宗教與禮樂文明——敦煌心史散論》北京：中國社會科學出版社，1996，p.430。

[77]［吳 2001］ pp.172-175；［吳 2002］ pp.57-60。

友’，並是以前者為主，所以明顯地脫離了‘朋友’氛圍，而充滿著下屬恭禮上級和官場內相互逢迎的特色。”主要論及四海書儀在官場中的使用和發展。

（2）“四海”的淵源——發信人與收信人的關係

書儀中的“四海”到底有什麼意思?為什麼此類範文叫做“四海”呢?我們在此進一步展開討論。

四海範文之中，如在【表 2】已所列，〈與～書〉中明確地提示收信人。從各個等級羅列的人物中，我們發現有如下共同點。

(1) 大體上，極尊等級是父輩的人，稍尊等級是年長的同輩。

(2) 都是非血緣關係的人。

但是，“父之執友”、“受業師”等人中再也沒有其他共同點。此外，以“與四海未相識書”為標題的範文，而且 H《新集書儀》中除了〈與四海平懷書〉之外，同時另收錄〈朋友疾相問書〉、〈與平懷書〉，四海和朋友還是有區別，不是一個概念，因此前人將“四海”解釋為“朋友”的說法，恐怕不十分正確。於是我們去看書儀之外的資料。《顏氏家訓・風操篇》中有如下一節：

> 四海之人，結為兄弟，亦何容易。必有志均義敵，令終如始者，方可議之。一爾之後，命子拜伏，呼為丈人，申父友之敬；身事彼親，亦宜加禮。比見北人，其輕此節，行路相逢，便定昆季，望年觀貌，不擇是非，至有結父為兄，托子為弟者[78]。

這裡顏之推所論，雖說“四海之內皆兄弟”[79]，但結成兄弟般的關係，其實是很不容易的。一定要志趣相投，始終一貫地追求共同理想。一旦結成了這種關係，就讓自己的兒子對對方施行見父輩的禮節。自己對四海兄弟的父母也要恭敬有加，如同對待自己的父母的禮儀一樣。現在，再一次看四海範文中所見的非姻屬致書對象，極尊等級的“父之執友”、“丈人”、“受業師”，稍尊等級的“己所事”等，都滿足顏之推所提到的條件。“父之執友”，《禮記・曲禮上》：“見父之執，不謂之進，不敢進。不謂之退，不敢退。不問，不敢對注。敬父同志，如事父。此孝子之行也。”孔穎達疏：“父之執，謂執友與父同志者也。”[80]志同道合的朋友才可以叫做“執友”，基於古禮的基本精神書儀中就具體地體現書寫函件時的禮儀。“丈人”，如上一章已述，對自己父親朋友的敬稱，雖然杜友晉和張敖的說法不同，根據《顏氏家訓》可以判斷，

[78]《顏氏家訓集解》p.123。

[79]《論語・顏淵》“君子敬而無失，與人恭而有禮，四海之內皆兄弟也。”(《十三經注疏》中華書局影印本，p.2503。)

[80]《十三經注疏》p.1233。

“諸丈人”、“父之執友”均指發信人父親結為兄弟的對象。“受業師”、“己所事”一定是有共同的志向之人[81]，適合結為兄弟的人物。因此推斷，書儀中多見的“四海”範文是結成兄弟般關係的人 (包括“兄弟”本人的父親、兒子) 之間往返的書札範文。發信人的“昆季”就是狹義的“四海”，四海的真正含義。

根深蒂固的共同志向紐帶把兩者聯結在一起，發生非血緣、非姻緣的“兄弟”關係。不僅僅是本人的兄弟關係，還會牽涉到雙方家屬，施行自己家屬同樣的禮儀[82]。因為如此，四海之間的兄弟關係成為非內外族之間結成的類似於內外族的複雜關係。這種情況，與已上所述的四海範文各等級的詞語運用類似於內外族的情況一致。此外，上達於下的書札四海範文中選用比較客氣的語氣之詞，緩和居高臨下的氣氛，反映出的可能是四海關係雖然模擬內外族同樣的關係，但還是其尊卑長幼不是像血緣等絕對的，而是精神上的上下關係。

（3）四海書儀的演變過程——其利用階層與社會環境

唐代吉凶書儀繼承東晉南朝禮俗與禮學，沿襲了以《顏氏家訓》為代表的家訓發展而來， 而且 A《書儀》〈與表弟妹書〉註釋[83]中見杜友晉參考了《顏氏家訓》的證據[84]。吉凶書儀中所收錄的四海範文也淵源於南北朝封建社會的門閥貴族之風俗，在唐代不斷地改編書儀過程中，前往消滅過渡，到了宋代就完全消失了。

南北朝時期，承擔文化教養之形成、傳承的是門閥貴族知識人階層，士庶之別也很明顯[85]。士大夫階層的人不一定是出仕當官的，他們之間往來的書札，並不一定重視官場往來的禮儀而更注重血緣、姻緣等關係的家禮[86]。唐代科舉制度確立，書儀的利用者，有一定的文化水平又有必要寫信的人多為官僚，適應利用者由貴族向官僚

[81] B《書儀鏡》〈吊四海遭兄弟喪書〉中亦見“忝為朋執”之語。

[82] 四海兄弟之間的關係，根據發信對象中並列在一起的情況，在禮儀上應該與“姑夫”、“姨夫”、“妻父母”等姻族等同。補充一句，這不是意味著四海涵蓋這些有姻緣關係的人，可能是爲了書儀的編輯方便，書信格式、稱謂 (如上所述，尊府君、尊大家、丈人等)、用語的規範相同的收信人順便並列於四海之名目下而已。在 D《新集吉凶書儀》中寫給妻子的父母之書札範文，收錄於內外族、四海範文兩處，兩者之間看不出多大區別。〈內外族吉書・上伯叔姑及伯叔母狀 姨舅并妻父母亦同〉“辭違已久，伏增馳戀，不奉誨示，無慰下情。孟春猶寒，伏惟姑伯叔尊體動止萬福。即日厶蒙恩，限以厶事，未由拜覲，伏增馳結。謹奉狀不宣。厶再拜 伯叔姑姨舅座前”〈四海極尊狀 謂諸丈人、受業師、又妻父母等〉“違奉已久，伏增馳結。不奉誨示，無慰下情。孟春猶寒，伏惟厶位 尊體動止萬福。即日厶乙蒙恩，限以所守，拜伏未由，無任馳結，謹奉狀不宣。厶乙再拜。厶位座前［此開項書之］。厶月日。”

[83] “亦云呈，然《顏氏家訓》甚非此敬字，不合卑處用時所共行，未即可廢，今且用之。”

[84] 史睿《敦煌吉凶書儀與東晉南朝禮俗》郝春文主編《敦煌文獻論集：紀念敦煌藏經洞發現一百周年國際學術研討會論文集》瀋陽：遼寧人民出版社，2001，pp.394-421。

[85] 那波利貞《〈元和新定書儀〉と杜有晉の編する〈吉凶書儀〉とに就いて》《史林》第 45 卷第 1 號，1962，pp.1-34。

[86] 關於吉凶書儀和家禮的淵源關係，詳細演變發展，參見［吳 2002］〈第七章 吉凶書儀溯源——家禮的形成和書儀製作〉，pp.204-236；上揭［史睿 2001］。

的變化，其內容也向官場轉化[87]。隨著時代變化而吉凶書儀中內外族或四海範文逐漸減少，官場文書部分的分類細化，其所占的比例越來越高[88]，與之相應，官場禮儀影響到日常生活中的書札禮儀，在內外族或四海的範文中的語言表現也有所反映，平居問安或結尾的套句逐漸被相同性質的公文用語代替[89]。

〈與～書〉的發信對象，從開元末成書的A《書儀》到五代時期的H《新集書儀》沒有明顯的區別[90]，但同時出現F《新集諸家九族尊卑書儀》〈與重者書〉、G《書儀(擬)》〈與平懷相與書〉、H《新集書儀》〈與平懷書〉等不依據四海關係的範文，司馬光《書儀》中見向簡約變化的趨勢，並且標題中“四海”之詞消失，四海吉書被改稱為“書”[91]。關於四海範文的致書對象，再補充一句，唐代還可以說是沿襲舊風俗的[92]，但司馬光的尊卑等級分類方法很粗略，往時疏密相當於內外族而按照內外族為標準的四海尊卑名分之制，到了宋代已丟失了其特殊地位。士大夫階層壟斷的禮儀制度之庶民化或簡約化，門閥門第的瓦解、市民經濟社會的興起以及庶民階層的抬頭等社會環境的變遷[93]，應當是促進如此傾向之因素也。

鑑於上述情況，我們可以知道，統稱為四海的收信人不僅是一般朋友而已，當中也有嚴格的等級區別，發信人和收信人之間有封建制度下的某種特殊關係。

---

[87]不僅僅是利用者，編撰者皆具有一定的身份，處於特定的階層。史志中所收錄的書儀編撰者，他們的名字又多見於正史中，有些人還有傳 (史志著錄之書儀一覽，可以參看王三慶《敦煌書儀文獻と東アジア文化》高田時雄編《漢字文化三千年》京都：臨川書店，2009，p.192，註釋21。)。敦煌寫本書儀也有“京兆 杜友晉撰”、“銀青光祿大夫吏部尚書兼太常卿鄭餘慶撰”，“河西節度掌書記儒林郎試太常寺協律郎張敖撰集”等字。

[88]四海範文中也出現專門在官場範圍應用的。如B《書儀鏡》〈賀四海加官秩書題〉、D《新集吉凶書儀》〈賀四海朝友加官語〉等。

[89]吳麗娛氏指出過官場起居儀對民間書札所及的影響。《試論敦煌書儀中的官場起居儀》劉進寶、高田時雄主編《轉型期的敦煌學》上海：上海古籍出版社，2007，pp.263-278。

[90]B《書儀鏡》收錄的〈重書〉、〈次重〉看起來比較特殊，但其發信目的還是平居問安。〈重書〉標題下註云“相國、左右丞相、御史大夫、中丞、侍御、六尚書、三公九卿、節度使、太守同”，值得注目的是最後“同”字。與C《新定書儀鏡》〈四海慶賀書題〉“內外族同”或〈與妻父母書〉“內外族表丈兄姊同”之說法相同，這些範文的主要對象還是“四海”，不是注重這些上級高官，這裡並列兩者而不是前者涵蓋後者。

此外，〈重書〉與F《新集諸家九族尊卑書儀》〈與重者書〉更接近，兩者非常相似，標題〈“四海”書題〉或許是抄寫時之誤。

[91]上引司馬光《書儀》卷一〈上尊官時候啟狀〉。

[92]“官位若高”、“年高己”等致書對象以及〈與四海未相識書〉之出現反映的或許是顏之推批評的“望年觀貌，不擇是非”之北方習俗，推測在吉凶書儀中當時南北風俗習慣已經開始融匯在一起。上述自稱“僕”的使用狀況亦與如此傾向沒有矛盾。史睿氏曾經指出過，唐初是南北學術文化最終走向統一的時期。(史睿《北周後期至唐初禮制的變遷與學術文化的統一》《唐研究》第三卷，1997，pp.165-184。

[93]那波利貞《〈元和新定書儀〉と杜有晉の編する〈吉凶書儀〉とに就いて》《史林》第45卷第1號，1962，pp1-34；唐代禮儀制度的變遷，請參考姜伯勤氏的前揭論文以及《唐貞元、元和間禮的變遷——兼論唐禮的變遷與敦煌元和書儀文書》均收錄於《敦煌藝術宗教與禮樂文明——敦煌心史散論》北京：中國社會科學出版社，1996，pp.425-441；pp.442-457。

六　小結

以上簡單地論述了四海範文使用的不同場合層次、演變過程以及其中所反映的社會環境之變化。對四海範文的特點，得出如下結論。

(一) 以“四海之內皆兄弟”為根底，牢固結合起來的兩個人之間 (亦含其父子) 往來書信範文。

(二) 所體現的禮儀更近似於內外族之間的禮儀。

(三) 因受官場社會的影響，其語言愈來愈官場化。

(四) 其語言運用，尤其是上達於下的書札中，慎重選擇詞語，尊卑上下差距較小。

(五) 起因於 (四)，司馬光《書儀》改定為尊、平交、稍卑三個等級。隨著時代的變遷，“四海”從書儀中消失。

通過考察，由此再一次認識到，書儀中所收錄的“四海”範文之發信人與收信人是基於非血緣、非姻緣的“兄弟”關係，範文中模擬親屬的禮儀，構成複雜的語言系統，劃分得很細緻，並且再現有尊卑長幼、上下遠近之別，像內外族的內部結構。

（作者為京都大學大學院文學研究科博士研究生）

『敦煌寫本研究年報』第四號（2010.03）163-179 頁

唐代西州における群牧と馬の賣買

中田裕子

貞觀十四年（640）、高昌國は交河道行軍大總管である侯君集の攻撃によって滅亡し、唐王朝の支配下に入った。唐王朝はその地に西州を設置し、高昌・交河・柳中・蒲昌・天山の五縣を置き、さらに西州都護府を設置し、その後この地は唐王朝西方の重要な軍事據點となっていった。

唐王朝はこのような軍事據點を支えるためにも「長行馬（長行馬驢・長行車牛）」と呼ばれる騎乘・運搬用の馬、あるいはその他の家畜も、それぞれ公共交通のために使用していた。

もともと高昌國には「袁行馬・車牛」と呼ばれる交通機關があり、それは民間からの家畜供出によって支えられていた〔荒川 1993、p.27〕。長行馬とはその交通機關を繼承したものであるとされ、荒川正晴は「馬畜を有する戸からの供出によるその運用も、西州設置後も繼續して施行された」と述べつつ、「その後の唐の中央アジアに對する支配の擴大・長期化にともない、長行馬・車牛も州縣附屬の馬・車坊に管理される官有の馬・車牛」となったと述べている〔荒川 1993、p.47〕 。このように、各戸が私的に所有し供出していた馬や牛などは、唐王朝が、その地での支配力を強めていくにつれ、官有すなわち國家所有のものとなっていったと考えられる。

ところが西州時期のトルファンにおいて、このような官有の馬牛のほか、私的に所有されていると見られる馬が軍營に徵發されており、さらには私的所有に歸する「群牧」と呼ばれる牧場もあった事から、官有・私有の家畜とそれを飼養する牧場が併存していたことがうかがえる。さらには西州において、それらの私的な家畜の賣買が頻繁に見られ、節度使すら使者を派遣して馬を購入していたのである。

そこで、本稿では、このような私的所有の馬や個人所有の牧場が西州においてどのように重要であり、またまたそれらの私的所有にかかる家畜がなぜ西州において賣買されていたのか檢討してみたい。

一、西州における私馬と群牧

西州都護府の設置後、その地において、「長行馬（長行馬驢・長行車牛）」と呼ばれる家畜を用いた獨自の交通システムが築かれたことは、すでに先學によって研究が重ねられている[1]。

この「長行馬」について、荒川正晴はトルファン文書から詳細な檢討を行い、本來、州府の付屬機關として機能していたものが、七世紀末以降の唐の軍事支配の強化により、實質的に駐屯軍將兵が管理・運用する交通機關となったと述べる〔荒川 1993、p.47 〕

トルファン文書からは、當時、西州に置かれた五縣に前庭府（高昌）・岸頭府（交河縣）・蒲昌府（蒲昌縣）・天山府（天山縣）の折衝府がそれぞれ置かれていたことがわかる〔荒川 1989、p.60 〕〔張 2003、pp.244-247 〕。

西州における折衝府のうち、蒲昌府には、「蒲昌群」とよばれる群牧、すなわち馬を放牧するための牧場があったと見られ〔荒川 1990、p.30〕〔乜 2005、p.138〕、スタイン將來のトルファン文書、Or.8212/565（Ast.III.3.06）「唐西州典張從牒爲檢校開元十年（722）蒲昌群長行馬事」（圖版・録文：Maspero1953,PlateXXXI, p.147, 陳國燦 1994、pp.210-211、沙知・呉芳思 2005-1、p.128）によれば、その蒲昌群が所有する馬數は一四六疋にのぼったことがわかる。

この文書を檢討した荒川は「長行馬は、放牧から槽での飼育や使者への差配まで兵士によって管理され、運營されるものである」と述べ、長行馬が當地の府兵にとって重要な馬であったことが指摘されている〔荒川 1990、p.32〕。

このように、西州では兵士によって長行馬が管理され、軍事的な使用を目的とした馬と交通的な使用を目的とした馬が密接な關係にあったが、これまでの研究では、その馬を活用した軍事據點のあり方や交通機能を論じることに重きが置かれ、それらを支える馬そのものが、どのように供給されていたのか論じられることはなかった。

おそらく、これらの馬は折衝府管内の土着の民が私的に所有していた家畜を供出していたものと考えられるが、トルファン文書中には私的に所有されていたと見られる馬が多數存在し、軍馬として徵用されていた例が見える。

たとえば乜小紅によれば、西州蒲昌縣において衞士の私馬が軍馬として徵用されていたと指摘される〔乜 2006、p.149-150〕。それを記す文書を以下に掲げる。

72TAM188:30「唐西州蒲昌縣牒爲申送健兒渾小弟馬赴州事」（圖録・録文：『圖文』肆、卷頭寫眞、p.27。3 行目の正方形等は蒲州縣印を示す。）

[1]例えば〔藤枝 1956〕〔孔汜星 1981〕〔王冀青 1985〕〔荒川 1989〕〔荒川 1990〕〔荒川 1995〕。

1　蒲昌縣　　爲申送渾小弟馬一匹赴州具上事

2　　健兒渾小弟徵馬壹疋　駞敦六歳

3　　右、得上件人兄虔慶牒稱、被徵馬一疋、今備得、具毛色

〔和譯〕

蒲昌縣より、渾小弟の馬一匹を州に向けて送る件について、つぶさに報告をすること。

健兒の渾小弟より徵收した馬一疋　口先が黑い黃毛の去勢馬　六歳。

右のことがらについて、上件人の兄虔慶の牒を得たところ、馬が一疋徵用され、今備え得るに、つぶさに毛色を…

この文書は、赤木崇敏によって申式文書と分類されるものと同一のものであると考えられる。當時、鎭や長行坊が西州都督府へ文書を上申する際に、同時に所管の縣にも文書を提出、縣はこれら諸機關からの報告をつき合わせて事實關係を確認して、州の擔當部局へ報告する仕組みとなっていたという〔赤木 2008、p.89〕。おそらくこの文書も同様のもので、この健兒の所屬する鎭より蒲昌縣と西州都督府へ送られたものであろう。

また 72TAM188:82（a）「唐神龍二年（706）主帥渾小弟上西州都督府狀為處分馬蹉料事」（圖録・録文：『圖文』肆 p.26）にも渾小弟は登場する。この文書は全 20 行からなるが、4 行目に紙縫が見え、ここで文書が貼り次がれている。おそらく、ここで別の内容の文書と連貼されたのであろう。以下には、渾小弟が登場する 5 行目からの録文と和譯を掲げる。

（前略）

5　　狀上州

6　□馬一疋　駞敦

7　□新備得上件馬、今月一日至營、其蹉料未□

8　□謹以狀上、聽裁。

9　□如前。謹牒。

10　　神龍二年二月　　日主帥渾小弟

（後略）

〔和譯〕

州へ狀によって申し上げます。
馬一疋　口先が黑い黄毛の去勢馬。
新たに備え得た上件の馬が今月一日に營に到着いたしましたが、…ま
だその飼料を…。
…謹んで狀をもって申し上げます。ご處分ください。
〔取り調べは〕先のごとくです。謹んで牒します。

ここより、個人の私的所有にかかる馬が徵用され、西州都督府へ送られていたことがうかがえる。また 72TAM188:81（a）「唐徵馬送州付營檢領狀」（圖録・録文：『圖文』肆 p.28）にも健兒から徵收した馬が營に支給されていることが記される。これも、4 行目の後に大きな空白があり、その後に紙縫が見え連貼されている。裏面の紙縫部分には「敦」のサインが見える。以下に 5 行目からの録文と和譯を掲げる。

（前略）

5　狀上州
6　＿＿＿馬一疋　赤草五歲　劉狀舉一疋忿草　六歲　沮渠意違一疋紫父□□
7　＿＿＿牒稱得狀稱前件人等、被徵馬速備送州者、營＿＿＿
8　＿＿＿今隨狀送州、請呈印者、別牒營檢領訖上、仍取領
9　＿＿＿付坊餧飼訖、今以狀上。

〔和譯〕

州へ狀をもって申し上げます。
…馬一疋、うすあかげ、五歲、劉狀舉、一疋、あおあしげ、六歲　沮
渠意違、一疋、くりげ、おす…牒をえたところ、前件人等の狀が申し
ますに徵用された馬を速やかに州に送るといいました。營…今狀にし
たがって〔馬を〕州に送り、印を確認することを請い願います。別の
牒により、營にて調べが終わったのち、處理し…。坊においては飼養
することを終えましたので、今このことがらにつき上申いたします。

このように私的所有にかかる馬には印が押されており、それらが確認されていたことがうかがえる。

また 65TAM40:24,25「唐某府官馬帳」（圖録・録文：『圖文』參 p.296）には、以下のような記載が見える。

1　＿＿＿府　官　馬　總　十　疋＿＿＿

2　翟達住一匹　敦十歳　楊歡德馬一疋□

3　□歳　楊孝君馬一疋

4　□馬一疋騮敦十歳　李才行馬一疋駮敦八歳

5　□歳　楊圈德□一疋赤□

この文書は、某折衝府に對して個人の私馬が供出され、登録されていた帳簿であると考えられる〔乜 2006、p. 151〕。ここより折衝府の衞士は、折衝府管轄内の民を徵收することより、個人的な馬が折衝府に供出され、官馬となっていたこと、すなわち兵士の私馬が軍馬として徵用されていたことがわかる。

また、Or.8212/568（Ast.III.4.076）「唐神龍元年（705）高昌縣白神感等辭爲放免戸備馬匹事」（圖版・録文：Maspero 1953, PlateXXXI, p.149, 陳國燦 1994、p.266、沙知・呉芳思 2005-1、p. 130）には、さらに「公私馬」と呼ばれる名稱も存在する。この文書の内容は、高昌縣の白神感等が高寧城に寄住していたが、自ら所有する馬を戸内に備えたまま徵發されてしまったところ、司馬によってその馬が西州に送られてしまったので、その馬を放免することを西州府に上申した辭である、という〔荒川 2000、p.287〕。

この公私馬とは「西州では私的所有にかかる民間馬が徵發され、半ば官馬的な存在となっていた語と推測される」〔荒川 2000、p.287〕と指摘され、個人的な馬が西州に直接徵發されていたのである。

また長行坊には私印の押された馬がいたことが、スタイン將來漢文文書 Or.8212/551（Ast.III.3.07-08）「唐西州長行坊配兵放馬簿」（圖版・録文：Maspero 1953, plate XXXII, p113-115、 陳國燦 1994、pp.199-206 、沙知・呉芳思 2005-1、p.91-94）、Or.8212/553（Ast.III.3.09-0.10）「唐開元十年（722）西州長行坊發送、收領馬、驢帳」（圖版・録文：, Maspero1953,plate XXIV-XXV,p123-124、陳國燦 1994、pp.192-198、沙知・呉芳思 2005-1、pp.97-100）などよりうかがえる。

例えばその中で、Or.8212/551（07）、18 行目には「一疋、赤草、二歳、帶星、未印私印　仙（一疋。うすあかげのめす、二歳、白斑、官印を押さず、私印あり。仙。）」、(08)、48 行目には「一疋、赤草、二歳、玉面連鼻白　三蹄白、未印私印　仙（一疋。うすあかげのめす、二歳、鼻先まで白、三つのひづめが白い、官印を押さず、私印あり。）」と記される。また Or. 8212/553、(09)、15 行目には、「一疋、忿敦、十二歳　次膚、梁微破、兩耳決、近人鼻決、腿膊蕃印、遠人頰私印西長官印（一疋。あしげ、去勢馬、十二歳、中等、たてがみに少しのかすり傷、兩耳に切り傷、手前の鼻に切り傷。桃に外國字の印、向こう側の頰に私印と西長官印があり）」と記される。

この文書中に見える「赤」、「忿」などは毛色の種類、「草」、「敦」はそれぞれ「めす」、「去勢馬」を示しており、また烙印、傷などの特徴も細かく記されている〔藤枝 1956、p.6〕また、左右は近人、遠人であらわし、「人が右手で手綱をとって近い方と遠い方」という意味であると考えられ、Or.8212/551 に見える「仙」の文字は、おそらく馬を實見し、チェックをしたもののサインであると見られる〔藤枝 1956、p.6〕。

ここには私印の押されているものとして二種類の記載が存在し、ひとつは「未印私印」とみえるもの、もうひとつは「私印西長官印」として記されるものがある。この「西長官印」とは、「西州長行坊」の略であるという〔藤枝 1956、p.8 〕。

つまり、長行坊には、私印と西州長行坊の印が竝列して押されている馬が存在したのである。なぜ、このように私印と長行坊の印が同時に押されることになったのか。

おそらく、先の「公私馬」の例と同様に、私的に飼養されていた馬が徵發され、西州の長行坊に收容された結果、半ば官馬的な存在となっていたからと考えられるのではないだろうか。

この私印に關しては、近年發見された『明鈔本天聖令』上・下（圖録：上、pp.112、校録：下、p.303）に、その規定が掲載される。

> 唐 30 條　諸有私馬五十匹以上、欲申牒造印者聽、不得興（與）官印同、竝印項。在餘處有印者、没官。蕃馬不在此例。如當官印處有瘢痕者、亦括没…。
>
> 〔和譯〕
> およそ私馬が 50 匹以上あれば、上申して印をつくることを望むものはこれを許すが、官印と同じものは與えられず、うなじに印を押す。別の部分に印があるものは、官が没收する。蕃馬はこの例にはない。もし官印の部分に傷のあるものは、また没收する…。

つまり、私馬を 50 匹以上所有するものに私印が與えられたのである。この規定では「項（うなじ）に押す」とあるが、西州では頰に押すこともあったことがうかがえる。スタイン將來文書に見える馬にも、「私印西長官印」という私印が押されているということであれば、そこにも五十頭以上の馬があったと考えてよいだろう。いずれにしても、西州には私牧が存在していたことになる。西州では、長行馬が、官有の牧場からだけではなく、そのような私牧からも徵發されていたのである。

では、トルファン文書には、そのような私牧について記すところがあるだろう

か。私は、おそらく、文書中に見える「群牧」がそれに當たるのではないかと考えている。「群牧」とは、唐王朝の管理する牧場の一つであるが、從來の研究では、官營、私營の別は論じられてこなかった。

この「群牧」に關して、荒川は73TAM509:23/1-1(a)「唐開元二十二年（734）西州高昌縣申西州都督府牒爲差人夫修堤堰事」（圖版・録文『圖文』肆、p.317）を檢討し、ここに現れる群牧は官營の群牧場で放牧に當たっていた牧子を指していたといい、ここから高昌城での群牧の存在が想像されるとし、群牧に關して基本的に官營であったと述べる〔荒川1997、p.56〕。

しかし、西州には私的な群牧が存在する。たとえば、73TAM509:8/26(b)「唐唐昌觀申當觀長生牛羊數狀」（圖録・録文：『圖文』肆、p.338）には次のようにある。

1　唐昌觀　　狀上
2　　當觀 長 生羊大小總二百廿廿八口
3　　一　百　五　十　二　口　白　羊
4　　廿廿　八　口　羖　羧
5　　羔　子　廿廿　八　口
6　　廿廿　八　五　口　今　年　新　生　羔　子
7　牒當觀先無群牧，三、五年諸家
8　布施及贖生、零落雜合存得上件
9　數具色目如前、請處分。

〔和譯〕

唐昌觀より申し上げます。當觀の長生羊は大小あわせて全てで二百四十八口であり、そのうち一五二口は白羊、四八口は黑羊、子羊は四八口です。

そのうち四八口は今年新たに生まれた子羊です。

牒しますに、當觀は以前には群牧はありませんでしたが、三、五年のうちに諸家のお布施や贖生（生き物をにがして德を積むために生き物をすてること）によって、ばらばらだったものが集まって、上件の數になりました。

數と詳細な種類は先の通りです。處分を請い願います。

これは馬の群牧ではないが、私的な群牧の存在を表しているといえよう。

そもそも唐令には、監と群という馬などの家畜を育てる牧場があった。その規模などに關する規定を以下に掲げる。

『唐六典』巻17、太僕寺（p.486）
諸牧監掌群牧孳課之事。凡馬五千匹爲上監、三千匹已上爲中監、已下爲下監。凡馬・牛之群以百二十、駞・騾・驢之群以七十、羊之群以六百二十、群有牧長・牧尉。

〔和譯〕
およそ牧監は群牧の繁殖の職務を掌る。およそ馬五千匹を上監とし、三千匹以上を中監とし、それ以下を下監とする。およそ馬・牛の群は百二十、駞・騾・驢の群は七十、羊の群六百二十をもってし、群には牧長・牧尉が存在する。

このように、唐王朝には「監」と「群」と呼ばれる二種類の馬牧場が存在し、「監牧」とは何千匹もの馬を養牧している大規模なものであったが、「群牧」とは、馬およびその他の家畜を含む、比較的小規模なものであることがわかる。

このように、西州において私的な「群牧」が存在したことは史料からうかがえ、『唐六典』で定められた規定に達していない牧場をも「群牧」と呼び、その牧場中には個人的に所有されたものが含まれているということが理解できるのではないであろうか。では、次に私的所有の家畜の馬賣買の重要性に關して、論じてみたい。

二、西州での馬の購入とソグド系商人

龍谷大學所藏「開元十六年請紙牒案」には、河西市馬使の米眞陁が、馬を購入するために西州を訪れたことが記されている。この市馬使とは、池田温によれば唐王朝が派遣したもので、「西域の良馬の購入のためには專使」であり、「はるか西方におもむいて現地買い付けをおこなっていた」者もいたという〔池田 1980、p.322〕。ここでは「開元十六年請紙牒案」の市馬使を檢討することにより、西州での馬の賣買に關して考察を加えたい。

この文書はすでに内藤乾吉、小笠原宣秀、西村元祐などにより檢討されている〔内藤 1960〕〔小笠原／西村 1960〕。それらの先行研究によれば、この文書は六紙が連貼されており、一～三紙までが「兵曹法曹請紙文書」と名付けられ、主に兵曹司や法曹司が紙筆の支給を司る録事司に、紙筆を請求したものであるとされる〔内藤 1960、p.40〕。また、四～六紙までが「河西市馬使請紙文書」と名付けられ、河西節度使に派遣された司馬使米眞陀が西州へ馬を買いに來た際、紙筆が必要となったため西州都督府に請求した際のものであるとされる〔内藤 1960、p.40〕。

以下に、今回主に論じる四紙から六紙までの録文と和譯を掲げる。

大谷 5839「開元十六年請紙牒案」第四紙～第六紙（圖録：『大谷』III、圖版九、録文：『大谷』III、pp.208-209、内藤 1960、pp. 37-38、12、13 行目と 27、28 行の間に紙縫あり。紙縫背面に「沙」のサインあり。9、10 行目の正方形は西州都督府印の位置を表す。）

1　　案紙貳伯張　次紙壹伯張　筆兩管　墨一挺
2　牒。眞陁今緣市馬要前件紙筆等、請准式處
3　分。謹牒。
4　　開元十六年五月　日河西市馬使米眞陁牒
5　　付司。檢令式、河西節度
6　　買馬、不是別　　敕令市。計不
7　　合請紙筆。處分過。楚珪
8　　示。　　廿九日
9　　五月廿九日　　録事使
10　　録事參軍　　沙安　　付
11　　檢　案　沙　白
12　　一日
……〔紙縫〕……沙（紙背押縫）
13　牒檢案連如前。謹牒。
14　　六月　日　史　李藝　牒
15　　檢　沙　白
16　　一日
17　　案紙二百張　次一百張　筆兩管　墨一挺
18　　右得河西市馬使牒。請上件紙墨等。
19　　都督判、檢令式、河西節度買馬、不是別
20　　敕令市。計不合請紙筆。處分過者。依檢
21　　前後市馬使鞠中郎等。竝無請紙墨等
22　　處。
23　牒 件 檢 如 前。謹 牒。
24　　六月　日　史　李藝　牒
25　　承前市馬、非是一般。或朔方
26　　遠湊、或河西頻來、前後
27　　只見自供。州縣不曾　官給
……〔紙縫〕……沙（紙背押縫）
28　　既無體例可依。曹司實

（後缺）

〔1～8 行までの和譯〕

案紙貳伯張　次紙壹伯張　筆兩管　墨一挺

　牒します。眞陁今は馬を買い求めるために、前件の紙筆等が必要です。式に准じ處分をお願いします。謹んで牒します。開元十六年五月　日河西市馬使米眞陁が牒します。

　司にまわせ。令・式を調べよ。河西節度使が馬を買うために別の敕が下されて、買い求めに來たわけではない。はかるに紙筆を請うべきではない。處分せよ。楚珪が指示する。二十九日。

〔17～28 行までの和譯〕

案紙二百張　次一百張　筆筒管　墨一挺

　右のことがらについて、河西市馬使の牒を得たところ、上件の紙墨等を求めている。

　都督が判するために、令式を調べたところ、河西節度使が馬を買うことは、別の敕が下されて購入するのではない。はかるに紙筆を請うべきではない。處分せよ。その前後にやってきた市馬使の鞠中郎等の案件を調べたところ、みな墨を求めることはなかった。

　牒しますに、取り調べは先のごとくです。謹んで牒します。六月　日李藝が牒いたします。前述の馬を買うことは一般的ではない。あるいは北方の地から遠くやって來たり、あるいは河西から頻繁にやってきても自ら持ってくるものである。これまでも州縣では官府は（紙筆を）給付しなかった。決まり事の據るべきところがないなら、曹司、實に…

この河西市馬使とはその名稱の通り、馬を購入するためにもうけられた使職であり、河西節度使が派遣し、西州において馬を購入させていたと考えられる。

官有の牧場であれば、唐の官僚である河西市馬使が、馬を「購入」という形で手に入れようとするはずはあるまい。つまり、西州に彼らが赴き、馬を購入するというのは、それは、あくまで私的な「群牧」からの購入であったと考えられよう。

このように、西州では私的な馬賣買が可能な地であったのである。

しかし、實は、河西自體が、そもそも良馬の産地であった。『舊唐書』卷 132、李抱玉傳（p.3645）には次のような記事がある。

李抱玉、武德功臣安興貴之裔。代居河西、善養名馬、爲時所稱。…抱玉少長西州、好騎射、常從軍幕、沉毅有謀、小心忠謹。

〔和譯〕

李抱玉は、武德時の功臣で、安興貴の子孫である。代々河西に居住し、名馬を養い育てることを得意とし、時に稱えられることもあった。…抱玉は幼いときから西州で育ち、騎射を得意とし、常に軍營に從い、落ち着いていて策があり、注意深い心を持ち、忠實につとめに勵んだ。

しかし、なぜ河西節度使がわざわざ西州にまで市馬使を派遣し、馬を購入しなければならなかったのであろうか。

本來、唐王朝は、突厥との關係もあって、軍馬が豐富で、官有の牧場、「監牧」が充實していた。ところが、調露元年（679）に、唐王朝配下にあった突厥が次々に反亂を起こしたため、馬の供給が一時枯渇してしまった[2]。唐王朝が馬不足からようやく立ち直ったのが、開元十六年のころであったという。おそらくこの頃、唐王朝の馬獲得政策の效果が表われ始めた頃であろう。そのような馬獲得政策の一つに、馬を私的に購入するということも含まれていたのではないか。この頃、頻繁に吐蕃が河西に攻め込んでいた時期でもある。

ただ開元十六年（728）七月にも吐蕃は瓜州に攻め込んでいるが、隴右節度使の張志亮や河西節度使の蕭嵩はそれを撃退している[3]。唐は、吐蕃の攻撃に備えるために、大量の軍馬が必要となっていた。河西節度使が、西域の良馬を買い求めたのはそのような理由からであったと考えられよう。

また、『新唐書』卷50、兵志、馬條には、安禄山が蜂起した際に、唐軍は、「監牧・私群」から馬を集めてようやく數萬となったという記事がみえる。

『新唐書』卷五十、兵志、馬條、（p.1339）
安禄山以內外閑廄都使兼知樓煩監、陰選勝甲馬歸范陽、故其兵力傾天下而卒反。肅宗收兵至彭原、率官吏馬抵平涼、蒐監牧及私群、得馬數萬、軍遂振。
〔和譯〕
安禄山は內外閑廄都使・知樓煩監を兼ねていたので、密かにすぐれた軍馬を選んで范陽に歸還し、よって兵力が天下を傾け、ついに反亂を起こした。肅宗は兵をあつめ彭原に至り、官吏の馬を率いて平涼にいたり、監牧および私群をあつめ、馬數萬を得て、軍はやっと奮い立った。

[2]拙稿「唐代六胡州におけるソグド系突厥」『東洋史苑』72、2009。
[3]『新唐書』卷5、玄宗紀（p. 133）
〔開元十六年（728）〕七月、吐蕃寇瓜州、刺史張守珪敗之。乙巳、隴右節度使張志亮・河西節度使蕭嵩克吐蕃大莫門城。
〔開元十六年〕七月、吐蕃が瓜州に攻め込むも、刺史張守珪はこれを打ち破る。乙巳、隴右節度使張志亮・河西節度使蕭嵩が吐蕃を大莫門城にて破る。

この監牧とはさきほど述べた「監」と同じで、大規模な官營牧場を指し、私群とはおそらく私的に所有されていた「群牧」であると考えられよう。ここで「監牧と私群において得られた馬は數萬にいたった」とはあるが、安禄山蜂起時には、ほとんどの監牧は安禄山によって掌握されていたのであるから[4]、監牧が提供できた馬匹の數はそう多くはないと推測され、唐軍は、その大部分を「私群」に頼らざるを得なかったのではあるまいか。突厥が供給する馬を官有として、軍馬は長行馬に使用し、國力を充實させてきた唐王朝であったが、7世紀終わり頃からは、突厥の反亂もあり、彼らからの馬の供給が期待できなくなった。いったんは回復したものの、さらには、吐蕃の攻撃や、安史の亂が續き、それらに對しては、官有の軍馬が不足し、私的な「群牧」の馬に頼らざるを得なくなったのである。本稿で取り上げた、西州「群牧」における馬の賣買に關する文書は、この頃、官馬の不足に惱んだ唐王朝にとって、私的な「群牧」がいかに重要であったことを物語っているものと言えよう

ところで、先ほど掲げた大谷5839「開元十六年請紙牒案」に登場する市馬使は「米眞陁」というソグド系の姓をもつものであった。この頃、西州ではソグド系の姓を持つ者が馬をはじめとする家畜賣買を頻繁に行っていた。以下にその他の私的な家畜賣買の例を掲げる。

たとえば書道博31「唐開元廿九年（741）六月眞容寺累年契」（圖録：仁井田2001、Pl.III、録文：仁井田2001、p.155、8・9行目の間の直線は畫指）には次のようにある。

1　開元廿九年六月十日眞容寺於于諶城
2　交用大練捌匹、買興胡安忽娑烏柏
3　特牛一頭、肆歲。其牛及練即日交相
4　付了。如后牛有寒盜、竝仰主保
5　知當、不忤買人之事。兩主對面、
6　畫指記。
7　　練主
8　　牛主安忽娑年卅
9　　保人安朱葭年卅二

[4]『舊唐書』卷199、安禄山傳（p.5369）「十三載正月…又請爲閑厩・隴右群牧等都使、奏吉温爲武部侍郎兼中丞、爲其副、又請知總監事。既爲閑厩・群牧等使、上筋脚馬、皆陰選擇之、奪得樓煩監牧及奪張文儼馬牧。」（十三載正月、…〔安禄山は〕閑厩・隴右群牧等都使となることを願い、吉温を武部侍郎兼中丞とし、（閑厩）副使とすることを上奏し、また總監事（監牧の總監）とすることを願った。すでに閑厩・群牧等使となり、筋力に優れた足の強い馬をひそかに選び、樓煩監の牧場および張文儼の馬牧をうばった。）安禄山と唐王朝の馬政の關係については、別稿で詳しく論じる（『龍谷史壇』、近刊）。

10　　見　人　公　孫　蘭

〔1〜6 行までの和譯〕
開元二九年（741）六月十日眞容寺が于諶城において興胡（ソグド人）安忽娑の烏柏特牛一頭、肆歳を大練八匹で購入した。その牛および練はそのうちのうちに支拂われた。もし、その後に牛が盗難にあっても、みなその持ち主がその責任を持ち、買人を煩わせることはない。兩主は對面して、畫指にて記す。

また② 73TAM509:8/10「唐開元二十一年（733）石染典買馬契」（圖版・録文：『圖文』肆、p.279) にも次のような記事がある。

1　馬壹疋騮敦六歳
2　開元廿一年正月五日西州百姓石染典交用大練拾捌
3　疋、今於西州市、買康思禮邊上件馬。其馬
4　及練即日各交相分付了。如後有人寒
5　盗識認者、一仰主、保知當不關買人之事。恐
6　人無信、故立私契。兩共和可書指爲記。
7　　練主
8　　馬主別將康思禮年卅四
9　　保人興胡羅世那年卌
10　　保人興胡安達漢年卌五
11　　保人西州百姓石早寒年五十

〔1〜6 行までの和譯〕
馬一疋、黑毛の赤馬、去勢馬六歳
開元二十一年正月五日、西州の百姓石染典が大練十八疋で西州において康思禮のもとから上件の馬を購入した。その馬および練はその日の内にそれぞれに支拂われた。もし後にその後に盗難にあっても、みなその持ち主がその責任を持ち、買人に關係ない事とする。人は契約を守らない恐れがあるので、私的に契約を結ぶ。兩者が合意すれば、畫指にて記す。

このように、①の文書は「安」というソグド姓を持つソグド系のものが賣り手であり、保證人も、「安」姓を持つソグド系の者である。②に關しては賣り手が「康」姓、買い手が「石」姓のソグド系、保證人もすべて「羅」「安」「石」などの姓を持つソグド系の者であることがわかる。②に見える石染典は、別の文書からわかる

ように西州の百姓でありながら遊撃將軍の地位を持っていたソグド系の人物である[5]。

ここより西州の百姓たる者が過所を獲得し、自由に馬の賣買を行っていることがうかがえ、當時の西州では、ソグド系の者による私的な馬の賣買が頻繁に行われていたことがわかる。

また突騎施の首領が馬を賣買している史料も存在する。72TAM188:87（a）「唐譯語人何德力代書突騎施首領多亥達干收領馬價抄」（圖版・録文：『吐魯番出土文書』肆、p.41、5 行目の直線は畫指。）

（前缺）

1　□錢貳拾貫肆伯文

2　　右酬首領多亥達干馬參疋直。

3　　十二月十一日付突騎施首領多亥達

4　　干領

5　　譯語人何　德力

〔和譯〕

錢貳拾貫肆伯文、右のことがらは〔突騎施〕首領の多亥達干の馬三疋の値として支拂う。十二月十一日付で突騎施首領多亥達干は〔その代金を〕受け取った。翻譯人何德力。

ここでは高田時雄が指摘するように、異民族との馬賣買の仲介人として何というソグド姓を持つ者が活躍している〔高田 2009、p.272〕。

つまり、西州で馬を買い付けた河西市馬使の米眞陁は、「米」というソグド姓を持つソグド系の者であり、さらに西州において、馬の賣買を行っていた石染典も「石」というソグド姓を持つ。當時、私的な馬の賣買が頻繁に行われていた西州では、その賣り手はソグド系商人が多かった。安禄山自身も、「安」というソグド姓を持つソグド系商人であったことはよく知られている。

當時の唐代の馬の賣買にソグド系の者が關わっていたことは、編纂史料からもうかがえる[6]。ソグド系商人がそれらの馬賣買のルートを掌握し、さらには唐王朝の官職を得たソグド系の者とも取引をし、唐王朝全土にそのネットワークを廣げていたことが考えられる。

[5] 73TAM509:8/13（a）之一「唐開元二十（732）年瓜州都督府給西州百姓遊擊將軍石染典過所」（圖録・録文『吐魯番出土文書』肆、pp.275-276）

[6] たとえばオルドス内にいたソグド系の集團である六胡州は馬を飼い育てることを生業とし、唐王朝に馬を賣り、遊擊將軍の地位を得ていた〔中田 2009、p.48〕。

おそらくは、西州もそのソグド系の者がつくりあげたネットワークに組み込まれていたのではないだろうか。

おわりに

このように西州における「私的所有の馬」を手がかりに、その馬を供給する「群牧」を考察し、さらに西州での私的な馬賣買について私見を述べてきた。

從來、唐代の「監牧」と「群牧」について、「監牧」が官有であることは夙に指摘されるところであったが、「群牧」については、官有であるか、私有であるかについては論じられることはあまりなかった。本稿では、少なくとも、西州の「群牧」には私有のものがあり、唐王朝の馬供給源にとして、重要な意味を持っていたことが考えられることを述べた。

さらに、河西節度使が西州で馬を買い付けるために派遣した河西市馬使の米眞陁は、「米」というソグド姓を持つソグド系の者であった。そのほか、西州において馬の賣買を行っていた石染典なども「石」というソグド姓を持つ。

このように八世紀、私的な馬の賣買が頻繁に行われていた西州では、その賣り手はソグド系商人が多かった。

おそらくソグド系商人がそれらの馬賣買のルートを掌握し、さらには唐王朝の官職を得たソグド系の者とも取引をし、唐王朝全土にそのネットワークを廣げていたことが考えられる。おそらくは、西州もそのネットワークに組み込まれていたのではないだろうか。唐王朝にとって、ソグド系商人の商業ネットワークと、その重要商品の一つであったであろう馬は、王朝存立のために缺かせないものとなっていったのである。

【圖録・録文略號】

Maspero, H. 1953：*Les documents chinois de la troisième expédition de Sir Aurel Stein en Asie Centrale*, London, The Trustees of the British Museum.

『圖文』：『吐魯番出土文書』壹～肆（圖文對照本）、中國文物研究所等編、北京、文物出版社、1996 年。

『大谷』III：『大谷文書集成』III、小田義久編、京都、法藏館、2003 年。

沙知、呉芳思 2005：『斯坦因第三次中亞考古所獲漢文文獻: 非佛經部分』1～2、沙知、呉芳思編、上海、上海辭書出版社。

『明鈔本天聖令』:『天一閣藏明鈔本天聖令校證』(上・下)、天一閣博物館、中國社會科學院歷史研究所天聖令整理課題組校證、北京、中華書局、2006 年。

【史料】

『資治通鑑』北京、中華書局、1956 年。

『舊唐書』/『新唐書』北京、中華書局、1975 年。

『唐六典』北京、中華書局、1992 年。

【參考文獻】

《日本語・五十音順》

赤木崇敏 2008:「唐前半期の地方文書行政――トゥルファン文書の檢討を通じて」『史學雜誌』117-11、pp. 75-102。

荒川正晴 1989:「唐河西以西の傳馬坊と長行坊」『東洋學報』70-3/4、pp. 35-69。

――― 1990:「スタイン將來“蒲昌群文書”の檢討――Ast.III.3.07.08.037 號文書の分析を中心にして」『西北史地』、pp.23-44。

――― 1993:「中央アジア地域における唐の交通運用について」『東洋史研究』52-2、pp.23-51。

――― 1995:「北庭都護府の輪臺縣と長行坊――アスターナ五〇六號墓出土、長行坊關係文書の檢討を中心として」小田義久先生還暦記念事業會編『小田義久博士還暦記念 東洋史論集』、京都、龍谷大學東洋史學研究會、pp.93-125。

――― 1997:「唐代トゥルファン高昌城周邊の水利開發と非漢人住民」『近世・近代中國および周邊地域における諸民族の移動と地域開發』(平成 7・8 年度科研報告書　研究代表・森安孝夫)、pp.49-64。

――― 2000:「唐朝の交通システム」『大阪大學大學院文學研究科紀要』40、pp.199-335。

池田温 1980:「敦煌の流通經濟」池田温編『講座敦煌 3 敦煌の社會』東京、大東出版社、pp.297-343。

小笠原宣秀／西村元祐 1960:「唐代役制關係文書考」西域文化研究會編『西域文化研究第三〈敦煌吐魯番社會經濟資料(下)〉』、京都、法藏館、pp.133-167。

坂上康俊 2008:「天聖令の藍本となった唐令の年代比定」大津透編『日唐律令比較研究の段階』東京、山川出版社。

謝成侠(千田英二譯)1977:『中國養馬史』、東京、日本中央競馬會弘濟會(北京、科學出版社、1959)。

高田時雄 2009：「漢字の西方波及」高田時雄編『漢字文化三千年』、京都、臨川書店、pp.255-275。

辻正博 2002：「草創期の敦煌學と日本の唐代法制史研究」高田時雄編『草創期の敦煌學』、東京、知泉書館、pp. 149-175。

内藤乾吉 1960：「西域發見唐代官文書の研究」西域文化研究會編『西域文化研究第三〈敦煌吐魯番社會經濟資料（下）〉』、京都、法藏館、pp.ii-iii、口繪 2、圖版 9。

中田裕子 2009：「六胡州におけるソグド系突厥」『東洋史苑』72、pp.33-66。

仁井田陞 2001：『唐宋法律文書の研究』、東京、東京大學出版會（1937 年初出。）

日比野丈夫 1963：「唐代蒲昌府文書の研究」『東方學報』33、pp.267-314。

藤枝晃 1956：「長行馬」『墨美』60、pp.2-34。

《中文・ピンイン順》

乜小紅 2006：『唐五代畜牧經濟研究』、北京、中華書局。

陳國燦 1994：『斯坦因所獲吐魯番文書研究』武昌、武漢大學出版社.。

孔祥星 1981：「唐代新疆地區的交通組織長行坊-新疆出土唐代文書研究」『中國歷史博物館』1981-3、pp.29-38，p.66。

黄正建 2006：「天一閣藏天聖令的發見與整理研究」『唐研究』12、北京、北京大學出版、pp. 1-8。

馬俊民・王生平 1995：『唐代馬政』、西安、西北大學出版社。

寧志新 2005：『隋唐使職制度研究（農牧工商編）』、北京、中華書局。

王冀青 1985：「唐交通通訊用馬的管理」『敦煌學輯刊』1985-2、pp.35-54

張沛 2003：『唐折衝府匯考』、西安、三秦出版社。

（作者は龍谷大學佛教文化研究所研究員）

『敦煌寫本研究年報』第四號（2010.03）181-194 頁

古代チベットの長さの單位: mda’ と sor mo

岩尾一史*

はじめに

敦煌をチベットが支配した時代（786 年～ 848 年）、多くのチベット文化が敦煌の社會に流入した。チベット語は一般に普及し、それとともにチベット語手紙、契約文書の形式が輸入された。一方で、チベット式の土地制や徵税制もチベット支配後の歸義軍政權に受け繼がれることになったのである [1]。

度量衡も、流入したチベット文化の一つとして數えることができる。チベットの容量單位であるケル（khal）、デ（bre）、プル（phul）が當時の敦煌で使用されたことは、敦煌發現チベット語契約文書によって在證されたが[2]、特にケルは漢語において「馱」と譯され、人口に膾炙したのであった。

ケルやデ、プルは現在のチベットでも使用されている容量單位である。しかし一方で、未知の度量衡の單位が史料中に現れることがある。本稿で紹介するのは、そういった未知の單位のうちの二つ、箭と指である。

一、「箭」と「指」

まず紹介するのは、敦煌漢語文書 Pelliot chinois 3432 である。文書の冒頭第 1-2 行に「龍興寺卿趙石老脚下、依蕃藉（＝籍）所附佛像供養 [. . .] 等數如後」とあり、敦煌の大寺龍興寺の所持品リストであることがわかる。第 1 行に「蕃藉（＝籍）」

---

*本稿は第 43 回野尻湖クリルタイ [日本アルタイ學會]（2006 年 7 月）ならびに京都大學人文科學研究所研究班「西陲發現中國中世寫本研究」での口頭發表（2009 年 5 月）を基に執筆した。兩會の席上、諸先生から多くのコメント、アドヴァイスを頂戴した。記して謝す。なお言うまでもなく、本稿に錯誤があれば筆者の責任である。

[1]例えば武內（2002）や岩尾 （2007）を參照されたい。

[2]契約文書については Takeuchi （1995）を參照されたい。なお、1 ケル＝ 20 デ。1 デ＝ 6 プル。

[3]と言う語が現れること、また文中に幾つものチベット由來の單位が現れることから判斷すれば、チベット支配期～歸義軍期初期に作成されたと考えられる。

リストには佛像、佛畫、經典をはじめ多くの佛具が現れ、それぞれの素材、色、大きさが詳細に記錄されている。問題はその大きさを示すのに使う尺度である。多くの物品に中國由來の尺寸法が使われているのであるが、中には明らかに見慣れない「箭」、「指」、「託」なる非中國の單位も散見されるのである。

同文書の詳細なフランス語譯注に Hou（1981）がある。氏はこれら單位について "l'usage des mesures tibétaines, telle que *t'uo* 託, *tsien* 箭 et *tche* 指" と述べ、これらをチベットの單位とみておられる。しかし、その原語や長さについては不明とされるのみであり、例えば託について "Mesure tibétaine ancienne dont nous ne connaissons pas encore la valeur" （Hou 1981: 153, n.8）、また箭についても "Mesure tibétaine"（同, n.11）と注記するにとゞまる。指に至っては注記もつけておられない。

本稿では、この三つの單位のうち、箭と指の原語とその長さについて考察したい[4]。以下、まずは Pelliot chinois 3432 に現れる箭と指の實例を引用する。

「箭」

- 畫布觀世音像壹、**長壹箭半**。（第 8-9 行）
- 繡阿彌陀像壹、**長參箭、闊兩箭**、帶色絹。（第 14 行）
- 四天王絹像肆、色絹裏、**長壹箭半、闊貳尺**、故。（第 15-16 行）
- 故佛衣、大像袈裟、表雜色絹、并貼金銅花疰嚴、綿紬裏、錦緣、**周圍拾箭壹**。（第 59-60 行）
- 又佛衣、綿紬裏、錦緣、金水疰嚴、**周圍陸箭**、故。（第 60 行）
- 故菩薩緋綾披、并有繡花色絹裏、錦緣及錦絹帶、**周圍陸箭**、眞珠疰嚴壹、故。（第 60-61 行）
- 故菩薩衣壹、綾錦表、色絹裏、高離錦及眞珠柒寶緣、色絹帶、**長肆箭、闊兩箭**。（第 62-64 行）
- 阿難裙、雜錦繡并雜絹補方、并貼金花疰嚴、番錦緣及錦絹瀝水、**長肆箭、闊兩箭貳**。（第 66-67 行）
- 金剛裙貳、故、緋綾表、色絹裏、紫絹緣、**長肆箭半伍、闊兩箭**。（第 68 行）

[3]Hou（1981: 152）はこの語を "le registre tibétain" と譯す。チベットが敦煌を支配したある時期、各寺を調査して所持品リストを作成したのかもしれない。

[4]託については更なる檢討が必要なので、別の機會に考察したい。

- 新高離錦表、色絹裏傘壹、紅絹裙、并絲懸針線袋、羅網、并金銅杏葉疰嚴、**周圍柒箭**。在行象□。（第 73-74 行）
- 故小白綾傘貳、色絹者舌、**周圍壹箭半**。（第 74-75 行）
- 金渡紫絹佛帳額、**長壹箭半**、闊壹尺、肆條。（第 76-77 行）
- 故緋繡羅額、**長壹箭半**。（第 77 行）
- 白繡羅額兩段、**長壹箭半**。（第 77 行）
- 故高離錦經巾壹、色絹裏、四方各**長壹箭半**。（第 78 行）
- 緋絹經巾、色絹裏、白練畫緣、**長兩箭、闊壹箭半**。不堪受用。（第 79-80 行）
- 又經巾壹、花羅表、紅絹裏、**長壹箭半、闊參尺伍**、不堪受用。（第 80-81 行）
- 鐘壹口、**周圍肆箭半、長壹箭半**。（第 86 行）
- 雜色絹路袋壹、**方圓壹箭**。（第 87-88 行）
- 聖僧座繡褥壹、青絹裏、高離錦□、**方圓壹箭**、故。（第 88-89 行）

「指」

- 又頭冠壹、錦驥帶陸、**長兩箭肆指、闊參寸**、并金銅杏葉壹拾伍、并子光下儭。（第 58-59 行）
- 又細畫布經巾壹、**長參箭壹析（＝指）、闊兩箭半。**（第 79 行）

*池田 (1979: 514-516, No.243), Hou (1981), 唐・陸 (1986-90: 第 3 巻、2-6)

上引の諸例から明らかになるのは、箭と指との關係である。第 57-58 行に「長兩箭肆指」とあるので、指は箭の下位單位であろう[5]。そうすると第 59-60 行に「故佛衣、大像袈裟、（中略）、周圍拾箭壹」、第 66-67 行に「阿難裙、（中略）、闊兩箭貳」、第 68 行に「長肆箭半伍」とあるのは、それぞれ壹、貳、伍の後ろに「指」が省略されたとみることができる[6]。

さて、この指という單位は、管見の限り上引の漢語文書にしか現れないのだが、一方で箭の存在は他の文書でも確認できる。Pelliot chinois 2583 「吐蕃申年（828 年?）等沙州諸人施捨疏十二件」中の第 1 件には次のようにある。

[5]第 79 行に「細畫布經巾壹、長參箭壹析、（後略）」とあるが、Hou（1981: 159）が「析」を「指」と讀み替えるのに從う。

[6]Hou（1981: 156, 157）も拾箭壹、闊兩箭貳に関しては同様の見解である。ただし長肆箭半伍に関しては “4 flèches et demie” としており（Hou 1981: 157）、すなわち半 = 伍とみておられる。つまり 1 箭 = 10 指とみておられるのだが、その見解が正しいかどうかは檢討の餘地がある。

1: 申年正月十五日、時□□時福田、柴（紫）一疋卅七尺。**絹兩疋各十五**

2: **箭**。金五兩。上錦兩張。**雑絹兩疋、各十五箭**。麥（?）三碩、折得上牛兩頭、共計十三石

（後　略）

*池田 (1979: 544, No.251), 唐・陸 (1986: 第 3 巻、64-70)

箭の例は他にもある。Pelliot chinois 2837verso 「吐蕃辰年正月二月沙州男女施入疏十四件」の第 9 件第 1 行にも「髮五箭」とある（池田 1979: 548, No.252）。また、Dx 6036verso には「傘一方圓各一箭」（第 3 行）とある[7]。

箭はチベット支配が終わった後も敦煌でしばらく使われたらしい。Pelliot chinois 2613 「咸通十四年癸巳歳（873 年）正月四日沙州某寺徒衆常住交割歴」には、尺寸法と併存して箭の用法がみられる[8]。つまり、少なくともチベットの敦煌支配が終わってから 25 年後の 873 年にもこの單位は使われ續けていたようだ[9]。

さて、箭や指がチベットの單位であるならば、當然ながらもとのチベット語が存在するはずであるが、果たして同時代のチベット語文書にはそれら單位が現れるかどうか。以下、チベット語文書中にその原語を求めてみよう。

二、指と sor mo

まず箭の下位單位である指について檢討しよう。チベット語のうち、「指」を意味し、かつ長さの單位として使われる單語があるかどうか。すぐさま見つかるのが、ソルモ（sor mo）、「指」である。ソルモは麥粒（’bru）7 つ分の長さとして說明される[10]。

注目すべきはこのソルモ（指）が明らかにインド由來の單位であり、*Mvy*（No.8201）にはもとのサンスクリットが Aṅguli-parva(n) と登錄されていることである。

他のインド由來の長さの單位、特に身體を使って測る長さの單位もチベットに導入されていたらしく、ドム（’dom. Skt. dhanu 「一弓」. *Mvy*. No.8204. 兩手を

[7]また Dx 6036verso 第 4 行に「大錯彩絹幡一口長七□」とあるが、最後の文字は殘畫からみて「箭」であろう。なお、Dx 6036 の存在については俄藏敦煌文獻輪讀會の席上にて知り得た。辻正博氏や輪讀會參加者に記して謝す。

[8]例えば「故破碎高離錦經巾壹、麡塵絹裏、每面各長壹箭半。」（第 8-9 行）、「白繡羅帶貳、各長壹箭半。」（第 10 行）とある。文書の錄文は池田（1979: 579-582, No.282）、唐・陸（1986-90: 第 3 巻、9-13）にある。

[9]その後、箭がいつまで敦煌に殘ったのか、殘念ながら詳細は不明である。

[10]例えば藏漢（2964）を參照されたい。

伸ばしたときの両方の掌または中指の先の間の長さ）やト（mtho, mtho gang. Skt. vistasti「礫手」. *Mvy* No.8400. 親指の先から中指の先までの長さ）も、チベット支配期に發行されたチベット語敦煌文書の中にみられるのである[11]。なお、1 ドム = 24 ソルモ、1 ト = 12 ソルモであり、また 1 ソルモ = 7 ドゥ（’bru）、すなわち麥粒（Skt. yava）7 つ分の長さに相當する。これらは明らかに佛典に現れるインドの度量衡に倣ったものである。

そうすると、インドのそれぞれの單位のメートル換算がわかれば必然的にチベットのそれぞれの長さも推定できるだろう。インドの單位の換算値については諸說あるが[12]、森・本澤（2002: 19）にならって 1 dhanu が 165cm だと假定しよう。そうすると、1 ドム = 165cm となる。1 ドム = 24 ソルモであるから、1 ソルモ = 165 ÷ 24 = 6.875 cm になる[13]。ただし 1 ドム = 165cm という前提が正しいかどうかは不明であるので、6.875cm というサイズはあくまでの目安である。むしろ、後述するように 6.875cm よりも若干短いか長かった可能性が高いのである（5 章參照）。

さて、上述の議論が正しければ、古代チベットはインドの度量衡を導入していたことになるが、そうするとこれらの單位が何時頃から使われたのかが問題になる。當然ながらインドの度量衡導入は佛典の翻譯に伴って行われたであろう。チベットの本格的な佛典翻譯は 8 世紀後半、チソンデツェンの治下にはじまったのであるから、インド由來の單位もその頃に導入された可能性が高い。このこと自體、さらに檢討すべき課題なのだが、本稿の意圖するところとは外れるのでしばらく措き、もう一方の箭について檢討したい。

三、箭と mda’

指（ソルモ）はインドの度量衡に由來する單位であった。一方で、箭にあたるようなインドの計量單位はないのである。そうすると、箭はチベット固有の單位である可能性がある。まずは、チベット語文書に箭にあたる單位が存在するか檢討してみよう。

まず紹介するのは、Pelliot tibétain 1287 『年代記』中にある次の一節である。

---

[11]Pelliot tibétain 1128, 第 23-24 行: ras khyi sha can zheng mtho gang srubs lhag ’dom gang //「綺紗（?）をもつ布で、幅が 1 ト（mtho）、縫い代（?）【もあわせて】1 ドム（’dom）のもの」。

[12]諸說については、森・本澤 （2002）を參照されたい。

[13]なお Jäschke（1881）はソルモ（sor mo）を inch（580 左）、ト（mtho）を span（241 右）、ドム（’dom）を a fathom（282 左）とする。

チベットにはかつて文字が無かったが、このツェンポ（=ソンツェン・ガムポ）の時に出來た。チベットの枠組みである大いなる法令と、役人の序列、（各位の）大・小の權威、善を行う者への褒美、咎ある者への罰、農民・牧民への皮税（thul ka）とドル税（＝穀物税. dor ka）、驛の位置と間隔の整備、**ダ（mda’）、プル（容量單位）、サン（srang　重量單位）【の整備】**等、チベットにおける善き法の基盤（chos kyi gzhung）全てが、ツェンポであるチソンツェンの御世に生じた。全ての人々がその大恩を思い起こして【その恩を】感受したので、ソンツェン・ガムポ（＝御心深きソンツェン）という御名を獻上した[14]。

* Pelliot tibétain 1287, 第 451-455 行 (Bacot *et al*. 1940-1946: 118, 161）

『年代記』第 451-455 行に現れる上記のくだりは、古代チベット建國の祖であるソンツェンガムポの事績を列擧した部分である。當時のチベットの各制度が列擧されており、本來であれば一條毎に愼重な檢討が必要なのであるが、本稿の主題と外れるのでこゝでは述べない。本稿で特に注目するのは、太字で示した一條である。

この一條ではダなる語が現れている。ダは「矢」の意であるが、文脈上、物理的な矢の意味ではありえない。というのも、この一條は、プル（容量單位）やサン（重量單位）を擧げていることから明白なとおり、度量衡の制定について述べているのであって、ダもやはり度量衡の一つであると考えるのが自然であるからである。さて、ダが度量衡の單位の一つであったとすると、當然想起されるのは、さきに紹介した長さの單位としての「箭」である。すなわち、このダは長さの單位であり、そして「箭」の原語である、と考えられるのである。

この假說は、いくつかの例で證明される。例えば、マザールターグ出土の紙文書 M.Tagh.0197 は「千【戸】を統轄する者?」tong kud[15]の所有財產目錄であるが、第 8 行目に

[14]bod la snga na yI ge myed pa yang / / btsan po ’di ’I tshe byung nas / / bod kyi gtsugs lag bka’ grims ched po dang / blon po ’i rim pa dang / che chung gnyis kyI dbang thang dang / legs pa zin pa ’I bya dga’ dang / nye yo ba ’i chad pa dang / zhing ’brog gi thul ka dang dor ka dang / slungs kyi go bar bsnyams pa dang / bre pul dang / srang la stsogs pa / / bod kyi chos kyi gzhung bzang po kun / / btsan po khri srong brtsan gyi ring las byung ngo / myi yongs kyis bka’ drin dran zhing tshor bas / / srong brtsan sgam po zhes gsol to / /

[15]Stong kud は解釋の難しい語である。Pelliot tibétain 1120 に「トンサル千戸におけるチベットのキャが 9.5 に對し、金を 7 サン 1 ショ【課し】、stong kud pa の五家に對し、金を [-].5 サンと 3 ショ【課す】」（stong sar s[t]ong sde gcig la / / bod rkya phyed dang bcu la / / gser srang bdun dang zho gcig / / stong kud pa khyim lnga la / / b[s]e[r?] [. . .] dang gnyis dang zho gsum / / ）と現れる stong kud とお

... と半分のダ...[16]

と現れる。矢が半分であるはずはないので、この場合のダは長さの單位であろう。さらに貢税徴收に關するチベット語文書 Pelliot tibétan 1128 には次のようにある。

.... 申年の年貢（lo thang）と同時に差し出す分は、紬（men tri）9 ユク（yug）9 ダ、細棉 123.5 ユク、粗棉 404 ユク、綺紗（?）をもつ布で、幅が 1 ト、縫い代（?）【もあわせて】1 ドムのもの、... [17]。

には、年貢とともに納めるべき紬、細棉、粗棉がユクで計算されており、そのうち紬の納付量が 9 ユク 9 ダと記されている。納付物品が全て布帛類であることから、このダが矢を意味しないことは明らかであろう。すなわち、單位としてのダが存在したことは間違いないのである。

さて、問題となるのはユクとダとの關係である。1 ユク（yug）は布帛では漢語の「疋、匹」に、また紙では「張」にあたる量詞（高田 2005: 111）であるが、年貢などの徴收にこのユクが使われる場合、そのサイズは必ず規定されているはずである。紬 9 ユク 9 ダとあることは、布帛 1 ユクの長さが 9 ダよりも長いことを示すが、ではそのサイズとはどのくらいなのか?注目すべきは Pelliot tibétain 1120 中の一節である。

（そして）漢人トンサル千戸 1 つに、232.5 のキャがあるのに對し課し

そらく同一であろう。Stong は「千」と解釋できるが、一方 khud ～ kud の解釋は難しい。khud pa は khud pa chen po という形で『編年記』にも現れ、Bacot *et al*.（1940-46: 43）は “grand trésorier” と譯す。Dotson（2009: 108, n.245）は khud が誓いを意味する語と共に現れることより skud pa “to smear”、すなわち「【犠牲の血を口に】塗り付ける」とを關係づけようとするが、自らも認めるように必ずしも khud pa の解釋に成功していない。岩尾（2007: 111）では先述の Pelliot tibétain 1120 の箇所を譯したおり、stong kud pa については stong を「千【戸】」、kud ～ khud を「管轄する」といった意味にとって、「千戸を統轄する」と解釋した。もしこの解釋が正しければ、M.Tagh.0197 の stong kud も同じく「千【戸】を統轄する者」と解釋できる。ただしこの解釋はあくまで文脈によるものであって、暫定的なものである。

[16]mda’ pye [dang +-5]. テキスト、文書寫眞は Takeuchi（1997-98: No.10）参照のこと。

[17]...spre’u lo’i lo thang dang / dus gcig du ’bul ba la / **men tri yug dgu dang mda’ dgu** / / phra ras yug brgya nyi shu rtsa phyedang bzhi / / sboms yug bzhi brgya rtsa bzhi / ras khyi sha can zheng **mtho gang** srubs lhag **’dom gang** /... Pelliot tibétain 1128 はチベットの貢納徴收と會計についての重要文書であるが、今まで全く注目されなかった。その寫眞が公開されたのも最近のことである（IDP のウェブサイトにデジタルカラー寫眞がある）。Cf. Iwao（forthcoming）. なお men tri を紬と譯することについては吉田（2005: 59-60）を参照されたい。

た分：沙州の主産（?gtso）の棉で、絹課として得る、**15 ダで 1 ユクとなる**最上等のもの 234.5 ユク[18]。

（Pelliot tibétain 1120, 第 8-10 行）

トンサル千戸のキャから「15 ダで 1 ユクとなる最上等のもの 234.5 ユク」の棉を徵收する、とある。キャについては既に拙稿（岩尾 2007）で述べたので詳說しないが、本稿において注目すべきは、棉が「15 ダで 1 ユクとなる」と規定されていることである。實は 1 ユク = 15 ダという規定は漢語文書にも現れており、上引の Pelliot chinois 2583 には「絹兩疋十五箭」とあった。漢語文書の 1 疋 = 15 箭とチベット語文書の 1 ユク = 15 ダは明らかに一定の規格が存在したことを示す。すなわち、チベットの 1 ユク（疋）は 15 ダ（箭）の長さに規定されていたのである。

四、ダの長さ

では、ダの實際の長さは一體どの程度であったのか。古代チベットにおける箭の長さについての記述ですぐに思いつくのは、唐書吐蕃傳や通典に現れる驛傳制についての說明である。

其驛以鐵箭爲契、**其箭長七寸**、若急驛、膊前加著一銀鶻。

＊『通典』卷一九〇邊防六吐蕃

其擧兵、**以七寸金箭爲契**。百里一亭、有急兵、驛人臆前加銀鶻、甚急、鶻益多。

＊『新唐書』卷二一六上吐蕃上

上述のように、使者のしるしとして鐵箭または金箭が付けられ、その長さは 7 寸であったという。たゞしこの箭はあくまでもシンボリックなものであって長さの單位としての箭とは別に考えるであろう。何よりも 7 寸は想定されるダの長さとして短すぎる。一例を擧げると、Pelliot chinois 3432 に「四天王絹像肆、色絹裏、**長壹箭半、闊貳尺**、故」とあったが、もし箭＝ 7 寸だと假定すると、絹畫の縱の長さは壹箭半＝ 10.5 寸、つまり 1 尺強（約 30cm）の計算に成るが、そうすると幅の 2 尺（約 60cm）よりも縱の長さが短くなってしまう。當時の絹畫は縱の方が長い短册型が普通であるので、幅が縱より長いのは明らかにおかしい。また、同文

[18]rgya stong sar stong sde gcig la / / rkya nyis brgya’ sum cu rtsa phyed dang gsum chis pa la phab pa / / sha cu gtso ras dar kar thub pa mda’ bco lnga pa yug du phyin pa bzang rab yug [gny]is brgya sum cu rtsa phyed dang lnga / / ...

書第 80-81 行に「經巾壹、花羅表、紅絹裏、**長壹箭半、闊參尺伍**、不堪受用」とあり、1 箭半の長さの經典を包む布が記録されている。1 箭＝7 寸と假定すれば、これとて上記の例と同じく約 30cm と成るが、やはり經典の包みとしては短すぎる。つまり使者のしるしである金箭または鐵箭は長さの單位としてのダとは無關係であり、ダはもっと長いはずなのである。

五、mda’ tshad ma

では、他に單位としての箭は他の史料に現れるだろうか。先述のとおりチベット本土において長さの單位としての箭はすでに、使われていない。しかしながら、生きた單位としては殘らずとも、いわば化石化して使用されている例がみつかる。それがダツェーマ（mda’ tshad ma）である。藏漢（1377）は、この語を「矢一本分の長さ、または矢一本分の長さのもの。」[19]と說明するが、肝腎のその矢の長さがどのくらいかについては說明が無い。

このダツェーマが使われているのは、具體的にはチベット語書籍のサイズである。楊（2000: 27, 44）は、デルゲ木版印刷所の木版の規格は次の三つに分かれると說明する。

- **「箭杆本」 mda’ tshad ma 長さ 60 ～ 70cm、縱 11 ～ 18cm**
- 「肘本」 khru gang ma　長さ 40 ～ 50cm、縱 7 ～ 10cm
- 「短小本」 ldeb thung　長さ 30cm、縱 5 ～ 6cm

*楊（2000: 27, 44）.

注目すべきは箭杆本であり、楊（2000: 27）によれば「卽古代一支箭的長度」と補足說明しているのである。この說明が正しいならば、あるいはこの箭杆本は古代のダと類似したものであるとも考えられるのである。この箭杆本なる語は明らかに古いものであり、例えば 14 世紀の高僧プトン・リンツェンドゥップ（Bu ston rin chen grub. 1290-1368）の傳記にも現れている[20]。

チベット語書籍のうち大きなものゝうちの一つはチベット大藏經であろう。大藏經は正式な規格で作られるはずであるが、これらがどのくらいの大きさか、確

[19]ring thung gi tshad mda’ gang tsam mam / mda’ la tshad bzhag pa’i dngos po /. 箭杆等長之物。與箭杆等長或等高的東西。

[20]プトンの傳記によれば、彼は『大乘阿毘達磨集論』を學んだ際、毎日午前には本文を箭杆本（ダツェーマ. mda’ tshad）の 7 枚ずつ、註釋を 5 枚ずつ理解し、午後にはその內容の說明ができたという。Cf. Ruegg（1966: 73. 附卷末版本寫眞 8a4-5）.

認する價値はある。さて、越智 （1997: 24）によると、セラ寺所藏の永樂版カンギュルは（横）68cm ×（縱）24cm の寸法である。また、同じく越智 （1997: 28）によるとデプン寺所藏のリタン版カンギュルでは、（横）69cm ×（縱）24cm の寸法である。さらに、筆者が大谷大學所藏の北京版大藏經中のカンギュルを調査したところ、その帙の寸法は（横）72cm ×（縱）21cm であった。これら各カンギュルの寸法から分かるのは、上記のカンギュルの寸法がおよそ箭杆本のサイズ内に收まっていることである。

今みた大藏經は刻本であるが、さらに寫本の場合はどうであろうか。チベット高原に殘る寫本のうち最古のものを含む、所謂タボ寫本の例をみてみよう。 Steinkellner（1994: 123）は、タボ寫本のサイズについて、最大のものは 69 cm x 22 cm、最小のものは 45.5cm x 8.5cm と報告している。興味深いのは、最大のものが 69cm であるということである。すなわち、これも箭杆本のサイズの範疇なのである。

併せて考慮すると、結局のところチベットの傳統的書籍のサイズというのはあまり變化せず、箭杆本と呼ばれるものも 60cm ～ 70cm を保っていたということであろう。プトンがみた箭杆本もおよそ同じくらいの寫本であったと推定されるのである。

さて、楊氏の「卽古代一支箭的長度」という補足說明が正しければ、ダツェーマの傳統は古代チベット期にまで遡ることができそうである。では、古代チベット期の文書の中に、このダツェーマにあたるものがあるだろうか?注目すべきは、敦煌發現チベット語十萬頌般若經である。十萬頌般若經は、9 世紀前半、『無量壽宗要經』と竝び、古代チベット治下の敦煌で大量に寫經された[21]。十萬頌般若經には大きく分けて貝葉本と卷子本があるが、今注目すべきは前者である。Lalou（1954, 1957）によれば、敦煌の貝葉本には二種類ある。ひとつはチベットから見本として送られてきたもので、一葉が 75cm x 25cm の大きさである。もうひとつは敦煌で寫されたもので、一葉のサイズは 70cm x 20cm である。チベットの見本にならって敦煌の貝葉本が作成されたことは間違いないが、今問題とするのは見本として送られてきた方、すなわち、75cm x 25cm というサイズの方である。このサイズの貝葉本はチベット本土で作成されたものであり、そして今までみてきた箭杆本のサイズと明らかに似通っているのである。筆者の考えでは、これらのサイズの類似は偶然の一致ではなく、古代のダのサイズでもって十萬頌般若經の写本が作られ、そしてそのダのサイズは後世にまでダツェーマとして継承されたのである。

[21]例えば藤枝（1961: 277-279）や西岡（1985）上山（1988）を参照されたい。

すなわち、古代のダのサイズは 75cm 前後だということになるのではなかろうか。

上の考えが正しいとすると、残る問題はダとソルモの換算率である。ダが 75cm 前後、ソルモが 6.875cm だとすると、1 ダ = 10.9090... ソルモになり、どうも不自然である。換算には 10 進法か 12 進法が使われた可能性が高いはずだから、あるいはソルモの長さが 6.875cm よりも若干短かかったか長かったのであろう。先述のとおり、ソルモ = 6.875cm というのは、ドム（両手を伸ばしたときの両方の掌または中指の先の間の長さ）が 165cm であるという常識的推定に基づくものであり、あくまでも目安なのである。すなわち、1 ダ = 10 ソルモだとするとソルモ = 7.5cm であり、1 ダ = 12 ソルモだとするとソルモ = 6.25cm である。今はソルモのサイズを 6.25cm ～ 7.5cm としておき、更なる研究を俟ちたい。

おわりに

以上、箭と指についてみてきた。本稿で述べた要點は以下のとおりである。

1. 敦煌漢語文書に現れる「箭」と「指」はチベットの長さの單位である。箭の原語はダ（mda’）、指の原語はソルモ（sor mo）である。
2. 古代チベットではインド由來の長さの單位とチベット獨自の長さの單位が併存していた。指（ソルモ）はインド系統の單位に屬する。一方、箭（ダ）はチベット獨自の單位である。
3. 古代チベット期のダの長さは、75cm 前後である。一方、ソルモの長さは 6.25cm ～ 7.5cm である。
4. 徵收の対象である布の規格では、1 ユク（yug） = 15 ダであった。
5. ダは古代チベット期以降、長さの單位として使われなくなった。たゞし、チベット語書籍の規格としてのみ、箭杆本（ダツェーマ. mda’ tshad ma）という語が殘った。

さて、本稿で述べたことが正しければ、おそらく 8 世紀後半以降の古代チベットには、インド、チベット兩方の度量衡が併存していたということになる。固有の度量衡がチベットに存在したことは、上引の『年代記』に現れる度量衡制定の一條に列擧される單位が全てチベット固有のものであることからもうかがい得る。

一方で、指（ソルモ）や、ドム、トなどのインド由來の單位はある時期おそらく8世紀後半の佛教の本格的導入時期にチベットに入ってきたと推定できる。おそらくのところ、佛教とともにチベットに導入されたのは度量衡だけではない。この時期にインド文化がチベットに與えた影響について、今後さらなる檢討が必要であろう。

參考文獻

[池田 1979] 池田溫, 『中國古代籍帳研究』. 東京大學出版會, 東京.

[池田 1990] 池田溫, 「敦煌における土地税役制をめぐって—九世紀を中心として—」. In: 唐代史研究會（編）, 『東アジア古文書の史的研究』, 刀水書房, 東京: 46-70.

[岩尾 2007] 岩尾一史,「キャ制（rkya）の研究序說—古代チベット帝國の社會制度—」. 『東方學』第 113 輯: 118-103.

[上山 1988] 上山大峻, 「吐蕃の寫經事業と敦煌」 In: 唐代史研究會（編）, 『中國都市の歷史的研究』, 刀水書房, 東京: 190-198.

[上山 1990] 上山大峻,「敦煌のチベット字人名資料—臺灣本一二五文書—」. In: 唐代史研究會（編）, 『東アジア古文書の史的研究』, 刀水書房, 東京: 402-419

[越智 1997] 越智淳仁, 「セラ寺・永樂版とデプン寺・リタン版について」. 『日本西藏學會々報』第 41/42 號: 23-32.

[榊 1916-25] 榊亮三郎（編）, 『梵藏漢和四譯對校翻譯名義大集』, 全 2 卷. 眞言宗京都大學, 京都. = [*Mvy*]

[藏漢] → [張 1985]

[高田 2005] 高田時雄,「有關吐蕃時期敦煌寫經事業的藏文資料」. In: 高田時雄, 『敦煌・民族・語言』, 中華書局, 北京: 100-124. 初出: in: 郝春文（編）, 『敦煌文獻論集: 紀念敦煌藏經洞發現一百周年國際學術研討會論文集』, 遼寧人民出版社 (2001 年): 635-652.

[武內 2002] 武內紹人, 「歸義軍期から西夏時代のチベット語文書とチベット語使用」. 『東方學』第 104 輯: 124-106.

[張 1985] 張怡蓀（主編）, 『藏漢大辭典』. 民族出版社, 北京. = [藏漢]

[唐・陸 1986-90] 唐耕耦・陸宏基（編）, 『敦煌社會經濟文獻眞蹟釋錄』, 全 5 卷. 全國圖書館文獻縮微複製中心・古佚小說會, 北京.

[西岡 1985] 西岡祖秀,「沙州における寫經事業」. In: 山口瑞鳳（編）,『講座敦煌 6: 敦煌胡語文獻』, 大東出版, 東京: 379-393.

[藤枝 1961] 藤枝晃,「吐蕃支配期の敦煌」.『東方學報』第 31 册: 199-292.

[森・本澤 2002] 森章司・本澤綱夫,「由旬（*yojana*）の再檢證」.『原始佛教聖典資料による釋尊傳の研究（6）「基礎研究篇 II」』, 中央學術研究所, 東京: 1-51.

[楊 2000] 楊嘉銘,『德格印經院』. 四川人民出版社, 成都.

[吉田 2005] 吉田豐,『コータン出土 8-9 世紀のコータン語世俗文書に關する覺え書き』（神戸市外國語大學研究叢書第 38 册）. 神戸市外國語大學, 神戸.

[Bacot *et al*. 1940-46] Bacot, J., Thomas, F. W. and Toussaint, Ch., *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*. Librairie orientaliste Paul Geuthner, Paris.

[Dotson 2009] Dotson, Brandon, *Old Tibetan Annals: An Annotated Translation of Tibet's First History*. Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Austria.

[Hou 1981] Hou Chi-lung, "Trésors du monastère Long-hing à Touen-houang: une étude sur le manuscrit P.3432." In: M. Soymié（ed.）, *Nouvelles contributions aux etudes de Touen-houang*, Genève: 149-168.

[Iwao forthcoming] Iwao Kazushi, "Dpya'（tribute） and Accounting Systems in the Old Tibetan Empire: an Introduction to Pelliot Tibetain 1128." In: Scherrer-Schaub, C. and Takeuchi , Ts.（eds）, *Proceedings of the Eleventh Seminar of International Association for Tibetan Studies*, E. J. Brill.

[Jäschke 1881] Jäschke, A.H., *A Tibetan-English Dictionary*. London.

[Lalou 1954] Lalou, M., "Les manuscrits tibétains des grandes *Prajñāpāramitā* trouvés à Touen-houang." In: *Silver Jubilee Volume of the Zinbun-kagaku-kenkyusho*, Kyoto University, Kyoto: 257-261.

[Lalou 1957] Lalou, M., "Les plus anciens rouleau tibétains trouvés à Touen-houang." *Rocznik Orientalistyczny* Tom. 21: 149-152.

[*Mvy*] → [榊 1916-25]

[Ruegg 1966] Ruegg, D. S., *The Life of BU STON RIN PO CHE: with the Tibetan Text of the Bu ston rNam thar*. Is.M.E.O., Rome.

[Steinkellner 1994] Steinkellner, E., “A Report on the ‘Kanjur’ of Ta pho.” *East and West*, vol.44-1: 115-136.

[Takeuchi 1995] Takeuchi Tsuguhito, *Old Tibetan Contracts from Central Asia*. Daizo shuppan, Kyoto.

[Takeuchi 1997-98] Takeuchi Tsuguhito, *Old Tibetan Manuscripts from East Turkestan in the Stein Collection of the British Library*. 2 vols + Supplement, The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco, Tokyo.

（作者は神戸市外國語大學客員研究員・非常勤講師）

『敦煌寫本研究年報』第四號（2010.03）195-207 頁

Another Hungarian looting China's treasures?

Sir Aurel Stein, Lajos Ligeti and a case of mistaken identity

Imre Galambos

The voluminous publication *Zhonghua minguo shi dang'an ziliao huibian* 中華民國史檔案資料匯編 (*Archives of the History of the Chinese Republic*) includes a group of documents called "Correspondence related to the theft of historical artefacts in the Xinjiang and Gansu region by the British national Stein (May 1930-December 1931)."[1] One of the files in the group is titled "Report of the Government of Jehol province regarding the coping of Buddhist scriptures by the Hungarian national Stein (September 9)" . In a recent article, the Chinese historian HUO Yunfeng 霍雲峰 scrutinized the details of Sir M. Aurel Stein's (1862-1943) visit to China during 1930-1931 and came to the conclusion that the telegram from Jehol could not have been written about Stein.[2] He concluded that the person mentioned therein must have been an unrelated "ordinary man" (一小人物) who was investigated only because he was engaged in copying Buddhist writings and happened to have a Hungarian passport.

HUO was, of course, correct in pointing out the mistake of the editors of the archives in associating this telegram with Stein,[3] he was, however, unable to determine the identity of the person referred to in the telegram dispatched by the Jehol Government. In reality, this was the young Lajos LIGETI (1902-1987) who was to become one of the giants of Mongolian and Turkic studies, and who subsequently served for 20 years as vice president of the Hungarian Academy of Sciences.[4] From the 1980s, his name, transliterated as Li Gaiti 李蓋提 , became well-known in academic circles in China, as he gradually became one of the trusted authorities in the field of Mongolian linguistics and history. But at the time of his first visit to China he was still in his late twenties, and completely unknown to anyone there. He had just completed his studies in Paris with Paul Pelliot (1878-1945) and Henri Maspero (1882-1945), and upon his return to

[1] Zhongguo di'er lishi dang'anguan 1994: 679-710.

[2] HUO 2008.

[3] At the same time we should give credit to the editors who organized the material on the basis of the content, which in fact refers to Stein. Thus they are surely not the ones to be blamed for the resulting confusion.

[4] LIGETI's first name Lajos is more commonly known in Western literature as Louis, and this was also the name he used for academic publications in French.

Hungary succeeded in obtaining a three-year scholarship to visit the lamaseries of Inner Mongolia to study Tibetan Buddhist texts.

Sir Aurel Stein's 4th, so-called "American," expedition to Xinjiang is the least known of all of his explorations.[5] This is no doubt due to the ultimate failure of the enterprise, which had been the result of a public campaign organized against him and his archaeological activities. While his former work in Western China earned him a knighthood and international fame as scholar and explorer, the fact that he removed the rich archaeological material of his expeditions from Chinese territory eventually led to resentment among Chinese intellectuals. His image evolved into that of an imperialist thief and spy. During his earlier expeditions, he had successfully cooperated with provincial authorities, even if with time this was becoming increasingly difficult, and in many cases earned the respect of the officials he interacted with. But in 1930, amidst the patriotic sentiments struggling to reassess China's historical past and to define its new identity, the public saw foreign explorers and archaeologists as plunderers of China's cultural property.

In the late 1920s, the main voice against foreign excavation and surveying in China was that of the Society for the Preservation of Cultural Objects, an unofficial organization consisting of scientists and scholars, many of whom had been educated abroad. In 1927, two major foreign expeditions that were in the process of being organized became the primary target of the Society. One of them was Sven Hedin's 1927 expedition which was only allowed to proceed after he assented to the Society's demands to finance ten Chinese members and to share the archaeological proceeds with China. The other major foreign enterprise at the time was the Mongolian expedition of the American Museum of Natural History, headed by the adventurous naturalist and explorer Roy Chapman Andrews (1884-1960). Hedin was flexible enough to accept the Society's demands and to convert his original team into a "Sino-Swedish expedition." Accordingly, his work not only received great support from Chinese officials but was also widely publicized within China. In contrast, Andrews adamantly defended the autonomy of his operations and regarded the compromises unacceptible. Although he managed to recover the material seized by the Society in 1928, by 1931 he was forced to abandon his expeditions and completely withdraw from China. Writing about the events in retrospect, he voiced his opinion that the efforts to prevent foreign exploration were part of a new nationalistic movement in China:

> Anti-foreignism accompanied the increasing nationalistic spirit throughout China; any agitation of whatever character that was directed against foreigners found immediate popularity with the masses. The Cultural Society saw an opportunity to obtain an exaggerated importance for themselves

[5] On the background of Stein's 4th expedition, see BRYSAC 2004.

> before the public by attacking our Expedition. They had been successful in the case of Doctor Hedin a year earlier and obtained much "face" for themselves. Later they and the official offshoot called the "Commission for the Preservation of Ancient Objects" caused enormous trouble for the Citroën-Haardt Trans-Asia Expedition, and drove the distinguished British archaeologist, Sir Aurel Stein, out of Chinese Turkestan.[6]

Stein, of course, was well aware of these difficulties, and thought it prudent to visit Nanjing in person in April-May 1930 to secure a travel passport for his new expedition.[7] His notebook and diary written during this time show that both he and the diplomats aiding him exerted considerable efforts to come up with a scenario that would ensure the success of the expedition. Following a meeting over dinner at the British Consulate, he wrote that Sir Miles Lampson (the British Minister), Sir Frederick Whyte (advisor to the Chinese Government) and Eric Teichman (Secretary at the British Legation) all agreed that the submission to the National Council of Cultural Association in his case was "undesirable."[8] Two days later, during a visit to the US Consulate, the British Ambassador Nelson Johnson gave the same advice: "N. J. knows of Chapman Andrews acceptance of National Council's conditions but does not think it advisable in my case."[9]

On May 10, Stein finally received his passport that permitted him "to trace ancient vestiges and artistic remains."[10] Three days later he left China on board of the Japanese ocean liner Hakone Maru in order to return to India and make preparations for the expedition. As the ship was leaving the Chinese continent, he enthusiastically related his successful application for a permit to his long-time friend, the Hungarian art historian Zoltán Felvinczy-Takács (1880-1964):[11]

> ... I am glad to inform you, at this time only confidentially, regarding the aim and results of my visit to China. The truth is that I was trying to obtain from the Central Chinese Government official permission for another Central Asian exploration, for which Harvard University, with the assis-

[6] ANDREWS 1932: 418.

[7] Stein arrived in Shanghai on April 22, coming from the United States via Japan. He spent almost three weeks in China, mostly in Nanking, and on May 13 continued his trip to India. After leaving Shanghai, he also made a brief stop in Hong Kong.

[8] Notebook entry for April 28 (MSS. Stein 264).

[9] Nootebook entry for April 30 (MSS. Stein 264).

[10] This was, in fact, a corrected version of the passport because the first version received on May 8 did not specifically authorize him to travel in Inner Mongolia. Stein also requested further corrections because in his opinion the expression "to trace ancient vestiges and artistic remains" did not include surveying work. Dr. C. T. Wang, the Chinese Minister of Foreign Affairs, however, assured him that to "trace vestiges" implied surveying. (Notebook entry for May 9, MSS. Stein 264.)

[11] Felvinczy-Takács was the Director of the Ferenc Hopp Museum of East Asian Art in Budapest, and this is where his papers, including his letters from Stein, are held today. I am grateful to Dr. Györgyi Fajcsák and Tatjána Kardos from the Museum for helping me with the archives.

> tance of some friends in Boston, and the British Museum had rather generously provided the financial means. The ardent support of the British Embassy and the friendly help of the American Ambassador yielded positive results, although it was quite difficult to avoid those obstructing conditions with which the nationalistic movement called "Young China" tries to burden nowdays any foreign scientific endeavor. But I still cannot be certain how I shall be treated by the Turkestan government, which since the revolution has been in rather loose contact with the (changing) Central administrations. Although fortunately that region is still governed by old type Mandarins and I have enough old friends who, as I am informed, still remember me with goodwill...[12]

Thus it is clear that Stein was very optimistic with respect to his upcoming trip, even though he acknowledged that he could run into some difficulties in Xinjiang. In the meantime, however, proponents of the preservation of antiquities movement did not remain idle, either. On May 31, only two weeks after Stein's departure, Academia Sinica issued a public letter calling for the prevention of Stein's new expedition to Xinjiang. It began with a condemning summary of the British explorer's past activities in China:

> The Hungarian Stein has already visited Xinjiang and other regions three times in the past, and has stolen and carried off many antiquities, such as the Dunhuang manuscripts, the Xichui bamboo slips, Buddhist statues and murals. He had had no prior permission from Chinese authorities and has inflicted serious damage on Chinese historical material...[13]

The reference to Stein's Hungarian nationality in the letter is an obvious misunderstanding which clearly shows that the authors were not government officials. All official communication related to Stein's upcoming trip had been conducted through British diplomatic channels where the country of his birth had very little significance. He had been a British subject since 1904 and had always traveled as such.

As a result of the letter from Academia Sinica, the Nanjing government sent out a directive to local administrations in North-Western China, calling for vigilance with respect to Stein's archaeological activities in the region. The Commission for the Preservation of Ancient Objects was also successful in pushing through a new Law for the

[12] Ferenc Hopp Museum of East Asian Art. A 1994/1. The letter is dated May 16, 1930, "Aboard the Hakone Maru, near Hong Kong."

[13] Zhongguo di'er lishi dang'anguan 1994: 679-680. This part of the letter is also quoted for reference in the Jehol Government's telegram (Ibid.: 684), although with a few typos, including the toponym Xichui 西陲 written erroneously as 覲垂. A draft of the letter from Academia Sinica is also held in the Xinjiang Archives, and a photograph of this has been published among the archival material related to Stein's 4th expedition (Zhongguo Xinjiang Weiwu'er zizhiqu dang'anguan 2007: 5).

Preservation of Antiquities, according to which foreigners could excavate in China only in cooperation with the Chinese and only if the proceeds remained in the country.[14]

It seems that Stein himself, confident as ever, did not recognize the extent of hostility and resentment towards foreign excavations, otherwise he would not have embarked on this expedition, which turned out to be his most costly and humiliating failure.[15] Initially, Jin Shuren 金樹仁 (1880-1941), the Governor of Xinjiang was instructed from Nanjing to deny Stein's entry into Chinese territory but after a rapid exchange of diplomatic correspondence, the permission was nevertheless granted.[16] This, however, did not mean the end of troubles for Stein who spent his entire time in China in constant argumentation with the authorities and was eventually forced to leave the country well before he had originally planned. Most importantly, he was unable to take with him any of the material he had collected on this trip and had to leave everything behind under the care of the British Consulate at Kashgar. The material was finally released by the British Consul to the Chinese authorities in November 1931.[17]

Coming from the direction of Srinagar, Stein entered Chinese territory at the end of September 1930 and made his first major stop at the British Consulate in Kashgar. The report that is recorded in the republican archives, however, was submitted by the Jehol Government on August 22 of the same year, while Stein was still in Hunza awaiting permission to cross into Xinjiang. Since this was only granted in early September, a fact the Chinese authorities must have been aware of, it is surprising to see that the young Hungarian scholar LIGETI, working thousands of miles away in the north of China, could have been suspected of being Stein.

Undoubtedly, the connection was made on two points: interest in ancient Buddhist writings and LIGETI's Hungarian nationality. LIGETI, in contrast with the ageing Stein, was a citizen of Hungary and traveled with a Hungarian passport. His philological interests lent him a certain degree of resemblance to Stein, although LIGETI never conducted any archaeological work and had a very limited budget for acquisitions. When he finally returned home, he left China with a rather small collection of books and manuscripts he either salvaged from the "book cemeteries" at the Lamaist monasteries or purchased very cheaply. In fact, he describes in his writings that on several occasions he had been offered good deals on antique books but had to decline the offer because he could not afford to pay for the books and their shipping.

[14] BRYSAC 2004: 20.

[15] In contrast with the resentment experienced by Stein and Roy Chapman Andrews, both of whom saw the prevention of their exploration as a politically motivated attack on science and scholarship in general, HEDIN (1943, Vol. 1: 62) described, at least in writing, his dealings with the Society in a much more sympathetic tone, even claiming that none of the harsh conditions laid down in Peking was applied in practice.

[16] BRYSAC 2004: 20.

[17] For a detailed description of the extended diplomatic disputation over the faith of the spoils of Stein's 4th expedition, see WANG 1994.

An archival letter written by LIGETI in Peking in June 1931 before returning home illustrates the dire financial difficulties he was having while in China. This is a letter addressed to his former professor, the linguist János Melich (1872-1964), and it is a desperate cry for help as the young LIGETI, despite having been promised so, has not been provided with the means for his return trip. The small stipend he had received from the Hungarian Academy of Sciences only covered his modest living expenses and he did not have enough money to return home. Although he had initially contacted Professor Zoltán Gombocz (1877-1935), he received no reply (possibly because the professor was out of the country) and in this letter was asking the help of Professor Melich:

> I have completed my three-year period of studies among the Mongols of Northern Manchuria. My return home, however, is hindered by unexpected difficulties. As you may remember, his Excellency the Minister was kind enough to grant a monthly stipend of five hundred pengő for the duration of my three-year research. I was not, however, granted travel expenses. The various promises all turned out to be illusory when the time came. My situation became all that more difficult because I could not travel through Siberia. In the first year the Hungarian Academy of Sciences kindly relieved the large deficit caused by my travel expenses, supporting my research in Mongolia with a one-time grant of two thousand pengő. At the end of last August, anticipating the impossibility of my returning home using the means at my disposal, I submitted a petition to the Ministry requesting a travel grant in the amount of two thousand pengő, as the minimal sum on which I could travel from Northern Manchuria to Peking, from there to Shanghai, then by ship to Marseille and then by train to Budapest – all using the lowest available fare. Although I have spent three months in Hailar in Northern Manchuria, I received no reply to my petition. Without waiting further, in order to complete the remaining part of my schedule, I continued my travels. At the end of April I received the Ministry's resolution (dated December 31) that I had been awarded one thousand pengő for my return trip. Following this, I applied for a visa at the Russian Consulate at Harbin but after lengthy back-and-forth communication my application was denied...[18]

The letter continues by asking the professor to take some action because otherwise he would simply not be able to return home. In his published accounts LIGETI does not discuss the financial difficulties related to returning home from China and thus this letter is an interesting piece of evidence that suplements our knowledge about his trip. But

[18]Manuscript Collection of the National Széchenyi Library (Levelestár, LIGETI Lajos MELICH Jánoshoz, Peking, June 4, 1931).

it is clear that under such circumstances the young scholar had no chance to engage in a large-scale acquisition of manuscripts and antiquities. Instead, he either salvaged discarded manuscripts or copied texts by himself.

The telegram of the Jehol Government identifies LIGETI by name, using the Chinese transliteration Li Gedi 李格第. This was, of course, different from the form Li Gaiti 李蓋提, how his name became known in China in later years. The telegram is dated September 9, 1930[19] and bears the title "Report of the Government of Jehol province regarding the coping of Buddhist scriptures by the Hungarian national Stein (September 9)." The document is signed by Tang Yulin 湯玉麟 (1871-1937), the Governor of Jehol. The beginning explains that the investigation was launched in response to the directive calling for caution with regard to Stein's activities. It also quotes part of Academia Sinica's letter in which the explorer is referred to as a Hungarian subject.

Consequently, a Hungarian scholar turning up at the Youshun lamasery 佑順寺 at Chaoyang 朝陽 around the same time with the aim of copying Buddhist scriptures immediately attracted the attention of the Jehol Government. It initiated an investigation which was carried out by Li Zhongxiang 李中祥 of the First Police Precinct, according to the instructions of Tian Yufeng 田雨豐, County Police Chief. Li reported back the following: "There is a Hungarian national residing at the Youshun monastery at the county seat. The examination of his passport revealed that his name is Li Gedi. Being asked about his background, he related that he came here to make copies of Tibetan Buddhist scriptures and will return once finished with this task."[20] To this report the Police Chief added a comment that "Li Gedi has a different name [from Stein] but is of the same nationality." However, no further assumptions were made beyond this observation.

While the Chinese archives afford no further insights regarding the mysterious Hungarian working at the Youshun temple, there is a wealth of information about this period in LIGETI's own recollections. He wrote two longer accounts of his journey, one an academic report published in 1933 in French,[21] the other a popular narrative that came out a year later in Hungarian.[22] In the French report he gives a general description of his visit to the Youshun monastery:[23]

> I passed through Beizefu, a Chinese center in terms of its administrative and commercial makeup, and after three days of travelling on May 20 arrived at Chaoyang. Today, this city is completely Chinese but in the past it

[19]Interestingly, just about this time a short review of LIGETI's trip appeared in the Letters to the Editor column of The Times, in which "Dr. Louis LIGETI" is commended on having obtained "a wealth of valuable information" ("Research in Mongola," *The Times*, September 13, 1930: 6).

[20]Zhongguo di'er lishi dang'anguan 1994: 684.

[21]LIGETI 1933.

[22]LIGETI 1934.

[23]I uniformly render the Chinese words and proper nouns in LIGETI's descriptions into pinyin, even if in the original they appear in their French or Hungarian spelling.

> was known by its Mongolian name as *Γurban suburγan*, or the city of the Three Stūpas.
>
> Ĵigs-med nam-mkha talks at length of this city in connection with the history of Buddhism in Mongolia. (Huth did not recognize its Tibetan name *mČhod rten gsum*, "The Three Stūpas.") Of the three towers only two remain today, the third having been completely demolished in the civil war of the Republic. In fact, the city of the 'Three stūpas' played a particularly important role in the history of the Lamaist Church. To these glorious times dates the large and rich Youshunsi lamasery which has fortunately survived the past twenty years without much damage. Still, one of its buildings was transformed into a Chinese school, and a small wing of the former residence of the lamas into a military office. I remained at the Youshunsi lamasery until July 30, and then returned in a diluvian rain to Beipiao, the terminal station on the branch of the Peking-Mukden line, from where I took the train to Peking."[24]

This short description shows that LIGETI was at the lamasery for over two months, from May 20 until July 30. In contrast with this terse scholarly narrative, LIGETI's popular account devotes three whole chapters to his life at the Youshun monastery (Figure 1) and thus provides a much more detailed description of the circumstances of his stay there. With his distinctive sense of humor he describes his encounters with the very people whose report is now kept in the republican archives. He identifies the Police Chief Tian Yufeng by name, erroneously calling him Tian Fengyu.[25]

> I ensconced myself in the monastery and, as far as it was possible, made myself comfortable in Deva Chenpo's rather uncomfortable dwelling, eager to begin working. As a measure of foresight I gave strict instructions to little Song, Deva Chenpo, and to Dambinima, the *shabi*, to resolutely deny my being home if anyone came to call on me. I had enough experience with nosy visits that were utterly pointless and only kept me from working for extended periods of time. My austere precaution worked out quite well, if only for a short while. One day, a number of policemen of various ranks came over in an attempt to see me. It would not have been a good idea to turn them away, and it seemed that Deva Chenpo shared the same opinion, as he led them straight in one after the other. Whispering in my ear, he at once let me know what great dignitaries were visiting me and that, for

[24] LIGETI 1933: 11.

[25] In this case LIGETI is mistaken because the name of the Police Chief was in fact Tian Yufeng, as can be attested from other historical sources.

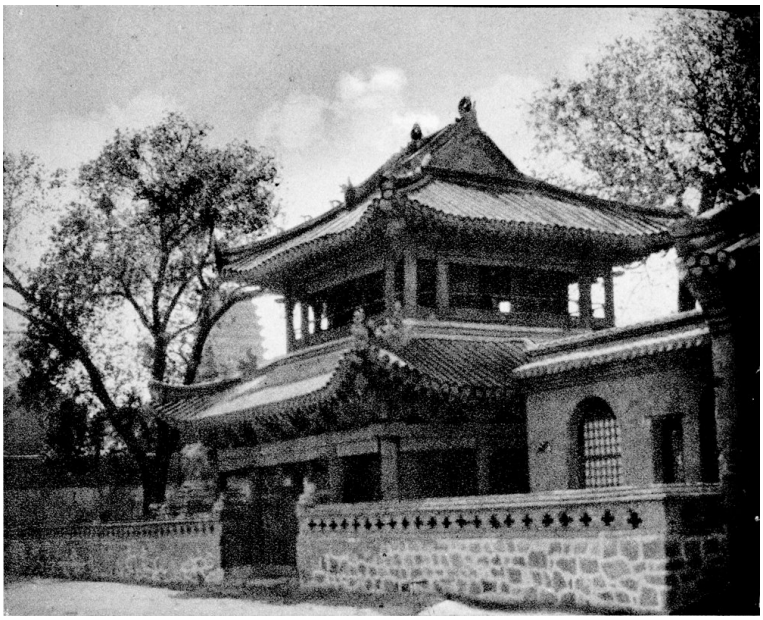


Figure 1: The main gates of the great monastery at Chaoyang (Ligeti, p. 418).

both his and the monastery's sake, I should give them a friendly reception. These visits have certainly raised my status in the eyes of the monastery's residents, and from there on the lamas all greeted me with frequent bows. To be sure, this reverence was not without reason, as the monastery was in desperate need of police goodwill — but more of this will be said later.

The procession was opened by a police officer. He saluted me in a military manner and declared that he was visiting me on behalf of Tian Fengyu, the Chief of Police, and should I feel the need they would be happy to place two guards in front of Deva Chenpo's door for my safety. As much as I was touched by their kindness and consideration, I anxiously protested against measures of this kind. I had absolutely no need for two good-for-nothing soldiers lurking around me all day, not leaving me a minute of peace. Not to speak of their salaries and rations which I would have been expected to provide. I had managed to get by in far more dangerous places without Chinese soldiers guarding my doorstep, and I was confident that I would also manage here. After all, I was in a monastery located in the heart of a large city.

Thus I politely conveyed my gratitude to chief Tian Fengyu, and as a token of my appreciation immediately sent him my business card, along with a small gift.

Tian Fengyu called on me the very same day. The lamas bowed their heads to him and led him to me with full reverence. Tian Fengyu immediately called lama Chen and turned to him in anger:

"How dare you accommodate Li *xiansheng* in a dirty hole like this?"

Lama Chen was lost for words, anxious to come up with an answer; while inside he surely blamed me for the new troubles with the police, as if they did not have enough of these already. I came to his rescue by saying that he had actually wanted to give me a much better room but I insisted on taking this one on account of Deva Chenpo being a famous astrologist. Deva Chenpo's eyes glistened with gratitude. Lama Chen was also appeased and even Tian Fengyu's anger dissipated, although he no doubt thought that foreigners were crazy to choose of their own accord to live in such filth.[26]

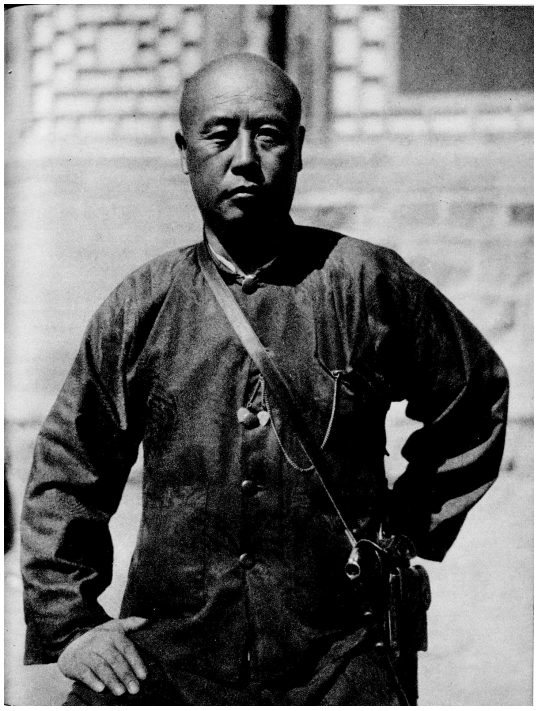


Figure 2: Tian Fengyu, the "polite policeman" (Ligeti, p. 417).

Further on, LIGETI retells his adventures with Tian Fengyu (Figure 2) whom he mockingly calls the "polite policeman" because he showered the young scholar with a multitude of small and useless gifts, each of which had to be reciprocated with a gift of European origin. Since by this time LIGETI was on a very tight budget, this caused him a considerable amount of headache. He also describes that this "polite policeman"

[26]LIGETI 1934: 446-447.

often showed up at his door with pieces of antique porcelain to inquire about their age and potential prices abroad. This, LIGETI says, was primarily because Governor Tang was a great collector and "Tian Fengyu knew from experience how useful it was to be passionately interested in the same things as the provincial governor."[27] The depiction of the Governor is even more sarcastic:

> Tang Yulin himself was illiterate and, of course, his fondness for collecting Chinese antiquities did not stem from an innate artistic disposition but from the fact that he could trade, through his men in Peking, the treasures he had gathered by means of extortion and looting, for shiny American dollars.[28]

While such condemning words may appear unwarranted with regard to a provincial governor, they echo Hedin's account of a meeting with the same Governor Tang, whom the Swedish explorer described as an "incapable and unscrupulous person" notorious for being involved in the business of selling off stolen artefacts to Japanese dealers:

> He was of medium stature, powerfully built and had coarse features. His behavior lacked all culture. The temples of Jehol from the time of the great Manchu Emperors had probably been robbed of most of their treasures of ecclesiastical art by his predecessors, but a few things had not yet been stolen and sold to Japanese agents or curio dealers from Peking. During our stay at Jehol we daily saw loaded lorries which at the command of Tang Yulin, it was said, removed idols and other objects from the temples, to Mukden.[29]

We can see that Governor Tang's passion for temple treasures was not a secret in Jehol and he felt no need to hide his dealings from others. Of course, the provincial governor's looting of antiquities by the truckload in full knowledge of the entire populace appears absurd in view of the efforts of the Society for the Preservation of Antiquities during this period. Even more ironic is that Governor Tang was the official in charge of investigating whether the young LIGETI had any illicit designs on treasures that might have been considered by the Society as part of China's cultural heritage.

Lajos LIGETI spent three years in Inner Mongolia during the time that coincided with an unprecedented antagonism towards foreign-led expeditions on Chinese soil. He himself traveled alone and conducted no archaeological excavations, thus remaining outside the field of vision of the preservation of antiquities movement. Unknowingly to himself, he had been briefly investigated after his arrival in Chaoyang on the suspicion

[27] Ibid.: 450.
[28] Ibid.
[29] HEDIN 1940: 46-47.

that he was in fact Sir Aurel Stein, plotting to rob China of yet another substantial piece of its cultural legacy. This suspicion was in part the result of official directives recently dispatched to local governments calling for vigilance with regard to Stein's activities in Chinese Central Asia. Added to this were LIGETI's Hungarian nationality and his interest in Buddhist scriptures, the two of which were enough to suggest that he was the notorious Hungarian-born explorer Stein. It is hard to believe that anyone who met the 28 years old LIGETI personally could have mistaken him for someone 40 years senior to him. The two scholars were a generation apart: LIGETI was a student of Stein's great rival, Paul Pelliot, and in 1930 he was only beginning his career, whereas by this time Stein was a celebrated explorer who had already completed his finest expeditions.

References

ANDREWS, Roy Chapman. 1932. *The new conquest of Central Asia: A narrative of the exploration of the Central Asiatic Expeditions in Mongolia and China, 1921-1930*. New York: The American Museum of Natural History.

BRYSAC, Shareen. 2004. "Sir Aurel Stein's fourth, 'American' expedition." In Helen WANG, ed., Sir Aurel Stein, *Proceedings of the British Museum study day, 23 March 2002*. British Museum occasional papers. London: British Museum: 17-22.

HEDIN, Sven. 1940. *Chiang Kai-Shek, Marshal of China*. New York: The John Day Company.

——. 1943. *History of the expedition in Asia, 1927-1935*. Stockholm: Elanders Boktryckeri. 3 volumes.

HUO Yunfeng 霍雲峰. 2008. "Sitanyin dang'an shiliao bianwu yize" 斯坦因檔案史料辨誤一則. *Minguo dang'an* 民國檔案 (2008) 2: 141-143.

LIGETI, Louis. 1933. *Rapport préliminaire d'un voyage d'exploration fait en Mongolie chinoise, 1928-1931*. Leipzig: Otto Harrassowitz.

LIGETI, Lajos. 1934. *Sárga Istenek, sárga emberek: Egy év Belső-Mongólia lámakolostoraiban* (Yellow gods, yellow people: A year in the lamaseries of Inner Mongolia). Budapest: Királyi Magyar Egyetemi Nyomda.

WANG Jiqing 王冀青. 1994. "Zhong-Ying guanyu Sitanyin disici Zhongya kaocha suohuo wenwu de jiaoshe neimu" 中英關於斯坦因第四次中亞考察所獲文物的交涉內幕. *Jindaishi yanjiu* 近代史研究 (1994) No. 4: 242-257.

Zhongguo di'er lishi dang'anguan 中國第二歷史檔案館, ed. 1994. *Zhonghua minguo shi dang'an* 中華民國史檔案資料匯編, Series 5/1, Wenhua 文化 (Vol. 2). Nanjing: Jiangsu guji.

Zhongguo Xinjiang Weiwu'er zizhiqu dang'anguan 中國新疆維吾爾自治區檔案館, Riben Fojiao daxue Niya yizhi xueshu jigou 日本佛教大學尼雅遺址學術機構, eds. 2007. *Sitanyin disici Xinjiang tanxian dang'an shiliao* 斯坦因第四次新疆探險檔案史料. Urumuchi: Xinjiang meishu sheying.

(The Author is Overseas Project Manager, International Dunhuang Project, The British Library)

『敦煌寫本研究年報』第四號（2010.03）209-245 頁

スタイン地圖と衞星畫像を用いた タリム盆地の遺跡同定手法と 探檢隊考古調査地の解明

西村陽子　北本朝展

1．はじめに

本論文は、情報學的手法を用いた歴史學・考古學研究の一例として、Google Earth の高解像度衞星畫像とスタイン地圖に含まれる誤差を利用したシルクロード探檢隊の考古調査地の照合の方法について述べる。本論文で主要な材料として利用するのは、約 100 年前にシルクロード地域を探檢した M.A.Stein（以下スタインとする）が作成した 2 種の地圖である。筆者らは、前稿[1]でこれらの地圖をデジタル化し、Google Earth の高解像度衞星畫像と比較しつつ利用できる形に整え、研究者をはじめ、誰もが利用できる地理情報基盤として一般に無償で公開した。

前稿の成果を受けて、本論文では地圖の特性を用いて 20 世紀初頭のシルクロード探檢隊の考古調査地を再發見する方法について述べる。探檢隊の調査地は、大規模な遺跡を除いてほぼ所在が不明になっており、これまで解決困難な難題とされてきた。しかし遺跡の同定はシルクロード地域の研究を行う上で最も基礎的な問題であり[2]、早期の解決が望まれている。

本論文では、情報學的手法の應用という從來とは異なる方法を用いながら、この問題の解決を試みる。本論文で利用する古地圖と衞星畫像の「場寄せ」という手法を用いることによって、タリム盆地全域（正確には河西回廊なども含むスタイン地

[1]參考文獻［6］參照。

[2]例えば［1］伊藤・于論文では米蘭遺跡の各調査地點について現地調査と寫眞照合によってスタイン調査遺跡の同定を試みており、その全貌を把握することによって次の段階の研究が可能になると指摘する。［1］p.55 參照。また［11］IDP NEWS, No.32, pp.2-4 では、マザール＝ターグやエンデレ遺跡など西域南道各地の寫眞照合を試みる。また、［9］でも、トルファン盆地の交通路を檢討する過程で遺跡の現地調査と同定に取り組む。これらとは異なるアプローチとして、［4］では衞星寫眞の判讀を通してトルファン盆地の既知の遺跡の立地條件を分析する。本論文とも直接の關わりを持ち、示唆に富む。

圖に描かれた地域）に散在する探檢隊調査地を同定できることを論じる。さらに一地點の同定の確證を取ることによって、當該地點だけではなくその周邊の地點にも多數の探檢隊調査遺跡を再發見することが可能になる。これらの結果は往々にして予想外だが、探檢隊の報告書と照合することで確實な證據を附与することができるため、今後のシルクロード研究に大きな影響をもたらすと期待できる。

本論文の主な成果は以下のとおりである。まず第 3 章では前稿の内容にもとづいてスタイン地圖の誤差を評價について概述し、タリム盆地の主要なオアシスごとに誤差の距離と方向の目安を示し、次章以下の參考とする。次に第 4 章ではトルファン盆地の複數の遺跡について、複數の探檢隊資料と現代の記録を照合することで、これまで予想されていなかった遺跡の間の關連性を明らかにする。さらに第 5 章では、今後の遺跡データベースの構築に向けて、遺跡の空間的な表現に關する問題點を明らかにし、過去に遺跡の同定を妨げていた諸問題が、場所の同定によって解決することを論じる。

2. スタイン地圖の解析

2.1 スタイン地圖の役割

本論文で試みる遺跡同定法で一つの重要な鍵を握るのは、探檢隊資料の地圖の誤差評價である。そこで、本章では本論文が中心的に利用するスタイン地圖を取り上げ、その誤差の分布を以下で解析する[3]。

スタインは、1900 年の中央アジア探檢を初めとして、計 4 回中央アジア探檢に赴いており、第一次探檢（1900〜1901）の報告書として *Ancient Khotan*（全 2 巻）を、第二次探檢（1906〜1908）の報告書として *Serindia*（全 5 巻）、第三次探檢隊（1913〜1916）の報告書として、*Innermost Asia*（全 4 巻）を上梓している。とりわけ、第二次探檢および第三次探檢において、スタインはシルクロードの中心となるタリム盆地全域（現・中華人民共和國、新疆ウイグル自治區に相當）を踏査し、その報告書である *Serindia* および *Innermost Asia* の卷末に、緯度經度を伴った詳細な地圖を附した。本論文ではこれらの地圖をスタイン地圖と呼ぶ[4]。スタイン地圖は現在もシルクロードに關する最も正確で豐富な情報を含む地圖として名高く、シルクロード研究における基本的學術資料として利用され續けている。

[3]本章の内容は［6］で發表した内容に基づく。

[4]著者らはディジタル・シルクロード・プロジェクトのウェブサイトにおいて、これらの地圖をデジタル化して一般に公開している。「地圖で探るシルクロード」、http://dsr.nii.ac.jp/geography/ を參照。「セリンディア (*Serindia*) : vol.5」と「極奥アジア (*Innermost Asia*) : vol.4」の下にある「1. Google Earth」からダウンロードできる。

スタイン地圖は本論文において重要な役割を果たす。それは、探檢隊資料の基盤地圖としての役割である。スタインは、スタイン自身による調査地に加えて、他の探檢隊による調査地も地圖に描き込んでいることがある。したがって地圖を殘さなかった探檢隊の調査地についても、この地圖から把握することができる。したがってスタイン地圖を基盤地圖として利用し、これを現代の地圖と比較することによって、探檢隊資料の遺跡と現代資料の遺跡を同定しようというのが本論文の基本的な方針である。

2.2 スタイン地圖のデジタル化

まずスタイン地圖のデジタル化について簡單に述べる。これまで紙のスタイン地圖を利用する上で大きな問題となってきたのが地圖シートの枚數の多さだった。その枚數は *Serindia* で 94 枚、*Innermost Asia* で 47 枚に達するため、シルクロード全域が多數の地圖シートに分割されてしまい、閲覽が不便で全體像が見えにくいという問題があった。そこで本論文では KML (Keyhole Markup Language) を利用して全ての地圖シートを繼ぎ目なく接續し、GE で閲覽できるようにした。GE 上では全ての地圖シートが球面上で連續しており、ズームイン・ズームアウト機能を用いて任意の地域を擴大して見ることもできる。さらに高解像度衞星畫像が無料で閲覽できるため、古地圖と現在の衞星畫像とを重ね合わせて比較することも可能になった。これによってスタイン地圖は、誰もが簡單に利用できるデジタル地圖となって、從來の紙地圖の問題點は解消することができた。

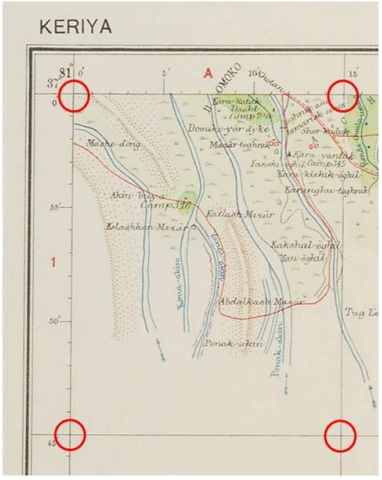


圖 1: *Serindia* 地圖シートの例

ただしここで重要となるのが、スタイン地圖と現代地圖とを位置合わせするための幾何補正處理である。本論文では以下の手順で幾何補正を實施した[5]。まずスタイン地圖には圖 1 に示すように、地圖シートごとに數本の直交する緯度線・經度線が描きこまれているため、その交點を位置合わせの基準點とする。1 枚の地圖シートには緯度線・經度線が 3-4 本ずつ描かれているため、1 枚の地圖から 30 點程度の基準點を拾うことができる。次に 4 つの交點で囲まれた四邊形（圖 1 はその 1 つの四邊形）の 4 隅の緯度と經度を地圖

[5] ［15］參照。

から讀み取る。そして四邊形内部は共一次内挿法を用いて補正後畫像座標を基準に補間處理をおこなう。このような再配列計算を地圖上の全ての四邊形について繰り返すと、1 枚の地圖シートに關する位置合わせ處理が完了する。さらにこれを全ての地圖シートについて繰り返せば、スタイン地圖の位置合わせ處理は完了となる。

2.3 スタイン地圖と衞星畫像の比較

上記の方法は、あくまでスタイン地圖の緯度經度が現代の緯度經度と一致すると仮定した場合の幾何補正法である。もしこの仮定が正しいのなら、地圖上に描きこまれた遺跡の位置は、GE 上の衞星畫像で觀察できる遺跡の位置と一致するはずである。しかしいくつかの遺跡で調査してみると、兩者の位置は明らかに一致しないことがわかった。これは兩者の緯度經度が異なり、現代の緯度經度を基準とするとそこに誤差が生じていることを意味している。ではその原因は何か。これを以下の觀點から檢討する。

1. 幾何補正に起因する誤差
2. Google Earth 衞星畫像の誤差
3. スタイン地圖の誤差

まず 1 では 3.2 節で述べた幾何補正に起因する誤差を檢討する。しかし結論から言えば、これは重要な原因ではないと考えられる。なぜなら、スタイン地圖における緯度線と經度線の交點は、基準點であるために正確な緯度經度にマッピングされるが、そもそもそれらの點でも地圖と衞星畫像とが一致していないからである。またスタイン地圖シートの四邊形の歪みは小さいため、内挿處理によって生じる誤差も小さく、後述するように數 km という單位になることはない。

次に 2 について、すなわち GE の衞星畫像が「正しい」緯度經度に配置されていないという可能性について檢討する。GE の誤差は公式には發表されていないため定量的に評價することは難しいが、衞星畫像を精密に位置合わせする手法に關しては長年の研究の蓄積があるため、キロメートルという單位で誤差が生じる可能性は低いと考えられる。

まず現地における GPS の實測値と GE の衞星畫像との一致を確かめるため、中國、五胡十六國時代に赫連勃勃によって建設された都城である統萬城の西城の城壁における計測結果を圖 2 に示す[6]。これは現在でも殘っている東城と西城のうち、

[6]測定時期は 2005 年 8 月、測定者は西村陽子。測定に用いた機種は、GARMIN 社の e-trex LEGEND C。

西城の城壁上を歩きながら不定期に測定を實施した結果を、GE の衞星畫像上に表示したものである。GE 上で觀察できる城壁の位置と、GPS 計測による城壁の位置はおおよそ一致しており、その誤差は大きくても數メートル程度であるように見える。

この問題を適切に理解するには、GE 上の衞星畫像で遺跡を發見して、GE 上で緯度經度を計測するという手順がもつ意味を考える必要がある。そもそも緯度經度とは、測地系によって定まる數値であり、異なる測地系の下では同じ地點でも緯度經度は異なる。例えば GPS で計測する緯度經度は WGS84 という測地系の下で定まる緯度經度であるが、日本でも 2002 年までは日本測地系という測地系に基づく、GPS とは異なる緯度經度が公式に利用されていた。これらはどちらも「正しい」緯度經度であって、ある測地系を一貫して使う限り、どちらを使っても何の問題もない。問題が生じるのは異なる測地系から得られた情報を統合する場合である。同じ緯度經度が異なる地點を指すことになるからである。

では GE 上で緯度經度を測定することはいかなる意味を持つのか。これは上記の議論を踏まえれば、いわば「Google Earth 測地系」という測地系のもとで緯度經度を測定するという行爲を意味することとなる。そして GE というツールを一貫して使うのであればこれで何の問題もない[7]。しかし GPS 計測値という、WGS84 測地系に基づいた情報をこの上で扱おうとする場合には、兩者の間にずれが生じる可能性がある。したがって

圖 2: GE 上の統萬城と GPS 計測値

[7]嚴密に言えば、GE 上の衞星畫像の更新によって遺跡の緯度經度が變化する可能性があるため、この方式には長期的には問題が生じる可能性はある。それに対して GPS で計測した緯度經度は測地系の變更がない限りは不變である。

問題の本質は、どちらが正しいかというよりは、兩測地系がどのくらい一致するのかという點にある。この點に關しては、兩者は完全には一致しないとの指摘もあるが、たとえ一致しないとしてもその大きさは本論文が問題とするキロメートル單位よりはかなり小さく、實用上はGE測地系とWGS84測地系とは同じものとみなして差し支えないと考えている。

2.4 スタイン地圖の精度評價

以上の議論から、スタイン地圖とGEの衞星畫像が一致しない原因は、主にスタイン地圖側にあるとの結論を得た。スタイン地圖が作成された約100年前の技術的な限界を考えれば、地圖に誤差が生じたとしても不思議ではない。そこで本論文ではスタイン地圖の精度を評價することにした。そのためには、100年前と現在とで位置が不變であると仮定できる場所を基準點に選んで、兩者の位置を比較する必要がある。この目的に適しているのが、形状が特徴的で位置も變化しない遺跡である。そこでスタイン地圖から遺跡地點を拾い、GE上でも遺跡を見つけ出すことで、兩者の位置を比較した。

圖3、圖4は基準點として選定した遺跡の例を示す。圖3は、GE上で確認した遺跡の位置と、*Serindia*および*Innermost Asia*地圖に描かれた遺跡の位置を、GE上に同時に表示したものである。一方圖4は、GEの衞星畫像と*Serindia*、*Innermost Asia*の地圖とを、遺跡地點周邊を切り出して比較したものである。圖4ではいずれの畫像でも地形がよく一致しており、遺跡の周邊地形という相對的な觀點では遺跡の同一性を確認できる。しかし圖4に示すように、遺跡の緯度經度という絶對的な觀點では、現在の衞星畫像とスタイン地圖の間では遺跡の同一性を確認できない。

ただし上記2つの遺跡はいずれも著名な遺跡であって、遺跡の同定は完了している。そこでこうした遺跡地點における誤差を計測していくことで、スタイン地圖の精度を評價することが可能となる。基準點として利用する遺跡地點は、1種類以上のスタイン地圖に描かれ、かつGE上でも位置が確認できる地點とし、全部で105地點を選定した。

ただし遺跡は小さいために高解像度衞星畫像上でも確認することが難しく、タリム盆地の全體にわたってまんべんなく遺跡地點を選定することは難しいことがわかった。そこで確認がより簡單なオアシスも基準點に加えることにした。スタイン地圖には、スタインが聞き取った現地語の名稱をアルファベット表記する方法で、多數のオアシス地名が記録されているため、これを現在の中國語表記と比

較し、現代中國で出版されている地圖も利用してオアシスを同定した。ただしオアシスの利用には以下の問題がある。

1. 河川の流路變更などの理由でオアシス自體が移動する可能性がある。
2. 現代になって範囲が擴大した場合には、オアシスのどの地點を選んで比較するかに任意性が生じる。

こうした問題點を考え、できるだけ變動が少なく小さなオアシスを優先し、城壁などの痕跡が殘っている場合は城壁内を、また擴大したオアシスの場合は旧城の中心地を基準點として選擇するように努めた。以上の選擇によって、基準點は遺跡地點とオアシス地點の合計でほぼ 200 地點となった。

圖 3: 廟兒溝（Ara-tam temple ruins）における位置の不一致

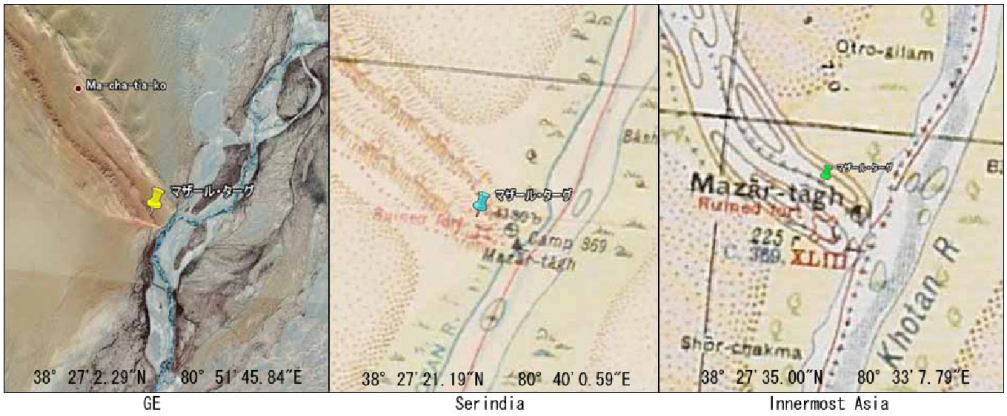


圖 4: マザール・ターグにおける遺跡周邊地形の一致

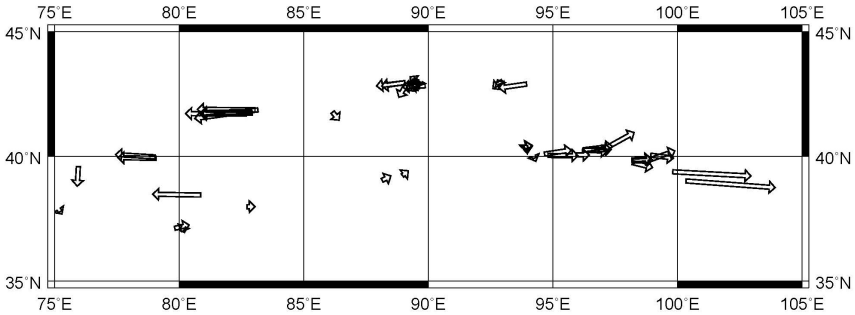


圖 5: *Serindia* における遺跡地点の誤差分布圖

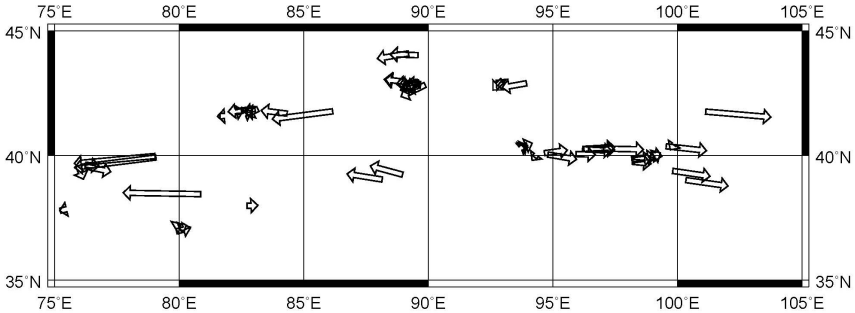


圖 6: *Innermost Asia* における遺跡地点の誤差分布圖

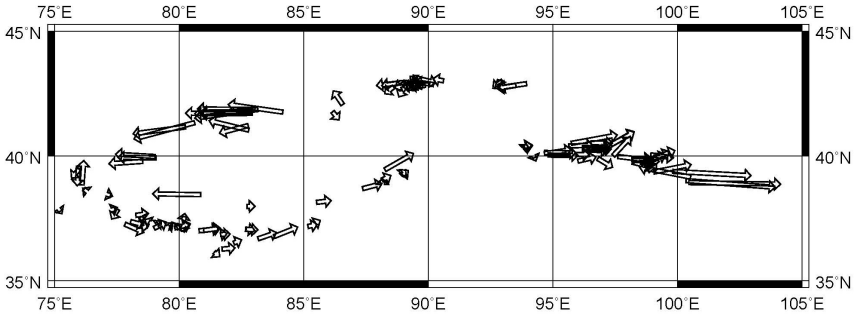


圖 7: *Serindia* における遺跡地点とオアシス地点の誤差分布圖

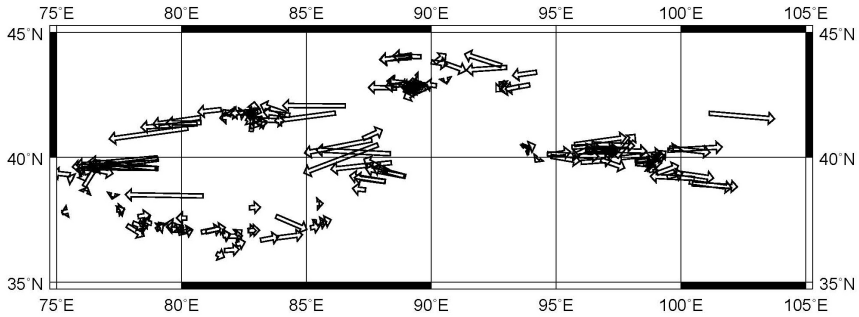


圖 8: *Innermost Asia* における遺跡地點とオアシス地點の誤差分布圖

2.5 スタイン地圖の地域間誤差分布

こうして選んだ基準點を用いて、GE の衞星畫像上で計測した位置とスタイン地圖上の位置との誤差を測定した。圖 5〜8 はその結果を地圖上に圖示した誤差分布圖である。*Serindia* と *Innermost Asia* の 2 種類の地圖に對して、それぞれ遺跡のみの誤差分布圖と遺跡とオアシスの誤差分布圖を示す。ここでは現在位置（矢印の起點）を基準にして、スタイン地圖上の位置（矢印の終點）を圖示したが、矢印の長さを實寸にすると誤差の傾向が見えにくいことから、ずれの方向（矢印の向き）を固定したまま距離（矢印の長さ）を 10 倍に強調した。現在位置とスタイン地圖上の位置との距離を誤差の大きさと定義すると、誤差の大きさは最小で 250m、最大で 32km とばらつきがあるものの、多くの地點では數 km 程度の大きさとなっている。これらの誤差分布圖を解析するといろいろなことが讀み取れるが、その詳細はすでに參考文獻［6］で論じたため、以下では要點のみをまとめる。

1. *Serindia* 地圖と *Innermost Asia* 地圖の誤差は、同じ傾向を示している。
2. 誤差は東西方向に大きく、南北方向の誤差は東西方向に比べると小さい。
3. スタインの調査經路の進行方向に向かって誤差が増大している。
4. 天山南路西部のオアシス都市・アクスにおいて著しい西方への誤差がある。
5. 河西回廊の都市・甘州（張掖）において著しい東方への誤差がある。
6. 誤差の距離と方向は地域間で異なる。

ここで 6 の點が重要である。三角測量を行った地域では誤差は相對的に小さいが、車輪による距離計測を行った地域では誤差は相對的に大きく、測量ミスなども誤差に影響して、地域ごとに誤差の性質が大きく異なっている。ゆえにスタイン

地圖を適切に利用するためには、タリム盆地を代表する地域を選定した上で、地域ごとに誤差の大きさと方向を示す必要がある。そこで圖 9 に示すタシュクルガン・カシュガル・アクス・クチャ・コルラ・ブグル・トルファン・ハミ・バルクル・コータン・ニヤ・チャルクリク・ミーラン・安西・甘州・肅州の各オアシス都市を選定した上で、これらオアシスごとの誤差情報を提示することにした。

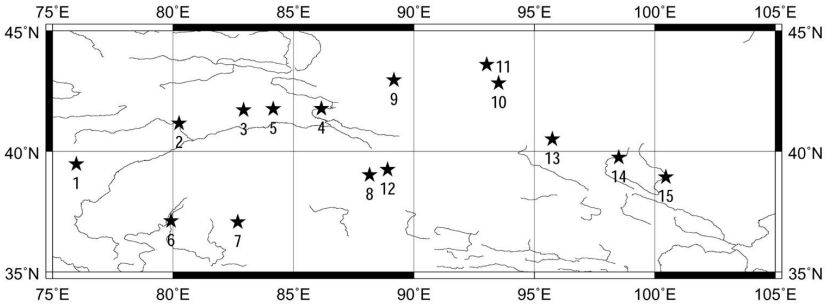


圖 9: タリム盆地の地域（地圖中の番號は表 1 と對應）

その結果を表 1 に示す。ただしこれらのオアシスには 2.4 節で述べた問題點が存在することから、オアシス近郊の遺跡地點も併記することにした。この表によって、ある地域での誤差を把握しながらスタイン地圖を活用することも可能となった。

2.6 スタイン地圖の地域内誤差分布

次に地域内の誤差分布圖をより詳細に解析する。圖 10 はクチャとその近郊に位置する遺跡の誤差分布圖を示す。中央の★印は現在のクチャの位置、黒矢印は現在位置と比べた *Serindia* の誤差、白矢印は現在位置と比べた *Innermost Asia* の誤差である。クチャ近郊においては、地圖ごとに各遺跡の誤差は同じような傾向を示しており、オアシスでの誤差がその地域の誤差傾向を代表していることがわかる。

一方圖 11 はカシュガルとその近郊に位置する遺跡の誤差分布圖を示す。こちらでは誤差の方向と距離が一致しないという結果が得られた。このように一つの地域内で誤差の分布が一定でない場合には、オアシスでの誤差はその地域の誤差傾向を代表していないということになる。

このように、地域内の誤差分布にも種々のパターンが存在することがわかる。例えば以下のような場合が考えられる。

1. 方向と距離が一定の傾向を示す場合。

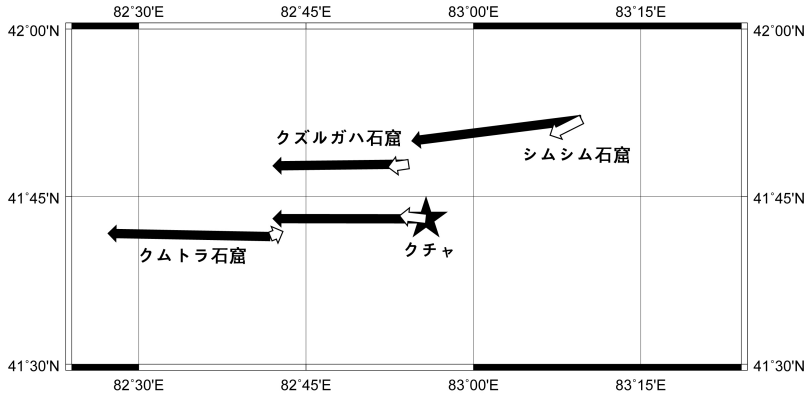


圖 10: クチャ近郊の誤差分布圖

2. 方向は一致しないが、距離の絶對値は小さい場合。
3. 方向も距離も特定の傾向を示さない場合。

上記の結果から、クチャは 1 のパターン、カシュガルは 3 のパターンに相當する。

もし地域内の誤差分布が 1 のパターンであることがわかれば、この結果は未知の遺跡の場所の同定に利用することができる。圖 10 の誤差分布圖は探檢隊資料と現代資料の間で同定可能な遺跡に關する誤差を示したものであるが、どちらかで未知の遺跡についてはそもそも誤差が評價できない。しかし地域内の誤差分布が一様であることが確認できれば、既知の場所から未知の場所を推定するのに、周邊の遺跡やオアシスなどの同定濟みのポイントにおける誤差の情報が利用できる。したがって未知の遺跡の同定に誤差を利用するためには、地域内の誤差分布が上記の 1 のパターンであることをあらかじめ確認する必要がある。

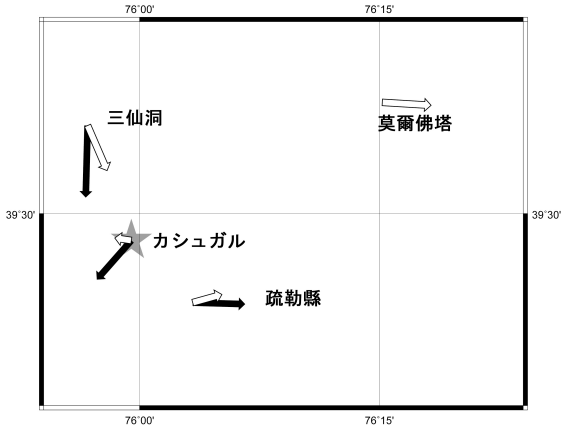


圖 11: カシュガル近郊の誤差分布圖

表1: スタイン地圖の誤差の方向と距離

	Oasis Name	Ruins near the Oasis	Serindia		InnermostAsia	
			Direction	Distance(km)	Direction	Distance(km)
①	Kāshgar		南南西	4.7	北西	1.4
		三仙洞	南西	8.5	南	6.2
		Hannuoyi (ruined town, 罕諾依古城)			東南東	9.1
		Mor stūpa (莫爾佛塔)			東	4.6
②	Aksu		南西	21.5	西	26.9
③	Kuchā		西	19.1	西	3.3
		Cave temples (Kizilgaha)	西	16.9	西南西	2.6
		Ming-oi (of Kum-tura)	西	20.3	東北東	1.8
		Simsin ruins	西	21.4	西南西	4.7
④	Korla		南南東	4.2	西	20.5
⑤	Bugur		西北西	18.4	西北西	9.0
		Lapar-kona-shahr (輪臺故城)			西	8.8
⑥	Khōtan		東北東	5.0	北東	1.0
		Yotkan	東北東	5.2	北東	2.6
⑦	Niya		東	3.0	東	2.7
		Niya stūpa (泥雅佛塔)	東	2.9	東	3.8
⑧	Charklik		東	4.4	西	10.8
		Charklik stūpa mound	東北東	3.6	西北西	12.4
⑨	Turfān		西南西	5.0	西	8.2
		Kara-khoja (高昌故城)	西北西	3.2	西南西	5.8
		Yār-khoto (交河故城)	西	7.7	西	6.5
⑩	Hāmi		西南西	6.3	西南西	6.2
		Temple-ruins(白楊溝)	南西	4.6	南西	5.2
		Ata-ram temple ruins (廟兒溝)	西	9.2	西南西	8.2
⑪	Barkul				西	13.0
⑫	Mīrān		東北東	3.9	西北西	11.8
		Mīrān fort	北東	2.9	西北西	11.7
⑬	An'xi		東	13.3	東	15.1
		Yulin Cave (榆林窟)	東	4.3	東	6.4
		So-yang-ch'eng (鎖陽城)	東	8.5	東	9.9
⑭	Suzhou		東	4.7	東北東	3.6
⑮	Ganzhou		東	31.9	東	15.7

3. 古地圖の特性を用いた遺跡の同定

3.1 遺跡位置同定の意義

第 2 章でまとめた前稿の成果を受けて、本論文では、デジタル化した古地圖の特性を利用して、地圖上に描かれた探檢隊調査地を高解像度衞星畫像上で特定する方法について論じる。

スタイン地圖には多數の遺跡が記されているが、地圖中の遺跡の實際の所在地や現状については、現代ではほとんど知ることができず、研究の大きな障害となっ

てきた。20 世紀初頭に探檢隊報告書が出版されて以來、シルクロード地域の研究はこれら探檢隊の報告した成果に基づいて進められてきた。しかし、スタインをはじめ、探檢隊資料は 100 年前の情報で凍結されており、これに新しい情報を付け加えることは、一部の著名な遺跡を除いて不可能である。一方、現代の調査は、これまで探檢隊の成果とはほぼ無關係に蓄積されてきた。現代中國では活發な考古發掘の成果が積み重ねられているが、これらは探檢隊の成果と照合されることはなく、現代の資料は現代の報告書という文脈の中でしか利用することができない。さらに 20 世紀初頭の探檢隊資料の間でも、複數の探檢隊の資料の相互關係が明らかでないという問題も存在する。20 世紀初頭の探檢隊も現代の文物局や考古研究所の調査も、同一地域を扱っているが、記録を讀むだけでは、それぞれの詳細な報告が一體どのような關係にあるのか把握することはできない。これは、過去の探檢隊資料と現代の調査研究の斷絶を意味しており、その損失は大きい。今後もシルクロード研究において中國から發表される資料が不可欠であることを考えると、探檢隊資料と現代資料に出現する遺跡を一意に同定する手法を確立しておくことには、重要な意義があると考えられる。本論文では、複數の資料にまたがる遺跡の同一性を判定することを目標として、地圖の誤差を利用しつつデジタル空間上で空間畫像史料を讀み解くことにより、

1. 探檢隊が調査した遺跡の位置
2. 各國探檢隊資料および現代調査の相互關係

の二つの問題が円滑に解決できることを論じる。

3.2 同一性判定の基準

照合の過程における遺跡の同一性判定の基準としては、以下の 4 種類がある。

1. 位置の類似性（場寄せ）
2. 名前の類似性（名寄せ）
3. 記録の類似性
4. 空間畫像史料の類似性

2 の「名寄せ」とは、主に探檢隊報告書の間で、地名の名稱の類似によって同一性を推定することを指す。約 100 年前の探檢隊當時と現代では地名の名稱は大幅に變化しているため、名寄せはほとんど不可能である。しかし探檢隊調査はほぼ同時代に行われたため、各國語によって綴りが異なるものの記録に殘された地名には類似が多い。スタイン地圖には、スタイン自身の調査地の他に他國の各國探

檢隊調査地も書き込まれているため、この地名の類似によって、地圖を殘さなかった探檢隊調査地についても、スタイン地圖上に集約することが可能である。

3. 複數の資料間に類似した記録がある場合は同一性を判定できる場合がある。しかし複數の資料の記録では、場所の見當がついていなければ同一對象に關する記録と認識できない場合もある。

4. 上で述べた基準を補うものとして、本論文では空間畫像史料の類似性も利用できる。ここでいう空間畫像史料とは、筆者が以前に提案した概念であり[8]、地圖・平面圖・寫眞などの空間情報を含む畫像史料を指すものである。本論文で提案する遺跡同定法は、1. の場寄せとともに、空間畫像史料を組み合わせて空間的な一致性を重視していく點に特徵がある。以下、1. については 3.3.1 節で論じる。

3.3 遺跡位置の特定手法

3.3.1 場寄せによる現在地の推定

1. では遺跡の場所の類似性を基準とする。この方法を本論文では「場寄せ」とよぶ。探檢隊資料が有する地圖に描かれた遺跡の位置を、地圖の誤差をもとに現代の衞星畫像と比較し、それらの位置が十分に近接していれば地圖上に描かれた遺跡の位置を推定できる。

第 2 章で論じたように、スタインの地圖は緯度經度を測定して描かれているが、當時の技術的限界のために地圖に描かれた緯度經度は不正確で誤差が加わっている。そこで本論文では、地圖上に描かれた地物の位置を確定するために、地圖の誤差に基づいて正しい位置を絞り込む方法を提案する。古地圖には、同一地域内ではほぼ同一の誤差が發生しているため、誤差のある古地圖上に描かれたある特定の箇所の現在位置を推定する場合、その地點に最も近い地點の誤差の方向と距離を用いることで、その誤差傾向から特定位置の現在位置を算出することが可能となる。ただし、この段階では位置の特定までは至らない。誤差はおおむね一樣に發生しているが、誤差だけではエリアの特定が可能になるだけで、證明は充分ではない。そこで第 2・第 3 段階で空間畫像史料との照合を併用する必要がある。また、場寄せにおいては GE の衞星畫像上の地形との照合が大きな役割を果たす。そのため、地形が明らかな地點であるほど場寄せの精度が上がるが、平地の砂漠などでは精度が下がることになる。

[8] [7]。

3.3.2 平面圖との照合による絞り込み

そこで、2 次元空間の平面圖を用いてさらに詳細な位置合わせを行う。この際、以下の 4 つのケースが想定できる。

1. 詳細な平面圖がある場合
2. 詳細でない平面圖がある場合
3. 遺跡の一部の平面圖がある場合
4. 平面圖が存在しない場合

1. の場合は平面圖と GE の地表面畫像および地形との比較で廣域での位置合わせが可能である。2. では平面圖と衞星畫像だけでは特定には至らないが、候補地をいくつかに絞り込むことは可能である。3. は地形とは關わらない遺跡平面圖の一部がある場合で、位置を絞り込んだ後に平面圖を用いて照合が可能になる場合がある。4. は 2 次元空間での位置合わせは不可能なため、この段階は飛ばして次の段階に進み、直接寫眞を用いて照合する必要がある。

3.3.3 寫眞照合による同定

最後の段階での照合では、現地の風景の中で寫眞を照合することで詳細位置を特定する。上の段階で絞り込みを行っている場合、ピンポイントで遺跡の位置が判るため、このプロセスは簡單になる。平面圖などの 2 次元空間の資料が十分でない場合や存在しない場合は、限定したエリア内の多數のポイントを探す必要が出てくる。しかし、例えば現代の文物局や考古研究所による調査データが存在するのであれば、寫眞照合の際に現代の調査で何らかの遺構の存在が明らかになっている點を優先的に調査できるため、照合過程における現代調査の價値は高い。例えば、トルファンでは以下の 2 種類の記録の利用が可能である。

1. 新疆維吾爾自治區文物普査辦公室・吐魯番地區文物普査隊「吐魯番地區文物調査資料」『新疆文物』1988-3（以下、「普査」）
2. 西村陽子・鈴木桂「吐魯番地區遺跡調査報告」『中央大學アジア史研究』29 號、2005 年[9]

[9]『吐魯番學研究』第 2 號に本稿で扱った同定の成果を盛り込んだ増訂版が掲載される予定である。本論文では主に同定方法を取り扱うが、現況と探檢隊調査の詳細なデータについてはこちらを參照されたい。

4. ケーススタディ：トルファンにおける遺跡同定

4.1 トルファンの所在不明遺跡

スタインを含め、約 100 年前のシルクロード探檢隊の調査對象地には、現在では所在地が不明となっている遺跡が多數存在する。しかし、このような所在不明遺跡が存在することは漠然と認識されているだけであって、具體的にどの地點が不明で、どの地點の遺跡は明らかなのかは明確になっていない。

そこで、トルファン盆地を遺跡同定のケーススタディの對象地に選び、この地域内の遺跡を網羅的に同定することで手法の可能性を明らかにする。この地域はスタインだけではなく、Le Coq（以下、ルコック）、Grünwedel（以下、グリュンウェーデル）も調査をおこなって、探檢隊報告書に遺跡を記録した。またスタイン地圖には、スタインが直接調査した遺跡の他にも、ルコックやグリュンウェーデル、オルデンブルグらの各國探檢隊が調査した遺跡も表記を直して書き込まれているため、これらの探檢隊の調査地もスタイン地圖で調べることができる。圖 12 はこうして得られたトルファン盆地の遺跡群の現況を示す。圖の地名は現代中國の考古調査で存在が確認できるもので、丸數字①～⑧で示した遺跡は現代の調査で報告されていないものである。現代の報告が確認できる遺跡は、1. Kara-Khoja（高昌故城）2. Yār-khoto（交河故城）3. Bezeklik Temple Caves（ベゼクリク千佛洞）4. Toyuk Caves（トユク石窟）5. Sirkip（シルキップ）6. Lukchun（柳中故城）7. Chong-hassār, Kichik-hassār 等、觀光名所として著名な大規模遺跡を含む合計 7 箇所である。これに對して、いわゆる所在不明遺跡をこれ以外とすると、以下の 8 地點となり、トルファン盆地で全 15 箇所の遺跡群のうちほぼ半數ずつであることが確認できた。

1. Oi-tam, ruined fort
2. Bögan-tura
3. Buluyuk (Shipang, Sassik-bulak, Kazma)
4. Murtuk-ruins
5. Yoghan-tura
6. Chikkan-kol
7. Bedaulat's town, Bēsh-kāwuk, Kosh-gumbaz
8. Yutōgh

圖 13 はトルファン盆地の誤差分布圖である。★印は現在のトルファン市を示し、黒い矢印は *Serindia* の誤差分布、白い矢印は *Innermost Asia* の誤差分布である。

3.6 節でも述べた地域内誤差分布のパターンで分類すれば、トルファン地域は誤差分布が一定の傾向を示すパターンに分類できる。したがって所在不明遺跡の現在地は、その周囲に存在する同定濟みの地點の誤差から推定することが可能となる。以下では圖 13 の誤差分布圖で得られた誤差を用いながら、所在不明遺跡を發見するプロセスと應用可能性を檢證する。

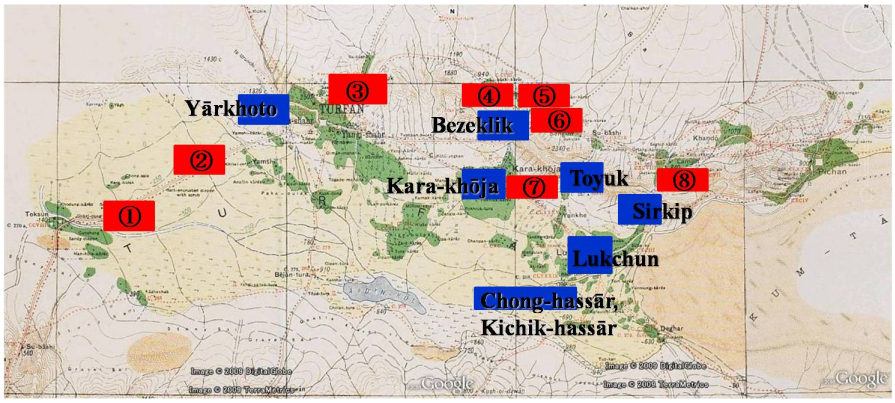


圖 12: トルファン盆地の遺跡群の現況。地名は現在でも確認できる遺跡、丸數字は所在不明遺跡（4.1 節の文中の番號に對應）

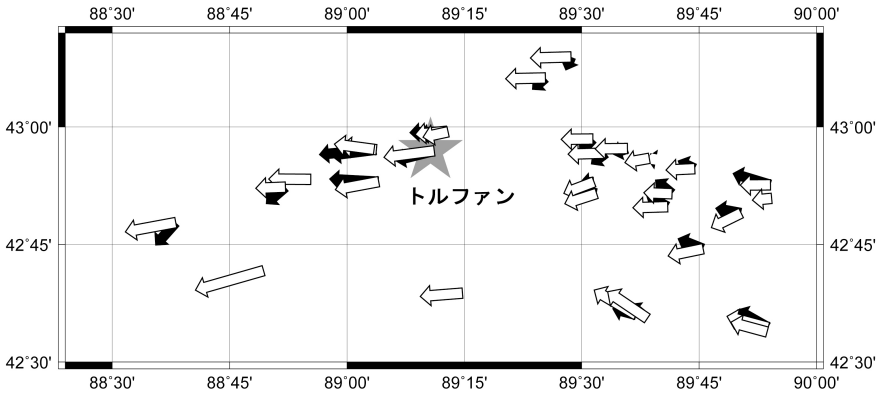


圖 13: トルファン盆地の誤差分布圖

4.2 Chikkan-kol と七康湖遺跡

まずは平面圖と寫眞を用いて遺跡が同定できた例を示す。Chikkan-kol（チッカンクル）については、二〇世紀初頭の探檢隊のうち、ルコックが最も詳細な報告を殘している。彼は ‘Tschyqqan Köl’ という湖周邊の發掘調査を行い、この地點に多數の佛教寺院遺構の存在を報告した（圖 14）[10]。第 6 章に述べるように、これ

[10] ［12］ p.11, Tafel. 51, Statuettenköpfe und aus Ungebranntem Ton oder Stein, a, b, c, d. Tafel 70, *Chotscho*, i, k.

はスタイン地圖の ‘Chikkan-kol’ と考えられる。

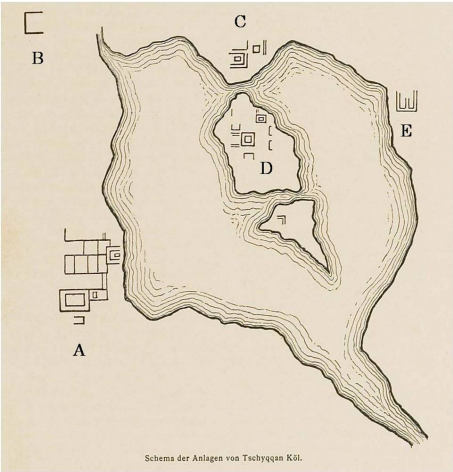


圖 14: Le Coq, Albert von, *Chotscho*, p.11, ‘Schema der Anlagen von Tscyqqan (Čïqqan Köl’（チッカンクルの施設分布）. A〜E は筆者による。

4.2.1 場寄せによる現在地の推定

スタイン地圖には、*Serindia* 地圖にも *Innermost Asia* 地圖にも Chikkan-kol の地名がある。しかしスタイン地圖上では Chikkan-kol という地名の近邊にいくつかのポイントが描かれているため、その中のどれが Chikkan-kol に對應するのかは明確ではない。そこでまず、スタイン地圖の誤差を利用して現在地を推定することにした。この付近で基準點として使えるのはベゼクリク千佛洞（Bezeklik Temple Ruins）であり、*Serindia* 地圖で西北西に 3.2km、*Innermost Asia* 地圖で西南西に 5.6km の誤差である。そこでこれらの情報を用いて場寄せによって現在地を推定した結果が圖 15 である。この結果、Chikkan-kol の現在地は右の GE 圖の枠のエリアにあると推定できる。

圖 15: 左：*Serindia* 地圖の Chikkan-Kol（誤差は西北西に 3.2km）　中：*Innermost Asia* 地圖（誤差は西南西に 5.6km）　右：Chikkan-Kol の現在位置（枠内）

4.2.2 平面圖との照合による絞り込み

圖 16 は Chikkan-kol 現在地として推定した地域の高解像度衞星畫像である。圖 14 に示すようにルコックは湖を報告しているので、この地域に存在する湖を探してみると、そこには 2 つの湖が存在することが判明した。そこでまずルコックが報告した湖を同定するため、衞星畫像と遺跡周邊の平面圖とを比較することにした。平面圖には縮尺や方位が記入されていないので、平面圖の擴大縮小や移動を繰り返しながら衞星畫像と平面圖の湖の形状を比較した。しかし試行錯誤を繰り返しても、湖の形状を一致させることは難しい。したがってこの方法では湖を同定することはできなかった。次にルコックの報告書の記述を参考に同定を試みる。ルコックは寺院遺構から 1km の地點に石窟が存在すると述べており、實際にこの地域には七康湖石窟という石窟が存在する。しかし石窟は 2 つの湖からそれぞれ 600 メートルと 2600 メートルの位置にあり、距離がルコックの記述と一致しない。ゆえに平面圖を用いた方法では遺跡を同定することはできなかったが、この時點で候補地を 2 つまで絞り込むことができた。

圖 16: Chikkan-Kol の現在位置。ルコックの Tschyqqan (Čïqqan) Köl 平面圖との對比。左上の白點は七康湖石窟の位置を示す。

4.2.3 寫眞照合による同定

そこで次に、ルコックの報告書にある古寫眞を利用することにした。圖 17 左は、ルコックの報告書にある Tschyqqan Köl の佛教寺院遺構（圖 17A）の眺望である。

その中心には特徴的な形状の遺構があり、その背景にも特徴的な山の稜線が寫っている。このような風景を撮影できる地點を現地で探せば、撮影地を確定することが可能である。そこで現地の考古學者である吐魯番地區文物局・吐魯番學研究院考古研究所所長の張永兵氏に現地調査を依頼した。この佛教寺院遺構は湖西南に存在するとルコックが記述していることから、圖 16 の北側の湖の西南部と、圖 16 の南側の湖の西南部および中心部の島の調査を依頼した。

圖 17 右は張氏が北側の湖西南岸で撮影した寫眞である。細かい撮影條件は異なるものの、遺構の状態や背景の山の稜線などの一致性を考えれば、ここがルコックの撮影地點であると同定することができる。したがってルコックが報告した湖は圖 16 の北側の湖であると同定することができる。またこの場所は、現代資料では七康湖遺跡として報告されている場所であることから、Chikkan-kol と七康湖遺跡の同一性も判定することができた。

さらに圖 18 はこの遺構に對應する衞星畫像を示す。ルコックの平面圖に描かれた形状とは異なっているものの、小房が 4 つ連續するという特徴はよく類似しており、この佛教寺院遺構が現在も殘っていることが衞星畫像で確認できる。このように同定した上で該當する地域の衞星畫像を分析すれば、探檢隊資料の圖面を訂正することも可能となる。

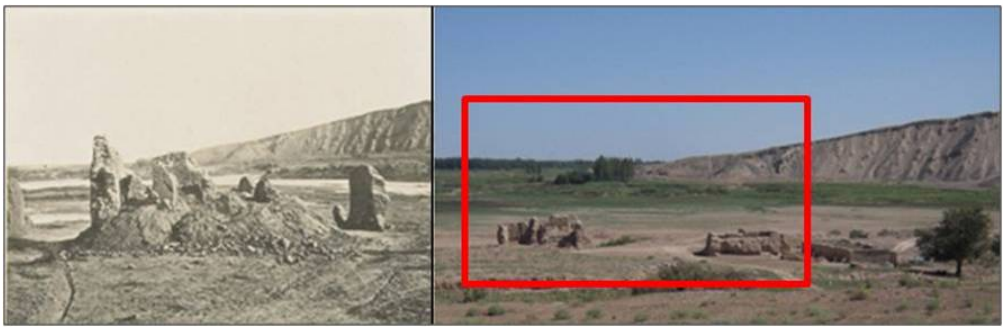


圖 17: 左：Tschyqqan Köl の湖西南岸にある佛教寺院の遺構。*Chotsco*, Tafel 70, CHOTSCHO, k. 右：現在の七康湖西南岸の遺構（2008 年 9 月 9 日、吐魯番學研究院・張永兵氏撮影）

4.2.4 同定遺跡の周邊

ここで再び圖 14 の平面圖に戻ると、同定した遺構を基點として周邊を探索すれば、その周邊の遺跡も芋づる式に同定していくことが可能となる。圖 16 は遺構 A を基點として推定した B の位置を探して發見した遺構である。形状と位置から考えれば、これもルコックが記録した遺構である可能性が高い。また C・D に相當

する位置にも何らかの痕跡が見えるが、この場所は衛星畫像が不鮮明であるため同定はできなかった。しかしこうして周邊遺跡へと同定の範囲を廣げていくことで、所在不明遺跡の存在などを明らかにすることができるため、今後の調査への手がかりに有用な情報が得られる。

圖 18: 湖西南岸の遺構の衛星畫像
（42°57′13.76″N, 89°35′49.45″E）

圖 19: 湖北岸の遺構の衛星畫像
（42°57′27.26″N, 89°35′58.52″E）

4.3 Murtuk Ruins と烏江不拉克

次に平面圖だけで遺跡の同定ができた例を示す。*Innermost Asia*, vol.3, Pl.29. には‘Site Plan of Ruins near Murtuk’（圖 21、以下 Murtuk Ruins、ムルトゥク）として詳細な遺跡平面圖が收められているが、現在では Murtuk Ruins に對應する遺跡は報告がなく、ここも所在不明遺跡となっている。

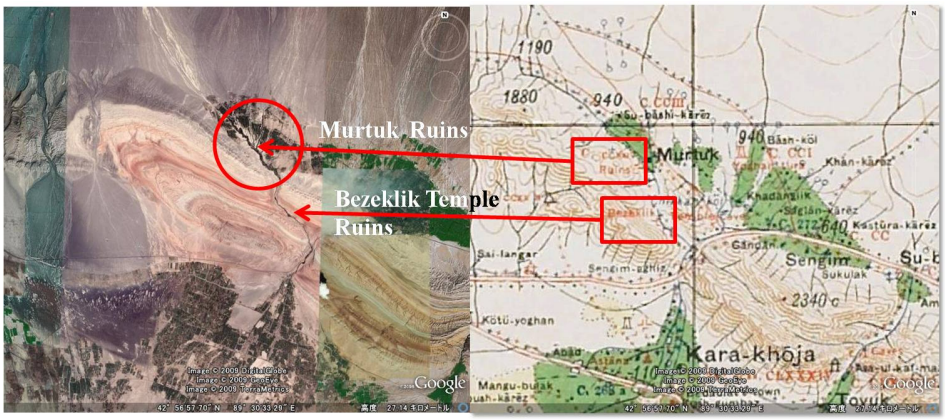


圖 20: Murtuk Ruins の推定エリア

4.3.1 場寄せによる現在地の推定

圖 20 右は *Innermost Asia* 地圖の Murtuk Ruins 附近を切り抜いたものである。ここもベゼクリク千佛洞（Bezeklik Temple Ruins）に近いため、ベゼクリクでの誤差を用いて場寄せする。*Innermost Asia* 地圖の誤差は西南西に 5.6km であるため、Murtuk Ruins の現在地は圖 20 右の GE 畫像の ○ エリアであると推定できる。

4.3.2 平面圖との照合による同定

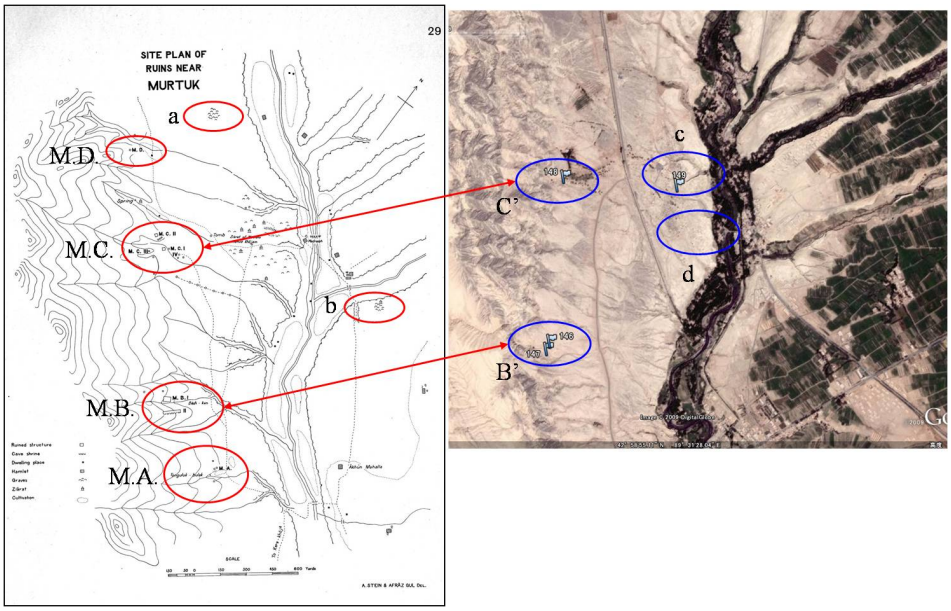


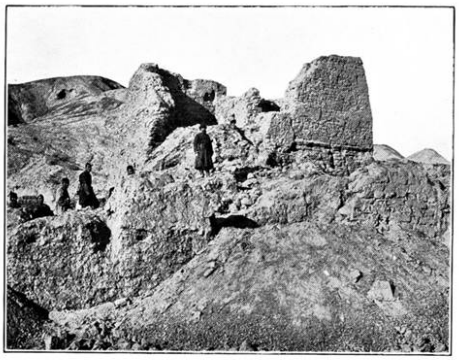
圖 21: 左：Site Plan of Ruins near Murtuk　右：烏江不拉克附近の衛星畫像（42°58′55.11″N, 89°31′28.04″E）

次に、スタインの報告書にある Murtuk Ruins の平面圖を、この地域の高解像度衛星畫像と照合した結果が圖 21 である。圖 21 左のスタインの描いた平面圖と、圖 21 右の GE の衛星畫像とを照合すると、地形がほぼ完全に一致していることがわかる。また平面圖には方位が書き込まれており、これもよく一致している。したがって、平面圖を現在の衛星畫像と直接位置合わせすることができるため、この平面圖に描かれている遺跡の現在地を確定させることができる。この附近の遺跡は現在では烏江不拉克（ウジャンブラク）と呼ばれている。この地域では、從來は B′ の石窟がグリュンウェーデルの調査した Murtuq, 2. Anlage であることが指摘されていたが、スタインが報告した Murtuk Ruins との關連性は指摘されたことがなかった。しかし場所の同一性を證據とすれば、Murtuk Ruins と烏江不拉

克は同一の遺跡であると判断することができる。同定の結果、スタインの報告と現代の調査では異なる遺跡が報告されており、そのために同定が困難であったことが判明した。

4.3.3 寫眞照合による同定

このように Murtuk Ruins については平面圖だけで同定が完了してしまったが、寫眞照合によって證據を補強することも可能である。圖 22 右はスタインが Murtuk Ruins M.B.I として報告した佛塔の寫眞である。一方圖 22 左は烏江不拉克佛塔として現在報告されている遺跡の寫眞である。兩者の撮影角度は若干異なるが、遺構の崩れ方から判斷しても、同一の遺構と判定することができる。また圖 23 右はスタインが Murtuk Ruins M. C. I として報告した遺構の寫眞である。一方圖 23 左は烏江不拉克烽火臺として現在報告されている遺構の寫眞である。兩者はほぼ同一の角度で撮影されており、背景の山や遺構周邊の様子まで一致している。この 2 枚の寫眞照合の結果により、Murtuk Ruins と烏江不拉克遺跡では、少なくとも M.B と B′、M.C と C′ が同一の遺構であることを確認できた。



305. RUIN, M.B. I, AT MURTUK IN COURSE OF CLEARING.

圖 22: 左：烏江不拉克佛塔　右：Murtuk Ruins M.B.I

なおこのような同一性の判定は、名稱や記述のみによる判定では誤りが生じやすいことに注意されたい。例えば M.C. はスタインが Ruined Shrine（寺院遺址）と報告しているが、現代資料では C′ は烽火臺[11] と報告している。したがって、遺跡の分類に依據してしまうと兩者の同一性を判定することができない。空間畫像史料に依據することで、遺跡の性質に對する認識や名稱が異なっていても同一性を

[11] 遺跡の前には「木爾土克薩依烽火臺」という碑が立てられている。「烏江不拉克烽火臺」という名稱は、「普查」のデータに基づく。

判定できる例があることを考えれば、こうした新しい手法の利用によって遺跡の同定が進む可能性もある。

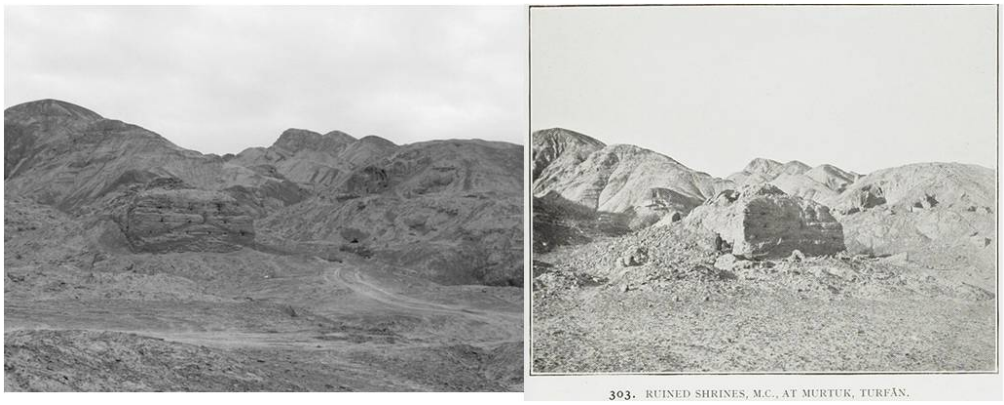


圖 23: 左：烏江不拉克烽火臺　右：Murtuk Ruins Ruined Shrine M.C.I.

4.3.4 同定遺跡の周邊

圖 24: a の位置に廣がる墓葬群。烏江不拉克墓群の北部？
（42°59′19.63″N, 89°30′56.86″E）

同定遺跡の周邊に存在する遺跡についても、平面圖に記された遺跡は全て同定することができることがわかった。例えば圖 24 は、圖 21 の a に相當する位置の衞星畫像である。圖 21 では Grave（墓地）を示す記號が記入されているが、GE で擴大すると甲字型の墳院を伴う墓葬群が存在することがわかる。これは現地で烏

江不拉克古墓群と呼ばれる墓葬群の北部と考えられる。この他、衞星畫像上では確認しにくいが、M.A.・M.D.・b の位置にも遺跡の存在が推定できる。以上のように、この地域ではほぼ全ての遺跡を一気に同定することができた。これにより、今後のこの地域の調査では探檢隊資料を活用することが可能になり、今後の調査が深化していくことが期待できる。

4.4 Yutōgh Caves と忙得古爾千佛洞

これは平面圖をうまく活用して同定した例である。スタインは Lamjin（連木沁、ラムジン）に近い Yutōgh（ユトーグ）遺跡で

1. Cave shrine below Yutōgh
2. Buddhist shrine below Yutōgh
3. Cemeteries near Masār of Yetti-kiz-khōjam, Yutōgh

という 3 つの遺跡を報告しており、*Innermost Asia* vol.3 に石窟の一部と佛教寺院遺址、および墓葬群の一部平面圖を報告している[12]。しかしこれらの遺跡については、Yutōgh という地名が知られていないため、これまでほとんど檢討されたことがなかった。また現在資料を見ると、この地域では耶特克孜瑪扎（ヤトクズマザール）墓葬群、奇格曼（チガマン）墓群、哈日土浦（ハリトゥプ）墓群、墩買來（ドゥンマイライ）墓群という 4 つの墓葬群のみが報告されており、墓葬群の報告の中で一度だけ附近にある石窟と寺院遺址に言及している。しかしこの地の遺跡の關係は全く未知のままであった。

4.4.1 場寄せによる現在地の推定

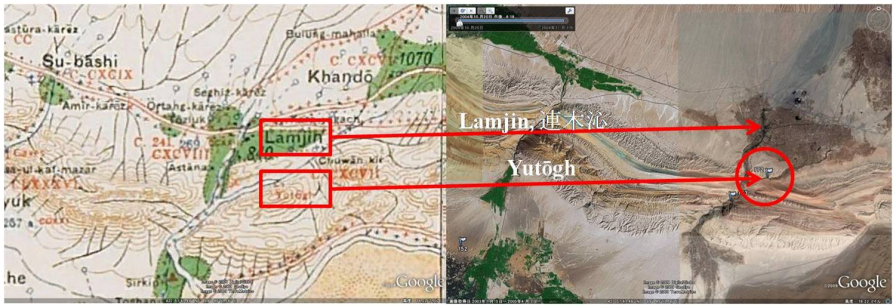


圖 25: Yutōgh の現在位置（○のエリア）*Innermost Asia* 地圖は西南西に 3.3km の誤差

[12] ［20］ vol.3, PL.26.

圖 25 は、*Innermost Asia* 地圖の Yutōgh 附近の圖と現在位置の推定エリアである。北側にある既知のオアシスである Lamjin での誤差は西南西に 3.3km であるため、この誤差を基準として地形も勘案すると、Yutōgh の位置は GE 畫像の○のエリアに相當すると推定できる。

4.4.2 平面圖の照合による同定

推定したエリアは筆者らが 2004 年に調査したエリアであり、その際に小規模な古い石窟の存在を報告した。この石窟は現在では忙得古爾（マンダグリ）石窟と呼ばれており、現在は全 8 窟が存在しているが、現代資料には報告がなかったため、筆者らが独自の編號をふった。しかし今回の推定位置を受けて報告を再調査したところ、その内、古い壁畫が遺存する禮拜窟である第 4 窟の平面圖が、圖 27 に示すスタインの平面圖と一致することが判明した。このように平面圖同士の照合に基づき、現在の忙得古爾石窟はスタインの調査した Cave Shrine below Yutōgh であると同定することができた。

圖 26: 忙得古爾石窟の現況（南から）

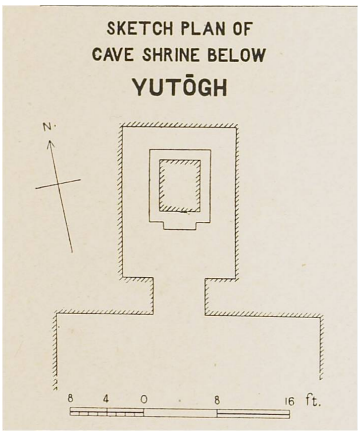


圖 27: Sketch Plan of Cave Shrine below Yutōgh

4.4.3 Buddhist Shrine below Yutōgh と西格力克塘木寺院

同定できた Cave Shrine below Yutōgh を基點として、次にその周邊の遺跡へと同定の對象を擴大してみた。*Innermost Asia*, vol.2, p.611. には、‘Buddhist Shrine below Yutōgh’ の項に續けて、‘Cave Shrine below Yutōgh’ の冒頭に次のような記述がある。

> Half a mile farther down the gorge, also on the right bank, lies a group of small caves, badly injured by the decay of the loose conglomerate into which they are cut, and also by vandal hands. About

30 feet above a narrow strip of cultivation two vaulted rooms open from a small terrace, one measuring 10 1/2 feet by 2 1/2 and the other 8 feet by 7.....
（Buddhist shrine below Yutōgh から）溪谷沿いに半マイル（800m）下ると、小さな石窟（small caves）がある（以下略）。

冒頭の下線部分は、‘Buddhist Shrine below Yutōgh’ から ‘Cave Shrine below Yutōgh’ までの距離と方向を記している。この記述の後半部分における石窟の外觀の描寫は圖 26 の忙得古爾石窟の外觀と一致するため、この記述は前述の遺跡の同定を補強する證據となっている。またこの記述の前半部分には寺院遺構の存在が記されており、これは忙得古爾石窟を起點として谷沿いに半マイル (800 メートル) 遡った地點に存在するはずである。圖 28 は *Innermost Asia*, vol.3 に收められた寺院の平面圖と、GE の衞星畫像上で發見した忙得古爾石窟の東北 800 メートルにある寺院遺構である。現代資料では西格力克塘木（シグリクタム）寺院の名稱だけが報告されているが、おそらくこの寺院と考えられる。兩者の形狀を比較してみると、現況の方が東西の廣がりが大きいものの、内陣の樣子や殘された基壇の形狀の類似性は十分に高い。したがって探檢隊報告の記述と平面圖の照合に基づき、‘Buddhist Shrine below Yutōgh’ と西格力克塘木寺院は同一の遺跡と判定できる。

圖 28: 左：Buddhist Shrine below Yutōgh　右：西格力克塘木寺院（42°51′06.89″N, 89°54′54.01″E）

4.4.4 Cemeteries near Masār of Yetti-kiz-khōjam, Yutōgh に關する考察

以上でスタインが報告した 3 つの遺跡のうちの 2 つを同定できたため、殘りの

1つである Cemeteries near Masār of Yetti-kiz-khōjam, Yutōgh についても考察する。

スタインが報告した墓葬群については、*Innnermost Asia.* Vol.3, Pl. 26 に平面圖が残されている。その名称について *Innermost Asia.* Vol.2, p.610 には、

「(Cemeteries near Mazār of)**Yetti-kiz-khōjam, (Yutōgh) "the Seven Holly Maids"**」という記述がある。またこの場所には現代資料で耶特克孜瑪扎墓葬群が報告されており、文物局の調査報告の中には、

「**耶特克孜瑪扎**古墓群（中略）墓群地處于火焰山前坡地、其北是**尤吐克河**、"耶特克孜瑪扎"是維語"**七女墳**"之意。(「普查」、p.71)」

という一文がある。Yetti-kiz-khōjam と耶特克孜瑪扎は語義が共通するため、同一の墓葬群を指していると考えられる。こうして、現代資料で報告されている 4 つの墓葬群のうちの一つは、スタイン探檢隊資料に報告された遺跡と同定できることを明らかにした。

4.5 Buluyuk 遺跡群 (Shipang, Sassik-bulak, Kazma)・Bedaulat's town・Bēsh-kāwak・Kosh-gumbaz・Oi-tam, ruined fort

ルコックやグリュンウェーデルらの報告書には、平面圖がなく寫眞しか報告がない遺跡が多數存在する。この場合は平面圖による照合ができないため、場寄せによる現在地の推定から、寫眞を用いた照合の段階へと進む必要がある。これは寫眞中の風景と 3 次元的に一致する現在の風景を現在地推定エリアから探すことを意味するため、現在地推定エリアが廣くなればなるほど困難な作業となる。しかし風景に特徴的な地物があれば、照合も現實的な課題となる。

圖 27 はルコックが報告した Schüi-pang 遺跡の寫眞である。ルコックはこの遺跡でパフラヴィー語・ソグド語・シリア語のキリスト教文獻を發掘したと報告しており、景教寺院の遺跡と考えられている[13]。スタイン地圖には Shipang という名稱の遺跡が記載されているため、まず名寄せによって兩者の遺跡が同一であると仮定する。次にスタイン地圖の Shipang 遺跡の現在地を場寄せによって推定すると圖 28 の丸で囲んだエリアに遺跡が存在すると推定できる。實はこのエリアでは吐魯番地區文物局によって、2005 年にこれに對應する遺跡が再發見されているため（未發表）[14]、現代資料と對應させることでこの遺跡に關する地圖の誤差の評價

[13] ［12］Tafel 71, h.

[14] 正式の報告は出されていないが、［5］ p.40 におおよその位置が、參考文獻［8］p.45 には現地調査の報告がある。

が可能である。そしてここの誤差を利用すれば、その周邊に存在する sassik-bulak や kazma 等の遺跡の現在地を推定することができる。現代ではこれらの遺跡に對應する報告はないが、ロシア隊の調査報告には sassik-bulak の寫眞が殘されているため[15]、寫眞中の風景に對應する場所を探して行けば遺跡の同定へと進める可能性もある。さらに遺跡名稱だけがわかっており、平面圖も寫眞も存在しない場合には、本論文では場寄せを用いて現在地を推定することができるため、現代資料から同定候補をさらに絞り込むことができる。例えば高昌故城の東側に位置する Bedaulat's town や Bēsh-kāwak 等の遺跡はこの場合に該當する。また Bedaulat's town・Bēsh-kāwak については、近年巫新華氏が對應する位置に遺跡の存在を報告している[16]ため、こちらも同定への手がかりとなる可能性がある。一方で Oi-tam, ruined fort については現在地の推定は可能であるが、今のところ對應する遺跡の報告が見あたらない。現地の古老はかつて存在したと言うが、いずれにせよ現地調査の進展を待たねばならない。

h. Ansicht der Ruine Schüi-pang bei Bulayïq im Norden von Turfan von Osten her aufgenommen. Diese Ruine ist der Fundort vieler unserer christlichen Texte in mittelpersischer, soghdischer, syrischer und türkischer Sprache.

圖 29: Ansicht der Ruine Schüi-pang（Schüi-pang 遺跡眺望）

[15] ［16］ PL.XXX.
[16] ［9］、p.48 參照。

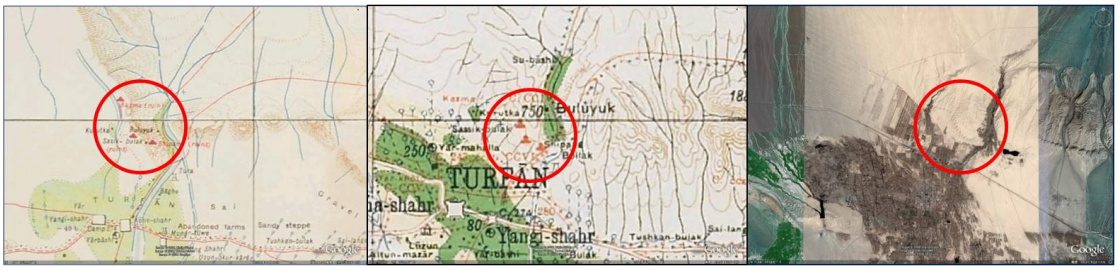


圖 30: Shipang（Schüi-pang および周邊遺跡の推定位置）

5．考察

第 4 章では、古地圖の誤差情報を利用した場寄せを中心として、空間の類似性による同定、記録の類似性を利用した同定、名前の類似性を利用した同定などを併用して、位置情報を主軸に据えた場所の同定について論じてきた。本論文ではケーススタディとしてトルファンを取り上げ、場寄せによる空間の統合で、様々な體系を持つ複數の資料を地圖上に集約して同時に扱えることを示してきた。ケーススタディとしてはトルファンだけであるが、本論文で使用した方法の最大の特徴は、場寄せはスタイン地圖に普遍的に存在する誤差に依存しているため、スタイン地圖がカバーするタリム盆地全域に適用できる、という點にある。

20 世紀初頭の各國探檢隊や現代の調査は、各々異なる基準や條件のもとで各自の方法論に基づいて行われている。調査結果には固有の見解が反映され、様々な相違が存在する。そのため、これまで資料にもとづいて遺跡の同定を行おうとした場合、様々な記録の相違に阻まれて同定は困難であった。原因としては以下の 4 つが考えられる。1. 遺跡の範囲の相違、2. 調査對象の重複と相違、3. 遺跡名稱の相違、4. 遺跡の性格判定の相違、である。本論文では、遺跡の本質を「場所」と捉えることで、從來の壁を乗り越えて遺跡の同定を進めることが可能になった。本論文で用いた衞星畫像上での同定においては、名稱とは異なり「動かないこと」は遺跡の基本的な性質のひとつであり、位置という不變性の高い情報を根據として同定していく手法は有效である。4 章で見てきたように、地圖の誤差にもとづいて衞星畫像上で場所を寄せると、様々な體系の様々な地名は衞星畫像上の現在地點に集合する。そのため、上であげた同定の妨げとなる相違は、異なる體系に屬する遺跡がデジタル空間上で一地點に集合することで、全て解消することになる。

5.1 遺跡の範囲の問題

第 4 章で扱った遺跡の同定では、遺跡の一部でも重なる場合には同一性を認定してきた。しかし、ひとまずこの基準で同一性を判定していくうちに、遺跡の同一性の認定に關する問題として、ひとつひとつの遺跡の空間の廣がりに大きな問題が存在することが明らかになってきた。このような空間的な廣がりの問題は、從來はあまり問題にされることがなかったが、實は今後も探檢隊調査遺跡の同定を進めていく上で避けられない問題であることが判ってきた。

例として、4.3 節で扱った Murtuk Ruins と烏江不拉克遺跡の場合を取り上げる。これらの遺跡に關しては、從來からグリュンウェーデルの調査した Murtuq 2. Anlage が伯西哈石窟であることは指摘されてきた。しかし Murtuq 2. Anlage と Murtuk Ruins の關係は報告書[17]だけでは把握することが難しく、烏江不拉克遺跡と Murtuk Ruins の關係については指摘されたことすらなかった。また烏江不拉克遺跡については現代資料では所在地が不明確であり、所在地を用いた遺跡の同定も不可能となっていた。しかし今回の遺跡同定によって、Murtuq と Murtuk と烏江不拉克という 3 つの遺跡の關係が判明するとともに、Murtuq と Murtuk の關係が把握しにくかった理由も明らかにできた。すなわち、グリュンウェーデルは現在の烏江不拉克遺跡とベゼクリク千佛洞とを含めて Murtuq と呼んでいたのに對して、スタインはこれを Murtuk Ruins と Bezeklik temple ruins と別々の遺跡として扱っていたのである。つまり Murtuk = Murtuq − Bezeklik という關係が成り立つ。また現代資料ではスタインの Murtuk Ruins に該當する範囲で、石窟・寺院・墓葬群・古城址などの小さな遺跡單位で報告している。ゆえに複數の資料の間で、實は遺跡の空間的な範囲が異なっており、圖 29 の模式圖のような關係になることがわかった。ここで A が Murtuq、B はスタインの Bezeklik、C は同じく Murtuk、D・E・F は現代の烏江不拉克の各遺跡であり、それぞれの遺跡が複雜な包含關係を形成していることがわかる。

一方、Yutōgh 遺跡では、4.4 節で示したように 3 つの遺跡の同一性を判定したが、現代資料ではスタインの報告に加えて多數の墓葬群が報告されている。それらの空間的な關係を模式圖としたのが圖 30 である。A は Yutōgh、B は忙得古爾千佛洞、C は西格力克塘木寺院、D は耶特克孜瑪扎墓群（Cemeteries near Mazār of Yetti-kiz-khōjam, Yutōgh）、E・F・G は新發見遺跡を示す。このような場合は包含關係に加えて近接關係も考慮した上で、遺跡の範囲を考えていく必要がある。

遺跡の同一性とは、必ずしも空間的な範囲の完全一致を意味するものではなく、

[17] ［20］ vol.2, pp.635-641.,［14］ pp. 301-313.,［16］p.48。スタインはグリュンウェーデルの報告書を引用しているが、それでも相互關係はわかりにくい。

部分的に重なっている場合や、近接しているが同じ遺跡とみなせる場合なども含めて、どこまでを一つの遺跡と考えるのかという問題に答えていかなければならない。しかもこの問題は、必ずしも完全に確定できるとは限らない。また、同一性を判定できたとしても、今度はどの名稱でその遺跡を代表させるかという問題も出てくる。本論文では、基本的にスタインの *Innermost Asia* の地名を用いつつ、探檢隊調査の遺跡名稱と現代の名稱を併記するという方法をとった。

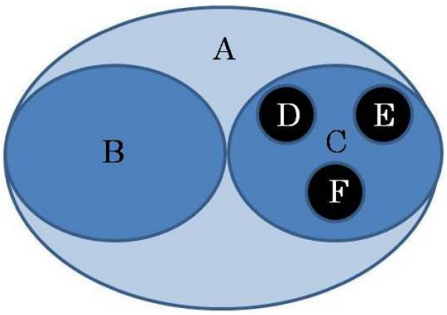


圖 31: 遺跡の關係が包含關係を形成

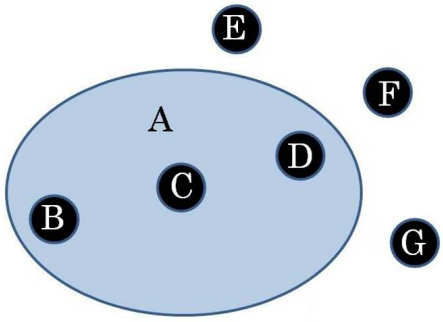


圖 32: 遺跡の關係が包含關係と近接關係を形成

このようにして探檢隊資料と現代の遺跡を同定していくことによって、同一の遺跡に關する複數の資料を比較することが可能になる。それによって 5.3 章・5.4 章で扱う遺跡の照合や記録の整理が可能となってくる。

5.2 遺跡の照合——遺跡名稱の可變性と遺跡位置の不變性

探檢隊と現代の調査が照合しにくかった理由は、それぞれの報告書で遺跡名稱が異なり、資料上で判別できないという原因が大きい。本論文では、複數の資料に現れる遺跡を網羅的に檢證したため、それぞれの資料の命名規則についても違いが見えてきた。

例えば Murtuk Ruins では、スタインは Murtuk River、すなわち現在の木頭河を基準として M.A. から M.D. までの遺跡を命名したが、文物局の名稱である烏江不拉克は、遺跡地點を指す現地の名稱となっている。いずれも現地の名稱を用いているという意味では共通しているが、河を基準として遺跡を集合（グループ）として捉えるスタインと、當該地點を基準として個別の名稱を付ける文物局では、命名規則に大きな違いが生じる。

一方 Yutōgh についても、「普查」の耶特克孜瑪扎墓群に關する報告の中に「尤吐克河」とあることから、Yutōgh とは河の名前で、スタインは Yutōgh 河を基準として Yutōgh 河流域遺跡群を報告したことがわかる。このように、河の名前を取ってその周邊の遺跡をグループ化して命名する手法は Murtuk Ruins にも共通するため、スタインの命名方法はこのような方法論をとっていたことが推測できる。一方の文物局は、ここでも現地の個々の遺跡の現地名を使用しており、こちらも一貫した命名規則を用いている。

しかしこうした命名規則の違いが、結果として探檢隊資料と現代資料との間での遺跡の同定を阻む大きな要因になっていた。本論文では、遺跡の名稱に依存しない同定手法を提案することで、從來の壁を乗り越えて遺跡の同定を進めることが可能になることを示した。名稱とは異なり、位置は遺跡において最も本質的な屬性の一つである。ゆえに、遺跡の位置という不變性の高い情報を根據とし、位置の類似性を重要規準として同定していく方法が有效である。

5.3 記録の整理

同時に、このような位置による同定手法をとることで、Murtuk Ruins M.C. のように、同じ地物が Ruined Shrine と烽火臺（圖 21）というように食い違った場合でも、再檢討が容易になる。

探檢隊と現代の調査が照合しにくかった理由の一つは、各調査によって名稱が異なるだけではなく、調査對象が一部重複し、一部異なっていたため、その相互關係がつかみにくかったためである。場所による位置の同定によって判明する遺跡にはどのような種類があり、シルクロードの研究にどのような貢獻が可能であるのかを概觀しておきたい。同定によって發見される遺跡には、以下の 4 種類がある。

1. 探檢隊調査で既知、現地で現在も既知
2. 探檢隊調査で既知、現地でも把握しているが、同定されていないもの
3. 探檢隊調査で既知だが、現地で未發見あるいは未公表のもの
4. 現代の新發見

1. は高昌故城や交河故城、廟兒溝などの著名な遺跡である。2. と 3. は探檢隊資料と現代資料に斷絶がある場合で、本論文ではこれらを「所在不明遺跡」と呼んできた。1.〜3. までは探檢隊調査と現代調査の照合で、これが判ることで現代の調査報告のうちの何が 4. 現代の新發見であるのかが明らかになり、これらの照合を通して探檢隊と現代の調査兩方の價値が向上すると考えられる。

例えば、今回あつかったトルファンの遺跡のうち、七康湖周邊の遺跡は、圖 17 の湖東南部の遺構 A が 2. に相當し、湖北岸や湖中の島の遺構など B,C,D,E,F が 3. に相當する。Murtuk Ruins は全體が 2. に相當し、圖 21 左の M.A.・ M.B. と a・b が 3. に相當し、圖 21 右の c・d が 4. に相當する。Yutōgh 遺跡は全體が 3. に相當し、奇格曼墓群・哈日土浦墓群・墩買來墓群が 4. に相當する。

從來問題となっていたのは、別個に報告された調査報告を整理する方法がなかったことだが、場所を同定することで相互の關係が明らかになり、古くから知られている遺跡との關係を整理した上で、新しい調査地を蓄積することが可能になる。

5.4 歴史・考古研究との關係

これまで論じてきたように、地圖の誤差に基づく位置の同定により、諸資料の混亂という問題を解決することが可能になると想定される。本論文では試驗的にトルファン一地域を取り上げてこのような照合が可能であることを示したが、このようなデータがタリム盆地周邊の各地域で積み上げられていった場合の價値は極めて大きいといえる。そしてこのような作業を進めていけば、探檢隊資料と現代資料を蓄積することが可能なタリム盆地の遺跡データベースを構築することも可能になるだろう。では、このようなデータベース化は、資料の讀解に基づく歴史や考古の研究にどのような影響を及ぼすのであろうか。

ひとつの例として、各國探檢隊や現代調査の調査データを集積し、空間の中での史料解釋が可能になることが考えられる。4.2 章で取り扱った Chikkan-kol の例では、最も詳細な報告を殘したルコックは、‘Tschyqqan Köl’ という湖周邊の發掘調査として多數の佛教寺院遺構の存在を報告した（圖 20）[18]。さらに圖 33 のような出土品 の特徴から、7 世紀の佛教寺院遺構と斷定した。グリュンウェーデルは ‘Höhlengruppe bei čiqqan-Köl’ として石窟について重點的に報告しており[19]、これは現在の七康湖石窟に比定されている。現代の調査はこの地域についても大規模墓葬群に集中して報告を行う。一方、日本の嶋崎昌はルコックの描いた平面圖の配置が 6 世紀の麴氏高昌國時代の新興縣に建立された「麴斌造寺碑」に記された寺院配置と類似していることを指摘し、ルコックのいう Tschyqqan Köl は、碑文にみえる「秦城澤」と關係がある可能性を指摘した[20]。

今回、佛教寺院遺構の位置が判明したことによって、嶋崎の説を全ての遺跡デー

[18] ［12］ p.11. Tafel. 51, Statuettenköpfe und aus Ungebranntem Ton oder Stein, a, b, c, d, Tafel 70, *Chotscho*, i, k.

[19] ［14］ pp.314-315. Fig. 632b は石窟プラン。

[20] ［3］ p.143、注 (64)

タを集積した上で再檢證し、衞星畫像も利用しながら、6 世紀の碑文に書き出された風景を現在の景觀の中で讀み直すことが可能になる。碑文に記された景觀を、衞星畫像の詳細畫像なども利用しつつ現實の景觀の中に置き直すということは、文獻に對する大きな補足材料となるであろう。

また、複數の探檢隊資料の空間畫像資料を組み合わせた遺跡の同定手法にも、今後の可能性が開けている。例えば、グリュンウェーデルのイディクートシャーリ（高昌故城）[21]については、報告書の平面圖と現況とを直接照合することは困難であった。しかしグリュンウェーデルの資料と現況との間にスタインの資料を介在させ、1) スタインの平面圖と現況との照合、2) 現況とグリュンウェーデルのスケッチの照合、と二段階のプロセスを踏むことで、グリュンウェーデルの報告書をより理解しやすくなる可能性がある。

探檢隊資料と現代資料とを統合したタリム盆地の遺跡データベースは、その他の情報の基盤ともなるものである。例えば、各地で出土した文書史料などについても、いずれかの報告書に出土地情報があれば、他の全ての情報や出土地の現況と結びつけて蓄積することが可能になる。寺院史料であれば、現地に殘る寺院の規模と照らしながら史料を解讀することもできるだろう。このように遺跡データベースは、今後は出土資料の解釋や出土地の考證にも有用な情報基盤として發展していく可能性があり、過去の知見と現地調査の成果を統合した新しい知見につながることが期待できる。

圖 33: Tschyqqan Köl の寺院遺構の出土品

[21] ［13］ Fig.2,” Planskizze von Idikutschari(“Stadt des Dakianus”) に見える高昌故城の遺構分布などは、現況とは大きく異なり、同定が困難である。

6．あとがき

本論文では、タリム盆地における探檢隊考古遺跡の解明という問題に對して、遺跡の位置を重視した同定手法を提案し、その手法をトルファン盆地における遺跡の同定に活用した。その結果として、トルファン盆地における所在不明遺跡の現況を明らかにするとともに、所在不明となっていた原因についても遺跡の命名規則や遺跡の空間的な廣がりといった觀點から明らかにした。

また、この遺跡同定手法をタリム盆地全體に適用するために、スタイン地圖の誤差をタリム盆地全域にわたって明示するとともに、地圖の誤差を用いた場寄せ手法を提案した。これは、古地圖のデジタル化と幾何補正、Google Earth のような高解像度衞星畫像を無償で提供するブラウザが出現したことによって初めて可能となった方法である。

現代の調査は、これまで探檢隊の成果とはほぼ無關係に蓄積されてきた。20 世紀初頭の探檢隊の成果は優れたものではあるが、各國語で書かれた大部の報告書は、言語的な問題からも十分に活用されてきたとはいえず、100 年前で凍結したまま新しい成果を付け加えることはほぼ不可能である。今後シルクロード地域の研究は中國から公開される資料にもとづいて行われることを考えると、探檢隊の成果と現代の成果を横斷的に結びつけるシステムを作成することは、今後のシルクロード研究にとって重要な課題である。本論文では、デジタル化した古地圖と地圖の誤差による場寄せを用いることで、20 世紀初頭の探檢隊に關する知識と現在の現地情報を、デジタル地圖を媒介して連結できることを示した。今後、同樣の方法でシルクロード各地のデータを集積してこれをデータベース化することによって、探檢隊の考古調査地の追試が可能になるだけでなく、過去の成果を現在に效果的に引き繼ぐ橋渡しとすることができると期待している。

参考文獻一覽

［1］伊藤敏雄・于志勇「米蘭の遺跡とその現状」、『西北出土文獻研究』第 4 號、pp.55-71、2007 年

［2］岡内三眞『漢代西域都護府の総合的調査』、平成 12～14 年度日本學術振興會科學研究費補助金基盤研究 B(2) 研究成果報告書、2000～2002 年、2004 年

［3］嶋崎昌「高昌國時代の城邑について」『隋唐時代の東トゥルキスタン研究』、東京：東京大學出版會、1977 年

［4］相馬秀廣「トルファン盆地の遺跡の立地條件――CORONA 衞星寫眞の判讀を中心として」、『シルクロード研究』8、pp.37-78、2000 年

［5］西村陽子・鈴木桂「吐魯番地區遺跡調査報告 (2004 年 10 月 14 日～11 月 1 日) ――主に麴氏高昌國・唐西州時期の古城・墓葬・石窟・宗教遺址の空間的把握を目指して」、『アジア史研究』29 號、pp.1-41、2005 年

［6］西村陽子・大西磨希子・北本朝展「Google Earth を利用したシルクロード古地圖の解析」、『人文科學とコンピュータシンポジウム じんもんこん 2007 論文集』、pp.155-162、2007 年

［7］西村陽子・北本朝展「『乾隆京城全圖』と古寫眞を用いた北京古景觀の再現」、「Historical GIS の地平」シンポジウム, pp.127-142, 2009 年

［8］森安孝夫主編『2007 年度新疆・山西・オルドス調査行動記録』、シルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相、［研究課題番號:17202018］平成 17～20 年度科學研究費補助金基盤研究 (A)(一般)、2008 年

［9］巫新華『吐魯番唐代交通路線的考察與研究』青島出版社，1999 年

［10］新疆維吾爾自治區文物普查辨公室・吐魯番地區文物普查隊「吐魯番地區文物調查資料」『新疆文物』1988-3、1-84 頁

［11］International Dunhuang Project, *IDP NEWS*, No.32, Winter 2008-9

［12］Le Coq, A., *Chotscho*, Belrin, 1913

［13］Grünwedel, A., *Bericht über Archäologische Arbeiten in Idikutschari und Umgebung im Winter 1902-1903*, München, 1906

［14］Grünwedel, A., *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan*, Belrin, 1912

［15］Kitamoto, A., Nishimura, Y., “Geometric Correction of Measured Historical Maps with a Pixel-Oriented and Geobrowser-Friendly Framework”, *Proceedings of the 22nd International Symposium on Digital Documentation, Interpretation & Presentation of Cultural Heritage (CIPA 2009)*, 2009

［16］Oldenburg, S. F., *Russkaia Turkestanskaia Ekspeditsiia, 1909-1910 goda*, St.Petersburg,1914

［17］Stein, M. A., Note on Maps illustrating Dr. Stein’s Explorations in Chinese Turkestan and Kansu. *The Geographical Journal*, vol.37, No. 3, Mar., 1911, pp.275-280

［18］Stein, M. A., *Serindia*, vol.1-5, Oxford, 1921

［19］Stein, M. A., *Memoir on Maps of Chinese Turkestan and Kansu: From the Survey made during Sir Aurel Stein’s Explorations. 1900-1, 1906-8, 1913-15.* Dehra Dūn, Trigonometrical Survey office, 1923

［20］Stein, M. A., *Innermost Asia*, vol.1-4, Oxford, 1928

（作者の西村陽子は國立情報學研究所特任研究員）
（作者の北本朝展は國立情報學研究所・総合研究大學院大學准教授）

〔敦煌寫本研究年報　第四號〕

2010 年 3 月 31 日發行

編　者　　高田時雄

發行者　　京都大學人文科學研究所
「西陲發現中國中世寫本研究班」
〒 606-8265 京都市左京區北白川東小倉町 47
Phone 075-753-6993　Fax 075-753-6999

ISSN 1882-1626